飯山市埋蔵文化財調査報告　第24集

国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

新堤（しんづつみ）遺跡・トトノ池南（いけみなみ）遺跡

1991・3

飯山市教育委員会

飯山市埋蔵文化財調査報告　第24集

国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

新堤（しんづつみ）遺跡・トトノ池南（いけみなみ）遺跡

1991・3

飯山市教育委員会

調査地遠望　対岸奥志賀スーパー林道より　1990．7．6

新堤遺跡遠望（南東から）1990．7．11

トトノ池南遺跡旧石器第２ブロック（南から）

トトノ池南遺跡　平安時代木組み簡易井戸ＳＥ１（北から）

序

飯山市教育委員会
教育長　岩　﨑　　彌

飯山市は、長野県の北端に位置し、市の中央に遠い昔から変わらぬ流れを見せる千曲川によって形成された肥沃な平地を中心として発展してきた奥信濃の産業・経済の中心地であり、古くは上杉謙信方に属し、信濃の北の要衝としての役割を果たしてきました。

また、この地域は、原始～古代、中世にいたる埋蔵文化財の宝庫であり、特に飯山市には原始～古代の遺跡が多いことでも知られています。これまでに、埋蔵文化財包蔵地として400を超える遺跡が確認されており、最近の開発ラッシュにより、多くの遺跡の発掘調査が実施され、後世に伝えるための記録としての報告書もその都度発刊しています。

今回の発掘調査は、国営飯山農地開発事業の一環として施工された二工区の農地造成工事に伴うもので、関田山麓の千曲川左岸の山地段丘に広大な優良農地を開拓しようとする事業により失われる埋蔵文化財を記録として保存するため、事前に緊急発掘調査を実施したものです。

本調査によって、旧石器、縄文、平安の各期にわたる遺構・遺物が多数出土しました。特に旧石器時代遺物の集中出土は、その数の多さもさることながら、さかのぼること約1万6千年以上前という飯山市最古の遺跡となった点、また県内でも極めてめずらしい縄文時代早期の土器の出土がみられた点は、当時の奥信濃文化を知るうえで大きな手がかりとなりました。

飯山市教育委員会は、この貴重な文化財を大切にし、永く後世に遺していきたいと考えています。

この報告書が学術報告書として活用されるとともに、市民の方々に広く親しまれ、飯山市の埋蔵文化財に対する関心と愛着の念が一層深められるよう祈念いたします。

最後になりましたが、この緊急発掘調査に協力してくださった関東農政局飯山開拓建設事業所及び地元関係者など多くの市民の方々の御厚意に対し心から御礼申し上げるとともに、調査にあたり御指導をいただいた文化庁、長野県文化課をはじめ関係各位に厚く御礼申し上げます。

例　　言

1　本書は、長野県飯山市大字一山字中堤3574-1番地ほかに所在する新堤（しんづつみ）遺跡、および大字一山字雪坪3138-5番地ほかに所在するトトノ池南遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　調査は、国営飯山農地開発事業に伴うもので、関東農政局飯山開拓事業所より依頼を受けた飯山市教育委員会が国庫補助を受けて実施したものである。調査費の割合は、関東農政局飯山開拓事業所委託金91%、文化財保護行政側負担金９%（国庫補助金50%・県補助金15%・市負担金35%）である。

3　発掘調査は、飯山市教育委員会が下記に掲げる調査会を設立し、調査団を組織して実施した。

飯山市遺跡調査会（平成2年度）

顧　　問	小野沢静夫	市　長（平成２年９月14日退任）
	小山　邦武	市　長（平成２年９月15日就任）
会　　長	佐藤　春夫	市教育委員会委員長
副 会 長	長谷川元一	市社会教育委員長
委　　員	吉沢菊之進	市文化財保護審議会会長（平成２年10月26日退任）
	滝沢藤三郎	市文化財保護審議会会長（平成２年11月２日就任）
	藤沢賢一郎	市議会総務文教委員長（平成２年12月11日退任）
	丸山　豊雄	市議会総務文教委員長（平成２年12月12日就任）
	中村　敏	市公民館長
	高橋　桂	日本考古学協会会員
	山崎美都技	市教育委員会委員長職務代理
	浦野　昌夫	市教育委員会教育長（平成２年12月24日退任）
	岩﨑　彌	市教育委員会教育長（平成２年12月26日就任）
事務局長	佐藤　清	市教育委員会教育次長
事務局次長	渡辺　博	市教育委員会社会教育係長
事務局員	堀内　隆夫	市教育委員会社会教育主事
	望月　静雄	市教育委員会社会教育係
	樋山二二子	

調査団

団　　長	高橋　桂	飯山北高等学校教諭
担　　当	望月　静雄	
調 査 員	常盤井智行	
	田村　滉城	
調査補助員	小川ちか子	

作業参加者（順不同）

村山亨・樋口幸正・樋口栄・高橋ちよゑ・米持元志・米持なつ江・斉藤小雪・村山くま・江口武雄・江口正二（以上温井）　市村久雄・市村しげ子・宮沢志づ江（以上上境）　渡辺貞子・渡辺節子・田中雪子（以上桑名川）　宮沢純子・青木秀子・宮沢美子（以上蕨野）　山崎満枝（大深）　樋山巌（戸狩）

宮沢建史・渡辺武志・久保田直也（以上高校生）　今清水豊治（教育委員会事務局職員）

整理参加者（調査員等除く・順不同）

小林新治・丸山三二・常田利夫・小林みさを・北山けさえ・桃井伊都子・綿田茂実・山崎満枝・樋山二二子

清水啓子（教育委員会事務局職員）

4　発掘調査は調査員常盤井・田村および調査補助員小川が中心となって行った。

執筆は、分担して行い、高橋団長が統括した。文責は、目次に明記した。

5　新堤遺跡のテフラ分析については、早津賢二・小島正巳両氏に依頼し、執筆いただいた。

6　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の諸氏・諸機関からご指導・御協力を得た。記して感謝申し上げる。(順不同・敬称略)

平川南（国立歴史民俗博物館）・百瀬長秀（県文化課）・児玉卓文（県文化課）・中島庄一（多摩市教育委員会）・中島英子（多摩市）・広瀬昭弘（県埋蔵文化財センター）・黒岩隆（県埋蔵文化財センター）・パリノ・サーヴェイ（株）・下境地区用水委員会・農地開発下境支部・同上境支部・温井区・下境区・上境区・温井老人クラブ・関東農政局飯山開拓事業所・長野市立博物館

凡　例

1　挿図中に示す方位はすべて真北をさす。

2　遺物実測図は、旧石器は⅔、縄文土器は½、土師器・須恵器等¼、石器・鉄製品½を原則として掲載している。

3　平安時代の土器について、内面に網点ののスクリーントーンのあるものは黒色土器であることを示す。断面に網点のあるものは灰釉陶器であることを示し、体部内外面の網点は灰釉の部分を示す。断面を黒く塗り潰してあるものは須恵器であることを示す。

国営飯山農地開発関係遺跡発掘調査報告Ⅰ

―新堤遺跡・トトノ池南遺跡―

目　　次

巻頭図版　　1・2

序

例言・凡例

第1編　序　　説

第2章　調査経過 …… 3

1　調査に至る経過 …… 望　月 …… 3

2　調査と整理 …… 常盤井 …… 4

A　発掘調査 …… 4

B　整理作業と報告書の作成 …… 5

C　発掘調査日誌抄 …… 5

第2章　遺跡群の位置と環境 …… 高　橋 …… 10

1　遺跡群の地理的位置と自然環境 …… 10

2　遺跡群の歴史的環境 …… 12

第2編　新堤遺跡の調査

第1章　遺跡の概要 …… 常盤井 …… 17

1　遺跡の概要 …… 17

2　調査方法 …… 17

(1) 調査地点　(2) 調査区の設定　(3) 調査方法

3　層　　序 …… 21

第2章　旧石器時代 …… 望　月 …… 25

1　石器群の出土状態 …… 25

A　ブロックの検出 …… 25

B　第1ブロック …… 27

C　第2ブロック …… 27

D　接合・母岩別資料 …… 27

2　出土石器 …… 36

A　石器の分類 …… 36

B　第1ブロック出土石器 …… 36

C　第2ブロック出土石器 …… 38

D　出土石器群について …… 48

第3章　縄文時代 …… 常盤井 …… 49

1　遺　　構 …… 49

A　溝状土坑 …… 49
B　斜めピット …… 49
C　ロームマウンドと焼土 …… 49
2　遺　物 …… 51
A　土　器 …… 51
(1) 山土状況　(2) 分　類　(3) 早期の土器　(4) 前～後期の土器
B　石　器 …… 57
(1) 出土状況　(2) 出土石器
第4章　平安時代 …… 60
1　遺　構 …… 60
A　掘立柱建物・柵 …… 60
B　土　坑 …… 62
2　遺　物 …… 62
A　土器・陶器 …… 62
B　石 製 品 …… 62
第5章　結　語 …… 高　橋 …… 63

第3編　トトノ池南遺跡の調査

第1章　遺跡の概要 …… 常盤井 …… 67
1　遺跡の概要 …… 67
2　調査方法 …… 67
3　層　序 …… 70
第2章　旧石器時代 …… 望　月 …… 72
1　石器群の出土状態 …… 72
A　ブロックの検出 …… 72
B　第1ブロック …… 75
C　第2ブロック …… 75
D　第3ブロック …… 75
E　第4ブロック …… 75
F　第5ブロック …… 83
G　頁岩系石器の出土状況 …… 83
H　接合状況 …… 83
2　出土石器の概要 …… 85
A　石器器種 …… 85
B　第1ブロック出土石器 …… 87
C　第2ブロック出土石器 …… 96
D　第3ブロック出土石器 …… 102
E　第4ブロック出土石器 …… 102
F　第5ブロック出土石器 …… 103
3　トトノ池南遺跡石器群について …… 117

(1) 石器と石器組成について …… 117
(2) 北信濃における石器群の位置付けについて …… 118
第3章 縄文時代 …… 常盤井 …… 123
1 遺 構 …… 123
A おとし穴 …… 123
B 溝状土坑 …… 123
C 斜めピット …… 123
D 集石土坑 …… 123
2 遺 物 …… 125
A 土 器 …… 125
(1) 出土状況 (2) 分 類 (3) 早期の土器 (4) 前・中期の土器
B 石 器 …… 130
(1) 出土状況 (2) 出土石器
第4章 平安時代 …… 132
1 遺 構 …… 132
A 井 戸 …… 田 村 …… 132
B 溝・土坑・建物 …… 常盤井 …… 132
2 遺 物 …… 135
A 土器・陶器 …… 135
(1) 出土状況 (2) 出土土器・陶器 (3) 小 括
B 木 製 品 …… 141
C 鉄 製 品 …… 146
D 石 製 品 …… 146
第5章 結 語 …… 高 橋 …… 149

第4編 自然科学分析

1 飯山市新堤遺跡のテフラ分析 …… 早津・小島 …… 153
2 トトノ池南遺跡・新堤遺跡自然科学分析報告 …… ㈱パリノ・サーヴェイ …… 156

挿 図 目 次

第1編 序 説

図1 国営飯山農地開発事業計画平面図 …… 3
図2 遺跡の位置 1:新堤 2:トトノ池南 …… 11
図3 周辺の遺跡 …… 13

第2編 新堤遺跡

図1 新堤遺跡既出遺物 …… 17
図2 B地点Ⅰ～Ⅳ区 …… 17
図3 調査地周辺の地形 …… 18
図4 地区割設定図 …… 19
図5 A地点実測図 …… 20
図6 Ⅳ区土層図 …… 20
図7 Ⅳ区遺構図 …… 22
図8 主要部遺構図 …… 23
図9 主要部遺構図 …… 24

図10　旧石器時代遺物分布図 …… 26
図11　第１ブロック遺物分布図 …… 28
図12　第２ブロック遺物分布図 …… 29
図13　母岩別資料分類図 …… 31
図14　母岩別資料分布図 …… 32
図15　接合資料分布図 …… 34
図16　出土石器分類図 …… 37
図17　第１ブロック出土石器実測図１ …… 39
図18　第１ブロック出土石器実測図２ …… 40
図19　第１ブロック出土石器実測図３ …… 41
図20　第１ブロック出土石器実測図４ …… 42
図21　第１ブロック出土石器実測図５ …… 43
図22　第２ブロック出土石器実測図１ …… 44
図23　第２ブロック出土石器実測図２ …… 45
図24　第１・２ブロック出土石器実測図 …… 46
図25　縄文時代の遺構 …… 50
図26　焼土実測図 …… 51
図27　縄文土器分布図 …… 52
図28　出土土器１ …… 54
図29　出土土器２ …… 56
図30　石器分布図 …… 58
図31　出土石器 …… 59
図32　土器・陶器分布図 …… 60
図33　掘立柱建物 …… 61
図34　出土土器・陶器 …… 62
図35　出土石器 …… 62

第３編　トトノ池南遺跡

図１　調査地周辺の地形 …… 68
図２　地区割設定図 …… 69
図３　旧石器群セクション …… 70
図４　谷状地土層図 …… 71
図５　旧石器時代遺物分布図 …… 73
図６　旧石器時代遺物分布図 …… 74
図７　第１ブロック遺物分布図 …… 76
図８　第１ブロック石器接合分布図 …… 77
図９　第２ブロック遺物分布図 …… 78
図10　第２ブロック石器接合分布図 …… 79
図11　第３ブロック遺物分布図 …… 80
図12　第４ブロック遺物分布図 …… 81
図13　第５ブロック遺物分布図 …… 82
図14　頁岩系石器分布図 …… 84
図15　石器器種 …… 86
図16　第１ブロック出土石器１ …… 89
図17　第１ブロック出土石器２ …… 90
図18　第１ブロック出土石器３ …… 91
図19　第１ブロック出土石器４ …… 92
図20　第１ブロック出土石器５ …… 93
図21　第１ブロック出土石器６ …… 94
図22　第１・２ブロック間接合資料 …… 95
図23　第２ブロック出土石器１ …… 97
図24　第２ブロック出土石器２ …… 98
図25　第２ブロック出土石器３ …… 99
図26　第２ブロック出土石器４ …… 100
図27　第２ブロック出土石器５ …… 101
図28　第３ブロック出土石器１ …… 104
図29　第３ブロック出土石器２ …… 105
図30　第３ブロック出土石器３ …… 106
図31　第３ブロック出土石器４ …… 107
図32　第４ブロック出土石器１ …… 108
図33　第４ブロック出土石器２ …… 109
図34　第４ブロック出土石器３ …… 110
図35　第４ブロック出土石器４ …… 111
図36　第４ブロック出土石器５ …… 112
図37　第４ブロック出土石器６ …… 113
図38　第５ブロック出土石器１ …… 114
図39　第５ブロック出土石器３ …… 115
図40　第５ブロック出土石器２ …… 116
図41　各ブロック出土石器組成一覧 …… 117
図42　旧石器時代遺跡分布図 …… 120
図43　縄文時代の遺構 …… 124
図44　集石土坑ＳＫ14 …… 125
図45　縄文時代遺物分布図 …… 126
図46　出土土器１ …… 128
図47　出土土器２ …… 129
図48　出土石器 …… 131
図49　平安時代の遺構 …… 133
図50　井　戸　ＳＥ１ …… 134
図51　井　戸　ＳＥ２ …… 135
図52　出土土器１ …… 137

図53　出土土器・陶器２ …… 138
図54　出土陶器３ …… 139
図55　出土陶器４ …… 140
図56　ＳＥ１出土木製品１ …… 142
図57　ＳＥ１出土木製品２ …… 143
図58　ＳＥ１出土木製品３ …… 144
図59　ＳＥ１出土木製品・竹製品・漆製品 …… 145
図60　鉄 製 品 …… 146
図61　平安時代の石製品ＳＥ１出土紡錘車 …… 146

第４編　自然科学分析

図１　発掘地点の地形 …… 153
図２　分析試料採取断面図 …… 153
図３　発掘グリット断面の地質柱状図 …… 154
図版１ トトノ池南遺跡出土材顕微鏡写真 …… 167
図版２ トトノ池南遺跡出土材顕微鏡写真 …… 168
図版３ トトノ池南遺跡出土旧石器岩石鑑定試料 …… 169

表　目　次

第２編　新 堤 遺 跡

表１　出土石器集計表 …… 27
表２　石器計測表 …… 47

第３編　トトノ池南遺跡

表１　旧石器集計表 …… 72
表２　飯山地方旧石器時代遺跡地名表 …… 122
表３　平安時代の土器一覧表 …… 147

第４編　自然科学分析

表１　トトノ池南遺跡出土材の樹種 …… 158
表２　鑑定試料表 …… 159

PLATE 目 次

ＰＬ１　遺跡航空写真
〈新堤遺跡〉
ＰＬ２　調査開始式
　　重機による表土除去
　　Ｂ地点Ⅳ区の調査
ＰＬ３　Ｂ地点全景
　　Ｂ地点Ⅰ区の調査
ＰＬ４　Ａ地点試掘トレンチ完掘状態
　　Ｂ地点Ⅰ区全景
ＰＬ５　Ｂ地点全景
　　Ｂ地点Ⅰ区
ＰＬ６　Ｂ地点Ⅰ区斜めピット
　　Ｂ地点Ⅰ区掘立柱建物群
ＰＬ７　Ｂ地点Ⅰ区
　　Ｂ地点Ⅱ区
ＰＬ８　Ｂ地点Ｄ—８区石匙出土状態
　　Ｂ地点Ｄ—13区小型磨製石斧出土状態
　　Ｂ地点Ｅ—11区抉入石器出土状態
ＰＬ９　Ｂ地点Ｂ—10区溝状土坑ＭＳＫ１
　　Ｂ地点Ⅳ区斜めピット23
　　Ｂ地点Ⅲ区斜めピット１
ＰＬ10　Ｂ地点Ⅰ区焼土１
　　Ｂ地点Ⅰ区焼土２
　　Ｂ地点Ⅲ区ロームマウンドと焼土11
ＰＬ11　Ｂ地点Ⅲ区平安土坑ＳＫ５
　　Ｂ地点Ｂ—10区ロームマウンド
　　Ｂ地点Ⅰ区焼土６
ＰＬ12　Ｂ地点Ⅰ区旧石器確認調査
ＰＬ13　Ｂ地点Ⅳ区調査地拡張
　　Ｂ地点Ⅳ区旧石器第１ブロック
ＰＬ14　Ｂ地点Ⅳ区旧石器第２ブロック
　　Ｂ地点Ⅳ区旧石器出土状態

ＰＬ15　Ｂ地点Ⅳ区土層調査
Ｂ地点Ⅳ区テフラ分析試料採取
ＰＬ16　出土旧石器
ＰＬ17　出土旧石器
縄文時代の石器
ＰＬ18　縄文早期の土器
縄文前期の土器
ＰＬ19　縄文後期の土器
縄文土器
ＰＬ20　平安時代の土器・陶器
平安時代の石製品
〈トトノ池南遺跡〉
ＰＬ21　調査地全景
黒色土上層平安時代遺物分布状態
ＰＬ22　Ｈ～Ｌ―19～21地区溝状土坑と斜めピット
谷状地黒色土除去後の状態
ＰＬ23　調査地全景
谷状地の土層
ＰＬ24　Ｋ～Ｍ―12～14地区縄文早期土器分布状態
旧石器第１ブロック
ＰＬ25　旧石器第１ブロック調査風景
旧石器第２ブロック
ＰＬ26　旧石器第３ブロック
旧石器第４ブロック
ＰＬ27　旧石器第１ブロック中央部
旧石器第２ブロック中央部
溝状土坑ＳＫ７
ＰＬ28　縄文時代の土坑　おとし穴・集石土坑
ＰＬ29　Ｐ―15区墨書土器出土状態
Ｑ―14区黒色土器椀出土状態
Ｐ―14区土師器甕出土状態
ＰＬ30　木組み簡易井戸ＳＥ１
ＰＬ31　ＳＥ１木札出土状態
Ｑ―14区黒色土下面出土自然木
素掘り井戸ＳＥ２
ＰＬ32　出土旧石器(1)
ＰＬ33　出土旧石器(2)
ＰＬ34　出土旧石器(3)
ＰＬ35　出土旧石器(4)　礫石器・台石
ＰＬ36　出土旧石器(5)　個体別資料
ＰＬ37　縄文土器(1)　早期押型文
ＰＬ38　縄文土器(2)　早期撚糸文・縄文、前期縄文
ＰＬ39　縄文土器(3)　早期無文・他
縄文時代の石器(1)
ＰＬ40　縄文時代の石器(2)
ＰＬ41　平安時代の土器(1)
ＰＬ42　平安時代の土器(2)
ＰＬ43　平安時代の陶器
ＰＬ44　平安時代の陶器　灰釉陶器
ＰＬ45　墨書土器・転用硯
ＰＬ46　平安時代の陶器
ＰＬ47　平安時代の木製品　ＳＥ１部材
ＰＬ48　平安時代の木・竹・漆製品　ＳＥ1井戸側・他
ＰＬ49　ＳＥ１出土種子・他
平安時代の石製品
平安時代の鉄製品

第1編　序　　説

第1章　調査経過

1　調査に至る経過

本地域は、長野県の最北部に位置し、千曲川左岸の山地段丘で、標高420m～860mを計る。地区面積604haの地区である（図1　関東農政局資料）。

国営飯山地区農地開発事業施行については、昭和54年から調査が始まり、昭和57年度から設計段階に入った。この地域は、基盤整備の遅れもあって小型機械による生産性の低い農業経営が営まれており、農業従事者の兼業化も進んでいる。そのため、山林原野を農地開発することにより経営規模の拡大、大型機化作業体系の確立により、生産性の高い野菜導入をはかり、中核農家の育成に寄与し、地域農業の振興を図ることを目的として開発計画がなされた。

昭和57年2月、市の農地開発室より小野沢市長名で教育委員会あて『国営飯山地区農地開発事業施行に伴う埋蔵文化財の取り扱いについて』の協議書が提出された。それによれば開発事業は、58年度から10カ年の予定で進められる計画であるが、埋蔵文化財の該当箇所を何年度に工事着手するかは現在のところ不明とのことであった。これに対して市教育委員会では、3月6日付で、周知の埋蔵文化財が存在する箇所もあるので、接近地区については具体的計画樹立後調査を必要とする場合があること。調査の取り扱いについては、計画が具体的に実施計画として作成された段階で、改めて市教育委員会経由で、県教育委員会と協議されたい旨の回答を行った。

59年11月12日、関東農政局飯山開拓建設事業所長名で『国営飯山開拓建設事業区域の埋蔵文化財について』の照会があった。今年度・来年度施行予定地域については飯山市分布報告書においては該当がないが、今後の予定地域において存在するかどうかということで、工事着工予定順表が添付されていた。このことについて市教育委員会は、11月15日付で、今年度・来年度施行区域には存在しないので差し支えない。その他の区域については、昭和60年度中に分布

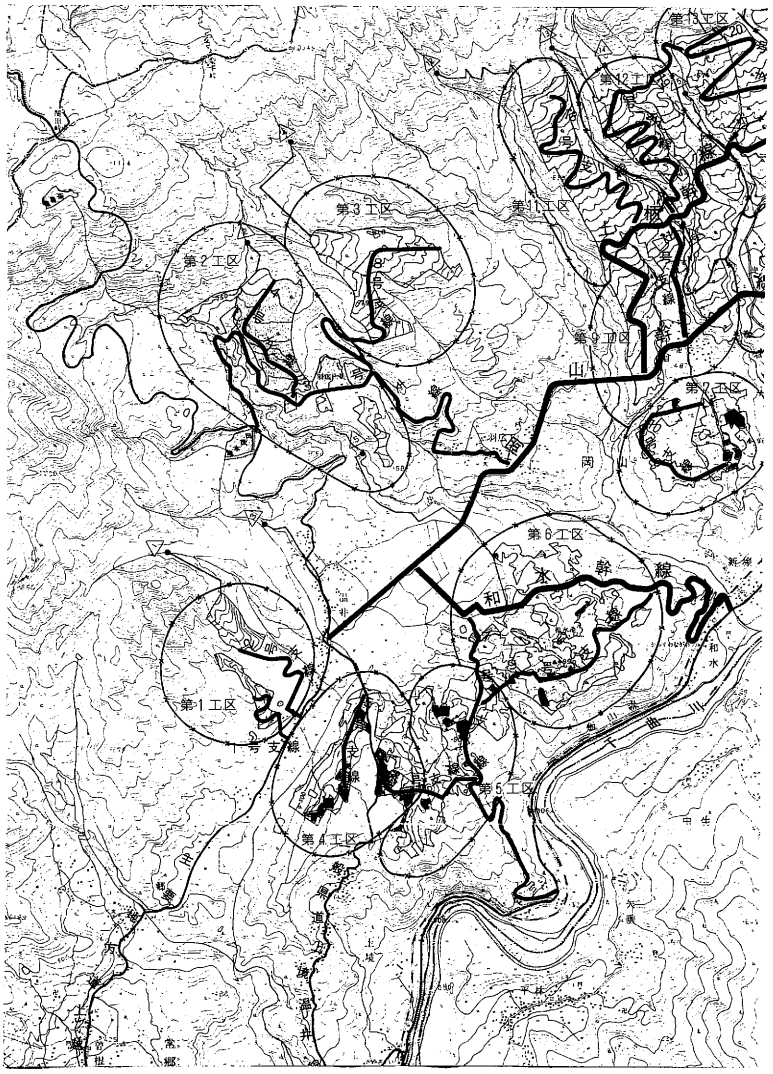


図1　国営飯山農地開発事業計画平面図

図を示すので、その段階で再度協議をお願いしたいと回答した。

この地域の埋蔵文化財の状況については昭和十年代より地元の北条幸作氏をはじめ江口善次氏・藤森栄一氏などによって明らかにされてきてはいたが、いくつかの明確な遺跡を除いて判然としていないのが実情であった。そのため、市教育委員会は昭和60年度当初より分布調査を実施して、関東農政局に回答することになった。

60年11月７日、施行区域内における埋蔵文化財の位地図を関東農政局飯山開拓事業所長あて提出した。調査の結果、施行区域にかかる埋蔵文化財包蔵地が10か所存在するが、工事予定順からすると昭和64年度から対象となると判明した。したがって、具体的協議は当該事業前年度の９月頃県文化課の指導を得て行いたいことで双方が了解した。

平成元年９月７日、市文化財保護審議委員高橋桂氏、県文化課小林・児玉両指導主事、関東農政局相馬係長、市教育委員会清水次長補佐・今清水主査および望月で現地協議を行う。その結果、工法については盛土・切土の箇所があるが、精緻な設計図が作成できていないので、具体的に地下に影響する部分が特定できないため、全面を対象としてほしいとの農政局側の依頼があった。図面上では４遺跡（トトノ池南・藤屋の堤・カササギ野池・休場）が来年度の対象となった。このうち藤屋の堤は現地調査の結果、範囲外の山地であることから調査は行わないこととした。また、休場・カササギ野池についても主要部分は除外されるので確認調査程度とした。また、調査期間は来年度６～９月の４か月間を予定することとした。

その後、着工予定の変更等で、休場・カササギ野池の所在する工区は次年度に送られることとなり、新たに新堤遺跡が所在する工区が予定されることとなった。

11月４日、県教育委員会教育長より、『国営農地開発事業に伴うトトノ池南ほか遺跡の保護について』の通知があった。なお、開発事業が９％の農家負担で進められることから、発掘経費についても総経費の９％を国庫補助事業として実施すべく申請した。

平成２年４～５月、関東農政局飯山開拓事業所より発掘調査の委託依頼があり、６月１日付で締結した。また、調査会の設立、法第98条の通知等の事務手続きを行い、６月11日より発掘調査を実施することとなった。

２　調査と整理

A　発掘調査

今回発掘対象となった遺跡は、新堤遺跡・トトノ池南遺跡である。発掘総面積は約5,600㎡、調査期間を新堤が１か月トトノ池南が２か月とみて、６月から８月の約３か月間を予定した。そして市内最古の旧石器群の出土等予想外の成果をもっておよそ予定どおりに発掘調査を終了した。以下発掘調査の概要を示す。

新堤遺跡

所 在 地　飯山市大字一山字中堤3574-5ほか

調査期日　1990（平成２）年６月11日～同年７月17日

調査面積　2,000㎡

調査結果　旧石器時代：石器群２群

縄文時代　：早期および前･後期の土器・石器・土坑・斜めピット群ほか

平安時代　：掘立柱建物４棟・柵１・土坑・土器・石製品ほか

トトノ池南遺跡

所 在 地　飯山市大字一山字雪坪3138-5ほか

調査期日　1991（平成２）年７月12日～同年９月10日

調査面積　3,600㎡

調査結果　旧石器時代：石器群５群

縄文時代　：おとし穴・溝状土坑・斜めピット・ほか早期および前・中期の土器・石器

平安時代　：井戸２基・ほか土器・陶器・木製品・鉄製品・石製品

B　整理作業と報告書の作成

整理作業は11月１日より、旧第三中学校寄宿舎で行った。整理手順は遺物洗浄・図面整理・遺物ネーミング・接合・実測・トレース・写真撮影であるが、洗浄・ネーミング・接合については主として作業員の方々におねがいした。残念ながら旧石器・トトノ池南遺跡の平安時代の土器の接合、縄文時代の石器の整理などは整理期間が限られているため充分には行えなかった。

本書の作成については、旧石器を望月が、その他の時代の遺物の接合・復元は主として田村があたり、多くの作業員が参加した。実測・拓本・トレースについては主として桃井があたり、遺構図の作成は主として常盤井・小川が分担した。写真撮影は田村が担当した。

本書の編集は高橋団長指導のもと調査員全員が行った。執筆分担については目次に掲げた。

C　調査日誌抄

1990(平成2)年　新堤遺跡・トトノ池南遺跡

５月23日（水）　新堤・トトノ池南遺跡発掘調査の日程・地点確認等について調査団打ち合わせ。新堤遺跡の発掘開始予定を６月５日とするが、種々の事情で後に変更。

５月25日（金）～６月４日（日）　発掘器材の点検、作業員の募集等の発掘準備を行う。

５月30日（水）　関東農政局岡山農地開発担当者と発掘打合せ・現地協議を行う。開発範囲に多少の異同があることを確認。新堤の樹木伐採を６月５日までに農政局で行い、調査開始を６月11日とすることとする。

６月４日（月）　新堤にコンテナハウス設置。

６月５日（火）　器材搬入。

６月６日（水）　新堤下境区水源について下境用水委員長・農地開発支部長他と現地協議。水源周囲20ｍの範囲は立入らないことを確認しその範囲に境界杭を打つ。

６月７日（木）　重機による表土除去を行う（～８日）。

６月８日（金）　調査区の地区割杭打ち。

６月11日（月）　新堤遺跡発掘調査開始式を現地で行う。引き続き便所設置・テナント設営・ジョレンがけ精査等の作業を開始。トレンチ内を便宜的にⅠ～Ⅳ区に呼び分けることとする。

６月12日（火）　Ⅰ区ジョレンがけ続行。D―８区で石匙出土。地元向けの発掘だより『かわら版岡山』を発行。発掘関係者、見学者に配布。

６月13日（水）～６月15日（金）　Ⅰ区ジョレンがけ精査、遺構掘り下げ、遺物取り上げ等続行。下境区水道委員長見学（14日）。

６月18日（月）　重機によるトレンチ拡張を行う。新堤池東部湖岸の土器採集地点近くにトレンチ設定、Ａ地点とする。

6月19日（火）　Ⅰ区ジョレンがけ精査続行。

6月20日（水）21日（木）　雨のため現地作業中止。

6月22日（金）　Ⅰ区C—10区で黒曜石製抉入石器出土。関東農政局2名見学。

6月25日（月）　Ⅰ～Ⅲ区精査・遺構掘り下げ続行。午後雨のため現地コンテナハウスで土器洗浄作業を行う。

6月26日（火）　雨のため現地作業中止。

6月27日（水）～28日（木）　Ⅰ～Ⅲ区ジョレンがけ精査・遺構掘り下げほぼ完了。掘立柱建物4棟を確認。斜めに掘り込まれた柱穴が多い。関東農政局次長他2名見学。

6月29日（金）　Ⅰ区全体写真撮影。Ⅳ区ジョレンがけ精査開始。

7月2日（月）　Ⅰ～Ⅲ区平板測量開始。A地点の調査、遺構・遺物ともなし。トトノ池南遺跡発掘範囲の確認のため関東農政局と現地協議。『かわら版岡山』No.2発行

7月3日（火）　雨のため現地作業中止。

7月4日（水）　Ⅳ区ジョレンがけ精査。午後雨のため現地作業中止。

7月5日（木）　A地点の調査半分割・四分割等を行う。Ⅲ区完掘全体写真撮影。千曲川対岸のスーパー林道より遺跡遠景写真撮影。トトノ池南遺跡の発掘について地主・農政局と現地協議。作物のある畑については一部調査を遅らせ、7月10日より前記畑をさけて調査を開始し、7月16日以降に前記畑に入ることとする。

発掘風景—ピット掘り

7月9日（月）　Ⅳ区完掘全体写真撮影。Ⅱ・Ⅲ区平板測量続行。

7月10日（火）　新堤Ⅳ区土層観察のため黄色粘土層を断ち割ったところ黄色粘土層中より旧石器出土。今後の対応を急拠調査員で協議し、Ⅳ区トレンチを拡張し調査することとする。トトノ池南遺跡重機による表土除去を開始。これより両遺跡の調査を併行して行う。新堤からトトノ池南へコンテナハウス移動。

7月11日（水）　新堤A地点写真撮影・平板測量。同Ⅳ区平板測量完了。トトノ池南重機による表土除去完了、引き続き午後新堤Ⅳ区の拡張を行う。調査期限があるため黄色粘土層の一部まで重機で除去する。

7月12日（木）　新堤Ⅳ区旧石器の調査を開始、続々と石器が出土し始める。新堤からトトノ池南遺跡へ発掘器材の一部を移動。P3:30～新堤遺跡現地見学会。P4:30～現地にてトトノ池南遺跡発掘調査開始式。P5～温井下村公会堂にて反省会。

7月13日（金）　新堤Ⅳ区旧石器の調査続行、安山岩製のフレイク・母岩100点ほど確認。石器群は2群あるもよう。

7月16日（月）　早津賢二・小島正巳両氏による新堤のテフラ分析の現地調査を行う。Ⅳ区旧石器第1ブロック写真撮影。第2ブロック掘り下げ続行。

7月17日（火）　新堤Ⅳ区旧石器第1ブロック平板測量、第2ブロック掘り下げ・写真撮影・平板測量

を終了し、石器を取り上げ、新堤遺跡の現地調査を終了する。新堤からトトノ池南へテント・発掘器材を移動。

7月18日（水）　トトノ池南遺跡ジョレンがけ精査南部より開始。地区割杭打ち開始。

7月19日（木）～20日（金）　南部ジョレンがけ精査続行。土器・石器の出土量は少ない。『かわら版岡山』No.3発行。

7月23日（月）　南部遺構掘り下げ開始。

7月24日（火）　北部重機による表土除去開始（～25日）。中央部に東西に走る黒色土層あり。

7月25日（水）　南部遺構完掘。溝状土坑・斜めピットなど。全体写真撮影。

7月26日（木）～27日（金）　調査地南部平板図作成。調査地北部地区割杭打ち。同ジョレンがけ精査開始。中央黒色土中から平安時代の土器片が出土し始める。関東農政局4名見学（27日）。

7月30日（月）～31日（火）　北部黒色土層ジョレンがけ続行。平安遺物分布状態の写真撮影。遺物分布範囲を図化し遺物とり上げ。関東農政局3名見学（30日）。木島平村教委吉原・伊藤氏見学（31日）。

新堤遺跡Ⅳ区の調査

8月1日（水）～3日（金）　北部黄色粘土層ジョレンがけ精査。縄文時代と思われる土坑（おとし穴か）、平安時代と思われる溝、柱穴等が検出されるが、遺物は少ない。Ⅰ—11地区を中心に黄色粘土層中から旧石器が出土し始める。『かわら版岡山』No.4発行。

8月6日（月）～9日（木）　北部遺構平板測量図作成。中央黒色土層掘り下げ。西部旧石器群掘り下げ。市教委教育長・係長・上境区長見学（8日）。9日P4～トトノ池南遺跡中間反省会を上境多目的集落センターにて行う。

8月10日（金）　台風の雨のため発掘作業中止。石器群の西側と黒色土層側をミニバックで拡張。

8月11日（土）　盆休みに向けて発掘器材をコンテナハウスに収納し、石器群・土器群にビニールシートをかける。

8月12日（日）～19日（日）　盆休み。「飯山地方最古の石器群」新聞発表（12日）。

8月20日（月）～24日（金）　西部旧石器群の調査と黒色土層の掘り下げとを併行して行ない、適宜写真撮影・実測等を行う。石器群はH・Ⅰ—11・12地区の1群の他にJ—9・10地区でも出土し始める（2ブロック）。黒色土層からは引き続き平安時代の遺物が出土する。墨書土器「天□作𥁕□」出土（23日）。『かわら版岡山』No.5発行（24日）。県考古学会森嶋・森山両氏視察（24日）。

8月27日（月）　旧石器群の調査続行。黒色土層東部Q—14地区で簡易井戸を検出。井土埋土には植物遺体（根か）が多量に混入しており、中央に丸太くり抜き材を井戸側としている模様である（SE1）。

8月28日（火）～30日（木）　旧石器群新たに2群を検出（第3・第4ブロック）。黒色土層掘り下げ続行。遺物の出土は少なくなる。SE1掘り下げ続行。湧水が激しいので水中ポンプで排水しながらの作業

であった。木札・漆器片等出土。県文化課視察（30日）。

８月31日（金）　旧石器群の調査・黒色土・ＳＥ１掘り下げ続行。Ｐ―13区で新たに素掘りの井戸検出、完掘（ＳＥ２）。出土遺物はなし。『かわら版岡山』№６発行。

９月３日（月）　旧石器群の調査・黒色土層の掘り下げ続行。黒色土層中からほとんど遺物が出なくなったため本日で終了。ＳＥ１写真撮影、実測、枠木の取り上げ。

９月４日（火）　旧石器時代の地形をみるために中央黒色土層の西半分を重機により黒色土下面まで除去。東から西へ傾斜する深さ１～1.5ｍの谷状地となる。黒色土を重機で概ね除去した後ジョレンがけ精査を行ったところＫ・Ｌ―12・13区で縄文早期押型文土器が石器片とともにまとまって出土。

９月５日（水）　Ｋ～Ｍ―11～13縄文早期土器集中地写真撮影。ＳＥ１井戸側状態が悪いので鉄筋・石膏・発泡性接着剤を用いて固定して取り上げる。Ｐ５～埋文センターにて調査終了の段取りについて調査員会議。

９月６日（木）　縄文早期土器集中地点平板測量図作成、遺物取り上げ。旧石器群新たに第５ブロックを検出。ＳＥ１断ち割り。市職員３名見学。

９月７日（金）　雨のため現地作業中止。Ｐ４～上境多目的集落センターにて発掘終了式を行う。

９月10日（月）　旧石器群第５ブロック取り上げ。谷状地全景写真撮影、平板測量を行う。黒色土層東部の断ち割り調査。最下層より自然木出土。以上の作業に併行して発掘器材の撤収を行いすべての現地作業を終了する。『かわら版岡山』№７発行。

トトノ池南遺跡　井戸の水吸みバケツリレー

発掘だより『かわら版岡山』

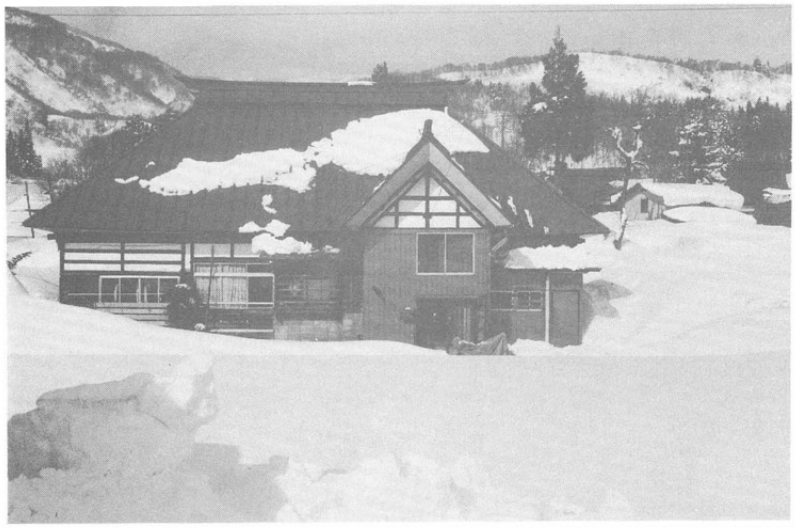
調 査 参 加 者

第２章　遺跡群の位置と環境

１　遺跡群の地理的位置と自然環境

遺跡は、長野県飯山市大字一山(いちやま)に所在する。「千曲川板橋長しふりさけて越後境の山見ゆるかな」。アララギ派の歌人土田耕平が飯山城跡より東頸城(ひがしくびき)山脈を眺めて詠んだ歌である。飯山市北部の自然景観が実に巧みに表現されている。飯山市街から北方を見ると東側より三国(みくに)山脈の峰々がせまり、西側には東頸城山脈が美しい曲線を描きながら新潟県方面へと連なっている。飯山市北部地域はこの両山脈に挟まれた細長い峡谷の間に展開している。飯山盆地を貫流した千曲川は、右岸では飯山市北原(きたはら)、左岸では同戸狩(とがり)地域にいたるや急激に両岸がせばまり、細長い峡谷の間を迂余曲流し左岸に小平地を形成しつつ、新潟方面へと流れ去っている。そして、左岸の小平地には集落が立地している。

さて、関田(せきだ)山脈は北信五岳の一つ斑尾(まだらお)山（1382m）を最高峰として長野県と新潟県の県境を画する1000m内外の低山脈である。今回、調査した温井(ぬくい)地域は、関田山脈の第２の高峰鍋倉(なべくら)山（1288m）の東麓に展開する台地上に存在する。鍋倉山は、トロイデ形の火山であり温井の台地は鍋倉山の溶岩流による溶岩台地である。この溶岩台地は五つからなり立ち、遺跡の所在する場所は最下位の台地であり、「鍋倉第五溶岩台地」と呼称されている。第五溶岩台地の東端は急峻な傾斜で千曲川に接する。温井台地は関田山脈より流下する幾つかの小河川によって切断されながらもはるか北西方面にのび、広大な台地を形成している。そして、この広大な台地上には温井・羽広山(はびろやま)・土倉(つちくら)・柄山(からやま)の小集落が点在している。これら集落の存在する台地は、千曲川が形成した低地の小平地に対して岡山上段地域とよばれている。今回調査した新堤遺跡は、最下位台地の東端に位置している。トトノ池南遺跡は、南端にほど近い中央部に位置しているが、鍋倉山に源を発し千曲川に流入す



岡山地区冬期の雪積 1991.1.30 温井にて 雪積2.6m

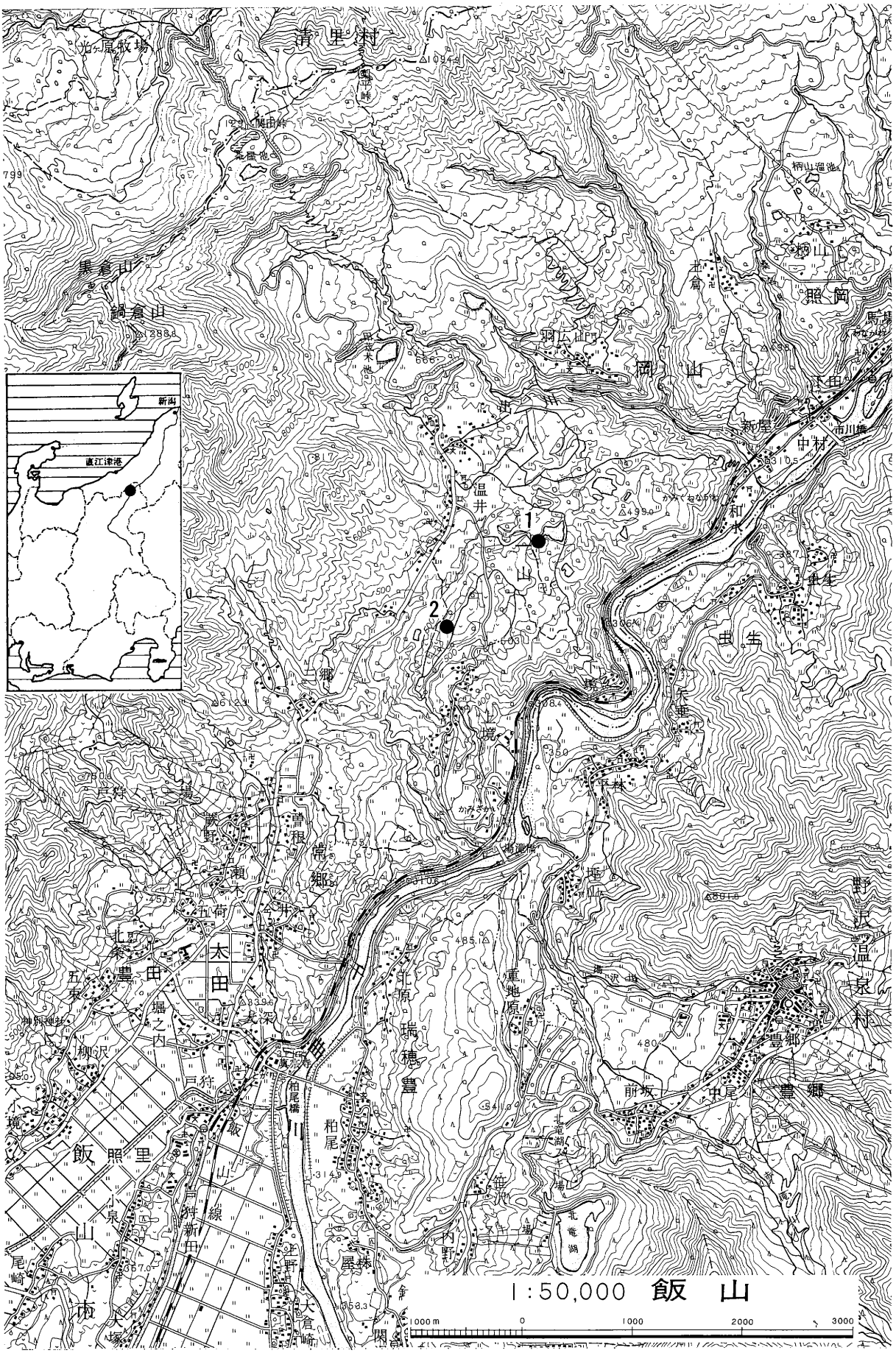


図2　遺跡の位置　1：新堤　2：トトノ池南

る運上(うんじょう)川・今井(いまい)川によって台地は浸食されあたかも丘陵状を呈する西側斜面の中腹に位置する。微地形を観察すると溶岩流の末端面における特徴としての微高地とそれに伴う凹地が随所に認められ変化に富んだ地形をつくり出している。そして凹所には必ずといってよいほど湧水が認められる。新堤・トトノ池南両遺跡はいずれもこの凹地部分に位置している。特に新堤遺跡の付近は湧水が豊富であって築堤工事が行われ下位集落の飲料水、農業用水として利用されている。

温井集落と羽広山集落との間には出(いで)川が深い溪谷をつくって千曲川に流下している。通称川倉(かわくら)谷といい温井と羽広山両集落の大きな交通障害となっていた。近年この川倉谷に架橋されて従来の交通障害は解消された。

遺跡地の存在する第5溶岩台地をほぼ東西によぎって市川谷(いちかわだに)道が通っている。この市川谷道は中世以来、飯山市太田(おおた)から同桑名川(くわながわ)にいたるこの地方の主要幹線であった。明治24年に県道谷街道(現117号線)が開通するに及んで廃れてしまうのである。この市川谷道から分れ関田峠(大明神峠)を越えて新潟県頸城郡板倉(いたくら)町に通ずる道路が通っている。この道路は上杉謙信が開いたものといわれ、信越交通の最重要道路であった。温井以北の飯山市岡山地区には、関田(せきだ)、筒方(どうかた)、梨子平(なしだいら)、牧(まき)、宇津の俣(うつのまた)、伏野(ぶすの)、須川(すかわ)等の峠道があり、中世以降明治時代にいたるまで新潟県との経済・社会・文化交流に大きな役割を果したのである。

飯山地方は、全国で屈指の多雪地帯として知られている。特に鍋倉山東麓に位置する岡山上段地域の雪積量は私達の想像をはるかに越えている。このような悪環境をものともせずに開拓の鍬を振りつづけて水田・畑地を切り開き集落を形成した人々の苦労に思いを馳せるときただ頭が下がるのみである。

鍋倉山麓は全国でも数少ないブナの原生林地として知られている。往時は台地全体にブナ林が鬱蒼として繁茂していたものであろう。そして、その下に棲息する動物も豊かであったであろう。トトノ池南遺跡でもブナの自然木が出土しており、ブナと人間生活の深いかかわり合いを証明している。

2　遺跡群の歴史的環境

温井地区の先史時代遺跡を最初に学界に紹介したのは、藤森栄一氏であった。すなわち、今回調査した新堤遺跡に近接する鳴沢頭(なるさわがしら)遺跡出土の土器及び石鋸の報文である。それは昭和9年のことであった。これを契機として温井地区に先史時代の遺跡が存在することが知られるにいたるのである。

この項では、今回調査した新堤・トトノ池南両遺跡を中心とした飯山市北半—市川谷の歴史的環境について触れてゆきたいと思う。

先土器時代の遺跡ではオリハンザがあげられる。この遺跡は、藤森栄一氏が鳴沢頭の報文をなされた頃、信濃史学界の指導者であった栗岩英治氏の影響で考古学に興味をもたれた地元の北条幸作氏が丹念に採集された遺物の中にポイント、マイクロリスが存在したことが契機である。ポイント・マイクロリスに注目したのが麻生優・樋口昇一両氏であった。昭和30年(1955)のことである。現在この遺跡は圃場整備事業で完全に消滅してしまっている。このことについては、「長者清水・水の沢遺跡」の報告者(飯山市埋蔵文化財調査報告第11集)で詳細に触れている。

温井台地上には、この他中塚谷地(なかつかやち)、中外(ちゅうがい)、西外峰(にしとみね)遺跡等の遺跡が知られている。今回調査したトトノ池南・新堤両遺跡のようにこれ等の遺跡も全くの処女地であって豊富に遺物が眠っている可能性が高い。いずれにしても温井の台地は先土器時代の宝庫であって、今後の調査次第ではどのような遺物が出土するか見当がつかない。先土器時代人にとって温井台地が魅力ある場所であった証左といえよう。同時にこの台地が何故、これほどまで先土器時代人を魅了したのであろうか、

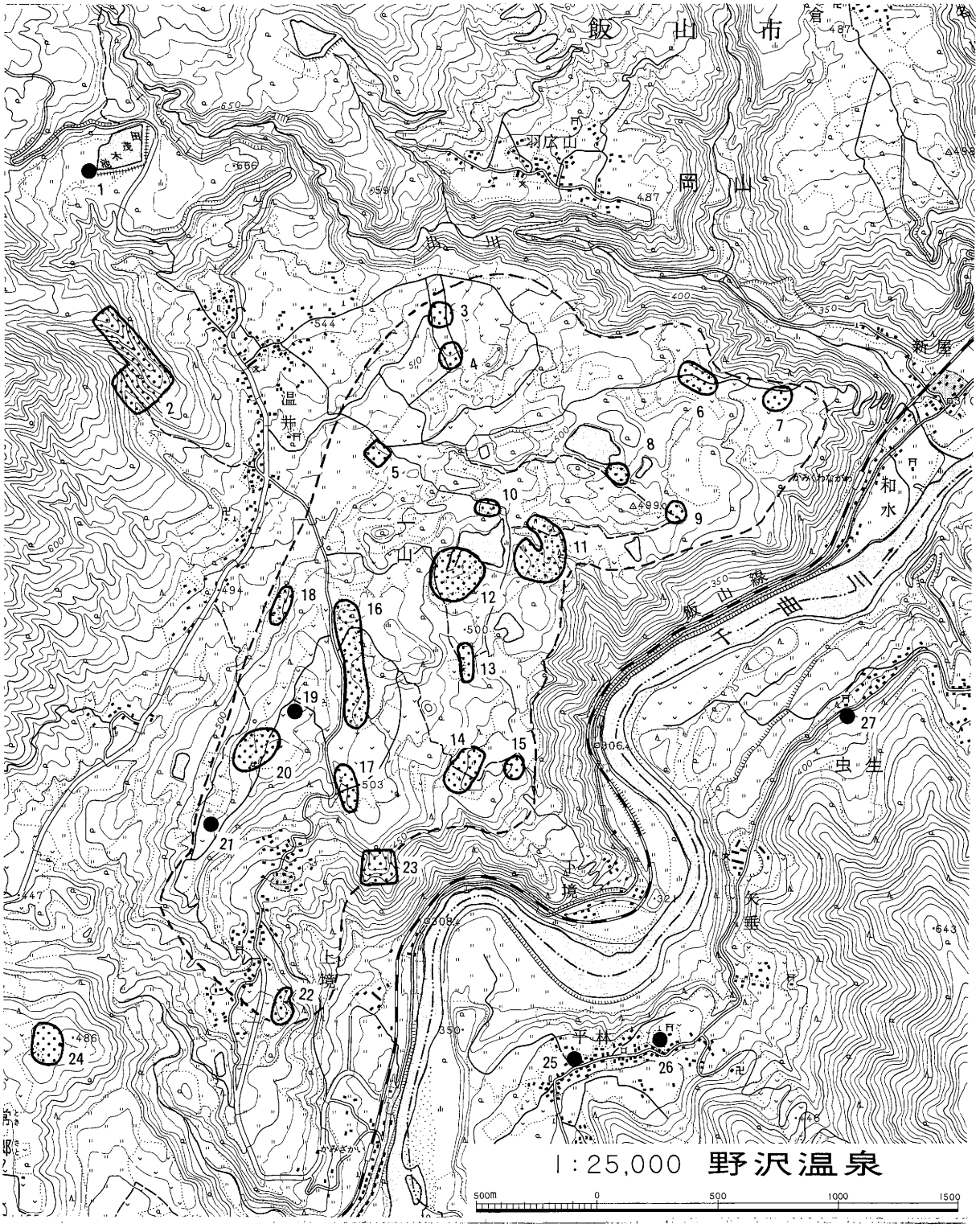


図3　周辺の遺跡　1:25,000

1 田茂木平(縄・弥？)　2 温井城　3 オリハンザ(先・縄)　4 水の沢(先・縄)　5 長者清水(平・中)
6 藤屋の堤(縄)　7 雨池(縄)　8 カササギ野池　9 休場(縄)　10 カツボ池上(平)　11 鳴沢頭(縄・平)
12 新堤(先・縄・平)　13 大原　14 カツボ池(縄・平)　15 下境(平)　16 中塚谷地(先・平)　17 上塚(先)
18 温井(仮称、先)　19 トトノ池(先・平)　**20 トトノ池南(先・縄・平)**　21 西外峰(先・縄)　22 中外(先・縄)
23 上境城　24 雨池グランド(先)　25 平林A(縄)　26 平林B(平)　27 虫生B(先)

今後の重要課題といえよう。

縄文時代早期の遺跡としては鳴沢頭と向原(むこうはら)があげられる。いずれも押型文土器が出土している。そして、今回調査した両遺跡でも押型文土器が検出された。対岸の下高井(しもたかい)郡野沢温泉(のざわおんせん)村虫生(むしう)遺跡でも出土している。飯山地方では、早期の遺跡は押型文土器と条痕文系の土器が主体である。出土する土器の量も多くない。先土器時代の遺物が豊富であるのとは対照的である。

縄文前期に遺跡では先記した鳴沢頭・向原の両遺跡がある。いずれも縄文前期後半の土器が出土している。縄文前期も早期と同様に遺物の出土量はそれほど多くない。いうならば小規模な遺跡といえよう。千曲川流域低地の遺跡が大規模なのとは比較して興味ある現象である。

縄文中期の遺跡としては、千曲川右岸の台地上に位置する下高井郡野沢温泉村平林(ひらばやし)A遺跡がまずあげられる。この遺跡は立正大学教授坂詰秀一氏によって調査された。縄文中期後半の土器・土偶・石皿等豊富な遺物を出土する遺跡として知られている。

温井を中心とする台地上には、田茂木平(たもぎだいら)・藤屋の堤(ふじやのつつみ)をはじめとして縄文時代の遺跡と推定される遺跡が幾個所か存在する。しかしながら、これ等の遺跡は、北条幸作氏の調査にかかわるものが大部分であって、氏が故人となられ、採集された遺物も所在不明のものが多く明確な時代判定は現在の所困難である。今後の調査に期待する以外ない。

弥生時代の明確な遺跡は、現在のところ上境以外はない。田茂木平遺跡で弥生土器が出土しているとのことであるが、これも故北条幸作氏採集になるものであって、全く不明である。むしろ温井台地には、弥生文化が浸透しなかったと考えてよいのではなかろうか。一歩ゆずって仮に弥生文化が存在したとしても微々たるものと考えてよいであろう。

古墳時代、奈良時代の遺跡は今の所確認されていない。ただ地元の古老によれば、温井台地山林中に古墳と思われるものが存在するとのことである。千曲川左岸の古墳最北端は桑名川であることを考えると温井に存在する可能性もある。今後の調査にまちたい。

先土器時代に華々しい人間生活の舞台となった温井台地が再び脚光を浴びるのは平安時代以降である。平安時代中期になると温井台地の各所に生活の痕跡が認められるようになる。そして、中世には越後との交流が活発化して越後と北信濃とを結ぶ重要な拠点となった。温井城・上境城がその証拠であろうし、更に長者清水遺跡出土の珠洲系陶器がそれを物語っている。峠―それは人間社会における文化・経済・社会・政治交流のモニュメントである。関田山脈中の温井台地に関係する関田峠・筒方峠・梨子平峠は、かつての繁栄を忘れたかのように静かに眠りつつも、私達に過ぎ去りし歴史の数々を語りかけている。

第２編　新堤遺跡の調査

第１章　遺跡の概要

１　遺跡の概要

新堤遺跡は岡山地区温井から同下境へ下る道の途中にある下境新堤池の東～南岸に展開する遺跡である。古くより温井の北条幸作氏によって縄文時代早期・前期の遺物が採集されている。(注1) 1983(昭和58)年の分布調査でも縄文時代前期末葉の土器・石器片・須恵器片が新堤池の東南岸水際から採集されている（図１）。

今回発掘したのは古くより遺物が採集されている新堤東岸に近接するＡ地点と、新堤南岸から約７～８ｍ程の比高をもった台地上のＢ地点である（図３）。

東の小丘から新堤への傾斜変換点にあたるＡ地点では遺物・遺構ともに検出されなかった。遺跡の中心はより新堤寄りになるのだろう。南岸台地上のＢ地点では、旧石器、縄文・平安の各時代の遺構・遺物が検出されている。

新堤遺跡の立地する段丘面は温井集落のある面から２段下がった面にあたる。ここは小丘や小谷が入りくみ複雑な地形を呈している。遺跡周辺の地形をみれば遺跡は北に開く小谷の奥部にあたり、小谷を堰き止めて新堤溜池が作られているので、もとはＡ・Ｂ両地点ともに小谷の両岸のやや広い台地上にあたるのだろう。小谷はＡ・Ｂ両地点の間を通り、西へ屈曲してＢ地点の南背後の小丘陵の裏へ入りこむ。またここは現在でも下境地区の飲料用水として利用されている水源があるように、水は潤沢な地である。水源地と新堤の間の湿地は水田として利用されていた。

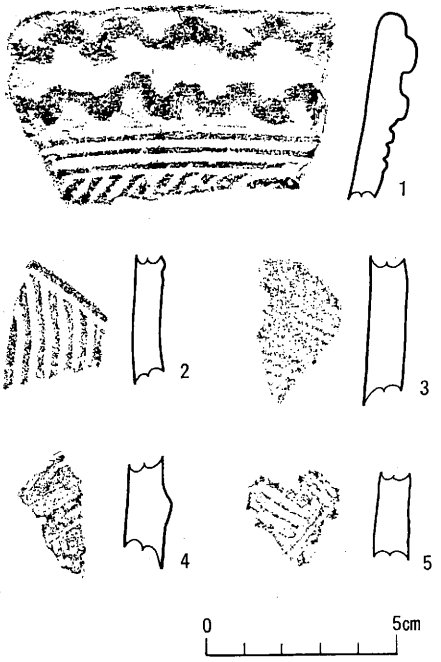


図1　新堤遺跡既出遺物
（旧カツボ池1983年採集品）1：2

注１　『岡山村史』飯山市公民館岡山支館　1960

２　調査方法

(1)　調査地点（図３）

調査対象地は新堤南東の農地開発予定地で、当初は新堤に東から舌状につき出た小台地（Ａ地点北東荒地）も発掘する予定であったが後に農地開発予定地が東方小丘までと変更になったので、舌状小台地に近接する所を試掘することとし、遺物・遺構があれば開発予定地内境界まで拡げることとしたが遺構・遺物ともに出土していない（図５）。

Ｂ地点は新堤南岸の小台地で遺跡立地条件が良好と考えられる所なのでここも発掘することとした。まず時間的な関係で重機による試掘を行い、遺構・遺物が検出された地点を中心に調査地を拡張した。

なお旧石器群が検出されたＢ地点西部のⅣ区については発掘終了予定間際の地山断ち割り調査時に旧石器が出土したことや、黒色土の堆積が厚いこと等もあって残念ながら充分な調査をしていない。

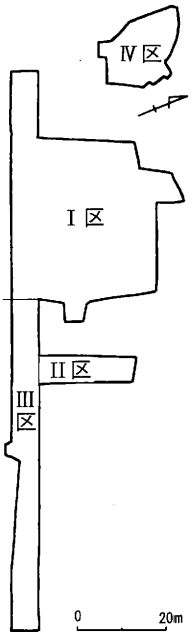


図２　Ｂ地点Ⅰ～Ⅳ区

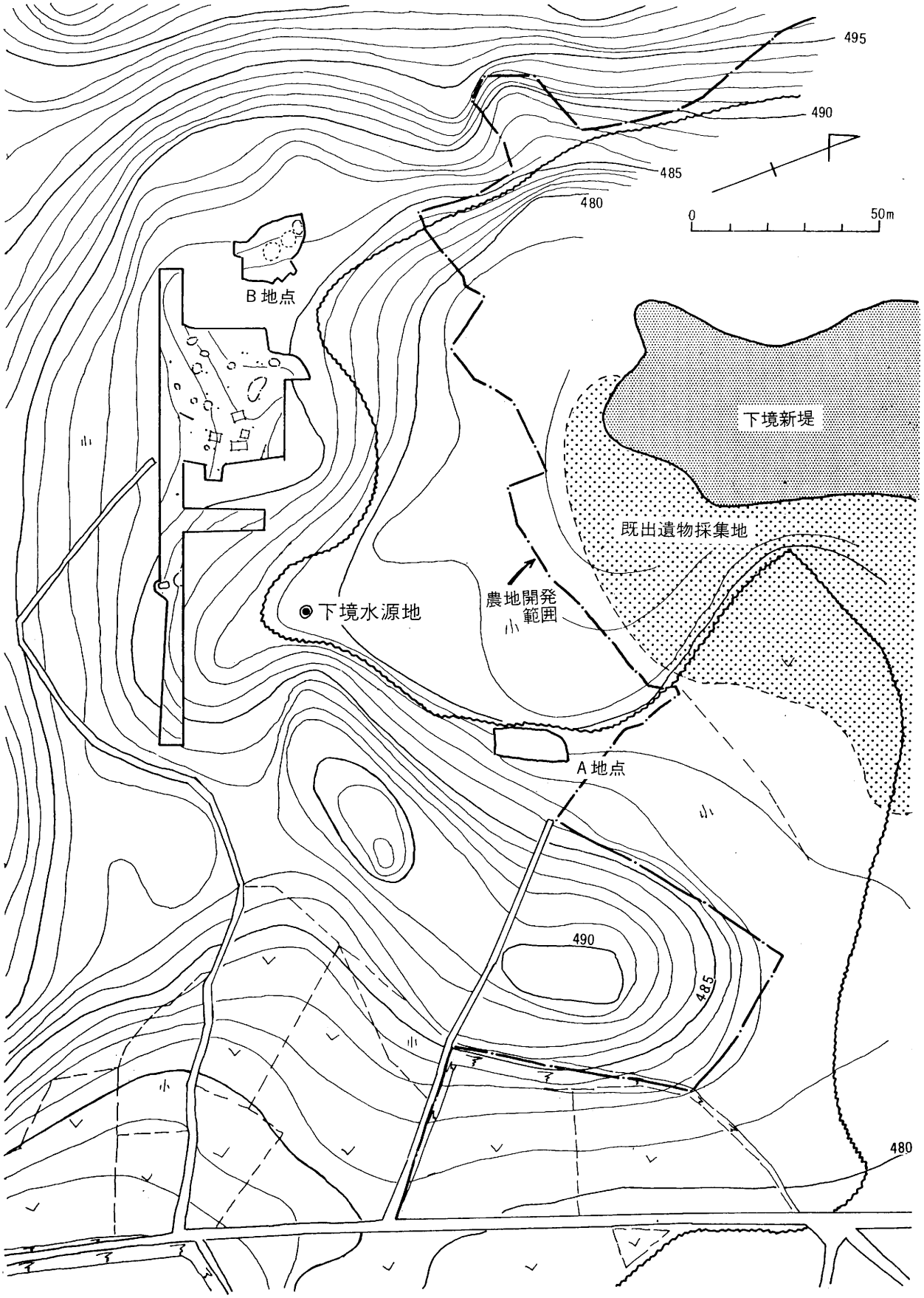


図3　調査地周辺の地形　1:1500

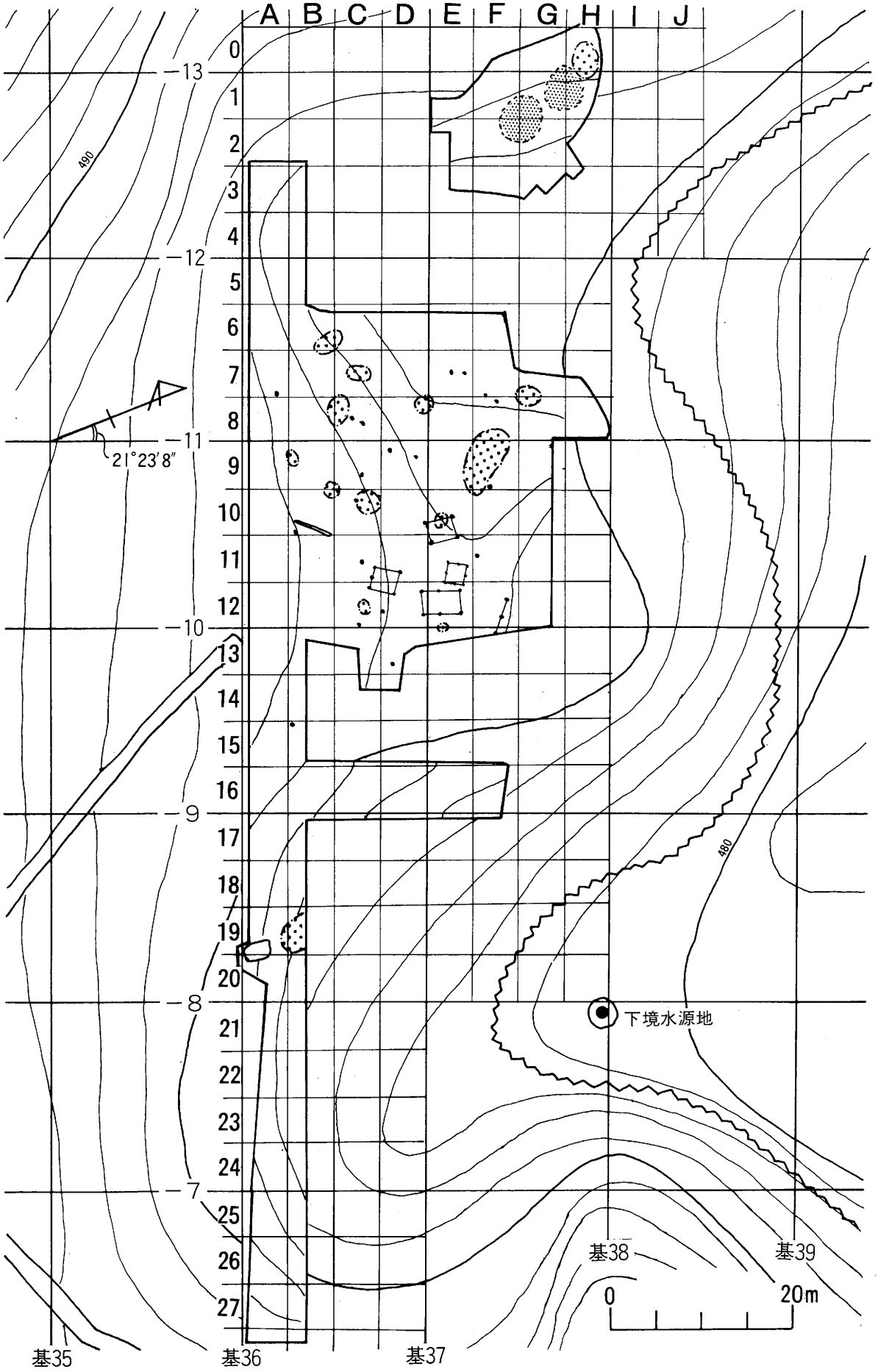


図4　地区割設定図　1:600

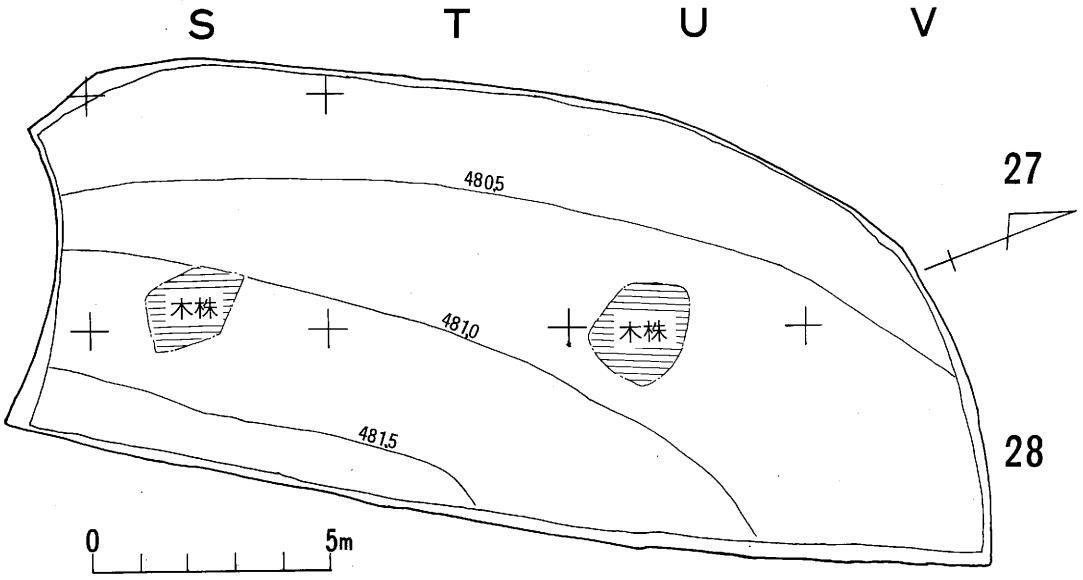


図5　A地点実測図　1:80

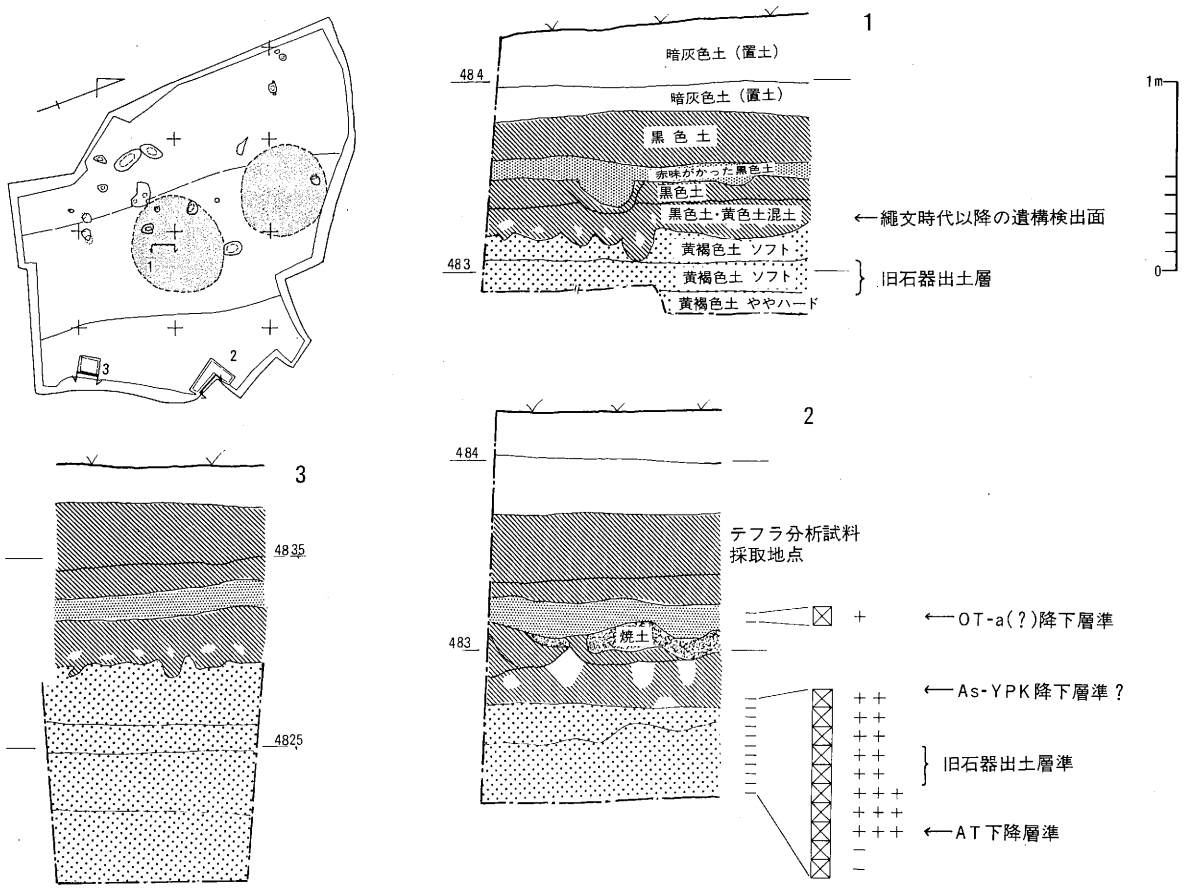


図6　Ⅳ区土層図　1:40

(2) 調査区の設定（図２・４）

調査区内の地区割りについては、関東農政局作成の工事用20ｍ方眼に合わせて行った。Ｂ地点に基36ラインのポイントが走っており、そこを基準に５ｍ方眼を設定し、東西に西から１・２・３……、南北に南からＡ・Ｂ・Ｃ……と呼称することとした。なお工事用方眼はＮ21°23′08″Ｅである。

またＢ地点の調査にあたってトレンチを便宜的にⅠ～Ⅳ区に呼びわけた（図２）。したがって遺物取り上げ番号にⅠ区―１番と大地区を入れるものがあったり、Ａ―13―１番と小地区のみの表示があったりする。

レベルは工事用ベンチマーク交点１を基準とした（Ｌ＝478.835ｍ）。

(3) 調査方法

調査方法は、時間の関係もありまず重機によって表土（耕作土）を除去し、所によっては黒色土も一定程度除去した後に、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に掘り下げて遺構・遺物を検出していった。遺物の取り上げについては、縄文期の遺構が明確でないこと等から１点ずつ地点と高さを測ってから取り上げた。遺構図は基本的に40分の１平板図を作成し、遺構に応じてより細かい作図を行った。写真は全体・遺物出土状態等を適宜白黒とカラースライドで撮影した。

３　層　　序（図６）

調査区内の層序は基本的に上層から暗灰色土(耕作土ないし表土)、黒色土、漸移層、黄色粘質土(地山)であるが、地点によっては暗灰色土直下が黄色粘質土の所もある。また、黒色土の堆積の厚い所では黒色土の中間にやや赤味をおびた層が入る所もある。

地表から地山の黄色粘質土までの厚さは谷状部の１～７区・17～23区では1.2～1.8ｍと厚く、他は 0.3～ 1.0ｍ程である。

縄文時代以降の遺構検出面は基本的に黒色土層下面で、遺物は黒色土中より主に出土しているが、ロームマウンド中からも縄文土器が出土している。

旧石器は黄色粘質土上面から約15～25㎝下で出土している。

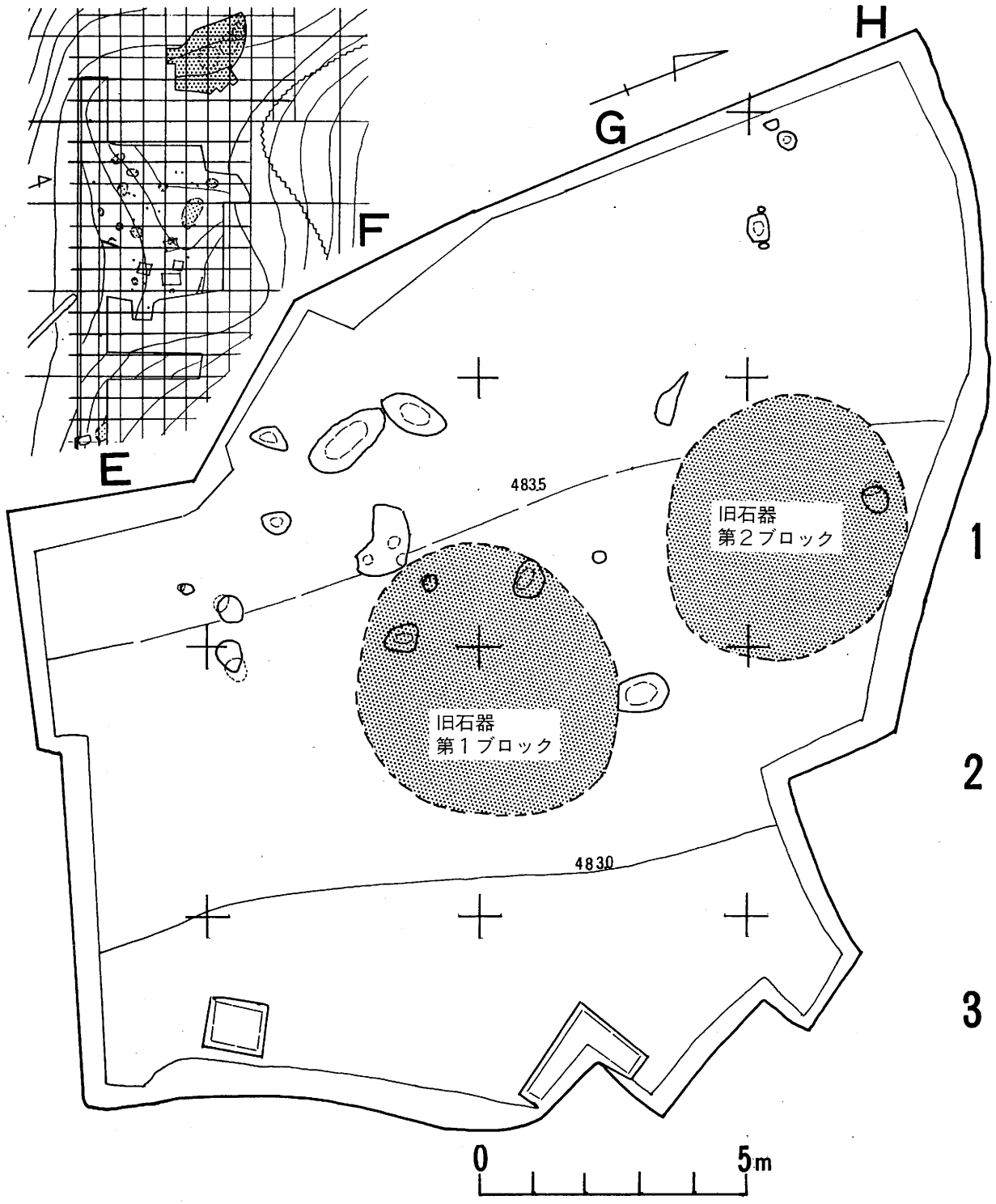


図7　Ⅳ 区 遺 構 図

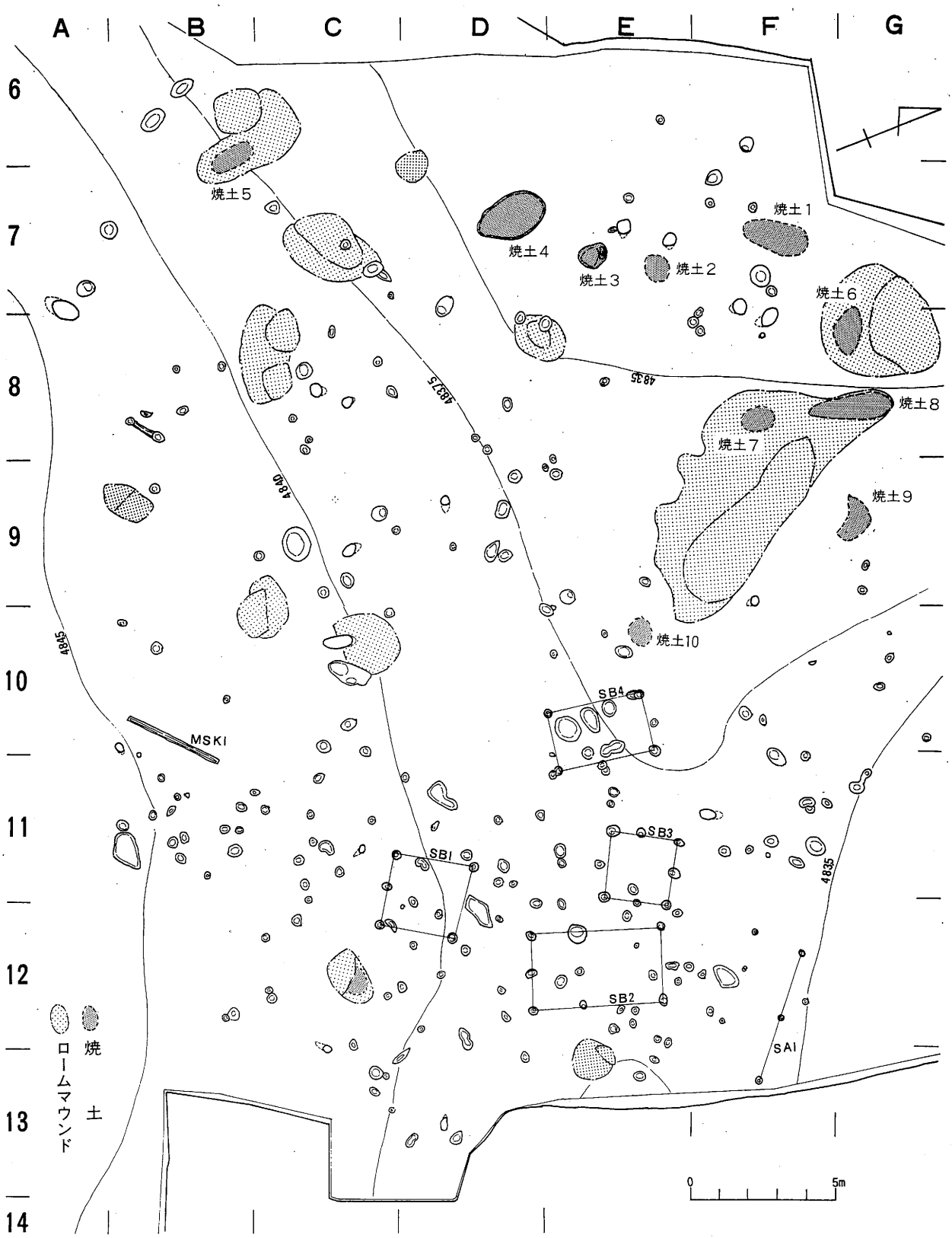


図8　主要部遺構図　1:200

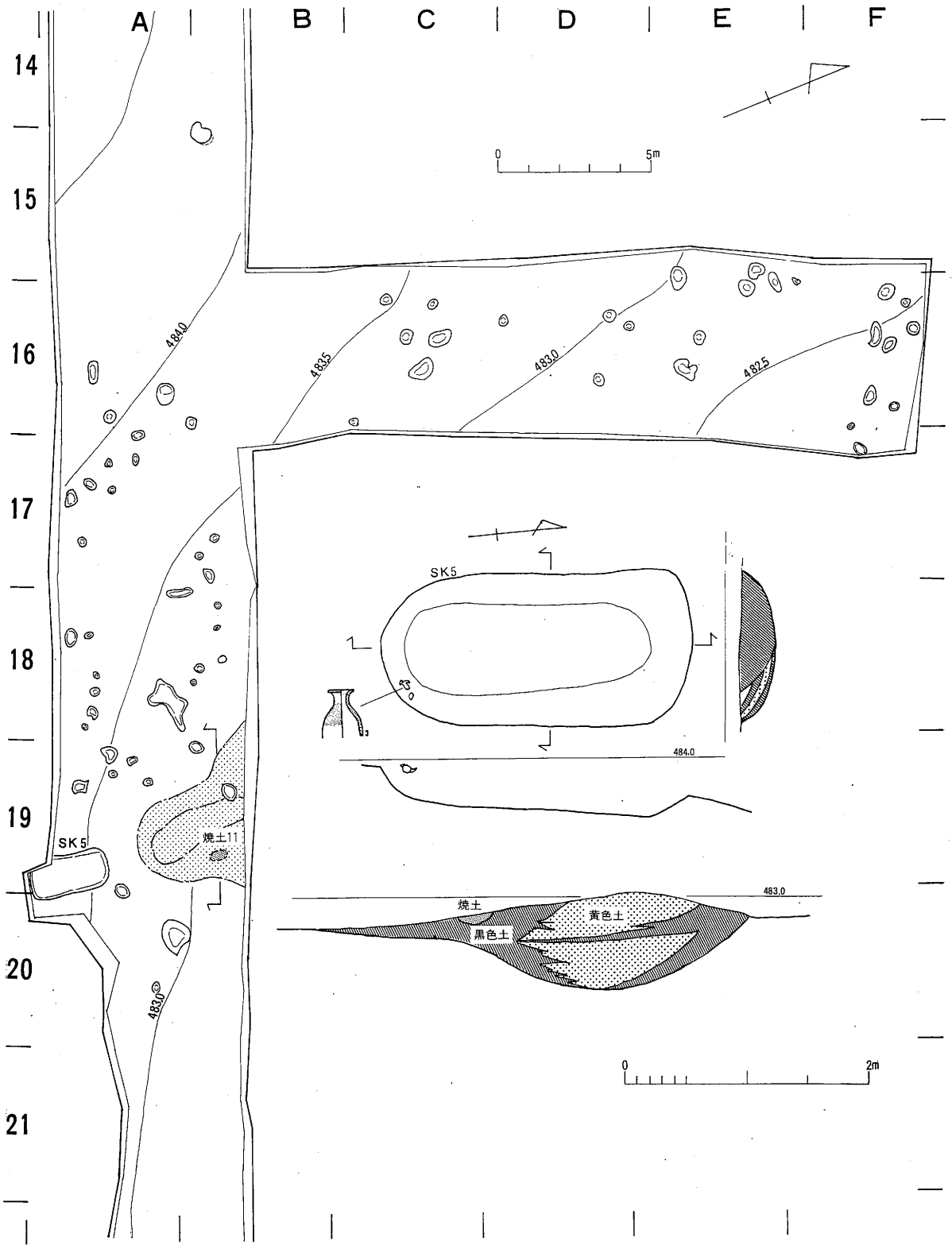


図9　主要部遺構図　1:200

第２章　旧石器時代

１　遺物の出土状態

Ａ　ブロックの検出（図10）

地形は、大局的には千曲川の高位段丘面に位置し、鍋倉溶岩等によって形成された２～３段の丘陵面に別れており、その中位に存在している。丘陵面は起伏に富み、低地・山地等が交互に展開している。遺跡の立地する地域は、北側が現在築堤され新堤と呼称される溜池となっている旧湿原で、千曲川の段丘崖にむかって開口していく。東側はやや平坦な丘陵面が続く。南・西側は傾斜を増して段丘崖となる裾部となる。

遺跡はこの新堤を北に望む狭小な平坦地に所在する。旧地形的には、東北側にやや小高い残丘があるので、現在新堤となっている低湿地に向かって開口するノッチ（谷頭部）の部分に相当する。

第Ⅳ区の調査において、標準セクション図作成のために、調査区外に試掘坑を設けた（図６―１）。その結果、地表下 140㎝の褐色テフラ層内よりややまとまって剥片を検出した。これが旧石器時代の石器であると確認し、急遽拡張し調査することとなった。試掘坑はＧ―３区に位置し、後の第１ブロック内東側部分にあたる。

なお、Ｉ区においても旧石器と考えられる石器が出土し、部分的にテフラ層内の調査を行ったが検出することができなかった。本地区は押型文土器などの縄文早期に比定される土器片が出土しているために、そうした時期の剥片の可能性もあり、本稿では取りあげなかった。

Ⅳ区の調査は、機械力によって周辺部約 200㎡の範囲において黒色土を除去し、テフラ層内の調査を行った。石器群は黒色土漸移層より15～25㎝下位を中心として包含されており、その状態は、黒色土に厚く覆われていたこと、およびテフラ層が比較的発達していることにより攪乱等を受けず、一文化層としてとらえられる良好な出土状況であった。ただし、一部には後世柱穴などが部分的に構築されている箇所もあった。本地区の層序については、前項で触れたとおりである（図６）が、黄褐色土層（テフラ層）について少し触れることとする。テフラ層は、黒色土層30～130㎝下位に存在する。厳密に自然堆積層として細分離はできなかったが、やや軟質のテフラ（ソフト・ローム）層が約40㎝～50㎝あり、しだいにやや硬質のテフラ（ハード・ローム）層に変化する。また、やや軟質のテフラ層はややくすんだ色調から明るい色調に変化があり、上・下層に分離できた。石器群は、このうちの下位の層準内において検出されている。早津・小島両氏によるテフラ分析（付編参照）によれば、姶良Tn火山灰降下層準が旧石器出土下限より10～15㎝下位に純層に近い状態で検出されたとされる（図１）。また、褐色風化テフラ層の上限には、浅間草津軽石層（As-YPk、1.0-1.1万年）の可能性がある軽石型火山ガラスも検出されている。

以上を要約すれば、本遺跡出土石器群の出土層位はAT層よりも10～15㎝上位にあり、As-YPkの可能性がある漸移層直下より15～25㎝下位にある。

石器の分布は、大まかに２か所に分布の集まりが認められた。この集まりを『ブロック』と呼称し、第１・第２ブロックとして以下に説明を加えることとする。出土石器の総数は 106点で、このほか礫などが数点出土している。出土石器の集計は次のとおりである。

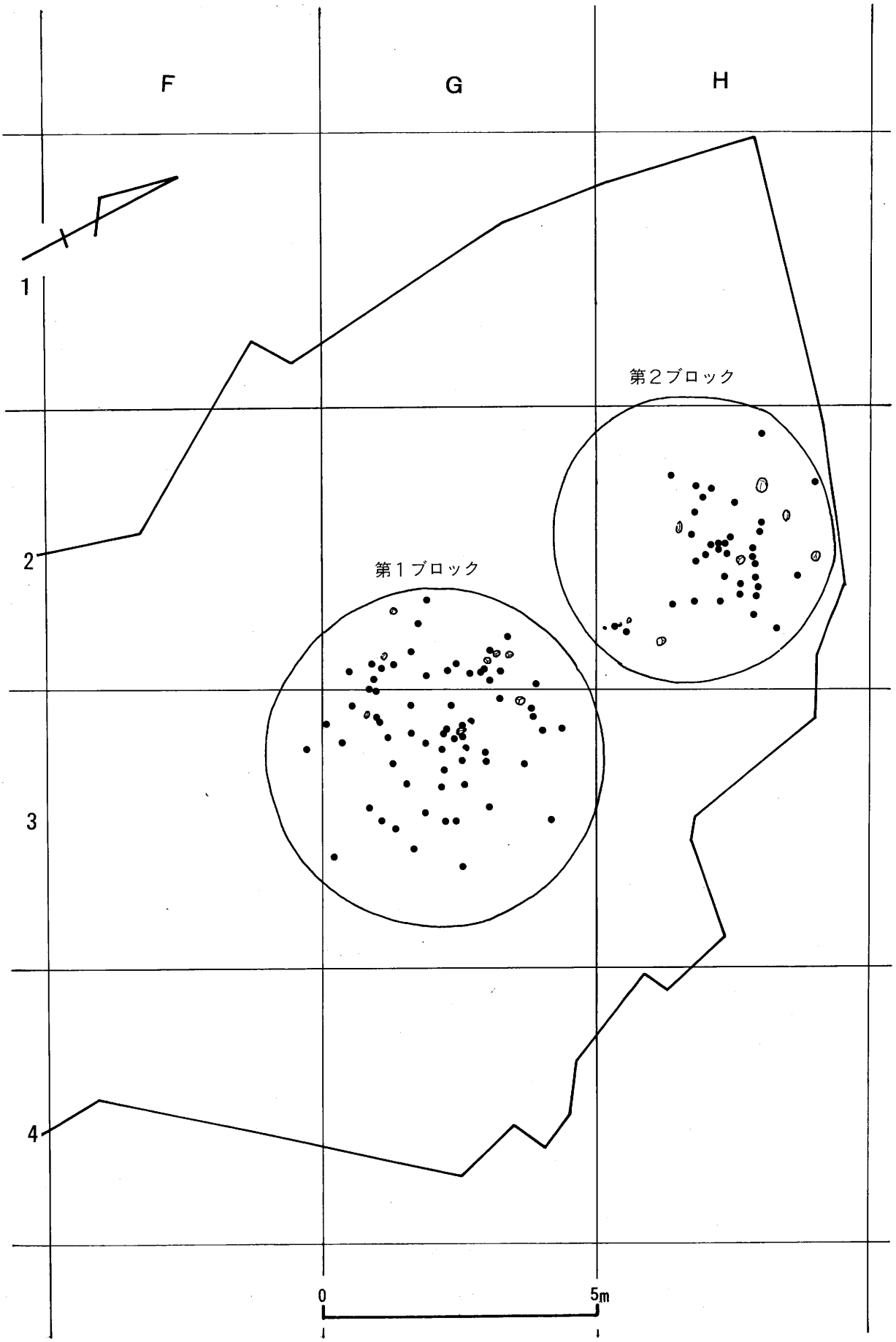


図10　旧石器時代遺物分布図（1：100）

ブロック	ナイフ形石器	削　器	使用痕のある剥片	礫石器	石　核	剥片･砕片	計
1	1	1	4	3	1	55	65
2	1	2	1	0	1	36	41
計	2	3	5	3	2	91	106

表１　出土石器集計表

B　第１ブロック（図11）

G―２・３区を中心として、径約５ｍの範囲に集中して出土している。旧地形的には凹部となる地点である。出土遺物総点数は65点、１点の使用痕のある頁岩系の剥片・チャート製同一母岩の剥片２点および礫石器以外すべて安山岩製で構成される。本地区はやや東南方向に傾斜しており、石器出土も傾斜面に添って出土しており、垂直分布では遺構の存在は認められない。レベル差は20cmを計るが、層位的には軟質テフラ下層の範囲内にある。礫は９点出土し、そのうち４点は接合して拳大に復元されたが、肉眼で観察する限り、火割れ等の痕跡は認められない（ＰＬ16－４）。石器集中部のほぼ中央にある礫は、人為的加工痕やキズは認められなかったが、台石の可能性が高い（ＰＬ16－４イ）。

出土石器は、二次加工のあるいわゆる製品は、ナイフ形石器・削器が各１点、礫石器３点と少ないが、剥片にも縦長の刃器状剥片が少なからず存在している。また、石核・打面再生剥片も存在しているので、石器製作が行われたものと考えられる。ナイフ形石器はブロック南端の破損礫付近より出土している。削器および礫石器は、ブロック西側の破損礫付近にまとまりをみせる。ブロック内における石器の出土位置は、製品・剥片ともに特別有意な関係は認められないが、破損礫付近にまとまる傾向は指摘できる。

C　第２ブロック（図12）

第１ブロックの北1.5ｍの距離において第２ブロックが存在する。H―２区を中心として、５×3.5ｍの範囲を有するまとまりである。ブロック内南側にやや離れて５点存在するが、これは礫が大半を占めており同一ブロックとして括れない可能性もある。除外した場合、径3.5ｍのブロックと径80cmのサブ・ブロックとになるが、本報告では一括し第２ブロックとして説明することとする。

本地区は第１ブロック方向およびやや西側に傾斜し、第１ブロックよりやや高位に存在する。石器の出土状態は、中央において検出された、扁平な台石状の石を中心として出土しており、このことは第１ブロックと類似している。なお、北側に出土した礫は土層中に混在している自然礫と思われる。

出土石器総点数は41点で、第１ブロック同様安山岩製が圧倒的に多い。安山岩以外では黒曜石小剥片３点、チャート製石核１および頁岩系のナイフ形石器１点である。

D　接合・母岩別資料

(1)　接合・分類の目的

出土した剥片類が接合し、あるいは同一の石から剥離されたと識別することによって、ブロック間の同時性や、同一文化層の認定に際して大きな効力をもっている。さらにはその集団が持つ石器製作技術を特定し、型式をとらえることも可能であるし、ひいては石器が最終的に出土した過程を明らかにし、個人の動きを探ることも可能であるかもしれない。もちろんそのためには、埋没過程における自然的営力の問題や凍土現象等の様々な問題が内包している。またそれ以前の問題として、こうした接合・個体別資料識別には多分に豊富な経験と専門的知識が必要とされる。次編におけるトトノ池南遺跡分析においても同様で

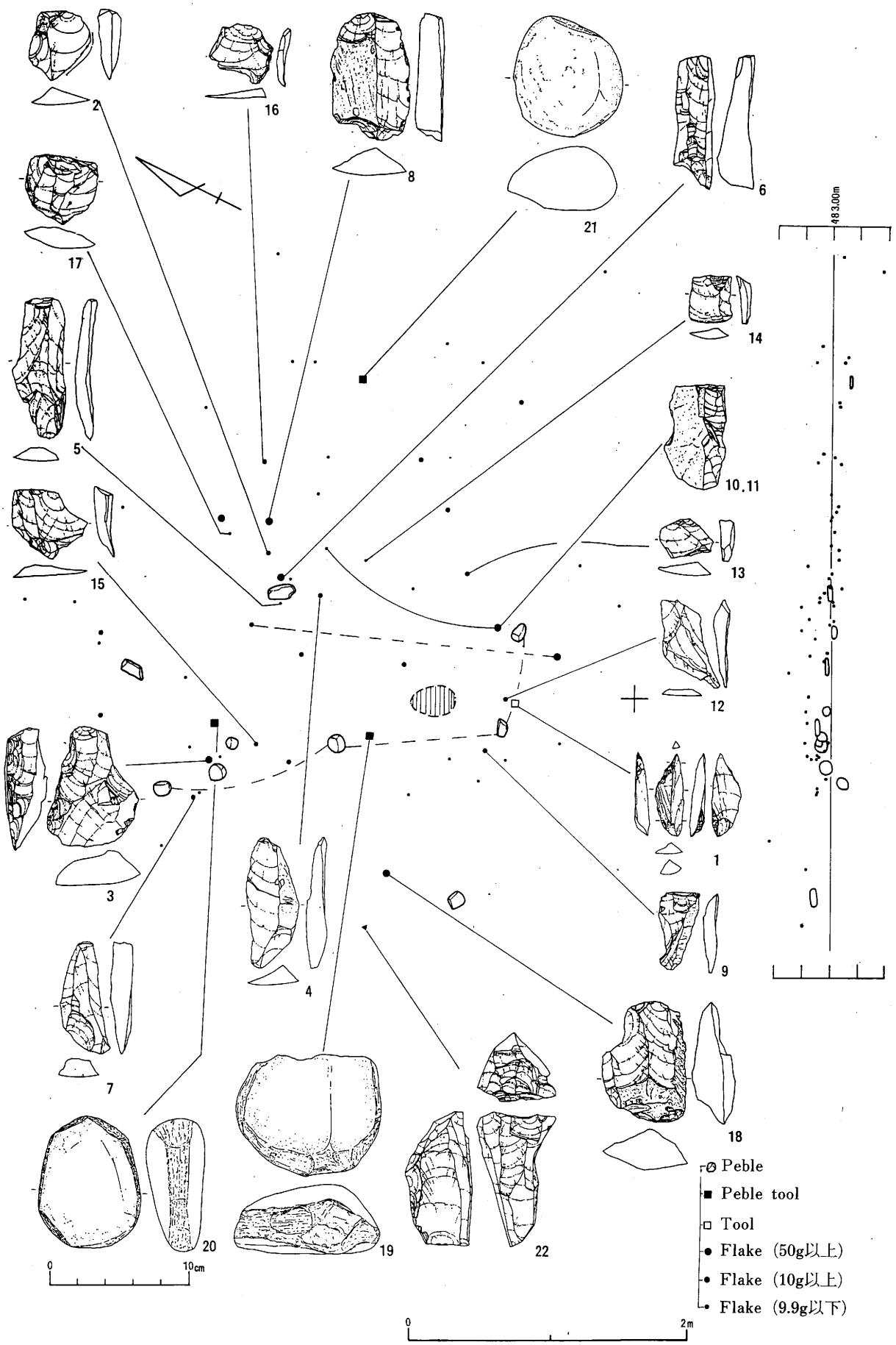


図11　第１ブロック遺物分布図（1:40）

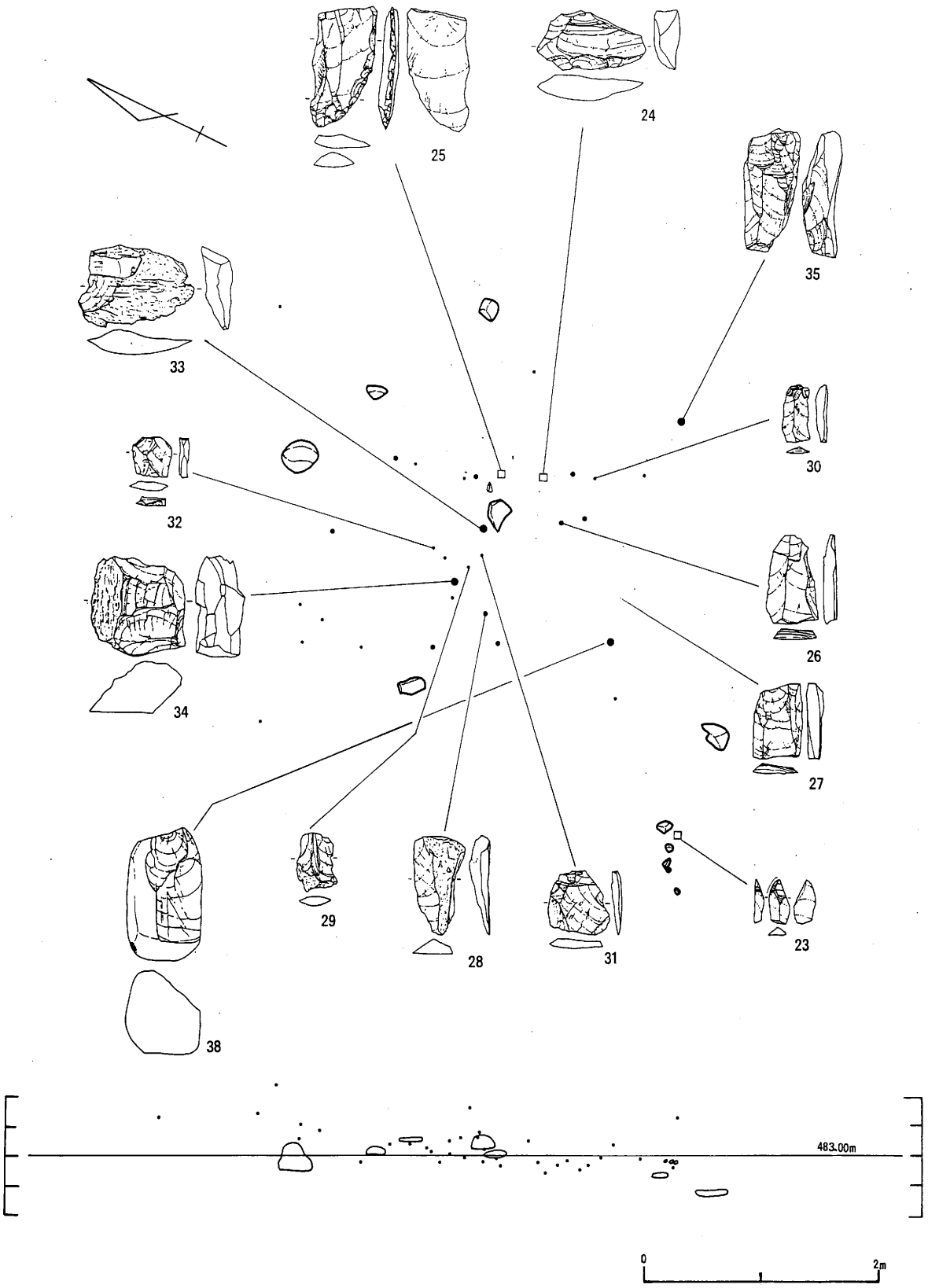


図12　第２ブロック遺物分布図（1:50）

あるが、期間がなく、加えて私たちの浅い経験ではかえって誤認する可能性が高いのも事実である。本報告では比較的出土量が少ないために識別が比較的容易であった本遺跡出土ブロックで敢えて実施してみた。

新堤遺跡出土石器は、2ブロックに別れて出土し、総点数は106点であった。このうち剥片・砕片が93点あり、剥片・砕片の占める比率は88%である。剥片・砕片のうち、そのほとんどすべてが剥片であった。砕片は、残土のウォーターセパレーション等の細部抽出調査を実施しなかったこともありほとんど検出できなかった。また、比較的遺存状況が良好でありながら、個体別資料が少なく同一母岩資料が多いのにもかかわらず接合例の少ないのが、その原因が調査面積が狭小なためか、資料の取扱いの問題かあるいは遺跡の実態なのか、今後のさらなる剥片資料の分析で検討しなければならない問題である。

(2) 母岩(固体)別資料の分類および分布（図13・14）

数量的には少ないが、接合資料等を通して母岩別に分類できる可能性が生まれ、さらに岩石の色調・岩質から9固体以上の母岩に識別できた。本来ならば石材別・岩質別にまず分類するべきなのであるが、整理期間がないために個別実測図から開始し、接合作業は今回の整理から外さざるをえないと考えていた。しかし、実際に進めていくなかで接合資料があることから、分類作業を外せなくなりあらためて作業することとした。

出土した全石器群のうち安山岩が6固体以上、その他黒曜石・チャート・頁岩で4固体に分類することができた。以下に分類した母岩別に説明を加える。

安山岩A（図13A・14A）

2点が同一固体と考えられる。色調はやや青みがかった灰色を呈し、岩質は緻密であるが、摂理が部分的に認められる。

資料は第1・2ブロックにまたがって出土しており、頻度は第1ブロック出土資料がやや多い。第1ブロックでは、石核（22）・打面再生と思われる剥片（16）が出土しており他に不定型な剥片が多い。細部については現在までに分析はできていないが、傾向として第1ブロックでは石核・打面再生剥片に代表されるように、石器製作過程に生じる作業剥片が多い。それに対して第2ブロックでは製品及び折損しているが、石刃と認定すべき企画的な刃器状剥片が多くを占めている。

現在までのところ接合関係にあるのは、石核と接合した剥片1点のみである。ただし、この資料はブロック間接合であり、ブロック間の同時性を具体的に証明している。

安山岩B（図13・B・14B）

安山岩Aに比較して白っぽい風化面を呈する母岩である。やや粗密の認められる岩質で、表皮の観察できる剥片は痘痕状を呈している。

資料は第1・2ブロックにまたがって出土し、接合資料も2点ある。比較的大型の剥片が多く、自然面を残す剥片も多いことから、初期の石器製作に伴う剥片と考えられる。

安山岩C（図13C・14C）

第1ブロックのみにおいて3点出土している。風化面は焦茶色を呈し、やや流理構造の発達している岩石である。使用痕を有する剥片1点と、他に大型の接合する剥片2点が出土している。

安山岩D（図13D・14C）

やや青みがかった縞状の帯をもつ岩石で、流理組織が認められる。第1ブロックのみに存在し、3点である。ナイフ形石器も本母岩としたが、色調等の視覚的類似であり、やや疑問も残る。

安山岩E（図13E・14C）

同一母岩が他にないと考えられる石器で、第2ブロックで3点検出されている。製品もあり単独で搬入された石器と考えられる。

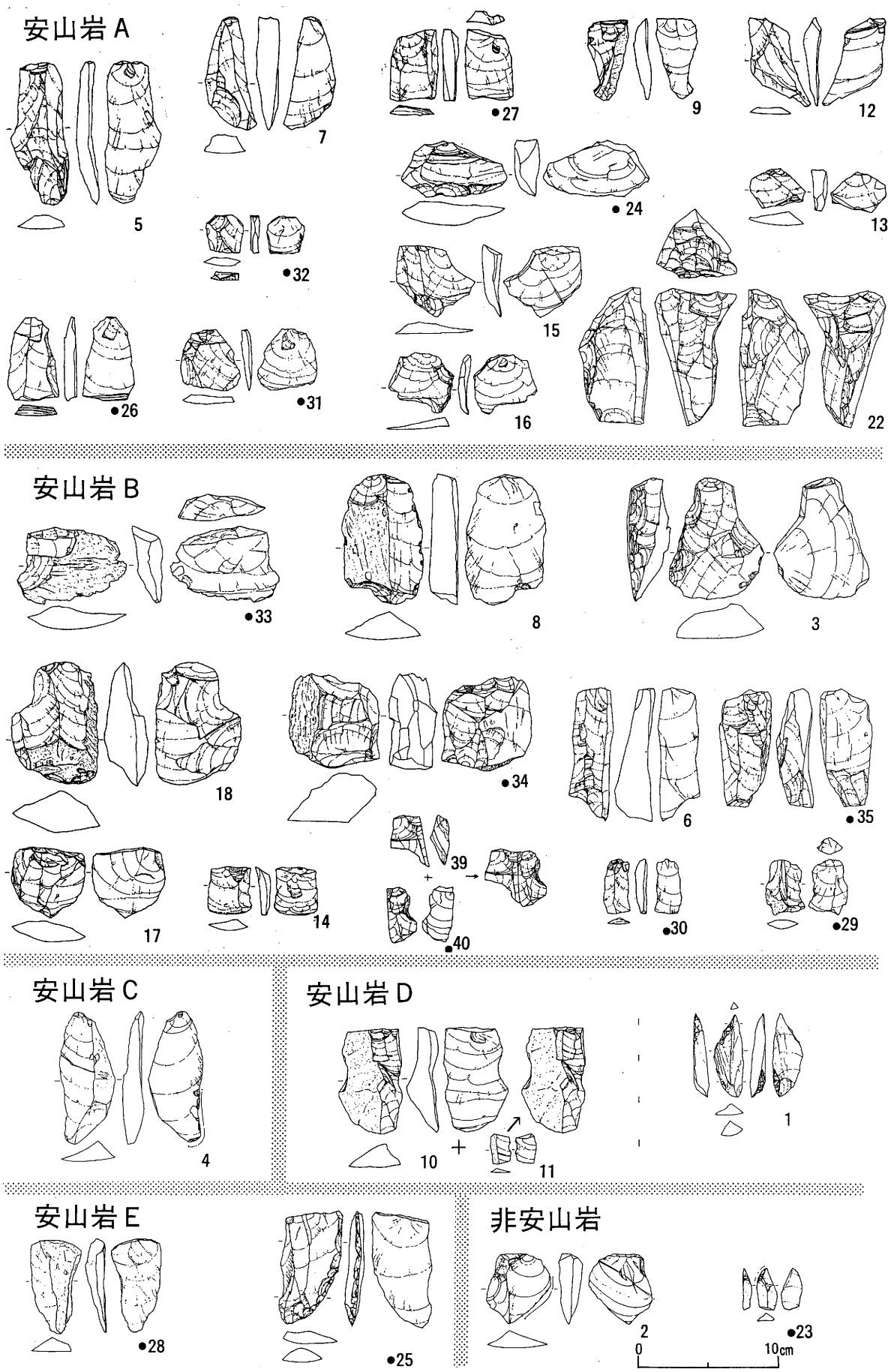
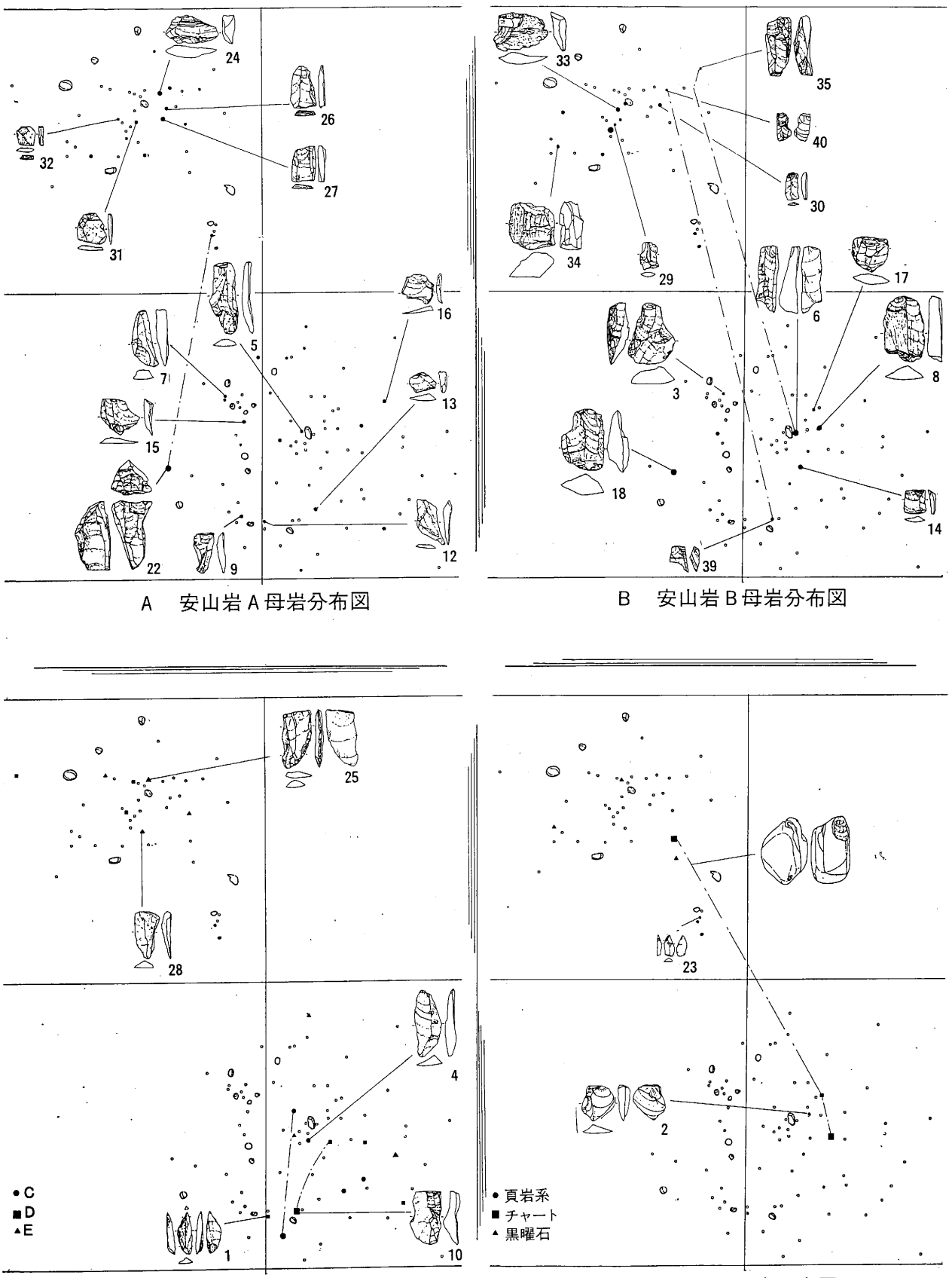


図13　母岩別資料分類図（1：4）



A　安山岩A母岩分布図

B　安山岩B母岩分布図

C　安山岩C・D・E母岩分布図

D　非安山岩分布図

図14　母岩別資料分布図（1:100）

非安山岩（図13非安山岩・14D）

安山岩以外の石材には、頁岩・黒曜石・チャートがある。頁岩はナイフ形石器、使用痕を有する剥片の2点で、外部で製作され、地区内に持ち込まれた製品である。黒曜石は第2ブロックで3点出土しているが、小剥片で具体的な様相は不明である。チャートはほぼ拳大に復元できた原石で、3点が第1・2ブロックに別れて出土している。第1ブロックでは剥片が、第2ブロックでは石核が出土している。ただし、石器説明の項でも触れるが、敲石の可能性も残されている。

以上の母岩別資料の分布状態から、安山岩A・Bは当地区において石器製作が行われ、多くが遺棄された。Aは第1ブロックで石器製作が行われ、第2ブロックへも石器が供給された。Bは、初期剥片が第2ブロックに存在し、第1ブロックに認められる表皮の残った剥片が明確でないが二次加工の痕跡を受けた剥片が多いことから、Aとは逆に第2ブロックから第1ブロックに石器が供給された傾向が伺える。ただし、実態はブロック間でもう少し複雑な動きがあったと推察される。このことは、剥片接合などを通して分析していく必要がある。C・D・Eは、個体数が少いので判然としないが、C・Dは搬入されて石器製作が少し行われ、作出された剥片は遺棄され、また搬出された固体資料と考えられる。Eは単品で当地区内へ運び込まれたものである。なお、安山岩D母岩としたナイフ形石器は、単品の可能性も残されており、Eの単独搬入品に識別されるかもしれない。

(3) 接合資料の分布状態（図15）

母岩別資料でも触れてきたが、礫を含め6固体が接合している。いずれも石器製作を復元しうるような資料ではないが、ブロック間接合が多い。ここでは、それらの接合状況について触れて行くこととする。

接合資料A（図15A）

チャートの接合資料で1～3まで3点ある。1・2は第1ブロックの至近距離で接合し、約5m離れた第2ブロックのやや南側で石核（敲石）に接合する。石器の動きからすれば第1→第2ブロックと移動し、破棄されたと推察される。

接合資料B（図15B）

第1ブロック中心部出土の剥片と、第2ブロック東端出土の剥片2点が接合した資料である。距離は約6.5mある。母岩別資料Bの接合例である。分厚い剥片の接合であるが、打面調整がなされており、下端にも調整痕がある。

接合資料C（図15C）

第1ブロック南側で出土した資料と第2ブロック東側で出土した資料の2点で、距離は約7.8mある。1枚の剥片のほぼ中央を打面側から半切したもので、これらが別々に製品として使用されたとは考えられない。第1・2ブロックに別れて出土したことについて、特異なあり方と思われる。

接合資料D（図15D）

母岩別資料Aの接合例で、第1ブロック東端から出土した石核に、約4mの距離をおいた第2ブロック南端から出土した剥片が接合したものである。接合した部分以後、下端および上端から剥片剥離作業を行っている。

(4) ブロックの様相

第1・2ブロックの石器出土状態について触れてきた。小面積の調査であったために、二ブロックだけとは思われず、新堤遺跡の旧石器時代の占拠エリアのすべてを明らかにしたとはいえない。しかし、検出された二ブロックでは、相互に接合関係を有したり、同一母岩からの剥片を共有していることが明らかになり、同一時期であることはもちろん密接な関係を有していたことも事実である。その反面、両者の間には所有する器種に若干の相違も認められている。

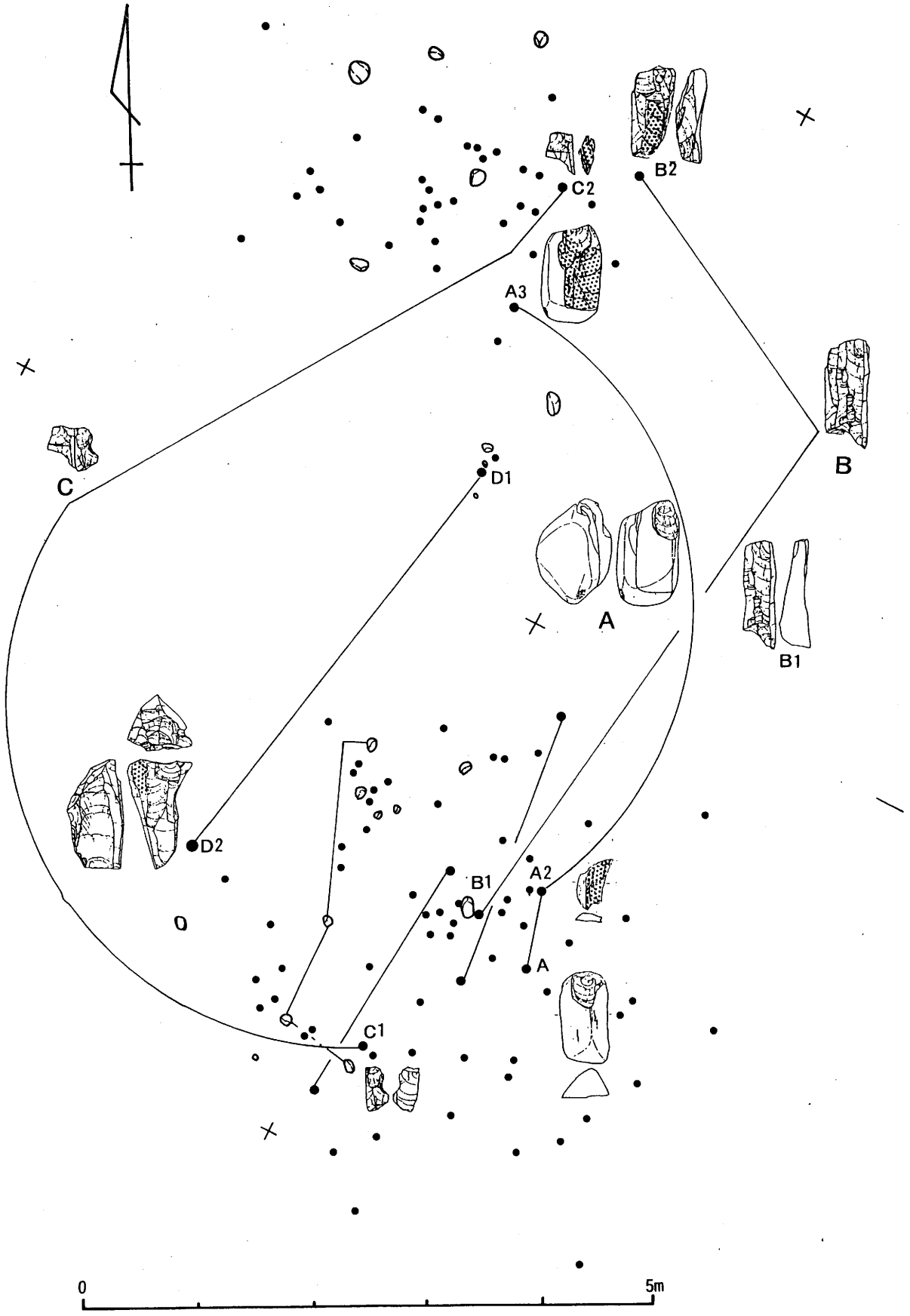


図15　接合資料分布図（1：50）

第１・２ブロックとも多数の剝片が出土しており、明らかな調整剝片も存在することから、石器製作を行っていることは事実であろう。作業台と推定される台石がそれぞれのブロック中央に存在しているのも、そうした行為が両ブロックで行われたことを示しているものと思われる。ただし、工程を復元できるまでの接合資料はなく、全体的にパーツが不足している。このことは、多くの作出された剝片が１・２ブロック以外の場所へ移動していることになる。また、接合関係を有する剝片はブロック間に別れていることが多い。このことは、二ブロックの同時性を証明するものでもあるが、第１ブロックが凹部にあることを考えると自然営力により移動したとも考えられるところである。

二ブロック間の相違点は、第１ブロックに礫石器が３点出土しているにもかかわらず、第２ブロックでは全く出土していない点である。ひとつのブロックで磨石などの礫石器が３点も出土することは多い事例と思われ、第１ブロックの相様を知るうえで重要な要素と思われる。総じて第１ブロックの方が器種は豊富である。

ブロックが有意なまとまりとしてとらえられるかどうかの前提条件を明らかにすることは難しいが、第１・２ブロックを比較した場合、第１ブロックがより中心で、第２ブロックはサブ的な場所であったと考えられる。

2　出土石器

A　石器の分類（図16）

出土した石器には、剥片に二次加工を施したいわゆる剥片石器と剥片（ブランクとしての剥片・石核調整などにかかわる剥片・製品としての刃器）、それらを作出するための石核、礫を加工もしくはそのまま使用した礫石器とに分類される。

(1)　二次加工を施した剥片石器

ナイフ形石器　剥片の縁辺にブランティング加工で代表される二次加工を施したもので、1・2ブロックより各1点出土している。

削器　剥片の縁辺に二次加工を施して刃部としたもので、尖頭状のものもある。

(2)　剥　片

剥片には、目的剥片・打面調整剥片・打面再生剥片・石核調整剥片等が存在するものと思われるが、形状のみからでは分類ができない資料もあり、ここでは刃こぼれと思われる使用された痕跡をとどめる剥片を『使用痕を有する剥片』とし、他はすべて剥片として一括した。

(3)　石　核

剥片を作出した石刃石核である。第1ブロックより1点出土している。

(4)　礫石器

本類には敲石・磨石（台石）などがある。ただし、一固体で二つの機能を持つと考えられる石器も存在しているので、大きく礫石器として分類することとした。

B　第1ブロック出土石器（図17～図21）

(1)　ナイフ形石器（1）

1点のみ出土している。正面に青色の縞状の流理組織が認められる、やや粗雑な剥片を素材とし、左側縁先端部を斜め整形して尖頭状に仕上げている。基部側は右側縁が裏面において、バルブが除去されると共に、入念なブランティングによって整形されている。左側縁部にも細かなリタッチが認められる。

(2)　削　器（3）

分厚い横長の剥片を素材とし、左側縁に急斜な加工を施している。

(3)　使用痕を有する剥片（2・4・8・18）

2・4とも他に同一母岩がなく、単品で製品として搬入されたものと考えられる資料である。2は、珪質の頁岩で、打面調整の施された幅広の剥片である。右側縁の鋭利な部分に刃こぼれ状の小剥離痕が認められる。4は安山岩製であるが、岩質が荒く、同質の安山岩は他に認められない。表皮を正面右の基部側半分に残すが、縦長で形状の整った刃器状剥片である。刃こぼれ状の小剥離痕が、裏面右側縁から先端部にかけて認められる。8は、3の削器と同一母岩と考えている剥片である。正面左側に表皮を残すが、鋭い右縁辺には刃こぼれ状の小剥離痕が目立つ。18は、大形の自然面の部分を多く残す剥片で、石核より作出された後裏面側に剥片剥離が行われている。先端部にも使用痕様の剥離痕がある。

(4)　剥　片（5～7・9～17）

5は大形の刃器状剥片で、正面先端部の稜線上より調整加工が加えられている。6は先端部が分厚くなる剥片で、第2ブロック35の資料と接合する。下端は石核の下端になる。7は、先端部がやや幅広となる剥片で、正面側には180度反対方向からの剥離面をとどめている。9は、正面右側が摂理面にそって剥落

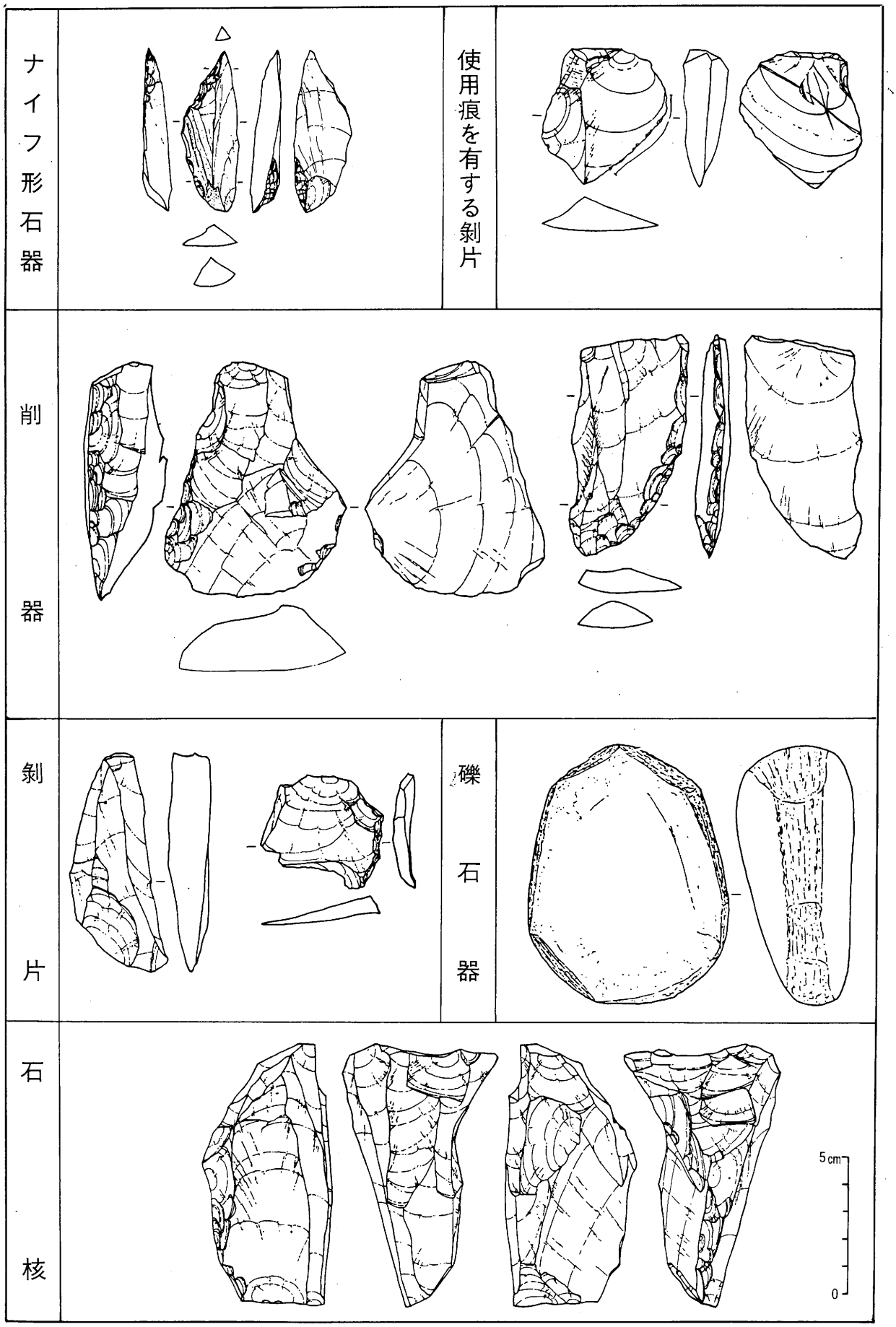


図16　出土石器分類図（1：2）

しているものである。10・11は接合した資料で、打面調整はなされているが、自然面を多く残している。15～17は、幅広で不定形な形態をもつ、打面調整剥片と考えられるものである。

(5) 礫石器（19～21）

3点出土している。19は敲石であろう。20は比較的粒子が荒く、軟質の砂岩を用いている磨石である。扁平な楕円礫を用い周縁のみを使用している。使用した痕跡は、図上端から反時計回りに順次使用したものと思われ、その一回に機能する面は、幅2cm、長さ2～5cmの範囲内にある。その状況からかなり使用した形跡が伺える。21は、前二者よりも明瞭ではないが、上下端に磨り面があり、裏面の右縁辺には大きな欠損部がある。敲石と磨石の両方の機能があったと考えられる。なお、台石と思われる礫が1点出土している。

(6) 石　核（22）

正面・打面ともに三角形を呈する石核で、上下両端から剥片剥離が行われている。上下打面以外は、石核調整が加えられるのみであり、さらに下設打面からの剥片剥離は頻繁に行われた形跡がない。このことから、石核は三角形の幅広な一辺を常に剥離面として設定し、徐々に後退してゆく単設打面に近い剥片剥離技術と思われる。

C　第2ブロック出土石器（図22～24）

(1) ナイフ形石器（23）

加工は浅いのでナイフ形石器とするにはやや躊躇する。軟質の頁岩を用い、先端部に微細な加工を施している。裏面の刃部側および基部側は取り上げ時の不注意により削られている。

(2) 削　器（24・25）

24は、横長の分厚い剥片を用い、端部に大きな二次加工を施している。25は、刃器状剥片の一側縁全部に二次加工を施して削器としている。先端部はやや尖頭状になっている。

(3) 剥　片（26～37・39・40）**・石　核**（38）

比較的整った刃器状剥片が多い。26は、下端部が欠損している。打面は小さいが、調整されている。27は、26と同様に下端部が欠損している。打面は調整されている。28は打面が調整された剥片であるが、正面側には多くの自然面を残している。29・30は、正面の一部に自然面を残している。29はやや鈍角な剥離角で、30は打面がほとんどない。31は、幅広な剥片である。32は、下端が欠損するが、その後、3回の加工痕状の痕跡が認められるが、浅い加工であり人為的な加工とは考えなかった。33は、広く自然面を残す横長剥片で、初期石核調整に伴う剥片と考えられる。34は、33と同一母岩である。裏面側には第1次剥離面に上下端から剥片を作出していることが伺える。石器加工に伴うものであるか、剥片作出を目的とした石核なのか分からない。35は、第1ブロック6と接合した剥片である。石核から剥離された後、第1次剥離面先端部および正面右側縁稜部から加工が行われている。製品もしくは未製品とも考えられる。36～38は接合資料で、石質はチャートである。36・37は第1ブロック出土石器であるが、接合資料の関係上本稿で述べる。石核と剥片であるが、石器製作を行ったものであるのか疑問である。打面は作出されず、打面の調整もなされていない。38の下端部に敲打痕が認められるが、これが剥片剥離作業に伴う衝撃痕であるのかもしくはハンマー的な機能を有した礫かもしれない。39・40は不定形な剥片の接合例で、第1・2ブロックに別れて出土したものである。打面側からの加撃で半切されているが、二次加工痕などは認められない。

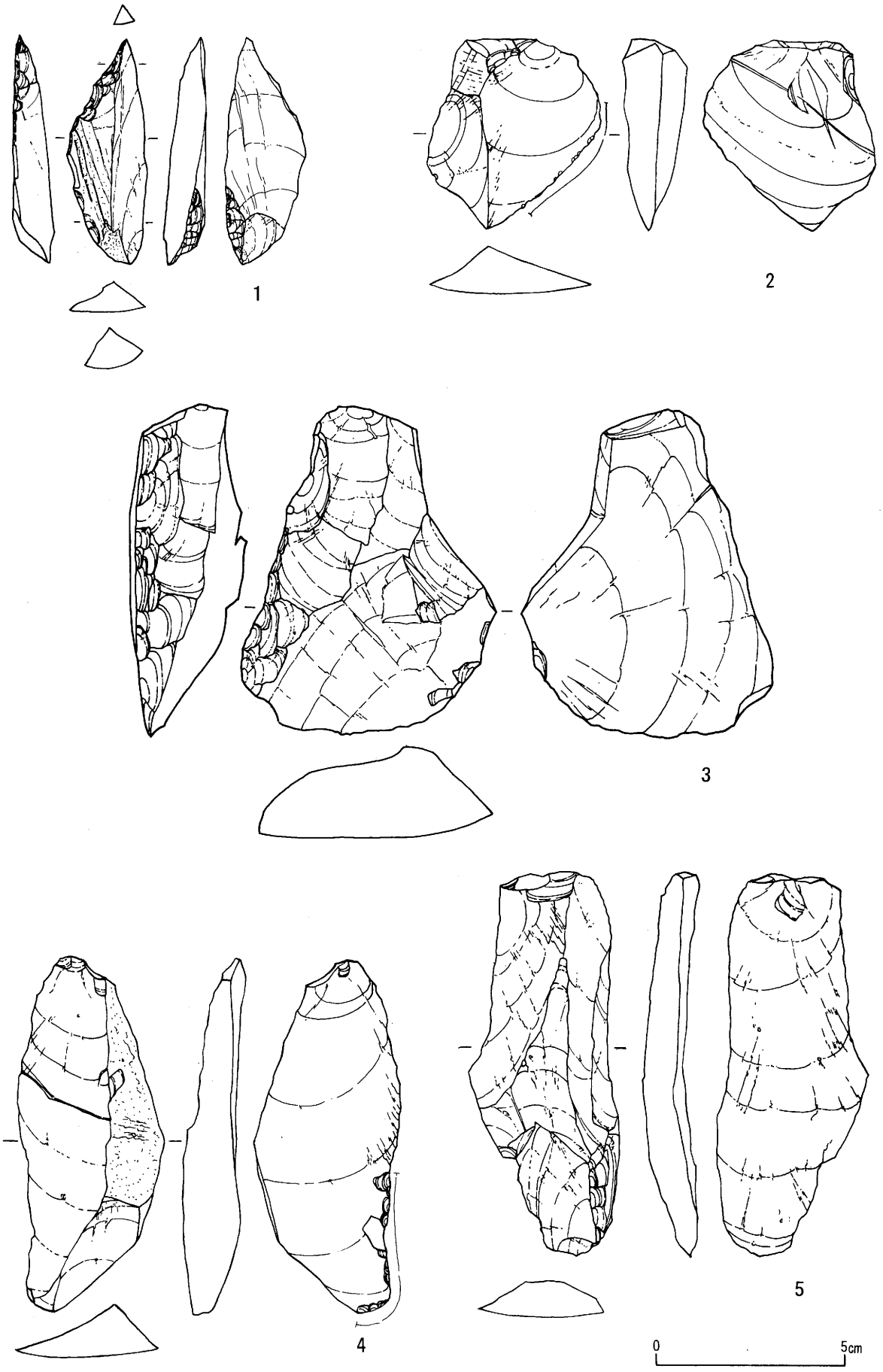


図17　第１ブロック出土石器実測図　１　（２：３）

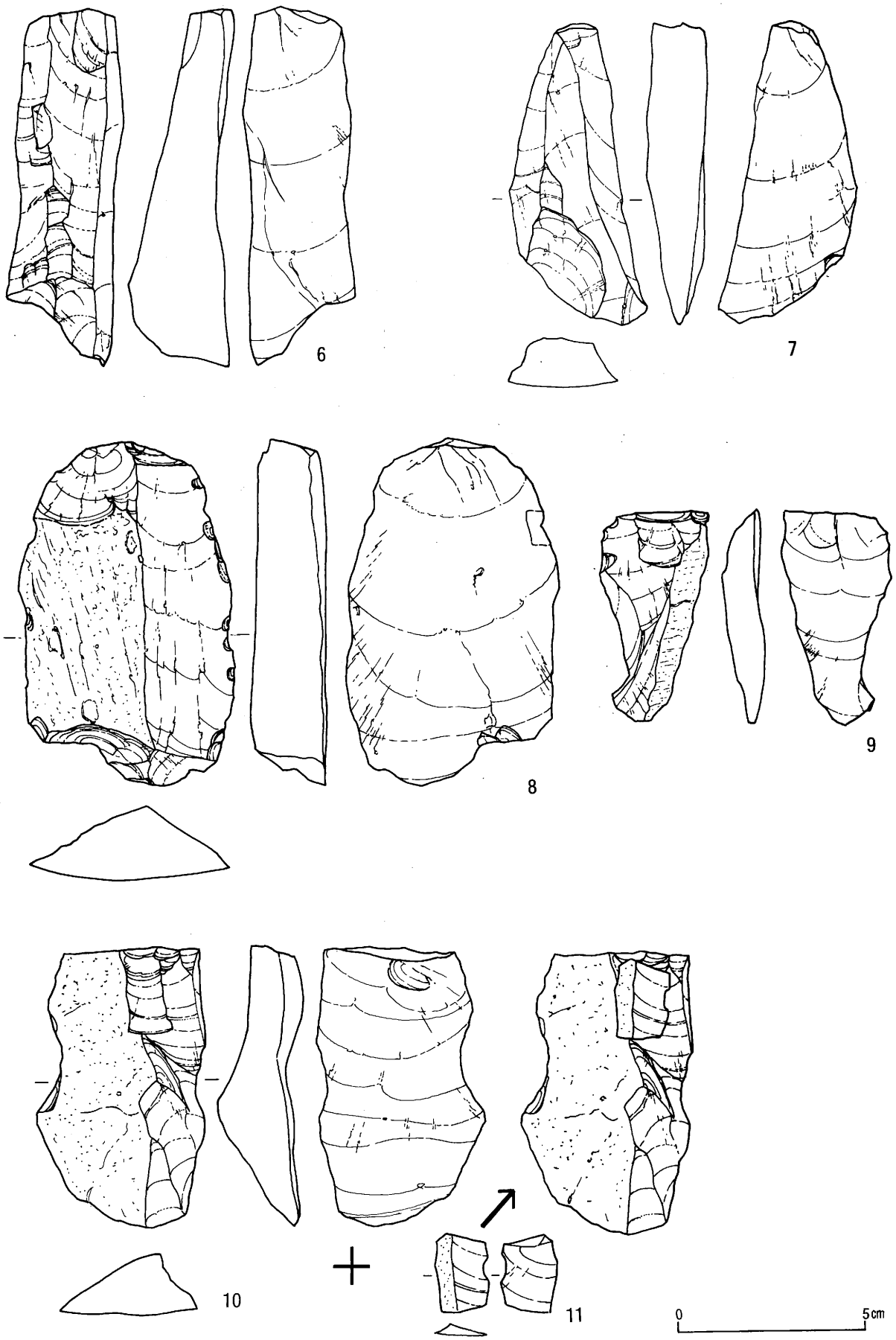


図18　第１ブロック出土石器実測図　２　（２：３）

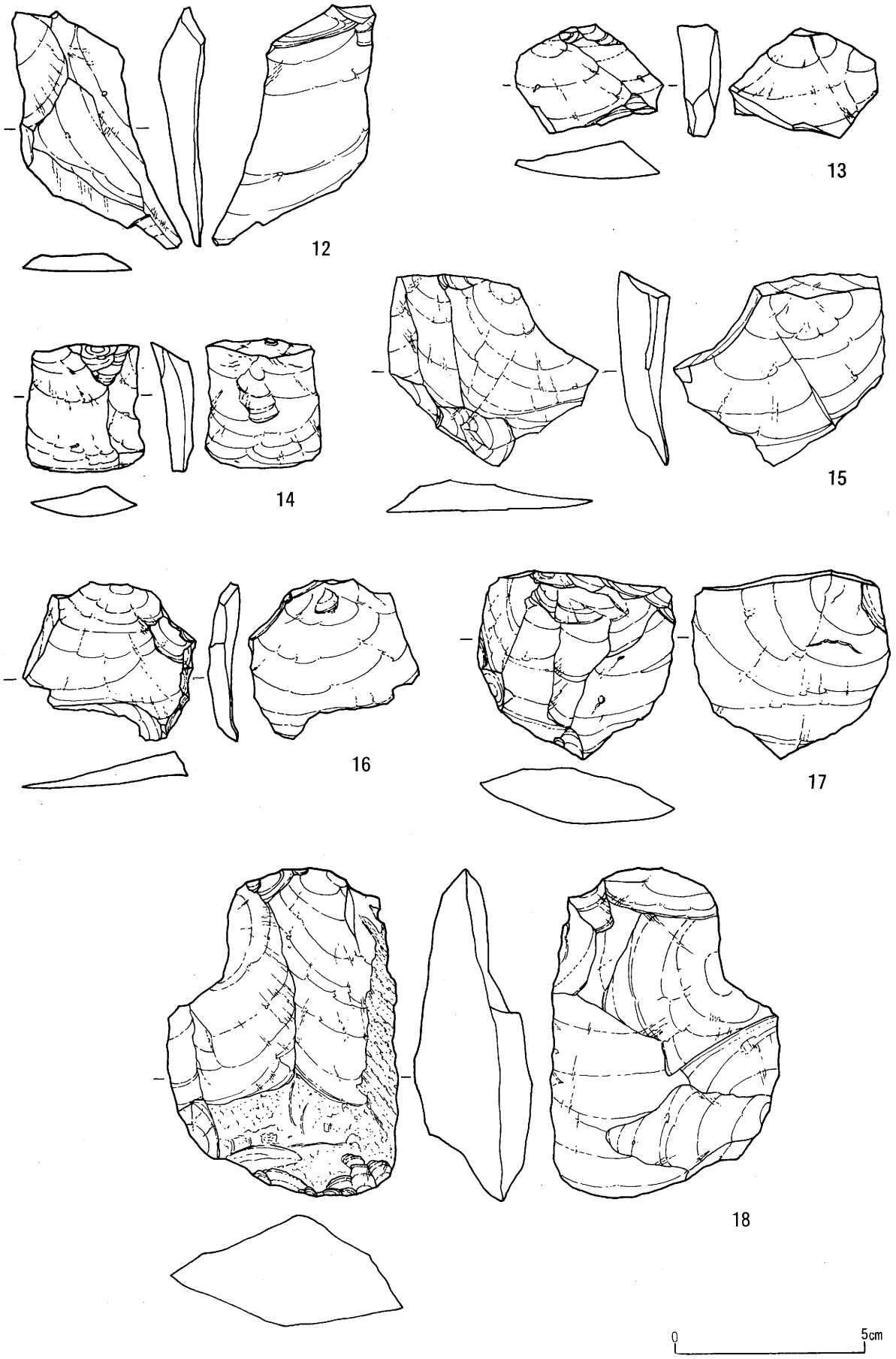
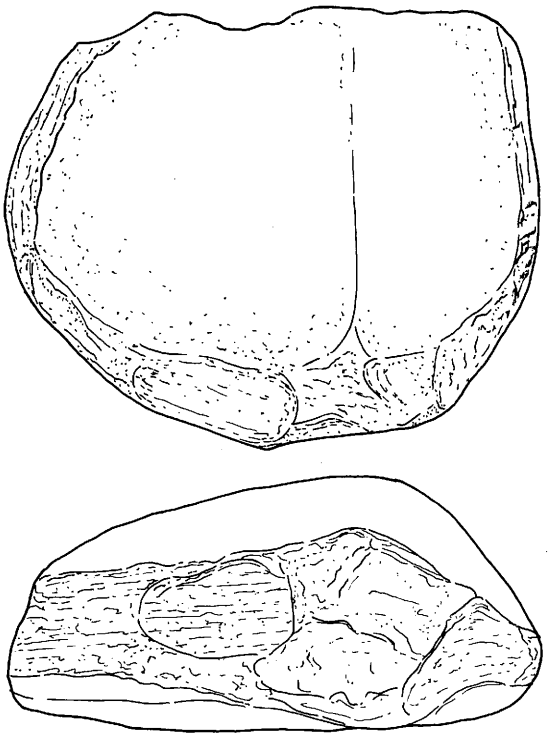


図19　第１ブロック出土石器実測図　３　（２：３）



19

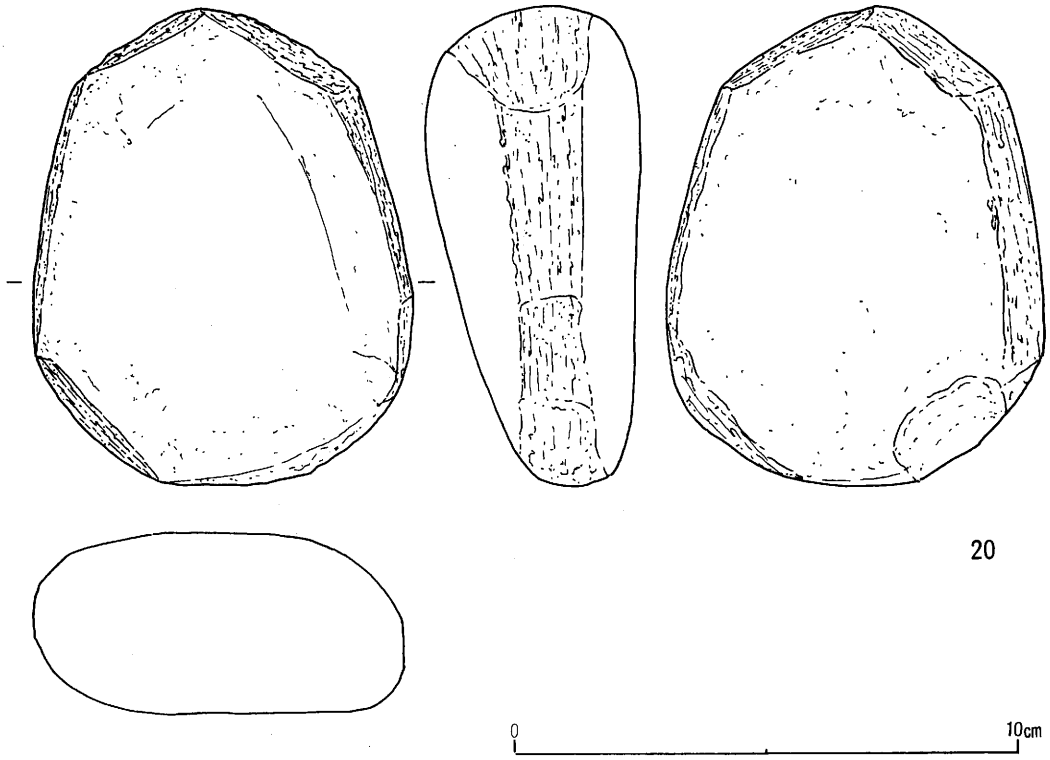
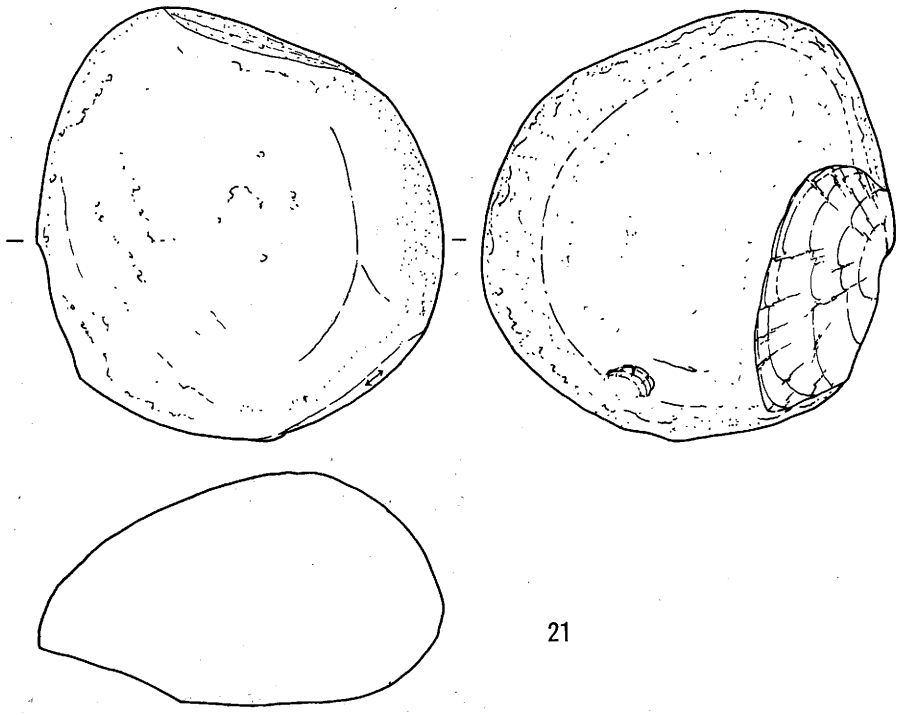
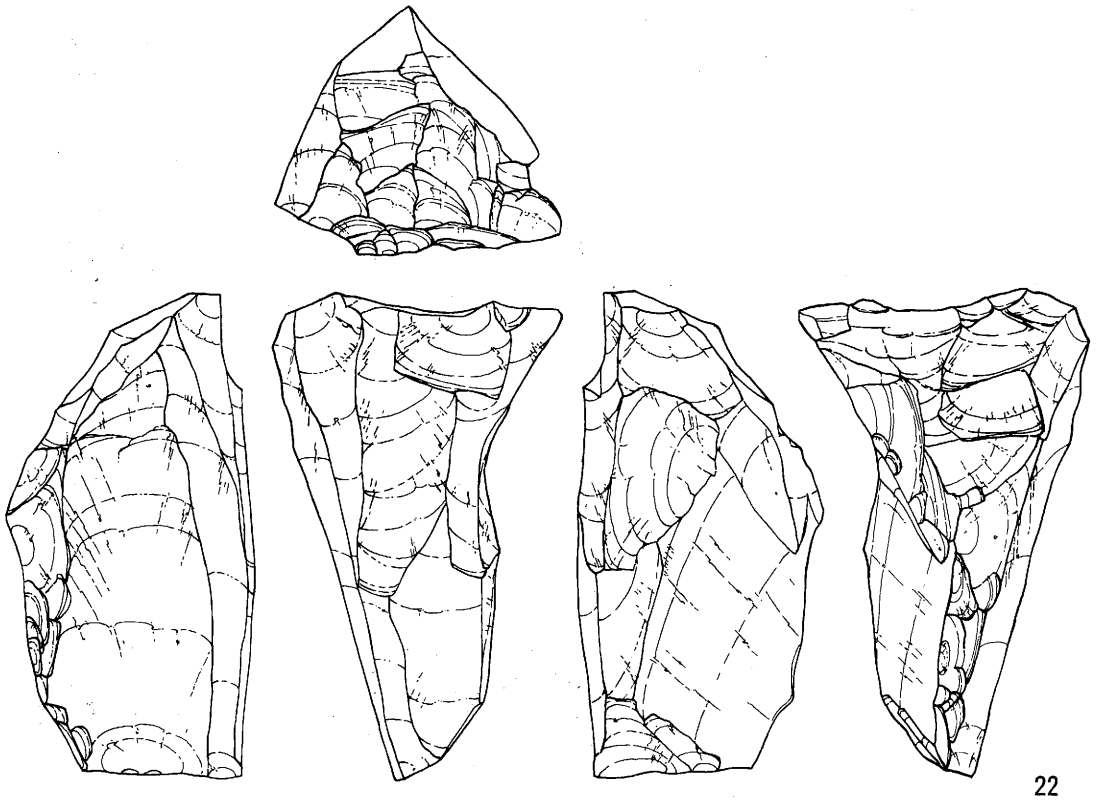


図20　第１ブロック出土石器実測図　4　（２：３）





0　　10cm

図21　第１ブロック出土石器実測図　5　（２：３）

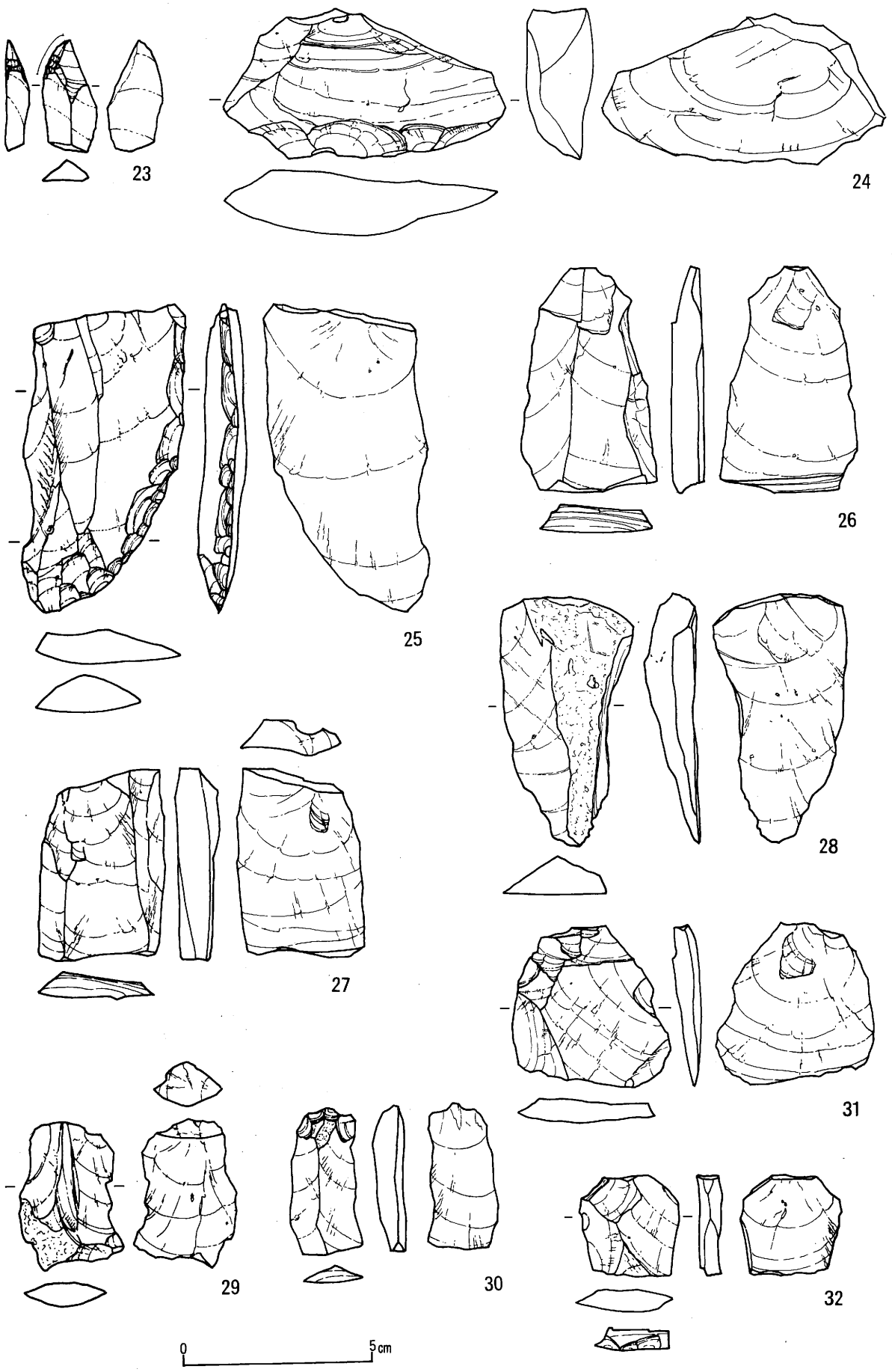


図22　第２ブロック出土石器実測図　１　（２：３）

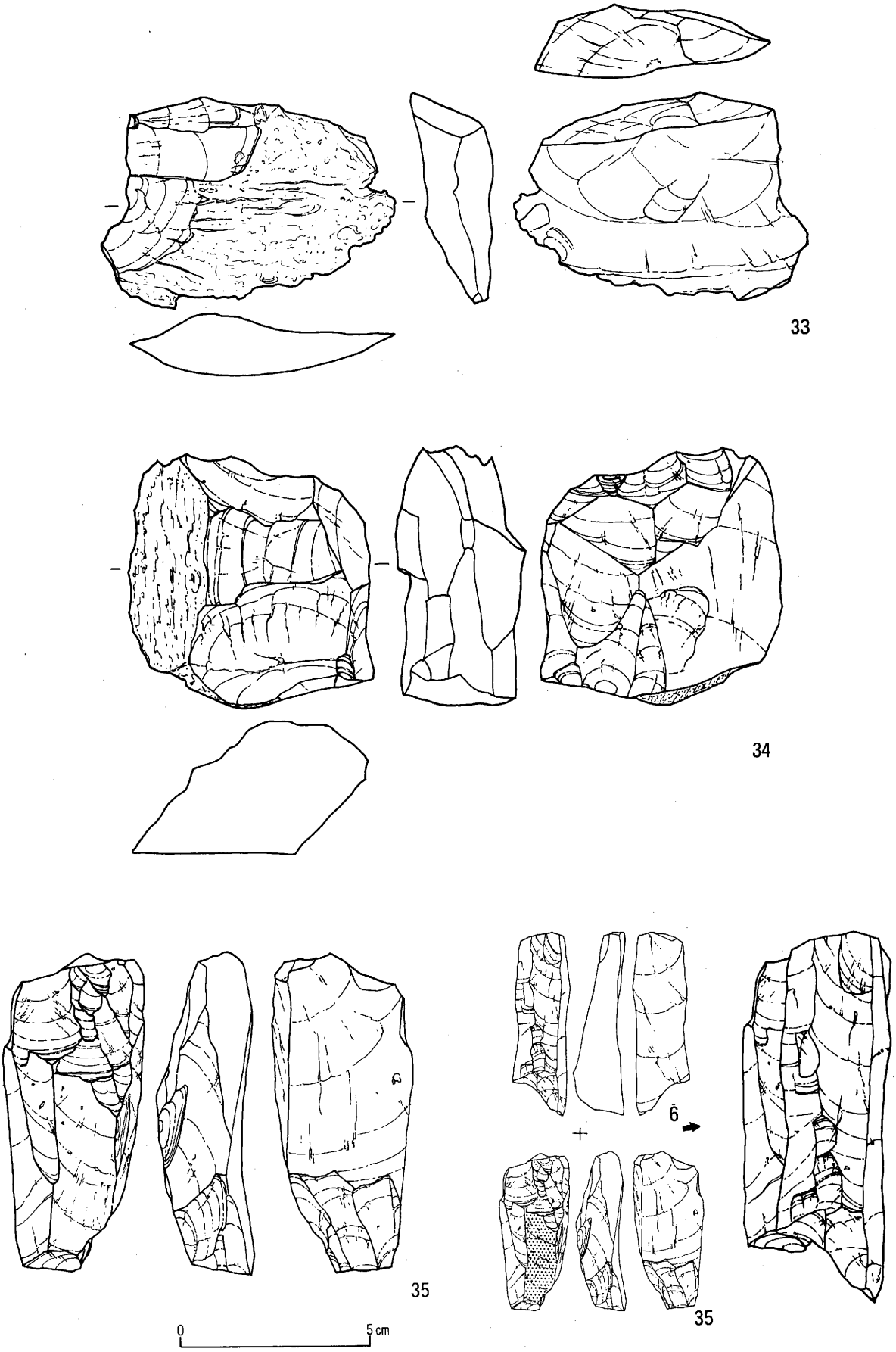


図23　第２ブロック出土石器実測図　２　（２：３）

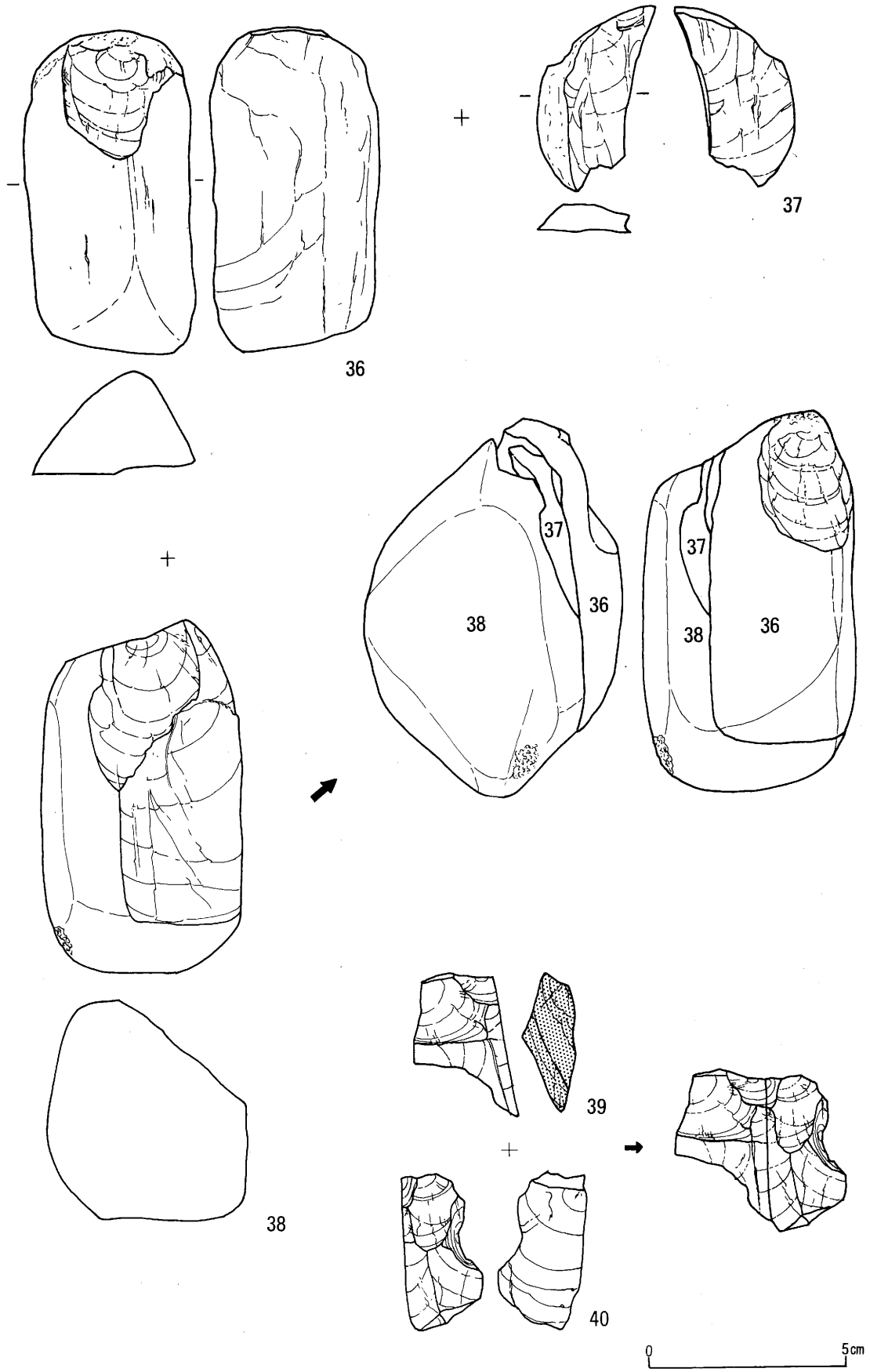


図24　第１・２ブロック出土石器実測図（２：３）

番号	石器名	地点	石質	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 g	破損	備考	石器固体番号
1	ナイフ形石器	1	安山岩	6.0	2.2	1.1	8.0			1—45
2	使用痕を有する剥片	1	頁岩	5.0	4.5	1.7	25.3			1—24
3	剥片	1	安山岩	8.7	6.7	3.1	136.1			1—62
4	使用痕を有する剥片	1	安山岩	9.3	3.9	1.5	42.5			1—26
5	剥片	1	安山岩	10.1	4.1	1.5	45.4			1—30
6	剥片	1	安山岩	9.5	3.2	2.6	63.4			1—27
7	剥片	1	安山岩	8.0	3.6	1.6	36.2			1—65
8	使用痕を有する剥片	1	安山岩	9.2	5.7	2.2	106.1			1—18
9	剥片	1	安山岩	5.6	2.9	1.1	13.3			1—47
10	剥片	1	安山岩	7.5	4.5	2.2	55.1		接合	1—38
11	剥片	1	安山岩	2.0	1.5	0.3	1.3			1—25
12	剥片	1	安山岩	6.7	4.0	1.4	13.9	○		1—44
13	剥片	1	安山岩	3.4	3.1	0.9	8.9	○		1—34
14	剥片	1	安山岩	8.6	6.1	3.0	133.3			1—54
15	剥片	1	安山岩	5.0	5.2	0.9	36.5			1—20
16	剥片(打面再生)	1	安山岩	4.2	4.6	0.8	12.1			1—10
17	剥片	1	安山岩	5.2	5.5	1.4	27.4			1—58
18	剥片	1	安山岩	2.9	3.9	1.1	10.5			1—36
19	礫石器	1	砂岩	8.9	10.6	5.1	579.4			1—50
20	礫石器	1	砂岩	9.5	7.6	4.3	336.2			1—63
21	礫石器	1	砂岩	8.6	8.0	4.6	121.3			1—6
22	石核	1	安山岩	9.6	5.8	4.9	209.0			1—55
23	ナイフ形石器	2	頁岩	3.0	1.5	0.8	2.0	○		2—4
24	削器	2	安山岩	4.0	7.4	1.8	50.8			2—17
25	削器	2	安山岩	8.2	4.4	1.3	40.0			2—18
26	剥片	2	安山岩	6.0	3.6	0.9	17.6	○		2—13
27	剥片	2	安山岩	6.7	3.5	0.9	27.6	○		2—29
28	剥片	2	安山岩	5.0	3.4	1.2	20.0			2—12
29	剥片	2	安山岩	4.2	4.2	0.7	4.3			2—23
30	剥片	2	安山岩	3.9	2.8	1.2	7.4			2—24
31	剥片	2	安山岩	2.7	2.7	0.8	5.3			2—26
32	剥片	2	安山岩	3.9	2.0	0.9	5.1			2—10
33	剥片	2	安山岩	5.4	7.7	1.9	66.6			2—22
34	石核	2	安山岩	6.8	6.2	3.4	148.2			2—27
35	剥片	2	安山岩	8.3	3.7	2.7	88.7			2—11
36	剥片	2	チャート	8.2	4.4	2.6	93.5			2—19
37	剥片	1	チャート	4.5	3.2	0.7	7.6		接合	1—17
38	石核	2	チャート	9.0	5.2	5.6	356.1			2—45
39	剥片	2	安山岩	3.8	2.5	1.4	7.6	○	接合	2—16
40	剥片	2	安山岩	4.5	3.2	—	—	○		

表2　石器計測表

D　出土石器群について

以上述べてきたとおり、新堤遺跡出土の旧石器資料については、定型的・指標的な資料が少なく、編年的な位置づけについては判然としない。ナイフ形石器が２点出土しており、そのうち第１ブロックより出土した資料の特徴は、石刃技法によって剥離された縦長剥片が用いられていること、斜め切断により、尖頭状の形態を示していること、基部側には調整・裏面加工が行われ、バルブが取り除かれるとともにやや鋭い基部の形態を示すことである。こうした技法は、後期旧石器時代後半のナイフ形石器において、東山系のナイフ形石器には見られず、茂呂系のナイフ形石器に類似するものである。また、杉久保型ナイフ形石器と呼ばれる石器にも打面除去などの裏面調整が窺えられ、本遺跡出土例はこうした系譜下の所産であろうと思われる。このほかの注目される石器としては、第２ブロック出土の削器（25）が特徴的である。幅広の刃器状剥片（石刃）を素材とし、一側縁を丹念に加工し、先端部が尖頭状に仕上げられている。こうした形態は、削器自体定型的な資料に恵まれていないこともあり、具体的な遺跡と比較することはできない。

また、剥片剥離技術については、石刃技法によって剥片剥離が行われていることをまず指摘できる。石核から想定するに、単設打面に近い石核で、一定の面を後退しながら剥片を剥離していく方法をとり、随時90度もしくは180度反対方向から調整（剥片剥離が行われることもある）が加えられている。この技術は、両設打面が用意されたより企画的に剥離された円筒形の石核に近似するものの、技術的にはまだ確立していない段階ではないかと考えられる。

飯山地方における旧石器時代の石器群は、現在までのところすべてAT以降の石器群と考えられ、太子林遺跡が最も古い段階として考えている（望月　1989)。太子林例の石核も両設打面ではなく、90度あるいは180度からの調整が加えられ、単設の打面が用意された石刃石核である。器種には掻器・彫器・局部磨製石斧を伴うなど、新堤遺跡より豊富であるが、技術基盤では類似性が認められる。このことから、太子林石器群のグループとして位置づけ、細部の編年については今後の研究課題としておきたい。

なお、早津・小島両氏によるテフラ分析が行われている。別項において詳細に触れられているが、姶良Tn火山灰（AT）降下層準より上位に石器包含層が存在することが判明している。ことことと、わずかではあるが出土した石器および石器製作技術から想定する年代とに矛盾は全くない。AT降灰以降のナイフ形石器を指標とする石器グループのなかに位置づけ、比較的早い段階におかれるものと考えておきたい。

引用・参考文献

奥村　吉信　　1987　「石刃法の展開」『太平臺史窓　第６号』　史窓会

飯山市教育委員会　1981　『太子林・関沢遺跡』　飯山市埋蔵文化財調査報告第７集

望月　静雄　　1989　「飯山地方の先土器時代編年予察」『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』　飯山市埋蔵文化財調査報告第19集

第3章　縄文時代

1　遺　　構

確実に縄文時代とする遺構はないが、検出状況、切り合い関係、トトノ池南遺跡での類例などから「Tピット」「溝状ピット」とも言われる溝状土坑（ＭＳＫ）と、斜めに掘られたピットを縄文時代の遺構としておく。また人為的な遺構であるか疑わしいが、主としてロームマウンドにあり焼土らしき土が集中しているものもこの項で説明することとした。

A　溝状土坑（図25）

Ｂ―10区から１基のみ検出されている（ＭＳＫ１）。長約3.4ｍ、幅約0.2ｍ、深さ約1.1ｍを測る細長く深い土坑である。埋土は黒色土。出土遺物はない。

B　斜めピット（図25）

何の目的で掘られたかわからないが、やや斜めに掘り込まれたピットが計23基検出されている。斜めに掘り込まれているという特色をのぞけば、ＣラインあるいはＦラインを中心に等高線に沿って並んでいると見えなくはないことぐらいが指摘できる程度で、開口方向、深さ、大きさ、設置間隔に一定の規則があるわけではない。

年代についてはＰ８が縄文前期の土器が出土しているロームマウンドを切っており、Ｐ22は旧石器第１ブロックを切っているから、ロームマウンド出土土器がロームマウンドの年代を示すものであれば縄文時代前期以降のものもあることになる。

大きさおよび掘り込みの角度については、プランは直径20cmのもの（Ｐ20）から長径約１ｍに達するもの（Ｐ８・Ｐ14）まであるが、直径30～50cm前後のものが平均的である。深さはプランの大きさとは必ずしも比例しない。深さ15cmと深いものから、２ｍ30cmにも達する深いもの（Ｐ22）もある。

埋土はいずれも黒色土で、出土遺物はない。

また斜めピットに関連するたとえば支柱等の痕跡についても検出されていない。

C　ロームマウンドと焼土（図８・９・26）

人為的な遺構とは断定できないが、ロームマウンドの黒色土中（焼土５～８・11）、あるいは黒色土層中に地山（黄色粘質土）から遊離して赤味がかった土層が集中している所（焼土１～４・９・10）が計11か所、Ｉ区西北部を中心に検出されている。

これらについては多くが黒色土中に断面凸レンズ状に浅く赤味がかった土層が堆積している状態であり、焼土と呼んで良いかについても疑問が残る。また赤味がかった土の状態も人為的に動かされたようでなく均一である。出土遺物はない。ただし焼土５は赤味がかった土の中央に一段と赤い焼土と呼んでも良さそうな所があり、人為的な焚火等の痕跡と考えられる可能性がある。

これらがＩ区西北部で多く検出されているのは、ここが黒色土の堆積が厚かったため黒色土を多く残して重機による掘削が行われていることにもよるのだろう。

いずれにしてもこれらの性格等については今後の類例をまって検討したい。

また、Ｃ―10区ロームマウンドの黒色土層下位から縄文前期後葉の土器が出土しており、Ｆ―９区ロー

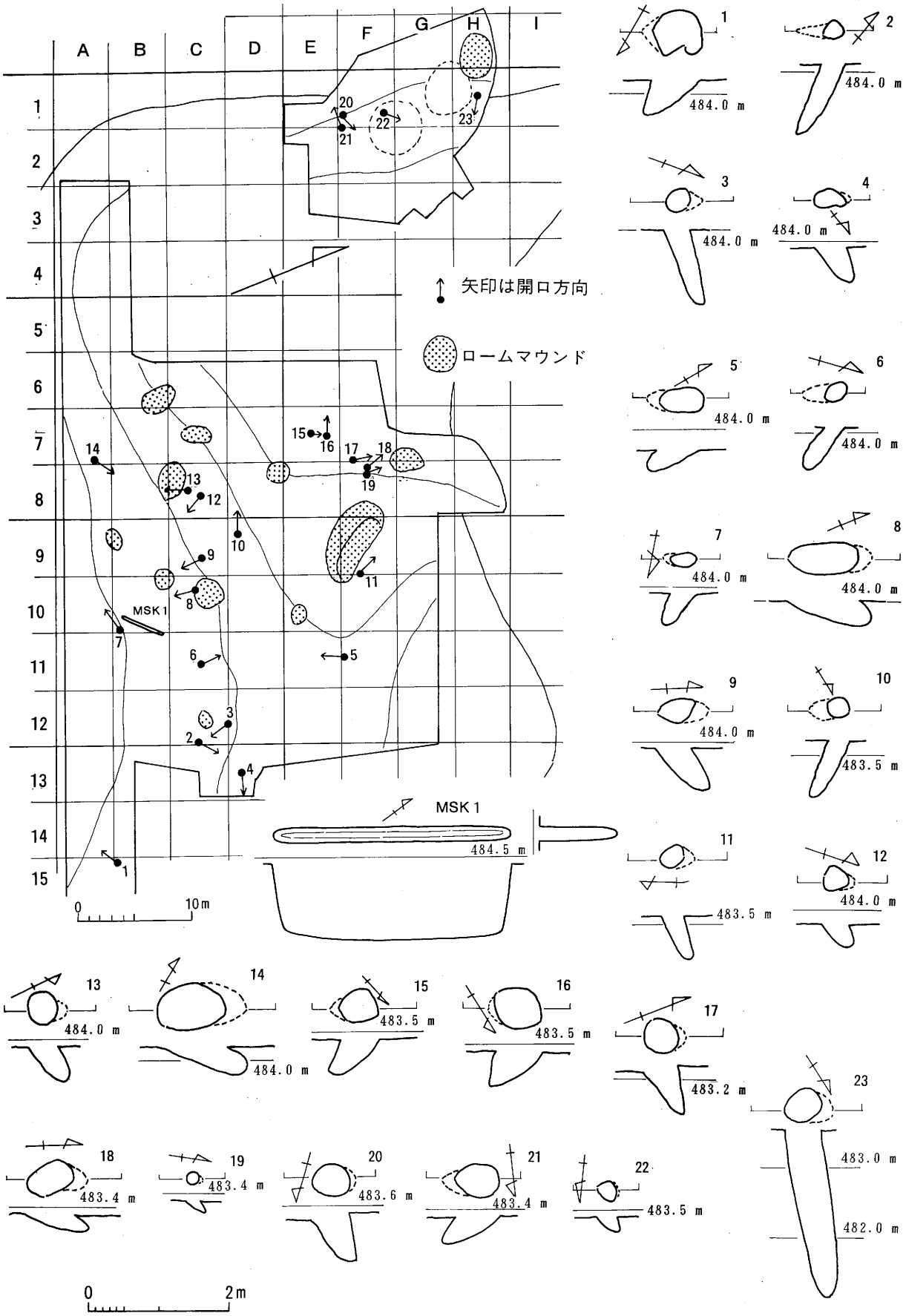


図25　縄文時代の遺構　1:80

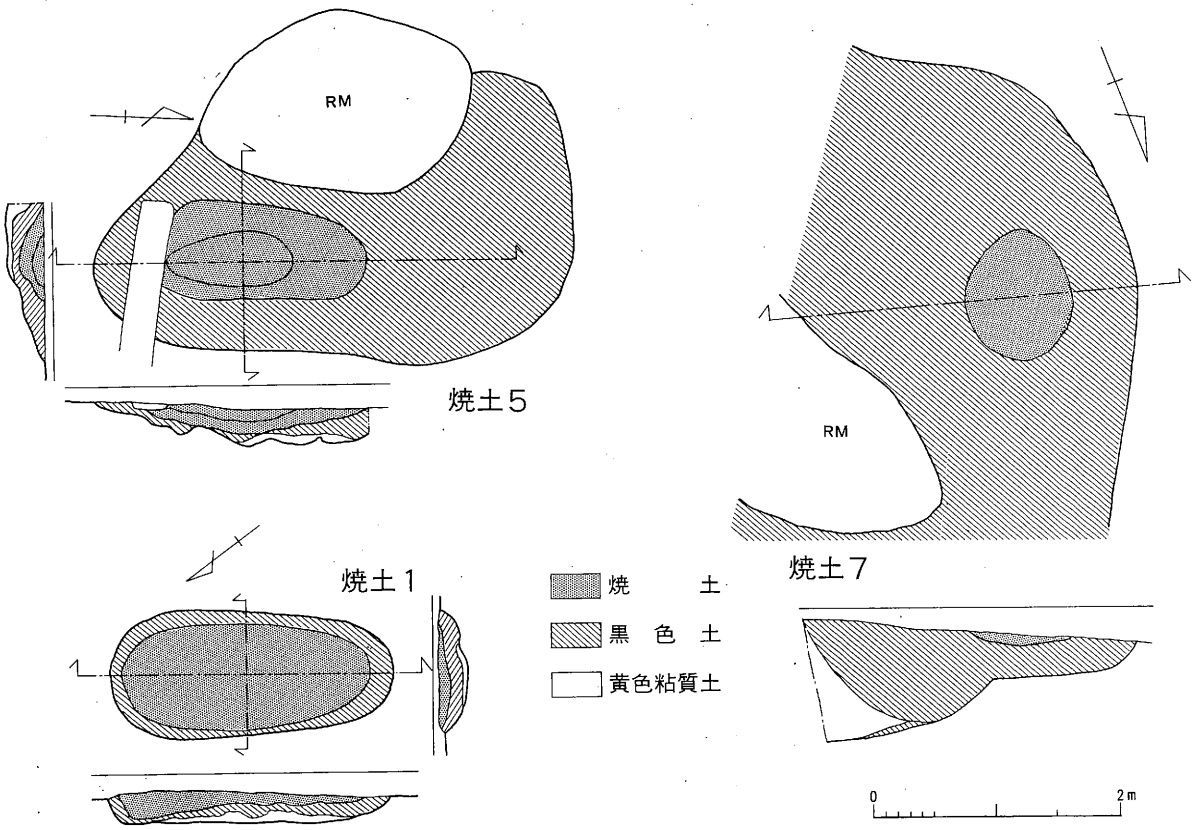


図26　焼土実測図　1:60

ムマウンドの黒色土層最下位からも縄文早期の貝殻腹縁文土器が出土している。

ロームマウンド中から遺物が出土したことは珍らしいが、ロームマウンドを利用した土坑であるかどうかは土層観察ではわからなかった。

2　遺　物

A　土　器

(1)　出土状況（図27）

縄文時代の土器の総量はコンテナ約1箱分と少ない。完形に復元できるものはなく、小片がほとんどである。しかし年代的には早期を中心に、前期から後期の広範囲にわたっている。

出土層位は基本的には遺物包含層である黒色土層の下位である。なお注意すべきこととして、一部がロームマウンド中から出土していることがあげられる。ロームマウンドからの出土土器は早期と前期のものである。

分布状況は、調査地中央部の黒色土が厚く堆積していたところを中心に、類ごとに比較的まとまって出土している。たとえば、沈線文と貝殻腹縁文を主文とするⅡ類は調査地中央よりやや東北に集中しており、Ⅳ類・Ⅴ類、Ⅵ類、Ⅶ類は調査地北西部に集中している。また、縄文Ⅲａ類（図10）は中央のロームマウンドから出土した破片と約15m北西に離れて出土した破片とが接合している。

(2)　土器の分類

土器の分類は時期別に大まかに分けたのちにそれぞれを文様・形態などからⅠ～Ⅹ類に分類し、さらに

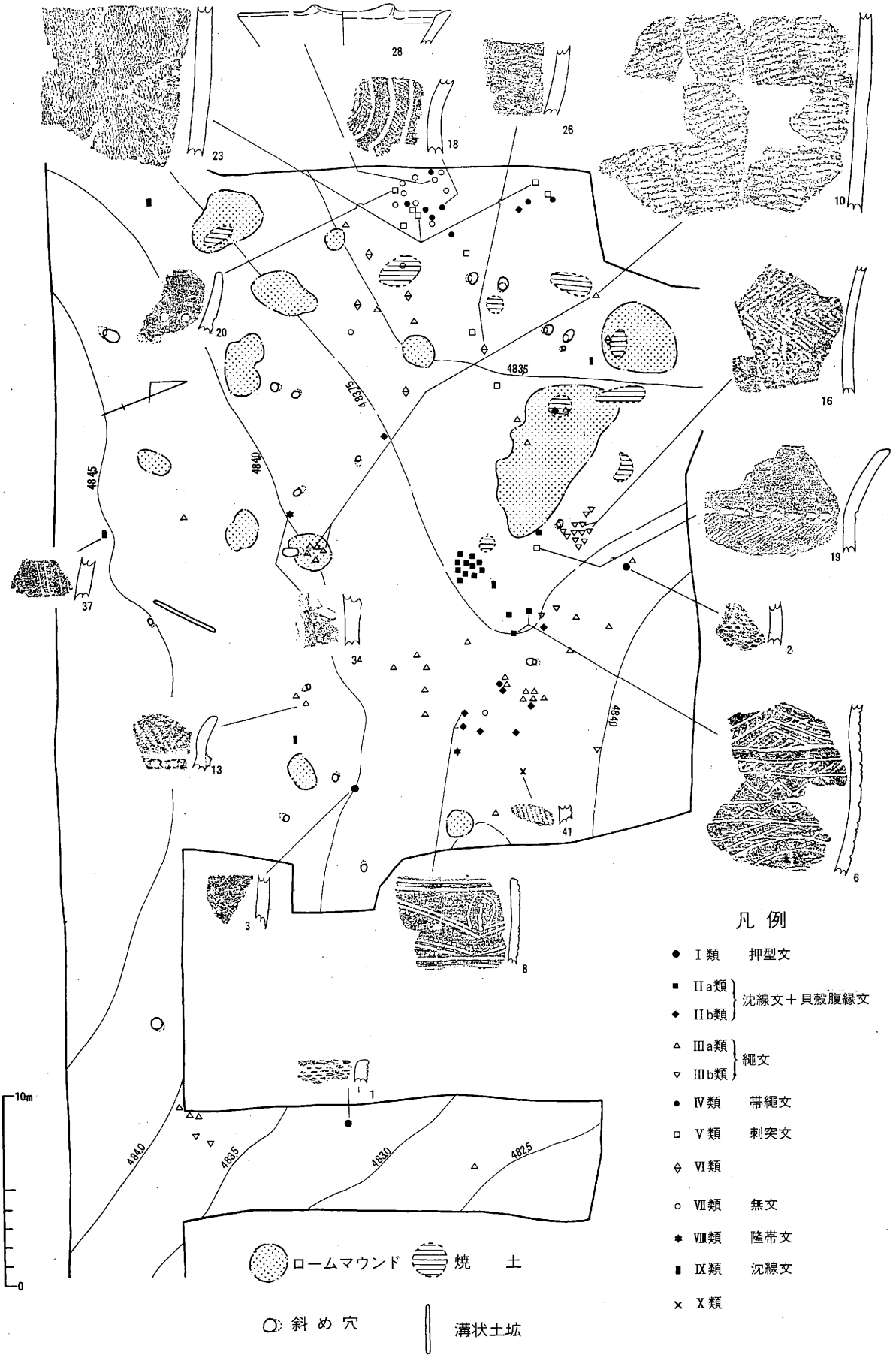


図27 縄文土器分布図 1:300

細かい特徴から類を細分している。

Ⅰ類（図28—1～3）　押型文をⅠ類とする。そして楕円文をⅠa類（1・2）、山形文をⅠb類（3）とする。3片出土。

Ⅱ類（図28—4～9）　沈線文と貝殻腹縁文を主文とするものをⅡ類とする。さらに文様・形態からⅡa類（4～7）、Ⅱb類（8・9）に細分する。Ⅱa類が20片、Ⅱb類が16片出土している。

Ⅲ類（図28—10～16）　縄文をⅢ類とする。さらに、斜縄文をⅢa類（10～13）、羽状縄文をⅢb類（14～16）とする。Ⅲa類が45片、Ⅲb類が19片出土している。

Ⅳ類（図29—17・18）　沈線で区画された帯縄文をⅣ類とする。14片出土。

Ⅴ類（図29—19～25）　頸部に刺突文をめぐらすものをⅤ類とする。さらに地文が縄文のものをⅤa類（19）、不明のものをⅤb類（20・21）、撚糸文のものをⅤc類（22～25）とする。Ⅴa類が1片、Ⅴb類が2片、Ⅴc類が11片出土している。

Ⅵ類（図29—26・27）　粗い縄文を軽く押圧しているものをⅥ類とする。6片出土。

Ⅶ類（図29—28～33）　無文のものをⅦ類とする。中には他類の無文部を含んでいるかもしれない。15片出土。

Ⅷ類（図29—34・35）　隆帯文をⅧ類とする。2片出土。

Ⅸ類（図29—36～40）　沈線文をⅨ類とする。さらに数条の浅い沈線をもつものをⅨa類（36～38）、深い沈線を方向不定に密にもつものをⅨb類（39）、浅いが副広の粗な沈線をもつものをⅨc類（40）とする。図示したものがすべてで計5片出土している。年代については今のところわからない。

Ⅹ類（図29—40）　平行条線文をⅩ類とする。1片出土。年代は今のところ不明。

(3) 早期の土器

Ⅰ類押型文土器（1～3）とⅡ類沈線文＋貝殻腹縁文土器（4～9）が早期に比定される。

押型文　押型文1・2は比較的小粒の楕円文が密に横走するもので、1は口縁直下より施文される。楕円の大きさは1が縦約2㎜、横約10㎜。2は縦約2～3㎜、横約5㎜。両方とも砂を多量に含み、焼成は良好。1は外面に炭が付着したのか黒灰色を呈し、2は内面が黒灰色である。3は山形文で山形の大きさは幅約6㎜高さ約3㎜。残りが悪く磨滅がはげしい。胎土の砂は1・2に比べ小粒でかつ少量である。

これらの押型文は小片で少量だが、後述するトトノ池南遺跡の押型文土器とよく似た特徴をもっており、細久保段階に比定されよう。

沈線文と貝殻腹縁文　Ⅱa類（4～7）は平行沈線文の間に沈線による鋸歯文あるいは、拓本ではよくわからないが貝殻腹縁による刺突文を刻み目のように並列して配するもので、沈線はⅡb類に比べて深くシャープである。胎土に砂粒をあまり含まず、色調は灰白色系で、焼成が悪いためか断面中央は暗灰色。白色系統で砂粒をあまり含まない点は他の出土品にない特色で、在地の土器でないと考えることよできる。

Ⅳb類（8・9）は2本一単位の平行沈線を口唇直下と口唇下6㎝の所に水平に配し、その中に、花蕾のような円形小穴からわずかに曲がりながら垂下する単線を囲む縦長楕円と山形文を沈線で配し、そのすき間に貝殻腹縁を直線的に連続して施文して波状文風にした文様を平行沈線に平行に配している。口唇部は棒状具の押圧による小波状をなす。Ⅳa類に比べ胎土に砂粒が目立ち、色調も茶色系である。内面はミガかれているのか平滑である。

これらのⅣ類は平行沈線と貝殻腹縁文を基調としている点で、神奈川県田戸遺跡を示標とする田戸式に比定されよう。中でもⅣa類の胴部が屈曲する特徴は田戸上層式にみられるようである。

小結　以上の縄文早期に比定される土器群は一括出土ではなく、層位的にも厳密に取り上げられておらず、また少量と残念な点が多いが、押型文系土器と沈線文系土器の関係を考える一資料となろう。

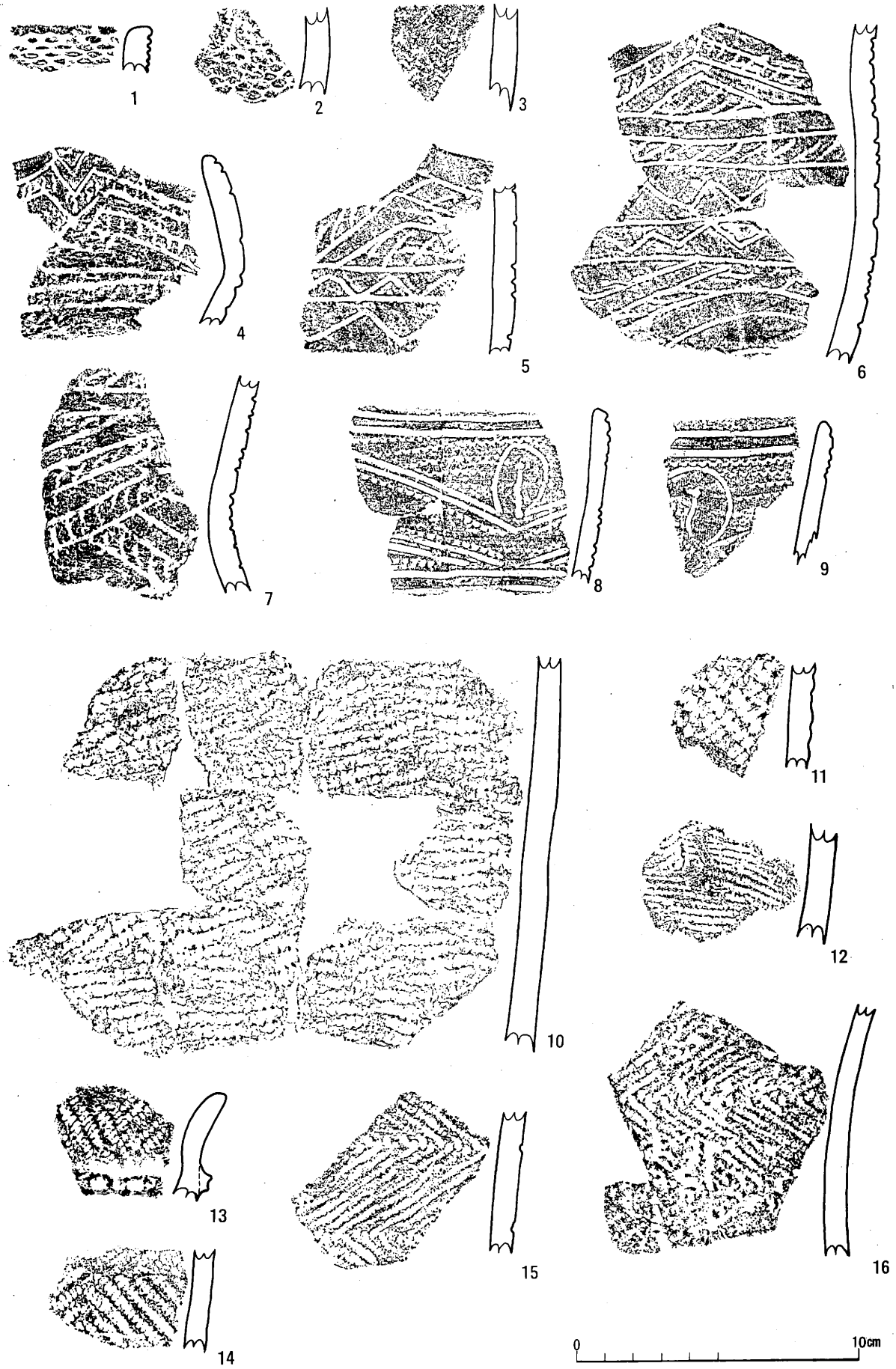


図28　出土土器1　1：2

(4) 前・後期の土器

前期の土器　Ⅲ類の縄文施文の土器（10～16）が前期に比定される。10は粗い撚りの弱い縄文が施される。胎土に砂粒を多量に含み、黄褐色系を呈し、焼成は良好。11は10と同様の縄文が施されているが、堅緻な焼成で灰白色を呈する。12は撚りの良い縄文を一単位ごとにやや方向をかえて施している。茶褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好。

13は口縁部下4cmのところに貼り付け突帯をもつ。突帯の上面は貼り付けられた後に何かで押圧されたらしくでこぼこしている。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良好。やや暗い茶褐色を呈する。

14～16は羽状縄文で、15・16は結節をもつ。14は結節をもたない。いずれも砂粒を多く含み、焼成は良好。茶色～茶褐色系の色調である。

以上の土器は、10・13がやや古手かもしれないが大半は前期後半に位置づけられようか。

後期の土器　早期・前期以外の土器を後期に一括する。

Ⅳ類（17・18）は沈線で区画された帯縄文を主文とするもので後期初頭の称名寺様式に比定される。胎土に砂粒を多量に含む。焼成は良好、茶褐色を呈する。

Ⅴ類（19～25）は刺突文をもつもので、19は頸部に刺突文をめぐらせ、それ以下に細かい左下りの斜縄文を施す。縄文の一単位は上下約1.5cm、左右約2～2.5cmと小さく、微妙に角度をちがえて押捺されている。口頸部は外方に開く。口縁部外面、および内面ともにていねいに横ナデされている。胎土に砂粒を多く含む。焼成は良好、暗い黄灰色を呈する。

20は2列の円形刺突文をもつ口縁部片で、刺突は棒状具を押しつけて半～1回転させている。内面はていねいに横ナデされる。胎土に砂粒を含み、焼成は良好だがもろい。黄褐色を呈する。21は円形刺突文が頸部に1ヶ所かろうじて確認できるものである。口唇部はやや波状をなす。胎土に砂粒を含む。焼成は良好。外面暗灰色、内面黄灰色を呈する。

22～25は撚りの強い密な撚糸文を若干左上から右下に傾けて縦走させているもので、21は棒状具による円形刺突文を2列めぐらすが、刺突は右から左へつき刺している。撚糸文の一単位の幅は同一の縄目を基準に見ると（5の矢印部）約2.5cmをはかる。(注1) 同じようにこんどは縦方向をみれば同一の縄目が2cm間隔であるので棒の直径（芯棒に縄を巻きつけた状態）は約6.4mmとなる。内面はていねいに横にナデられ、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で堅緻、明るい茶褐色を呈する。以上の共通する特色から21～24は同一個体と考える。24はやや撚り糸の細いもので、21～23に比べ胎土に砂粒を多量に含む。内面はていねいに横にナデられ、焼成は良好だがもろい。明るい茶褐色を呈する。

Ⅵ類（26・27）は、粗い縄文を軽く押さえてあるもので、内面がていねいにナデられ、胎土に砂粒を含む。焼成は良好で堅緻、茶褐色を呈する。以上の特色は前述の21～24に等しい。又、出土地点も近い。

Ⅷ類（34・35）は隆帯文と呼ぶか太い凹線文と呼ぶか判断しにくい。胎土に砂粒を含む。焼成が悪いためか断面中央は黒灰色である。表面は黄褐色。

以上の土器はⅤ類の頸部の2列の刺突文の特色などから後期初頭に比定されよう。Ⅵ類もⅤ類との近似性から同期と考える。

Ⅶ類のうちの28～30は同一個体の可能性が高い。無文の小型深鉢と思われる。28の口唇部は一部突出し波状口縁様をなす。復元口径約15cm、くびれ部同10.5cm。胎土に砂粒を多く含む。暗茶灰色を呈する。焼成は良好。口頸部の形態などから後期前半期のものと考えられよう。

注1　土器は形成後の乾燥・焼成で収縮するので、この値をそのまま原体の大きさとすることはできない。少し大きめの原体となろう。

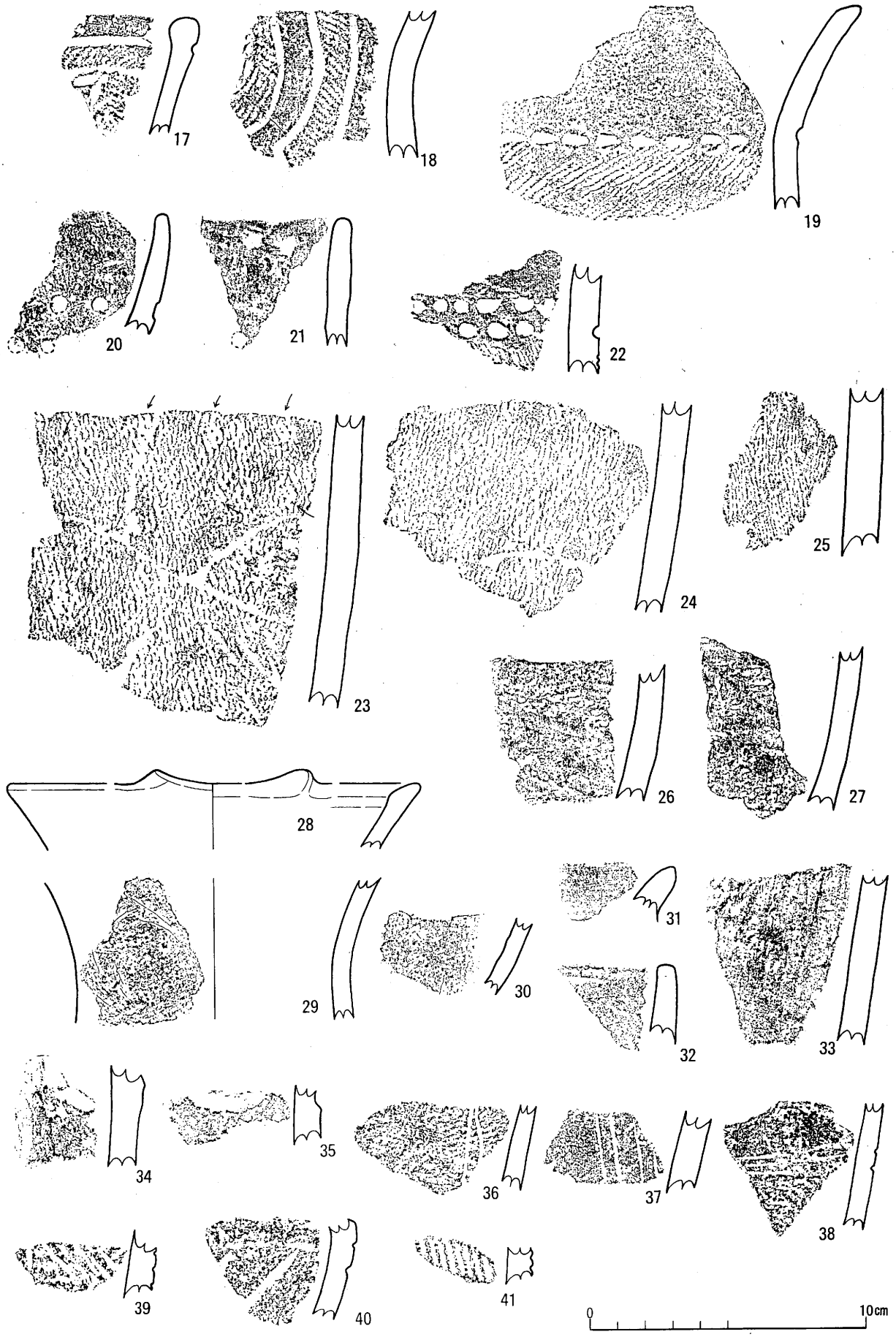

17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
10cm

図29　出土土器 2　1：2

土器の分類、年代の比定等については、㈶長野県埋蔵文化財センター広瀬昭弘・黒岩隆両氏の御指導を得たが、誤りがあれば筆者の責任である。

参考文献

『長野県史』 考古資料編全１巻４ 1988.3
『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』 1987.3 岡谷市教育委員会
『縄文早期の諸問題―講演・発表要旨』 1988.9 群馬県考古学研究所

B 石 器

(1) 出土状況（図30）

縄文時代の石器は、旧石器が多少混入しているかもしれないが概ねコンテナ１箱分が出土している。大半が剥片で製品および石核が少量ある。石質は多くが安山岩である。

出土層位は土器と同様黒色土層の下位である。

分布状況は土器とおよそ重なるが、土器の出土の少ないⅡ区・Ⅲ区にも剥片がわりと多く出土している。

(2) 出土石器（図31）

今報告では製品と思われるもののみを図示して報告する。

１は縦形の石匙で、小さなつまみが整った刃部に付く。刃部はつまみをのぞく全外周にていねいにつくり出されている。刃部形態は一方が湾曲し、もう一方は直線的である。暗茶褐色の頁岩製品である。石匙は一般的に早期前半の押型文期に出現し、縦形のものから横形のものへ移行するが、前期後半には大半が横形になるという[注1]。つまみが小さいことや、全体に作りが良すぎることなど問題もあるが、当石匙も土器出土量の多い早期におかれる可能性がある。

２は石槍と考えられるもので、粗く刃を作り出している。安山岩製で風化が進んでいる。

３は小型の磨製石斧である。長さ5.6cmと小さいが、全面がていねいに研磨されている。表面中央にはかすかな凹みがある。風化が進んで灰白色に近い。重さ30.4ｇ。

４は抉入石器で唯一の黒曜石製品である。両側中央に抉入を入れ、先端および側面に刃部を作り出している。先端の刃部は使用痕かと思われるつぶれがある。

５は鋸歯縁石器で、一側方に鋸歯状の刃を作る。安山岩製。

６～11はいわゆるスクレイパーである。いずれも安山岩製と思われる。６は上端に原石表面を残しているものの他は刃を作り出しており掻器に近い。７・８は同形態のもので扁平な剥片の一部に刃を作り出している。石質もよく似ている。９はやや厚手のもので一側面に粗く刃を作り出している。10は相対する二方向に刃を作り出している。11は横長剥片にていねいに刃を作り出したもので、つまみが付けば横形の石匙となる。

12は使用痕のある剥片と考えられる。暗黄灰色の頁岩製。

注１ 小林康男「(2)石器―石匙―」『長野県史』 1988

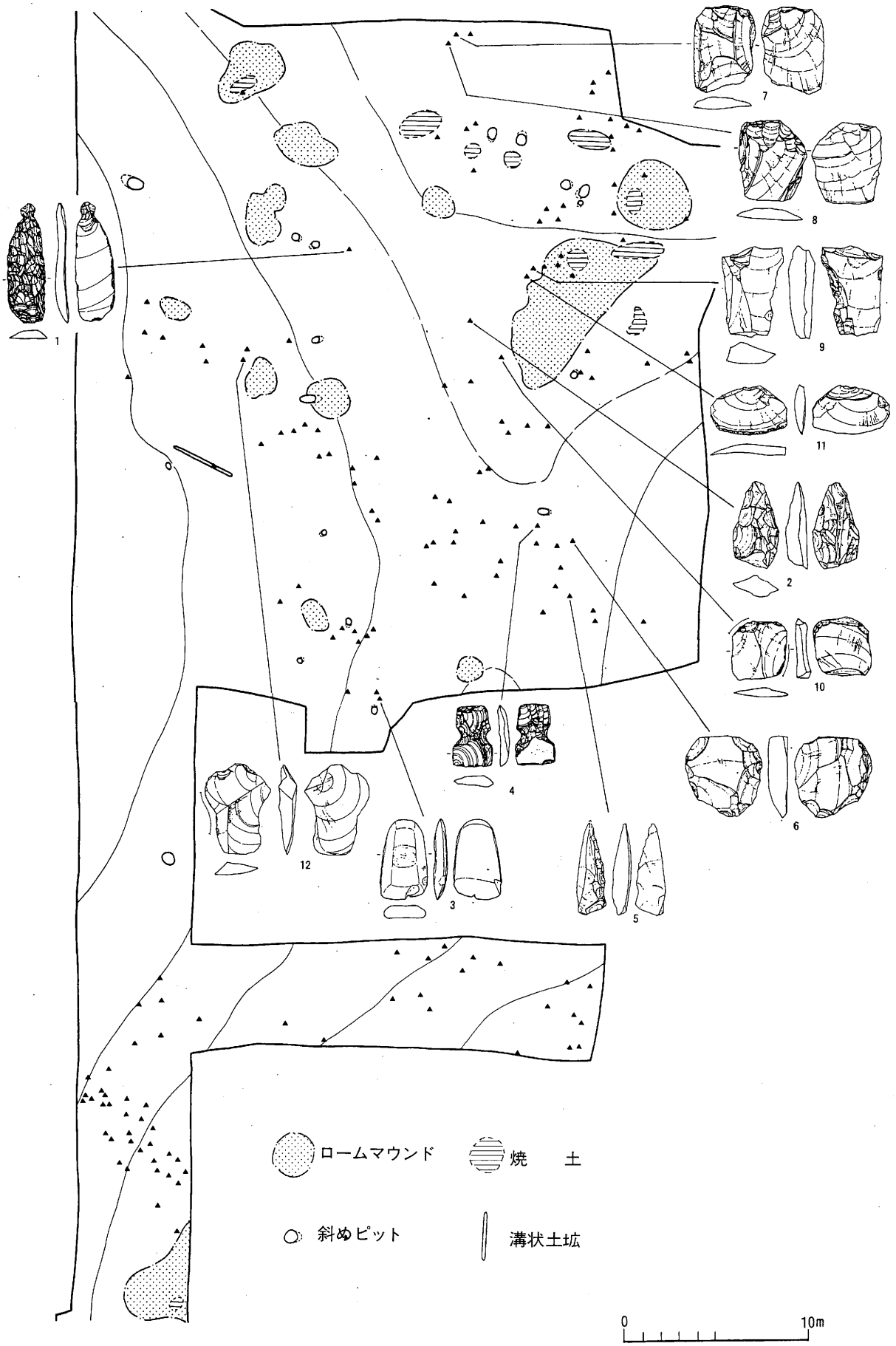


図30　右器分布図　1:300

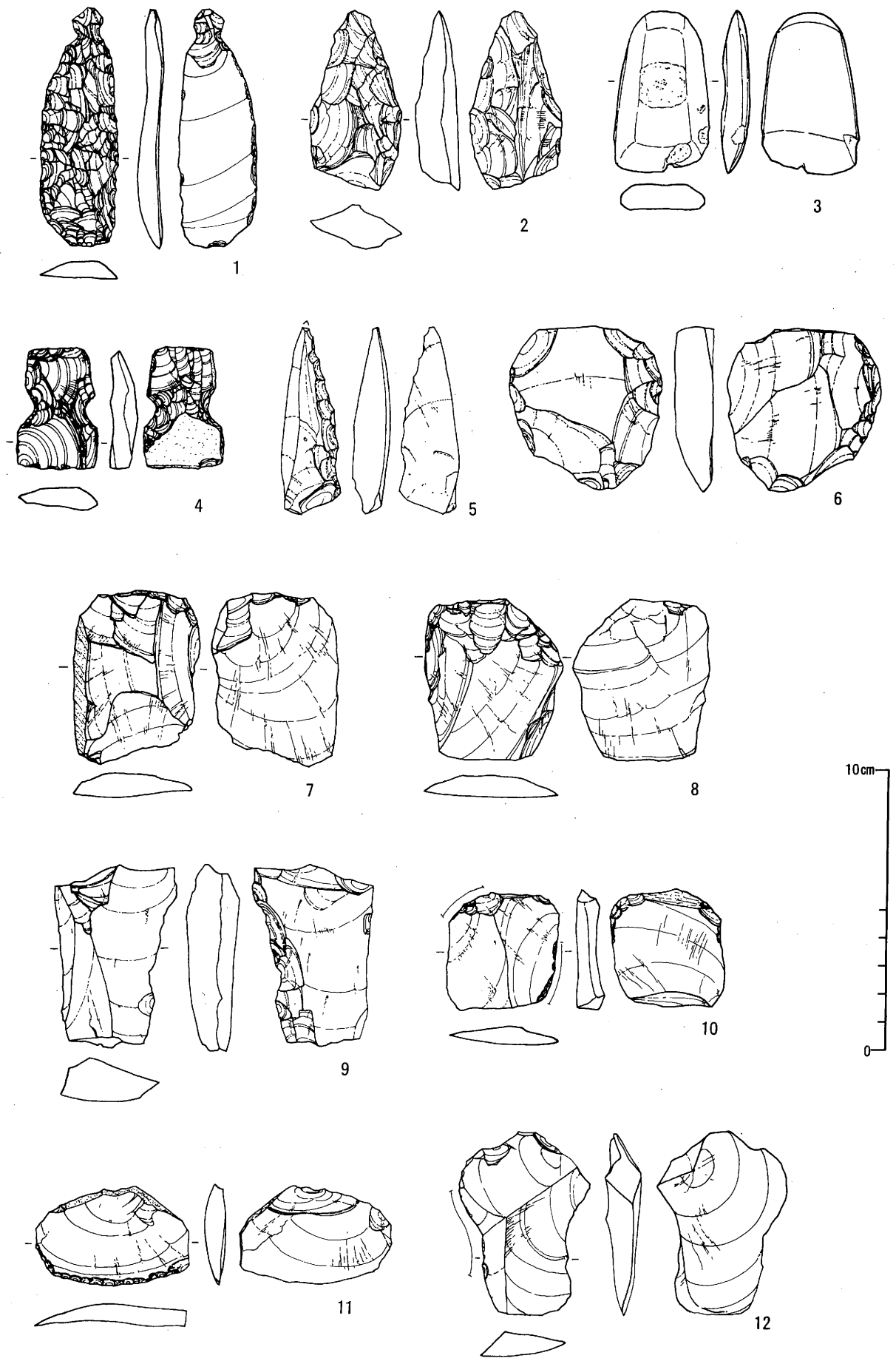


図31 出 土 石 器 1：2

第4章　平安時代

1　遺　　構

平安時代の遺構には掘立柱建物・柵・土坑があるが、掘立柱建物・柵については柱穴中から平安時代の遺物の出土がないので断定できないが、検出状況、平安時代の遺物の分布状況などから当期の遺構としておく。

A　掘立柱建物・柵（図8・33）

掘立柱建物址は4棟近接して確認されている。柱穴の深さや並ぶ方向等で現地で検討した結果であるが、他にも一列に並ぶ柱穴もありさらに建物があった可能性がある。

掘立柱建物が検出されたのはⅠ区東部のC～E—10～12区で尾根線にあたる。他の柱穴もこの10～12ラインの尾根線上に多い。

(1)　SB1

C・D—11・12区にある1間(2.6～2.7m)×1間(2.5m)の建物である。柱穴掘形のプランは円形で直径30～40cm。南側柱列中央にはやや浅い柱穴があるがこの構造はCB3に共通するので他の柱列の中央にも浅い柱穴があった可能性がある。柱穴の深さは四隅が40～45cm、南側柱列中央が30cm。

(2)　SB2

D・E—12区にある2間(4.4m)×2間(2.5m)の南北棟の建物である。柱穴掘形のプランは円形で直径約30cm、北側の母屋部分の規模は2.5m×2.8mとSB1にほぼ同じ。南側柱列中央に柱穴があり、廂中央にも柱穴がある。柱穴の深さは北側母屋部分のものが50～60cmと深く、他は25～40cmである。

(3)　SB3

D—11区にある2間(2.35m)×2間(2.25m)の建物である。柱穴掘形のプランは円形で直径30～40cm。四辺ともほぼ中央に柱穴があるが位置が若干外方へずれている。柱穴の深さは四隅のものが40～60cm、中央のものが20～40cm。

(4)　SB4

E—10区にある1間(2.1m)×2間(3.5～3.6m)の南北棟の建物である。柱穴掘形のプランは円形で直径30～40cm。柱穴の深さは四隅が45～60cm、他が30cm。桁行中央の柱穴は西側柱列では検出されていないが、東側柱列中央の柱穴が浅いことから、本来はあったものと考える。

(5)　SA1（図8）

掘立柱建物群の北方F—12・13区にある東西方向の柵列で2間分（4.3m）を確認している。柱穴掘形のプラ

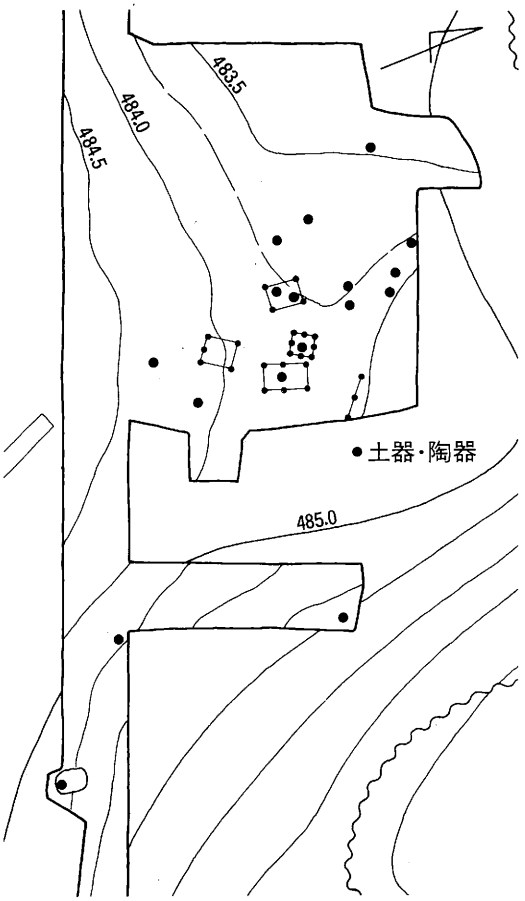


図32　土器・陶器分布図

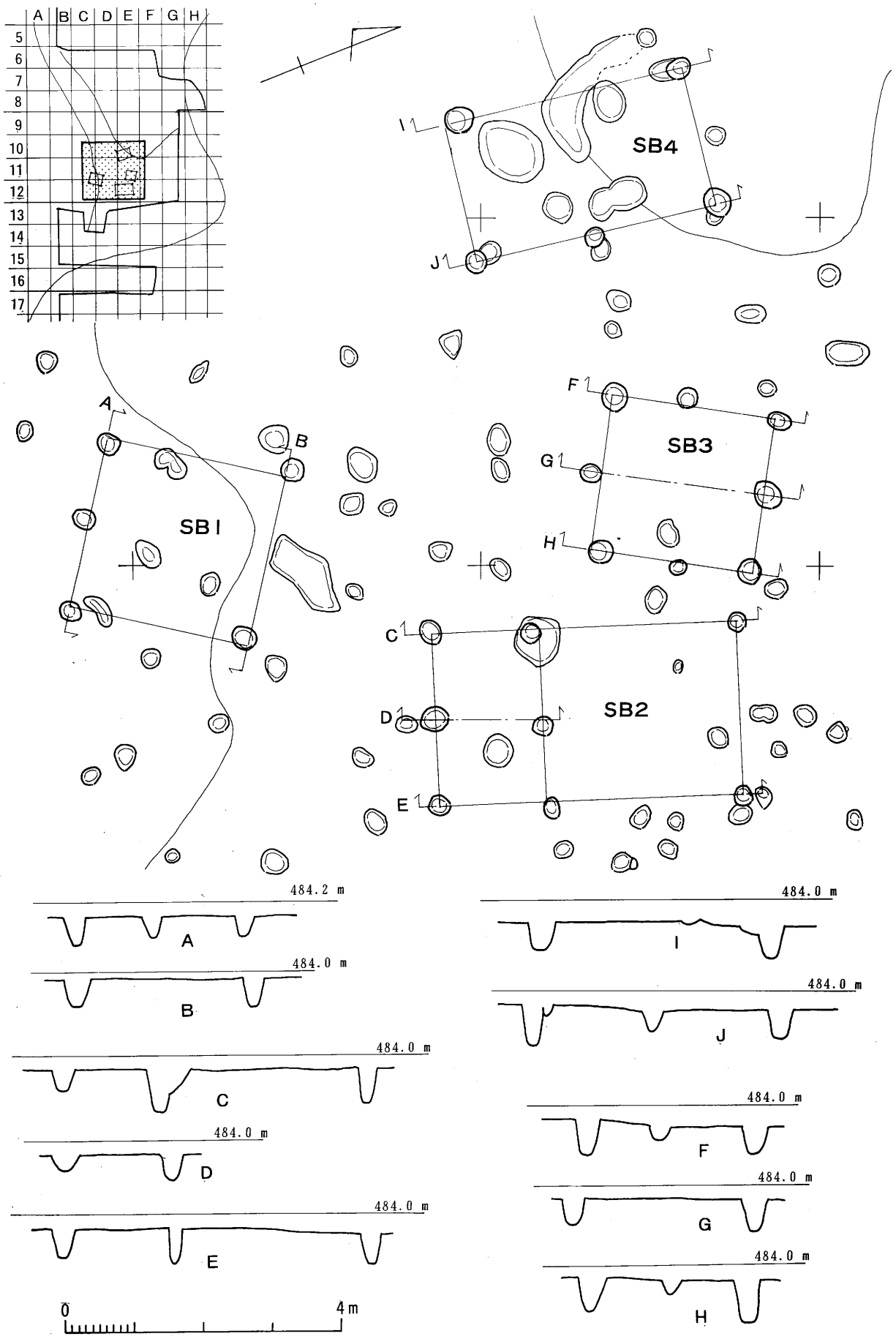


図33　掘立柱建物　1：80

ンは円形で直径20～30cmと小さい。柱穴の深さは15～20cmと浅いが、ここは耕作土直下が黄色粘質土であり、畑の耕作で削平されたからであろう。

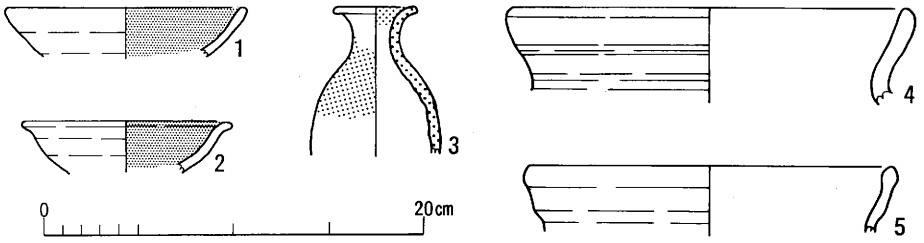


図34　出土土器・陶器　1：4

(6) 小　結

これらの掘立柱建物は規模・構造ともによく似ており同時代のものと考えられる。規模は最大のＳＢ２でも11m²（3.3坪）と小さく、ＳＢ３は5.5m²（1.7坪）しかない。柱穴の規模も小さい。これらはこの建物群が定住的な住居の可能性が小さいことを示している。

B　土　坑（図９）

調査地東部Ａ―19地区で平安時代の土坑が１基検出されている（ＳＫ５）。

ＳＫ５は南から北へ傾斜する斜面に直交して構築された土坑で、プランは南北2.5ｍ×東西1.3ｍの隅丸長方形を呈し、底は船底状である。埋土は黒色土が主だが、西部は黒色土と黄色粘質土が互層をなしていた。土坑西南隅から灰紬陶器小瓶と土師器甕胴部片が出土している。人骨等の出土はないが、形態などから墓の可能性が指摘できる。

2　遺　物

平安時代の遺物は総量で両掌の中におさまる程と少ない。分布は図32のように掘立柱建物群を中心に散在的にあり、Ａ―19区の土坑ＳＫ５から灰釉陶器小型壺が出土している。

また、平安時代に特定できないが、旧石器群の検出されたⅣ区から砥石と考えられる石製品が出土している。

A　土器・陶器（図34）

１・２は黒色土器の椀で、１は口縁部が外反しないもので、２は口縁部が外反する。１が口径12.8cm。２は口径11.6cm。

３は灰釉陶器の小型壺でＳＫ５出土。釉は外面肩部に厚くかかっている。内面には黒色の付着物がある。

４・５は土師器の甕で、屈曲して受け口状をなす口縁部をもつ。

他に図示していないが土師器の甕の体部片が出土している。

これらの年代については資料が少ないながらも、黒色土器椀や土師器甕の形態からトトノ池南遺跡と同様の10世紀代に考えておきたい。

B　石 製 品（図35）

出土品は砥石と思われる石製品で、黄灰白色を呈する頁岩製。３面に磨った痕跡が残る。

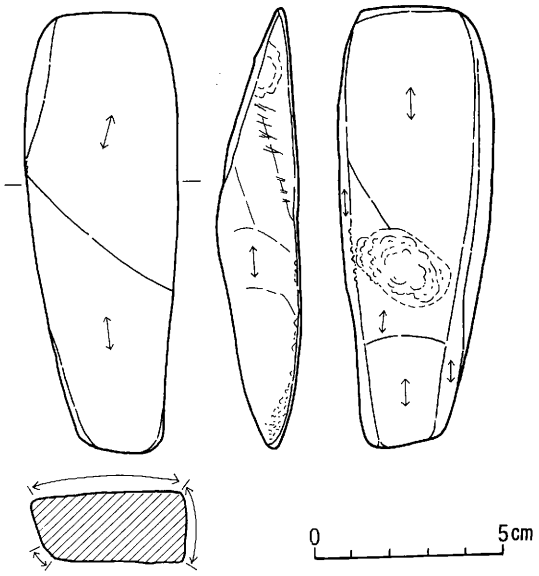


図35　出 土 石 器　1：2

第5章　結　　語

鍋倉山東麓に展開する広大な温井台地は、その広大な台地と深雪地帯という地理的環境が重なりあって、他地域と比較すると開発はそれほど進展せず自然景観が良好に残されていた。台地面は畑と山林が交互に入りくみ山村の土地利用の風景が広がっていた。それ故に千曲川流域の低地帯と異なり、考古学的研究の対象の場となりにくく、北条幸作・渡辺喜平次氏等郷土史に興味を持つごく一部の人々によって細々と資料採集が続けられていたのみであった。

昭和59年に入り、温井地県営圃場整備事業が施行されることとなり、同年6月より一ヶ月半余にわたり長者清水・水の沢両遺跡の発振調査が行われた。これが温井台地における本格的考古学調査の初めであった。この発掘調査で私達は、旧石器時代、平安時代、中世の貴重な資料を得ることができた。そして、温井台地が考古学的にみて非常に重要な場所であることを認識したのであった。このことは、今回調査した新堤・トトノ池南両遺跡出土遺物が如実に証明している。

さて、新堤遺跡は、歴史的環境の項で若干触れているように凹地で豊富な湧水が得られる場所に立地している。

今回の調査を通じて私達は、飯山地方にまた新たな旧石器時代の遺跡を加えることができた。旧石器は2つのブロックに分れて出土した。出土石器数106点。特に第1ブロックは径約5mの範囲に集中しており、当時の居住空間を暗示するとともに石核や打面再調整剥片の存在など石器製作が行われたことを示している。

2つのブロック出土石器の石材は、安山岩が主体であり地元産出の石材を利用していることが察知された。このことは、飯山地方の旧石器時代遺跡に一般的にいえることであり、安山岩を主体とする旧石器時代の遺跡は、飯山地方の顔といえるであろう。そして、そこに介在する頁岩や黒曜石製の石器は文化・経済交流の一面を表現しているといえよう。年代的には、飯山地方の旧石器時代編年にあてはめれば太子林石器群に属するといえるであろう。今後の当地方旧石器時代研究の重要な資料といえるであろう。

さて、今回の調査で特に注目したいのは、微量ではあるが縄文早期の資料が得られたことである。飯山地方は、縄文早期の遺跡数も少なく遺物も稀少である。そういう意味では今回の資料は貴重である。押型文、沈線文、貝殻腹縁文土器が出土し、長野県が東西文化交流の接点であることを示している。

縄文土器では、早期の他に前期後半の土器、後期前半の土器が出土している。後期土器には称名寺様式に比定されるものが存在する。当地方の後期の遺跡は、千曲川流域のような低地に立地しているのが一般的である。温井台地のように比較的高地に立地するのは珍らしい。数量的にも微量であり、キャンプサイトの性格をもつものと考えてよいであろう。

平安時代の遺構と思われるものに掘立柱建物址が4棟検出されている。平安時代の遺物が僅少なことから臨時的、短期的な居住であったろうと推定される。他に土坑が検出されている。この土坑から灰釉陶器小瓶と土師器の甕胴部破片が出土した。土坑墓と考えてよいであろう。

末尾ながら調査にあたって指導頂いた県文化課、物心両面にわたって協力頂いた地元関係機関、炎天下のもと精力的に調査に従事された作業員の皆さまに厚くお礼申上げる。

第３編　トトノ池南遺跡の調査

第１章　遺跡の概要

１　遺跡の概要（図１）

トトノ池南遺跡は岡山地区温井から上境へ下る道の西側丘陵にある遺跡である。今回の発掘で旧石器・縄文・平安の各時代にわたる遺構・遺物が検出されている。

トトノ池という名称の池は現在ないが、かつて清水の湧き出る湿地が今回調査地の東北方約 130 m の所にあり（図１右上）、トトノ池と呼ばれていたそうである。(注1) ここは現在ヨシ原である。北条幸作氏もこのトトノ池周辺をトトノ池遺跡と想定されている(注2)が、今正確な地点を特定できないので、今回発掘の遺跡はトトノ池遺跡の南ということでトトノ池南遺跡と呼称することとした。

今回発掘した所は丘頂平坦面から西へ比高８ｍほど下がった所にある緩斜面にあたる。現況は畑地であり、畑の造営時に高所を少し削平しているとのことであった。発掘前の現地調査でも畑に遺物が散乱していた。

なお、今回発掘した地点の南にも、遺跡の立地に良好な緩斜面が広がっているが、そこは畑地造営時に重機で大幅に削平したとのことである。

湧水は、発掘地東端で井戸が検出されたように、当丘陵の西斜面の丘頂からやや下がった所には点々とあり、現在も少量ながらも湧き出ている。

注１　上境在住の作業員市村久雄氏ご教示

注２　北条幸作『下水内郡石器時代分布私見』1939・『岡山村史』飯山市公民館岡山支館　1960

２　調査方法

A　調査方法

発掘調査は、時間の関係もありまず重機によって表土（耕作土）を除去した後にジョレン・移植ゴテ等で慎重に掘り下げて遺構・遺物の検出を行った。発掘前の遺物の分布状態などから遺跡の中心は調査地の北部と考えられたが、畑の作物等の関係から17ライン以南の南部から調査を開始し、南部が一段落した後に北部の調査を行った。

遺物の取り上げについては、基本的には１点ずつ位置と高さを記録することとしたが、場合によってはグリッド毎に一括して取りあげた。

遺構図は全体を平板で測量し、適宜微細図を作成した。

写真は全体・遺物出土状態等を適宜白黒とカラースライドで撮影した。

調査地中央部の東西方向の谷状地の調査は旧石器・縄文早期の地形を復元する目的で西半分の黒色土を重機で除去し調査した。東半分については断ち割り調査を行った。

B　調査区の設定（図２）

調査地内の地区割りについては、関東農政局作成の工事用20ｍ方眼に合わせて５ｍ方眼を設定し、西から東へＡ・Ｂ・Ｃ……、北から南へ１・２・３……と地区名をつけた。

レベルは工事用ベンチマーク、引照杭Ｐ17（Ｌ＝528.785）を基準とした。

図１　調査地周辺の地形　　1:1500

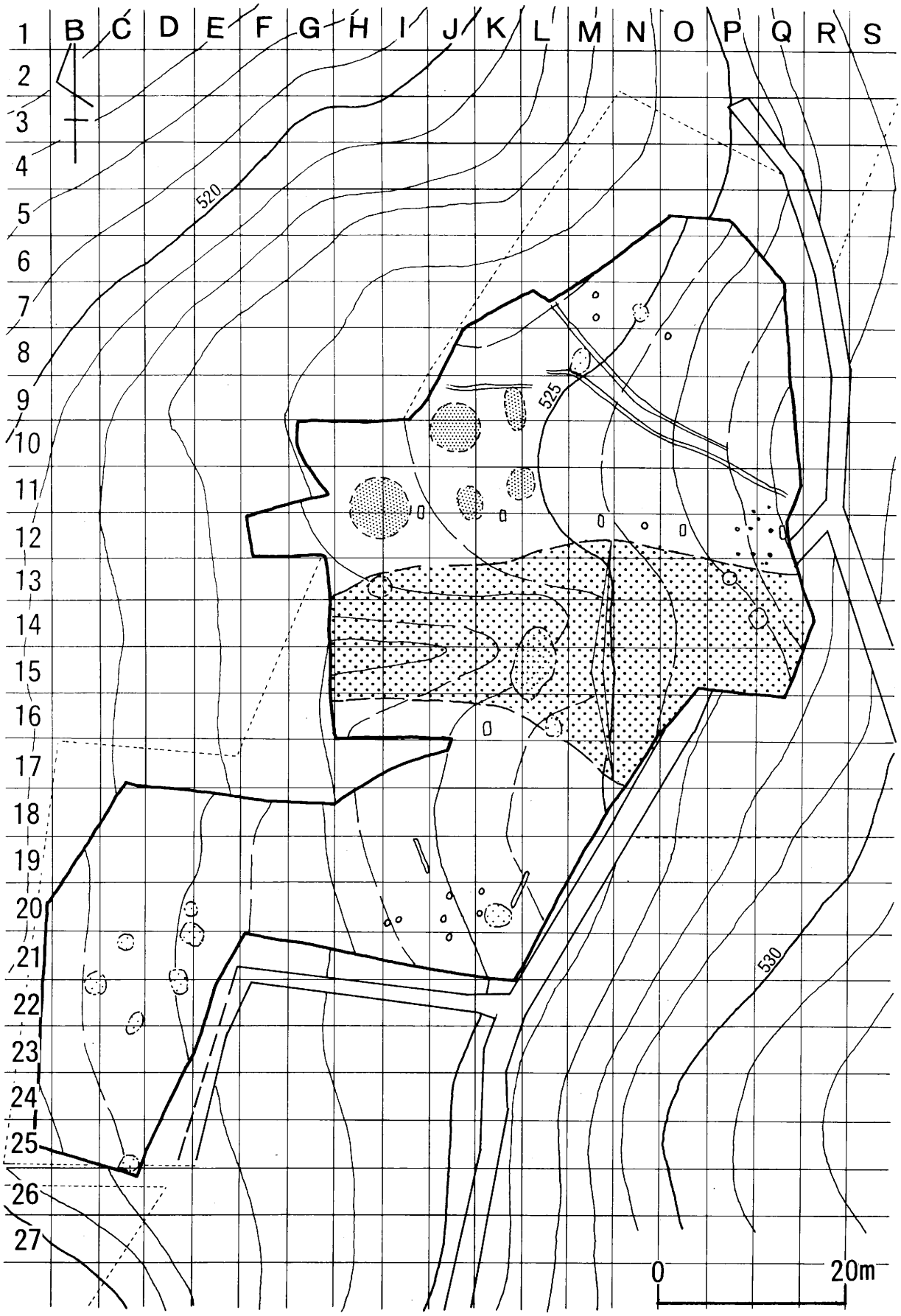


図2　地区割設定図　　1:600

3　層　　序（図3・4）

調査地内の層序は基本的に上層から灰褐色土（耕作土）、黒色土、漸移層、黄色粘質土（地山）であるが、中央谷状地とH～L—19～21地区をのぞけば、畑地造営時に削平されたとのことで耕作土直下が黄色粘質土である。

谷状地の土層（図4）は東端部では上層から耕作土、黒色土、黒色土・黄色粘質土混土であるが、黒色土の間に平安時代の土器と炭・焼土を多量に含む層があり、その下層に平安時代の遺物を少量含む赤味をおびた暗灰色土が堆積している。またここの最下層には青白色粘土が認められる。

平安時代の井戸ＳＥ１は上記の平安遺物と炭・焼土を多量に含む層より下で検出された。

谷状地中央の土層は東端と基本的に等しいが、黒色土下位に焼土がブロック状にあり、最下層には拳大から人頭大の礫が認められた。

縄文時代早期の土器は黒色土最下層から漸移層にかけての層位で検出された。

旧石器は黄色粘質土（地山）中から出土しているが、旧石器出土地点は耕作土直下が黄色粘質土であり、黄色粘質土上端からの旧石器出土層位の深さはわからない。現況では、耕作土と黄色粘質土の境から下15～30cmのところから出土している（図3）。また、石器群断ち割りトレンチや、井戸・土坑の壁面観察によると、所々で礫状となるかたい黄褐色粘質土層（スコリア層か）が黄色粘質土層現上端から約30～50cm下で認められるが、この層は旧石器出土地点では黄色粘質土層上端から約50cm下にある（図3・43・51参照）。

なお、谷状地東端の黒色土断ち割りトレンチの最下層（西へ傾斜する地点での最下層であるから厳密には最下層とは言えない）から自然木が出土している（ＰＬ49）。㈱パリノサーヴェイの鑑定で、ブナ属の一種と判明している。伴出遺物があれば古環境の復元に良好な資料となるが、残念ながら伴出遺物はない。層位的に平安時代より古いことはまちがいない。

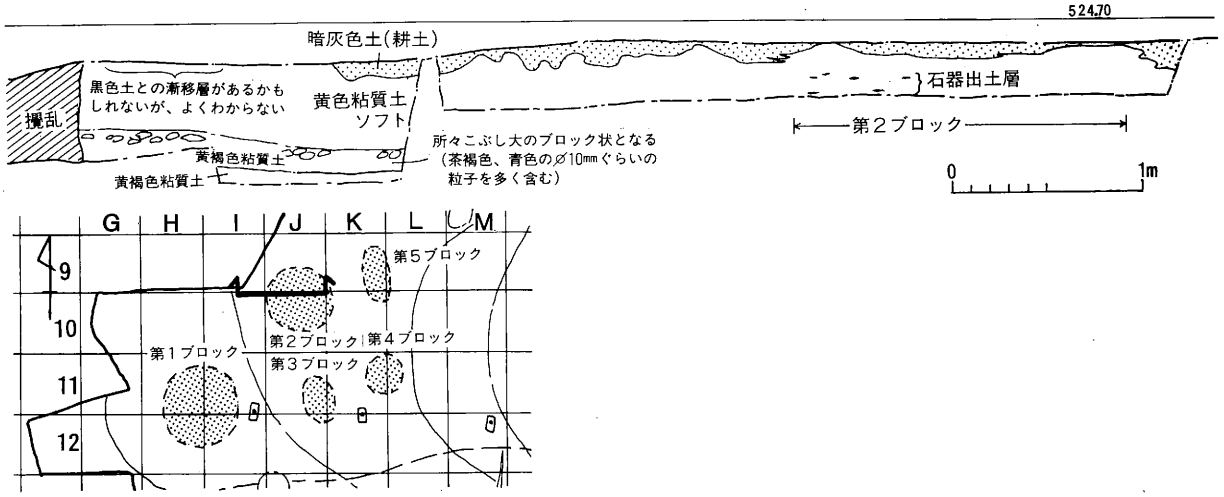


図3　旧石器群セクション　1：40

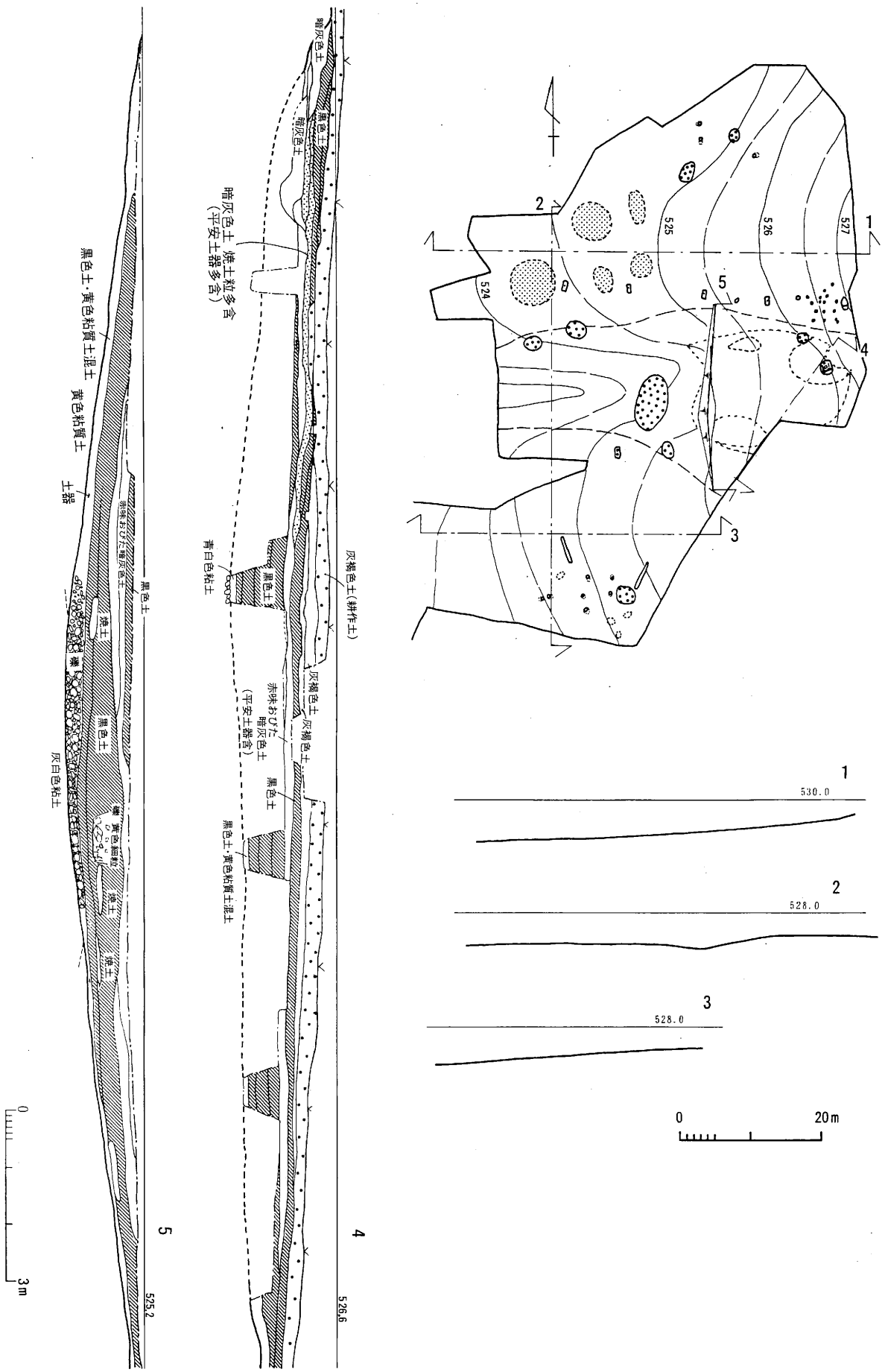

暗灰色土
黒色土
暗灰色土
暗灰色土・焼土粒多含
(平安土器多含)
黒色土・黄色粘質土混土
黄色粘質土
土器
赤味おびた暗灰色土
黒色土
焼土
礫
黒色土
灰白色粘土
礫・黄色細粒
焼土
焼土
黒色土
525.2
5
灰褐色土(耕作土)
黒色土
青白色粘土
灰褐色土
灰褐色土
赤味おびた暗灰色土
(平安土器含)
黒色土
黒色土・黄色粘質土混土
526.6
4
524
525
526
527
1
2
3
4
5
530.0
528.0
528.0
0
20m
0
3m

図4　谷状地土層図

第２章　旧石器時代

1　石器群の出土状況

A　ブロックの検出と石器群の概要

Ｉ―11区において、黒色土直下の褐色風化火山灰層より安山岩の剥片を検出した。付近の精緻な調査を試みたところ、ややまとまって出土することが判明し、旧石器時代の石器群であると判断した。ただし、このＩ―11区付近はアスパラ畑の西境であって、山林との境界を明確にし雑草などの繁茂を防ぐためか、幅約２ｍの溝が掘られていた。さらに、それより以東の畑部分には「トレンチャー」と呼ばれる作物間の土壌攪拌を目的とした深耕機械によって、幅15cmのトレンチが数十センチ間隔で褐色風化火山灰層の上部まで入り込んで攪乱していた。これは文化層と認定される面までには到達していなかったが、やや上部に包含されていた遺物には影響があったと考えられる。この部分の石器の集まりを第１ブロックと呼称して調査を行った。畑境界溝の東側の山林地帯も調査したが、遺物は皆無であった。また、緩斜面上部の東側もテフラ層内を調査したところＪ―10区・Ｋ―11区・Ｋ―９区において石器群の集まりを検出した。これらの集まりは現象的に４か所の群に別れているために、第２～５ブロックと呼称することとした。層位的には、黒色土漸移層より30cm下位の褐色風化火山灰層中位にある。第１ブロックから第５ブロックまですべて同一層準であり、一時期の単一文化層として捉えられる。

出土石器総数は530点で、その88％が二次加工痕のない剥片・砕片である。石材は、頁岩系の石器が22点、黒曜石２点（礫石器・台石除く）のみで、他は全て安山岩でその比率は約96％である。このうち黒曜石は第２ブロックより２点、合計3.1ｇの小剥片であった。出土層準も攪乱を受けた上層よりの出土で、縄文時代の可能性も大きいため、本時期からは除外したほうが良いと考えている。また、頁岩系の石器は、すべてが製品もしくは刃器状剥片であり、石器製作が行われた痕跡もない。したがって、本石材は製品として運び込まれたものであると考えて差し支えないだろう。安山岩は、本遺跡が所在する丘陵―特に南に接する大明神丘陵―に転石としてテフラ層内に多数産出することが確かめられており、いわば地元の石材といえる。これに対して頁岩系石材は、当地区（北信濃）においては産出しないので、北に接する津南（越後）方面に産出するのではないかと思われる。ここでは、地元石材安山岩に対する搬入石材として頁岩系石材を位置づけておきたい。トトノ池南遺跡の石器群は、地元石材の安山岩によって製作された製品と剥片類、およびごく少数の頁岩系製品の集合といえる。

なお、本報告までに第１・２ブロックの内容について、充分な整理作業を行うことができなかったため、個々の石器の詳細な検討を行っていない。

出土した石器の各ブロック毎の集計表は以下のとおりである。

ブロック	ナイフ形石器	掻器	彫器	削器	（刃器）	剥片・砕片	石核	礫石器	台石	計	％
1	0	12	1	5	(7)	259	3	2	1	290	55
2	0	5	0	1	(1)	151	3	0	1	162	31
3	1	4	1	0	(1)	17	0	2	1	27	5
4	0	2	1	3	(6)	22	0	1	0	35	7
5	0	0	0	1	(0)	14	1	0	0	16	3
計	1	23	3	10	(15)	463	7	5	3	530	
％	0.2	4	0.6	1.8	3	87	1.3	1	0.6	100	

表１　旧石器集計表

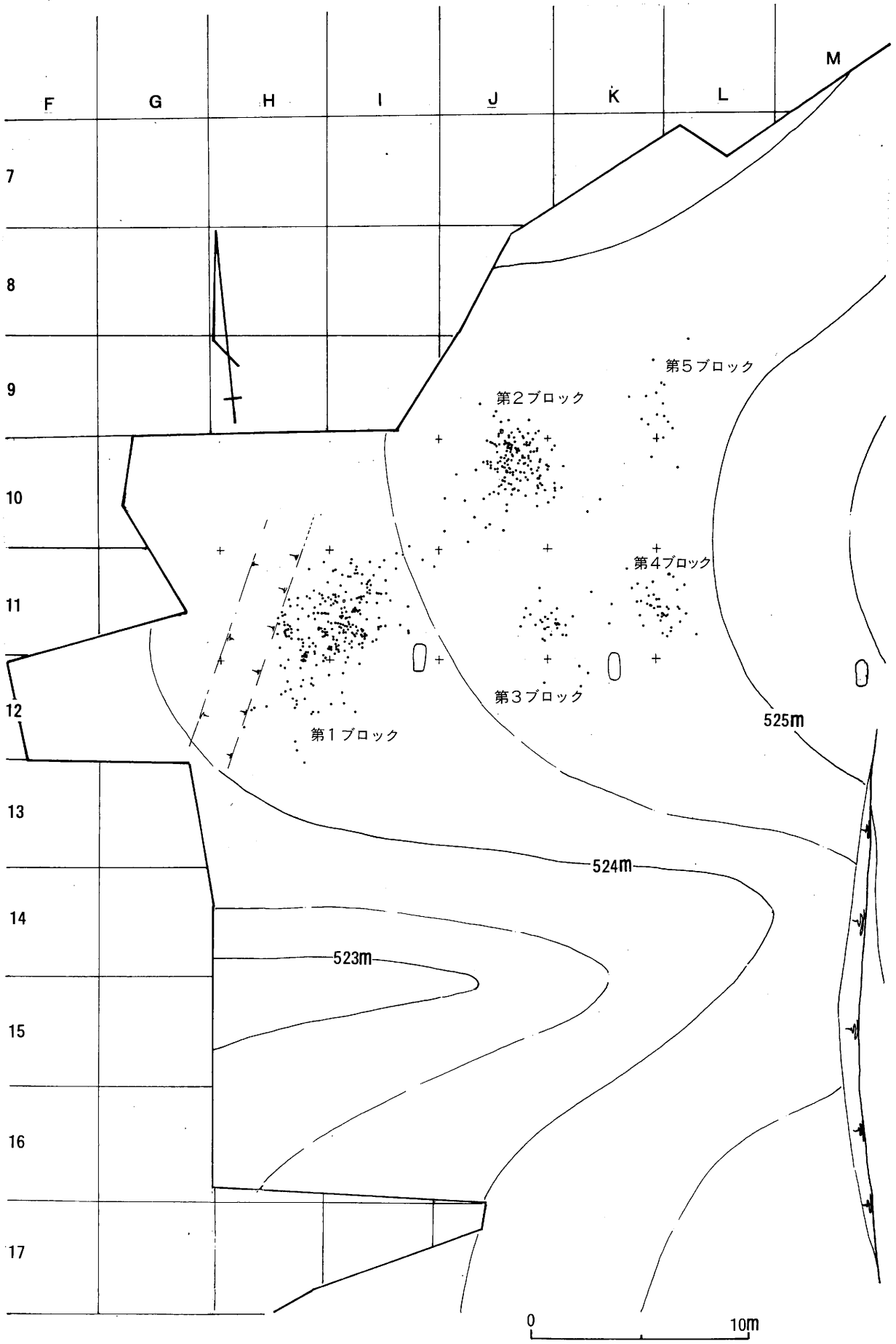


図5　旧石器時代遺物分布図　　1:250

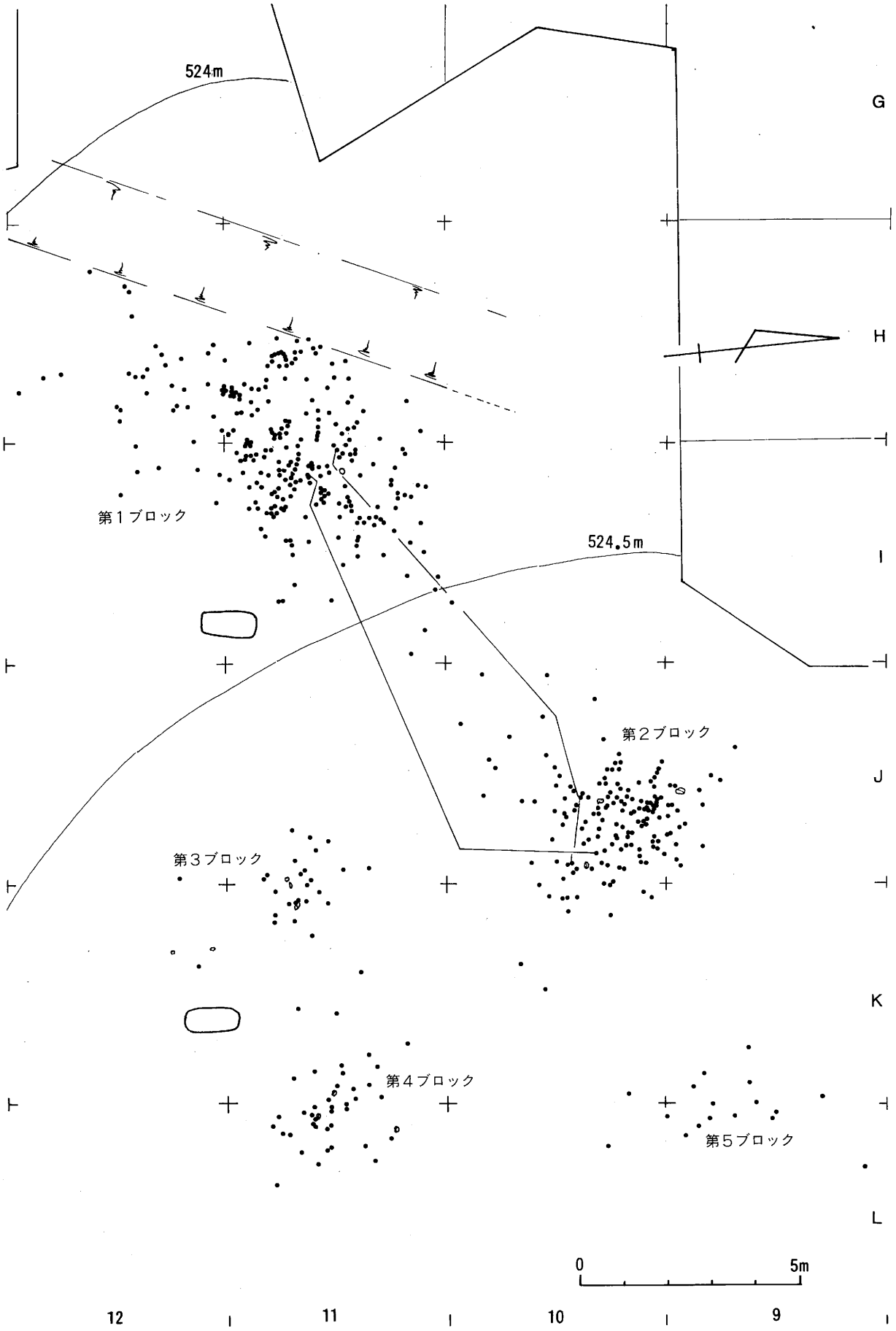


図6　旧石器時代遺物分布図　　1:125

B　第1ブロック（図7・8）

H・I—11・12区に位置し、西側を溝によって破壊されているが、9×5mの楕円形を呈する範囲内にまとまっている（図7）。集中部は、径4mの範囲で粗密はある。西側破壊部分に接する地点でもまとまって出土しているので、本来の集中部はもっと広がる可能性がある。出土層準では最大40cmのレベル差があるが、上部において攪乱を受けているので多少上方へ移動した結果であろう。層位的には漸移層から出土している。本来的な文化層は褐色風化火山灰層中位で、漸移層より15～30cm下位付近にあると考えられる。

石器総点数は290点で、石材には安山岩が大部分を占める。二次加工を施した製品類は、中心部の西側と東側に別れてまとまっている傾向があり、特に西側のまとまりは掻器を中心として、他に製品として運び込まれた頁岩系の石器が集中している。剥片・砕片類は出土石器の89%を占め、整った刃器状剥片もあるが、石器製作を行った接合する剥片も多い（図8）。接合関係の動きではブロック西側部分を中心としていることから、この付近が石器製作の場と考えることができる。台石は、ほぼ原石にまで復元された接合資料242～252の固体資料付近より出土し、その破片は約3m離れた地点より接合している。礫石器は178・180よりさらに西の部分に2点がまとまって出土している（図8）。

出土石器には、掻器・彫器・削器および礫石器・台石などがある。

C　第2ブロック（図9・10）

第1ブロック北東約10mに位置する。J—9区を中心として出土した石器集合で、5×4mの範囲をもつ（図9）。第1ブロック同様に上層が攪乱されており、レベル幅は、40cmある。

出土石器総数は163点で、遺跡全体の31%を占める。石材では、頁岩製の石器が4点のみで、他はすべて安山岩が占める。黒曜石製の小剥片2点は前記したとおり除外したほうがよさそうである。掻器は5点出土しているが、中心部分にまとまる傾向がある。その他の石器は石核・剥片で占められ、接合する石器も多いことから石器製作を行った製作址であると考えられる。

現在までのところ、接合した石器は2・3点の接合例が多いが、その接合分布はブロック内全体に及ぶ(図10)。また、第1ブロック出土石器と接合関係のある石器も2例あり（図6）、今後の検討ではかなりのブロック間接合があるものと考えられる。

D　第3ブロック（図11）

J・K—11区にまたがって検出された石器の集まりで、総点数27点と少なく台石状の礫を中央に、2×2mを中心とした範囲である。本地区は漸移層までしか攪乱を受けておらず、比較的良好な包含状態であった。

出土石器は、ナイフ形石器・掻器・敲石など8点あり、出土総数27点の約30%と製品は多い。石材は、頁岩系の製品2点以外は安山岩である。また、接合資料は1点のみで、剥片も比較的形状の整った刃器状剥片が多い。なお、ナイフ形石器は欠損品であるが、本遺跡唯一の資料である。

E　第4ブロック（図12）

第2ブロックの東約5mに位置し、径約4mの範囲に36点出土したものである。遺存状態は良好で、出土層準のバラツキは少ない。出土石器は、掻器・彫器・削器・刃器状剥片・礫石器が計5点出土し、他は安山岩の剥片である。接合資料も若干存在する。

図７　第１ブロック遺物分布図　1:80（番号は石器実測図番号）

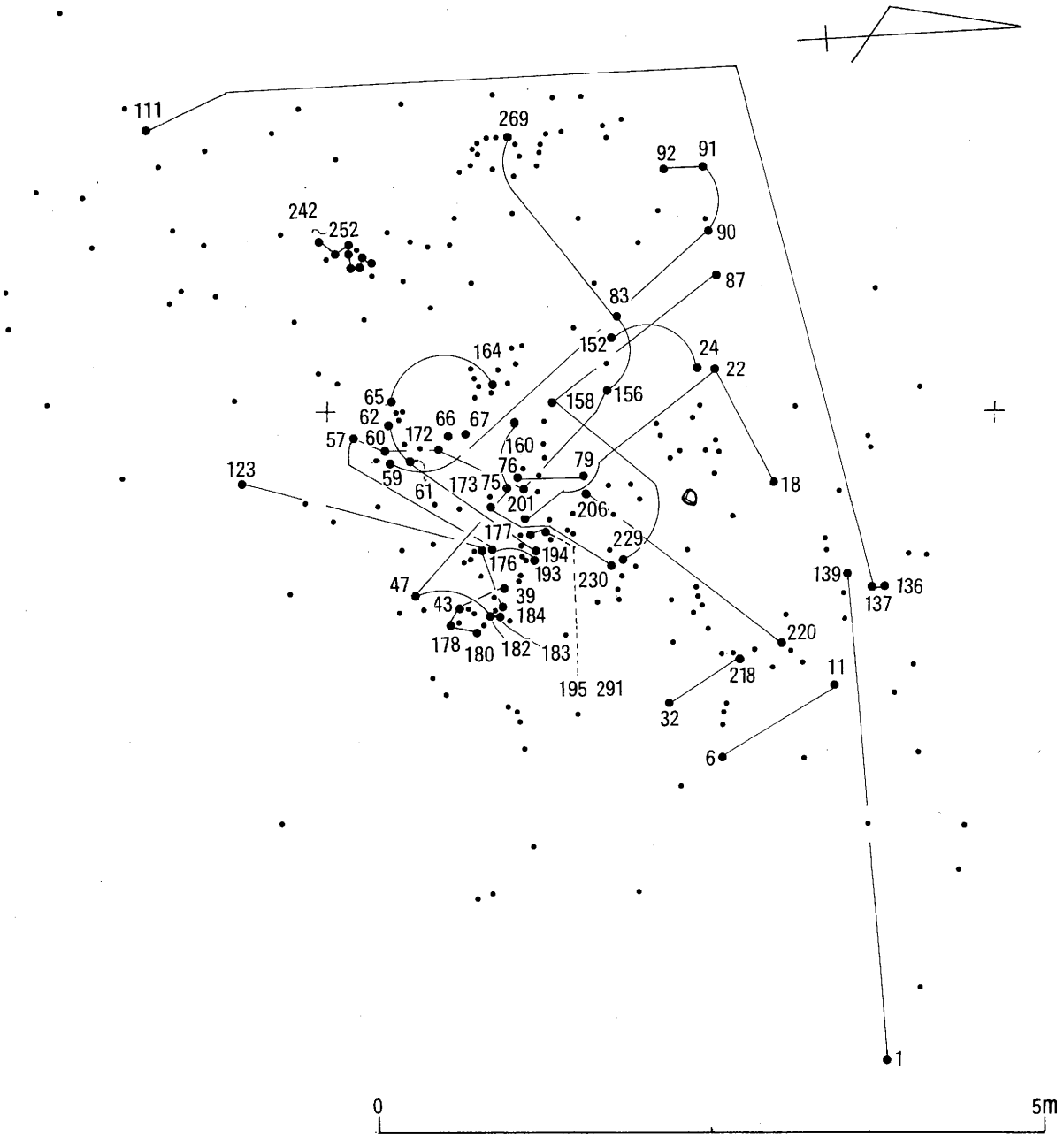


図８　第１ブロック石器接合分布図　1:50（番号は石器個体番号）

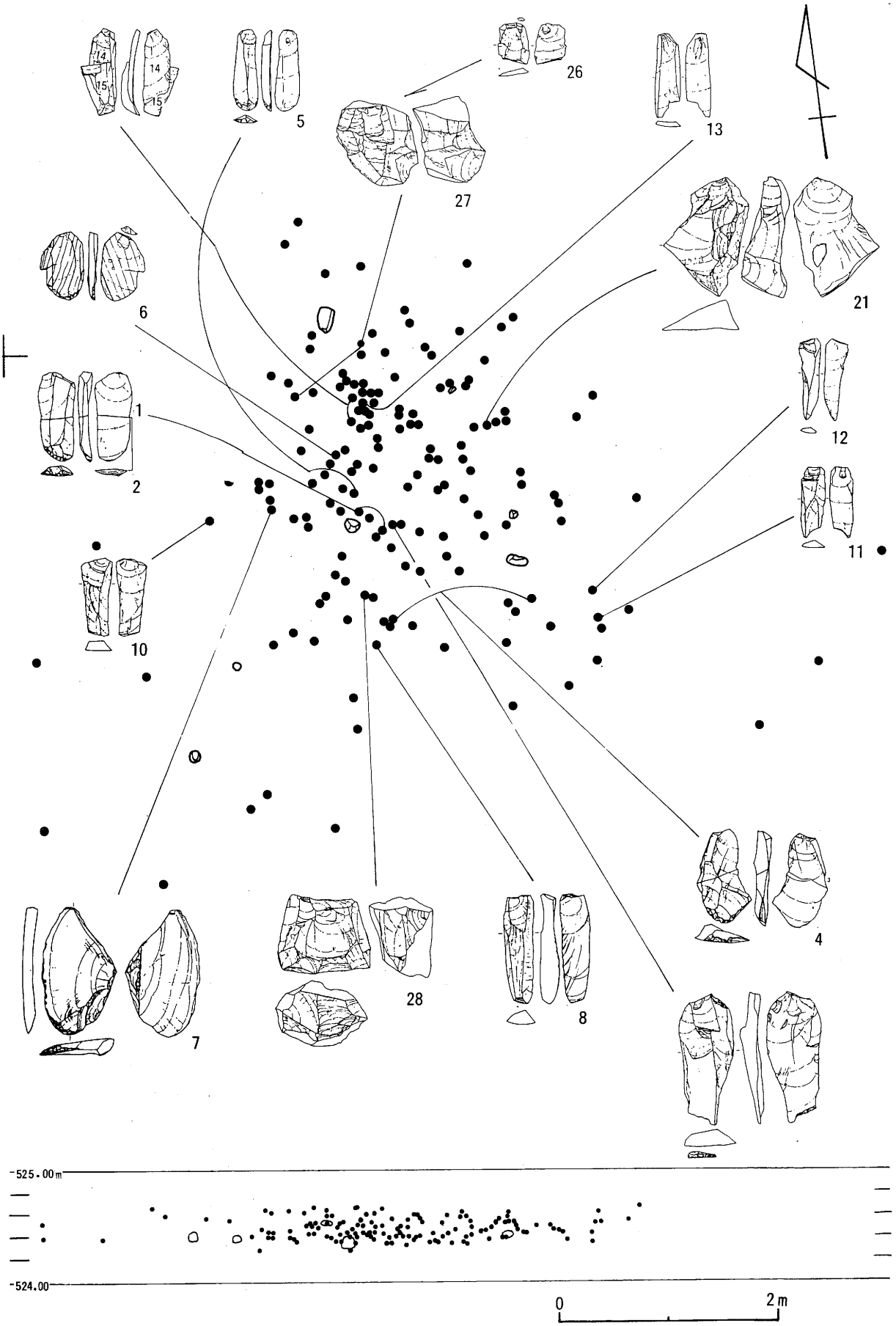


図９　第２ブロック遺物分布図　1:50（番号は石器実測図番号）

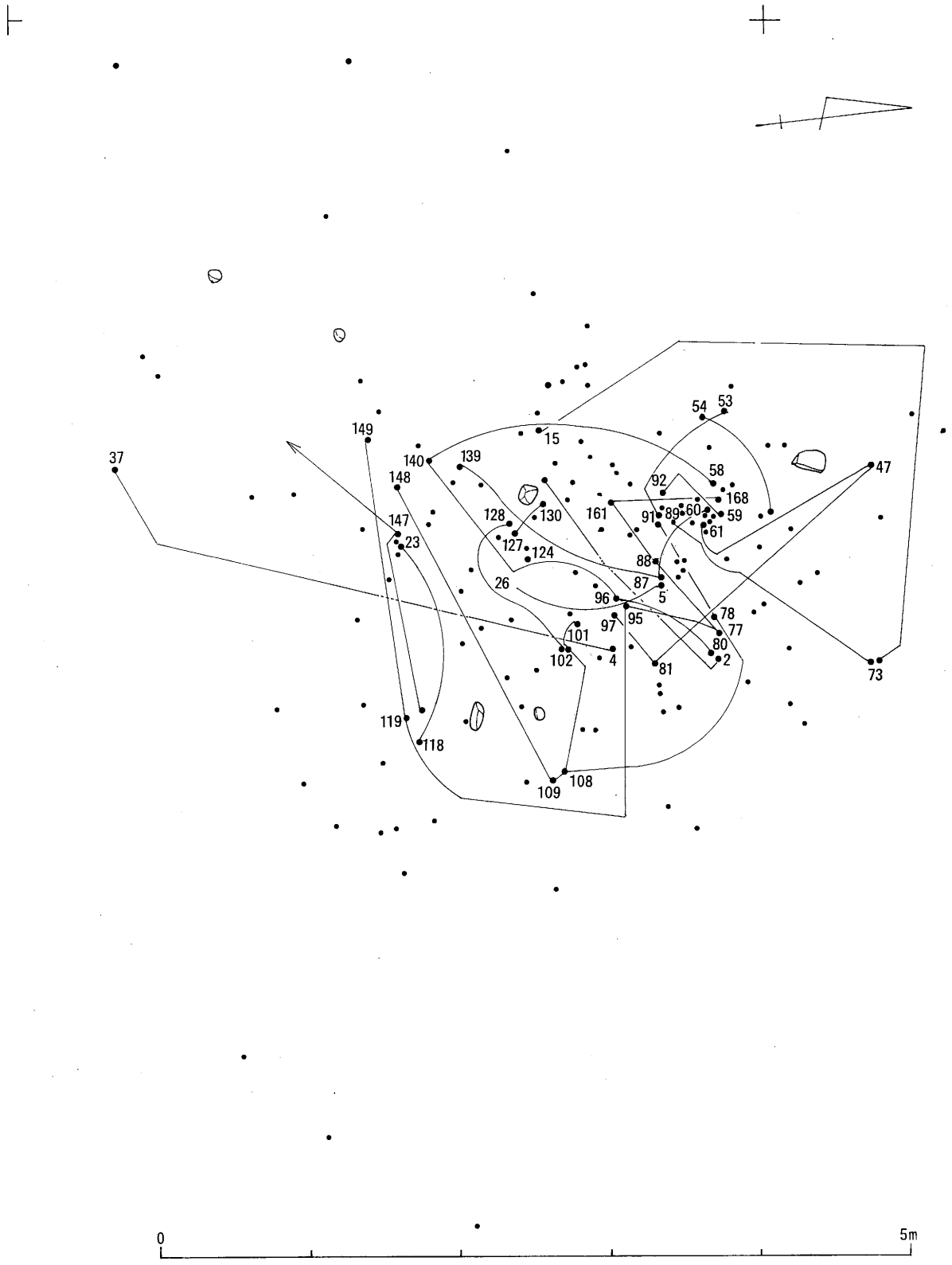


図10　第２ブロック石器接合分布図　1:40（番号は石器個体番号）

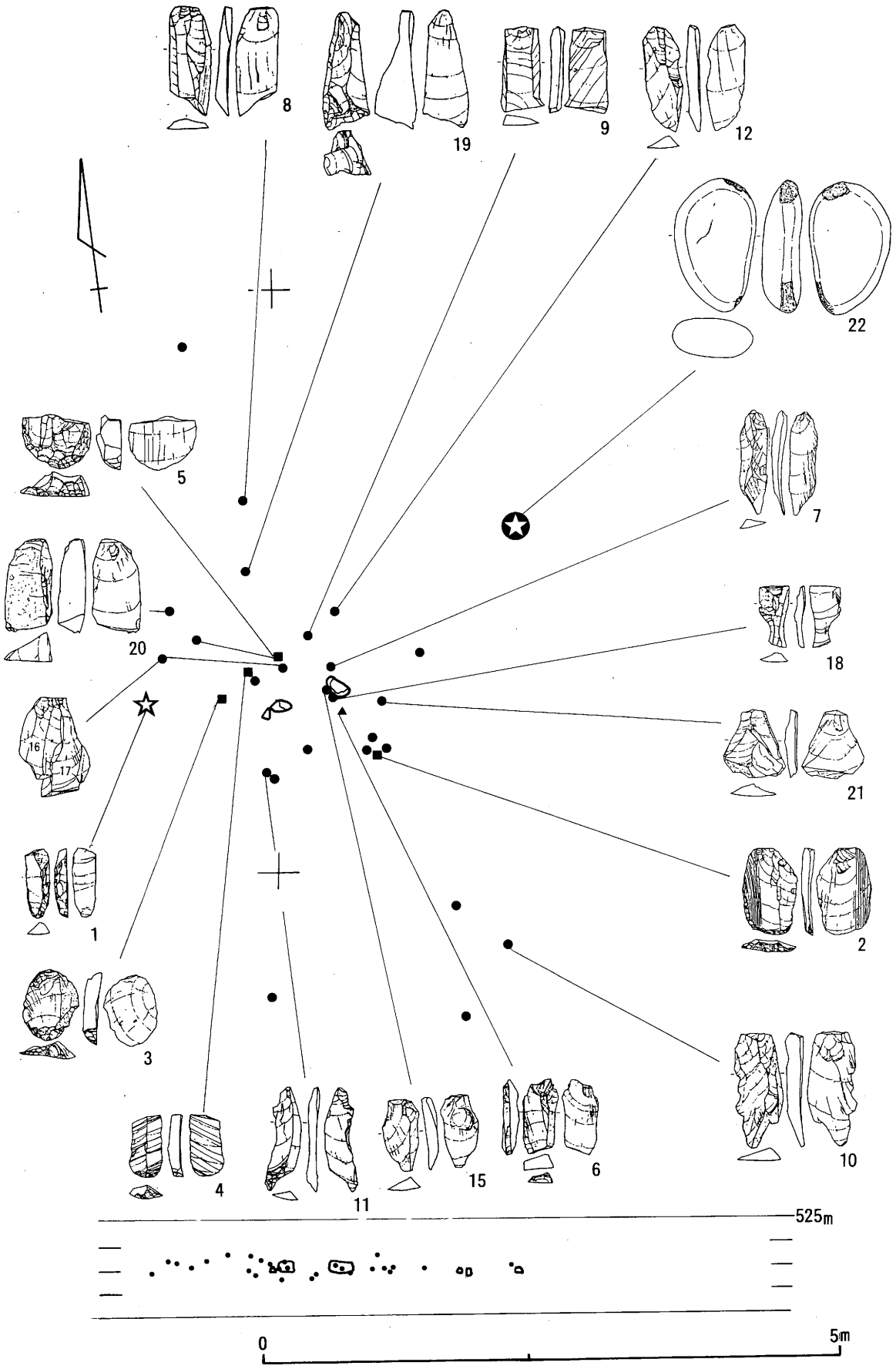


図11　第３ブロック遺物分布図　1:50（番号は石器実測図番号）

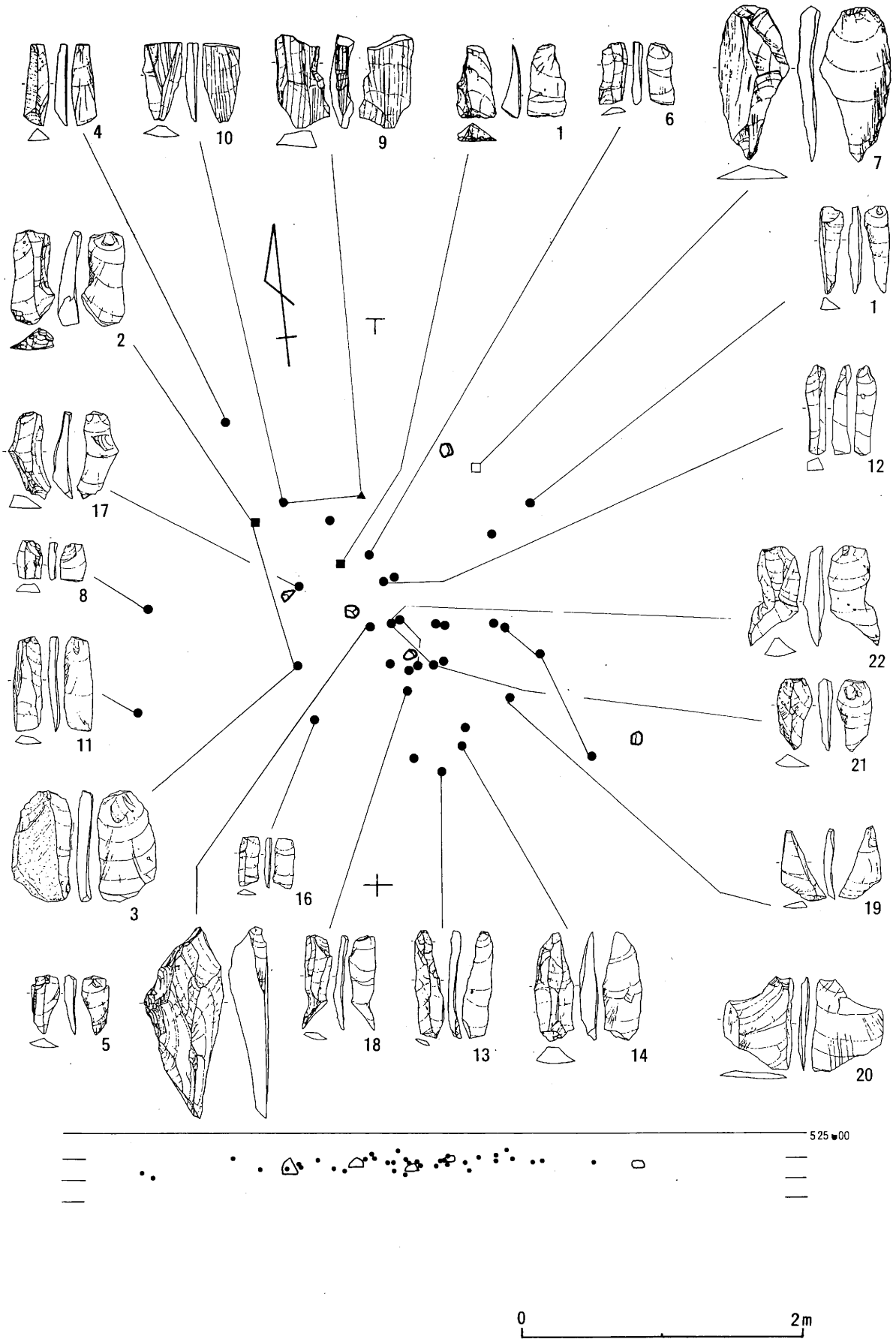


図12　第４ブロック遺物分布図　1：50　（番号は石器実測図番号）

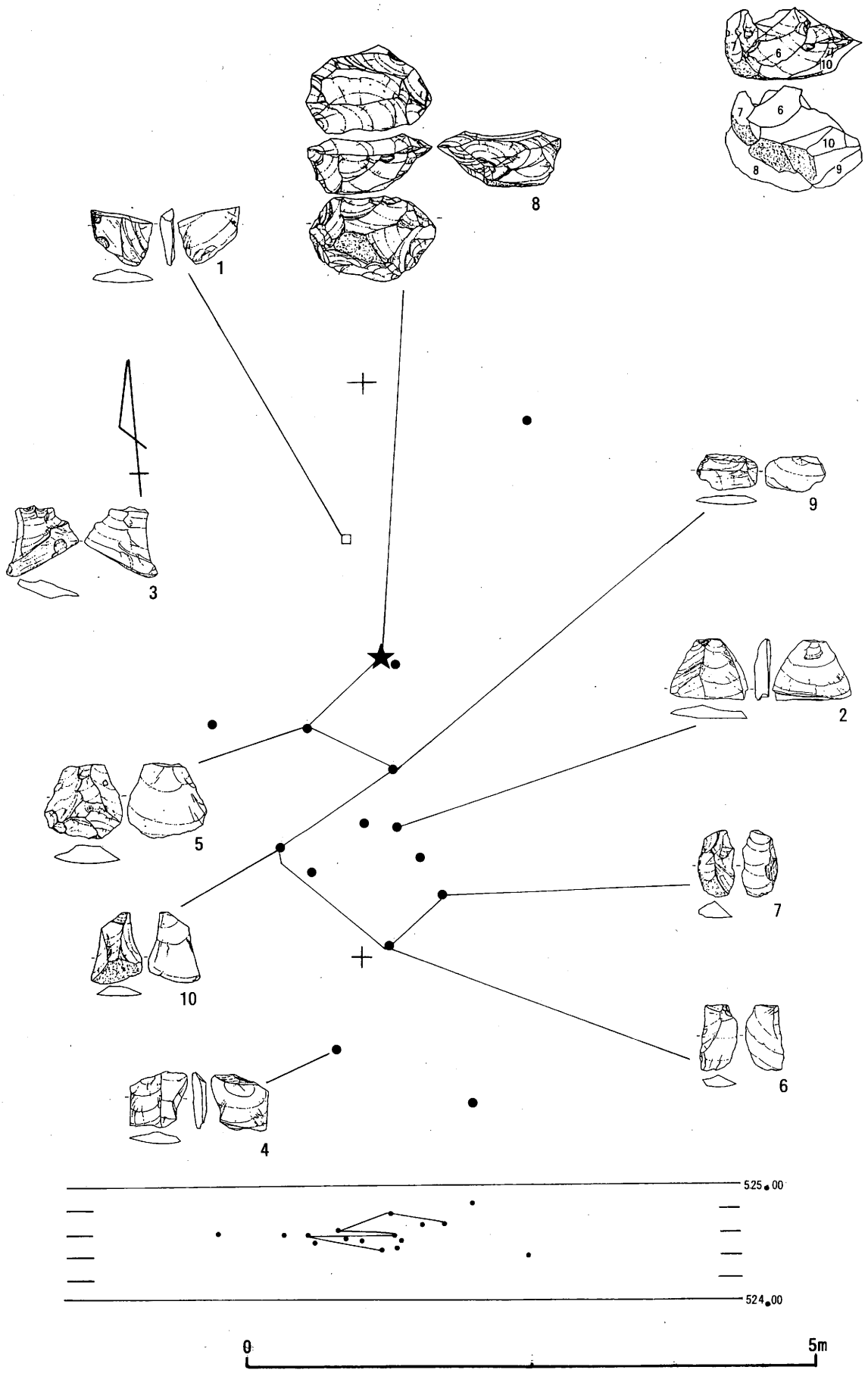


図13　第５ブロック遺物分布図　1:50（番号は石器実測図番号）

F　第5ブロック（図13）

第2ブロックの東側約7mに位置する。まばらな出土状態で、4×3mの範囲である。
石器は、1母岩の接合資料が中心で、総点数16点中5点以上が石核に接合する。

G　頁岩系石器の出土状況（図14）

客体的に出土した22点の頁岩系石器の出土状態について触れる。第1ブロックでは、二次加工の施してある石器が3点、刃器が8点の計11点出土している。ブロック内での位置は、西側にまとまる群と東側にまとまる群とがあり、他の石器集中密度とほぼ重なる。第2ブロックは、掻器・刃器各1点出土している。ブロックの端部にあり、特別な位置を占めていない。第3ブロックでは、破損したナイフ形石器と刃器各1点が出土している。ナイフ形石器はブロック端部にあり、かろうじて第3ブロックに位置するような場所であるが、刃器はブロック中央部の台石に接して出土している。第4ブロックでは削器2点、刃器5点の計7点出土している。集中することはなくまばらな出土位置である。

H　接合状況（図8・10）

接合作業は完了していないので、現在までに接合した資料のうち主要なもののみについて簡単に触れることとする。

(1)　第1ブロック

固体資料1（PL36-2）39＋43＋178＋180　サイコロ状に分割された石核で、流理組織の発達により剥離面は明確でない。側縁に自然面を残すことから単一面のみからの剥片剥離作業を行なったものと思われる。

固体資料2（PL36-3）242＋243＋245＋245＋247＋248＋249＋250＋253　ブロックの一か所にまとまって出土した資料で、分割礫がほぼ接合したものである

固体資料3（PL36-4）47＋76＋79＋182＋183＋289　石核に接合した資料である。流理組織が発達している。固体資料1・4と同一母岩の可能性がある。裏面は自然面を残し、側面には90度横から石核調整が加えられている。

固体資料4（PL36-5）24＋152　石核と剥片各1点の接合である。流理組織が発達している。剥片は先端が細くなる柳葉形を呈している。下端からの調整は認められるが、剥片剥離を行なった形跡はない。固体資料9と同一母岩の可能性がある。

(2)　第2ブロック

固体資料1（PL36-6）78＋91＋101＋102＋108＋109＋148　分割礫で、石核を2点含む接合資料である。下端部の接合資料は、白く風化した軟質の安山岩で意図的に除去したものであろう。石核は、1点刃器状剥片の接合があるが、長さ4.2cmの寸詰まりの剥片で、2・3の剥離面のみで目的となる剥片を作出した形跡はない。

固体資料2（PL36-8）58＋80＋90＋140　自然面を多く残す全長16.5cmの大型の剥片で、90＋80が一枚の剥片で、58＋140がその次に剥離された剥片である。剥離面は180度反対方向からの剥離が残り交互に剥離されたことが窺える。下端部の側縁に剥片作出面が存在するので、打面再生剥片と思われる。

固体資料3（PL36-9）95＋119＋124＋149＋161＋168＋77＋88　扁平な礫をスライス状に剥離していったもので、縦長の剥片は作出されていない。打面調整もなされておらず、上・下端交互に剥離している。

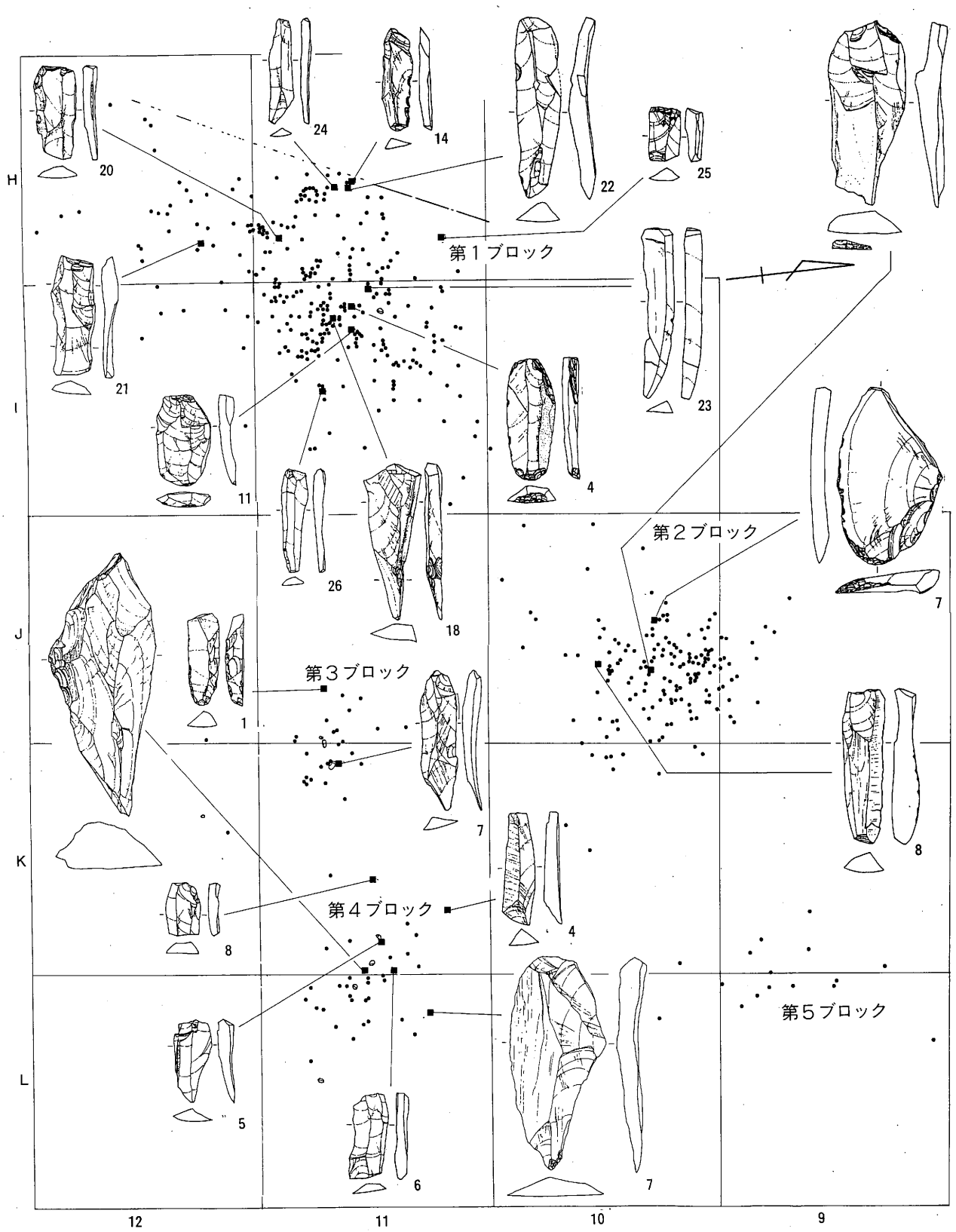


図14　頁岩系石器分布図　1:80（番号は石器実測図番号）

2　出土石器の概要

A　石器器種（図15）

本遺跡から出土した石器を、ナイフ形石器・掻器・彫器・削器・刃器・剥片・砕片・石核・礫石器・台石に分類した（図15）。これらの分類は、統一された概念ではないが、加工技術・形態上からの分類したものである。なお、刃器については、本遺跡では頁岩系の二次加工の認められない剥片を刃器としている。前項で触れてきたように、本遺跡出土の頁岩系の石材は全体の４％に相当する22点で、そのうち製品は７点であった。他の15点の頁岩系石材は、小剥離痕を有する剥片ないし形状の整った刃器状剥片（石刃と呼べるものであるが、本稿では縦長剥片の形状の整ったものを刃器状剥片と呼ぶこととする）で、石核はもちろん石器製作において生じる石核調整・打面調整剥片はまったくなかった。このことから頁岩系剥片はすべて製品として搬入されたものと考え、『刃器』として他の剥片と分離することとした。なお、安山岩製の剥片においても刃器状剥片が多く出土しているが、具体的に区分する作業を行わなかったために一括して剥片として報告する。

(1)　ナイフ形石器

本遺跡からは１点のみの出土であるため、形状・技術上の特徴について傾向を述べることができない。第３ブロックから破損品１点が出土している。石材は頁岩系で、安山岩は多量に出土したにもかかわらず本器種は１点も認められなかった。

(2)　掻　器

本遺跡の製品で中心をなす器種である。第５ブロック以外の全ブロックから２点以上出土し、特に第１ブロックからは12点出土している。石材は23点中、安山岩20点、頁岩３点である。形状は縦長剥片を基本とし、端部に厚形整形を施したエンド・スクレイパーが主体である。大きさは、長さ７cm、幅３cm、厚さ2.5cmを平均とした大型の一群（ａ）と、長さ７cm、幅２cm、厚さ２cmの細身の一群（ｂ）、長さ５cm、幅1.5cm、厚さ１cm前後のやや小型の一群（ｃ）が存在する。また、剥片の両端に刃部を設けた複刃掻器も２点出土している。

(3)　彫　器

樋状剥離の加えられた一群を彫器としたが、定型的なものはなく、やや躊躇するものが多い。第１・３・４ブロックより各１点出土している。すべて安山岩製である。

(4)　削　器

剥片の縁辺に二次加工を施したサイド・スクレイパーと呼称される石器を一括している。長さ10cm以上の大形のものが多い。形状も逆三角形をしたいわゆる尖頭状の形態をとる定型的な例も多い。第１・２・４・５ブロックより合計８点出土している。石材別では、安山岩４点、頁岩６点である。

(5)　刃　器

頁岩系の剥片を一括したものである。すべて形状の整った縦長剥片で、刃こぼれと思われる小剥離痕をとどめる資料も多い。すべて製品として使用されたものと考え、剥片とは分離している。

第５ブロック以外のすべてのブロックから合計15点出土している。

(6)　剥片・砕片

本遺跡出土石器の88％にあたる463点が出土している。すべて安山岩で、接合する資料も多い。打面調整された石核より剥離されたものがほとんどを占めるが、まれに自然面を残した打面もある。これは、石核調整・打面調整に伴う剥片であり、不定型な剥片が多い。また、刃器（石刃）とすべき剥片も多く存在

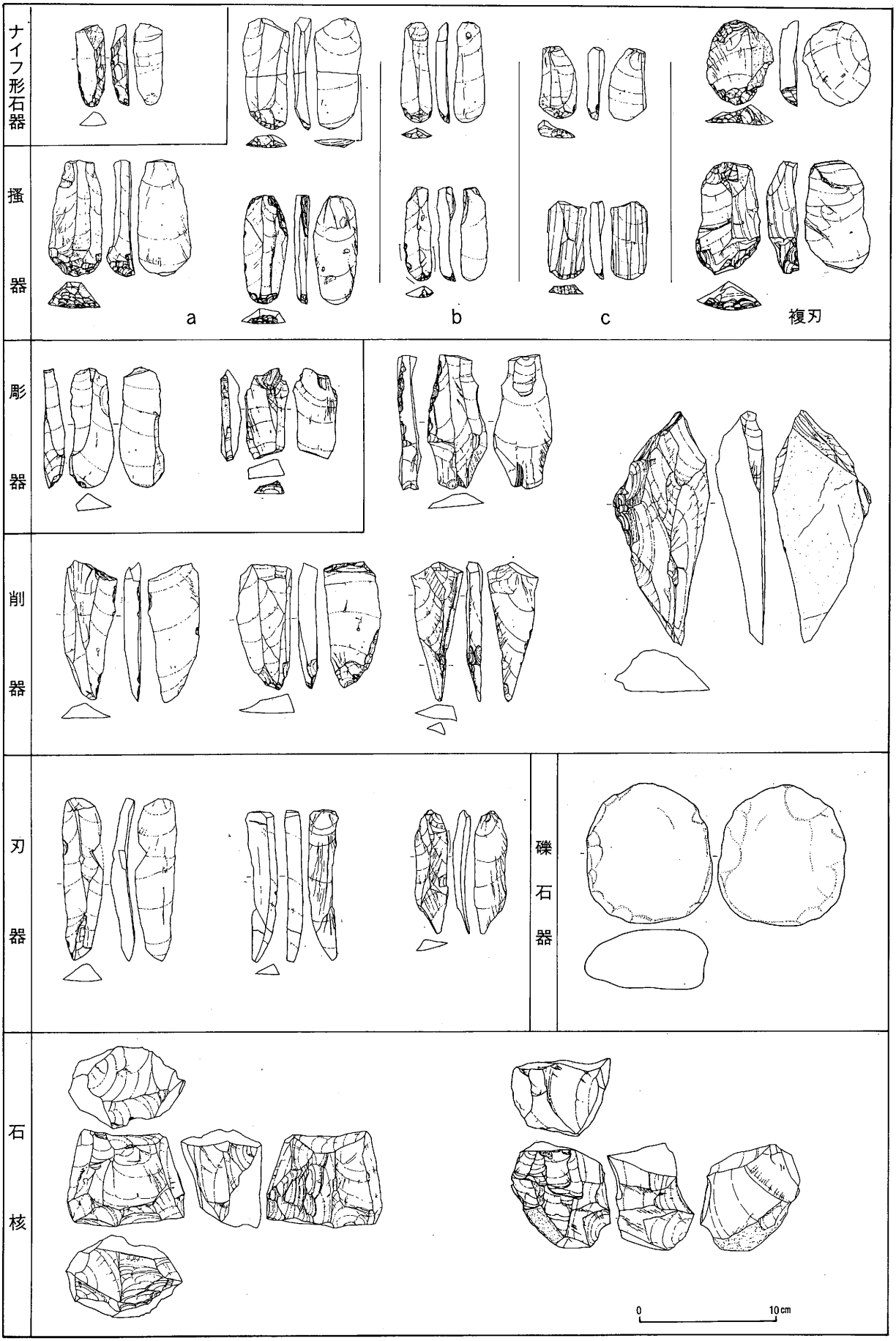


図15 石器器種 1：4

するが、安山岩については接合資料・母岩別資料を通して剥片剥離技術を究明できる可能性があり、報告段階ではこれらの作業を完結させることが不可能であったために今後の研究課題としておきたい。

(7) 石　核

石刃石核で、7点出土している。また、第1ブロックではサイコロ状になった資料が接合して石核になる資料が出てきており、最終的にはもう少し増えるかもしれない。石核に接合する剥片も多い。

(8) 礫石器

新堤遺跡と同様に、礫を使用して敲石・磨石としたものを一括した。明確な痕跡を留めないものや、2種類以上の機能の可能性があるものもあり、個別資料で検討するものとしてここでは器種としては礫石器とする。第1・3・4ブロックより計5点出土している。

(9) 台　石

人頭大の扁平な石を搬入して、台石として使用されたと考えられるものである。第1～3ブロックより各1点出土している。ブロック内でのあり方は、台石を中心として石器が分布する傾向があり、作業に伴うものであろう。

B　第1ブロック出土石器（図16～図22）

(1) 掻　器（図16～図17—13）

本ブロックからは、12点出土している。石材では10点が安山岩、2点は頁岩である。

1は縁辺がほぼ平行する縦長の刃器状剥片を素材とし、やや分厚い先端部に刃部を作出している。刃部の正面形態は円形を呈し、断面はオーバーハングしている。

2は両端に刃部を作出した複刃掻器である。基部側の刃部は全体に及んでいない。下端部の刃部はほぼ円形に作出されており、やや左刃となっている。使用のためかかなりオーバーハングしている。

3は、基部側が右からの剥離でスポール状に剥取られているが、第一次剥離面から見る限りわずかである。ほぼ円形な刃部を作出している。

4は、頁岩製のエンド・スクレイパーで、表皮を一部に残すものの、縦長の形態の整った剥片を素材としている。基部側右側縁には調整加工が加えられて形状が整えられている。刃部は、比較的幅が狭いが、細かな調整によって作出されている。

5・6は、接合資料で長さ8.4cmのエンド・スクレイパーとなったものである。接合面は、正面稜からの加撃で欠損したものであるが、意識的なものであるのかどうかはっきりしない。刃部は荒い調整加工で作出され、左側縁には細かなリタッチが認められる。

7は破損品で、端部にやや簡単に刃部が作出されている。

8は、前記掻器に比べ細身のエンド・スクレイパーで、刃部も細かな加工で作出されている。刃部側両縁辺には、小剥離痕が認められる。

9も8同様に細身のエンド・スクレイパーである。刃部は荒い剥離によって作出され、端部に細かな加工を3回施して仕上げている。10は小型のエンド・スクレイパーで、長さは5.2cmを計る。

11は、頁岩製である。基部側右側縁部に細かなリタッチが施され、刃部もきわめて細かな加工を4回ほど行って作出している。その形状から掻器としたが、刃部の加工が厚形整形とはいえず、削器としたほうが妥当かもしれない。

12は小型掻器で、ほぼ平行する刃器状剥片の端部に刃部を作出したものである。流理構造の発達した安山岩で、刃部は特に不明瞭となっている。

13は、横長の剥片を素材としたもので、正面には多くの自然面を残す。刃部は、端部に厚形整形を施し

て作出している。

以上の掻器のうち１～12は縦長の刃器状剥片であり、石刃技法によって作出された剥片である。13のみ横長剥片であるが、おそらく石核調整時に作出された調整剥片を使用したものであろう。

(2) 削　器（図17―14～図18―18）

５点出土している。

14は、頁岩製で、基部側が剥落欠損している。右側縁に不揃いな二次加工を施している。

15は、長さ9.7cmを計る縦長の刃器状剥片を素材としている。先端部は、摂理・流理構造の発達により荒れている。刃部は左側縁の基部側に作出される。

16は、基部側が数回にわたって加撃されていることから折取ったものと考えられる。形状は先端部が尖頭状となっている。二次加工は、右側縁の基部側と先端部側にそれぞれなされている。

17は、形状が16と酷似している。基部側は16よりさらに丁寧に調整加工して形状を整え、刃部は先端部に両面に加工を施し、尖頭状に仕上げている。16は素材をうまく利用して尖頭状の削器にしているのに対し、17は素材をかなり変えて16に近い形の尖頭状の削器にしている。

18も形態は尖頭状の削器である。頁岩製で、摂理面の打面から剥離しているが、やはり摂理面に添って剥離している。そのため剥片の形状は横長状の不定形な剥片となっている。二次加工は正面稜線からの加撃が側縁から加えられている。裏面側には小剥離痕が認められる。

(3) 彫　器（図18―19）

１点出土している（19)。基部側を少し欠損する。彫刻刀面は左側縁に上端および下端の両方から作出される。上端からのフルーティングは、第一次剥離面に対して鋭角になされるために鋭い刃部となっている。基部側からのファシット面は鈍角である。また、末端面には細かな加工が施されている。石材は、風化の著しい安山岩である。

(4) 刃　器（図18―20～図19―26）

頁岩系の刃器状剥片であり、７点出土している。

20は先端部を欠失するが、縁辺が平行する整った剥片である。基部側に簡単なリタッチが認められる。

21は、基部が欠失する。３回ほどの剥離が観察されるため、折取ったのかもしれない。22は、11.8cmを計る大形の剥片で、縁辺には小剥離痕が認められる。21も細身の縦長剥片である。

24は、やや黒色を呈する頁岩系の石材で、裏面基部側一部は剥落している。また、先端部も欠失する。

25・26は先端部が欠失している。

(5) 剥　片（図19―27～図22）

前項の刃器と同様に、形状の整った剥片も多い。27は両縁辺が平行する刃器状剥片で、全長は10.6cmを計る。基部の表裏に加工を施してバルブを除去するとともに、ノッチ状の形状を呈している。18～38も比較的整った形状の刃器状剥片で、企画的な剥片といえる。32・33・35・36は流理構造の発達した安山岩で、剥離面が不明瞭となっている。41～43は接合資料である。図22―１・２は、第１ブロック・第２ブロックの接合で、両設打面の石核から交互に剥離されている。

(6) 礫石器（図22―44）

２点出土しているが、１点図示した。白っぽい砂岩系の石材で、拳大の扁平な礫である。縁辺周囲に凹凸があり、部分的に　打痕、すり面がある。また、全体的に丸みを帯びており、摩耗している。

(7) 台　石（ＰＬ35―４）

20×15cm、厚さ５cmの扁平な台石である。敲打痕などは特に観察されないが、台石上は使用によるためか平坦な面となっている。

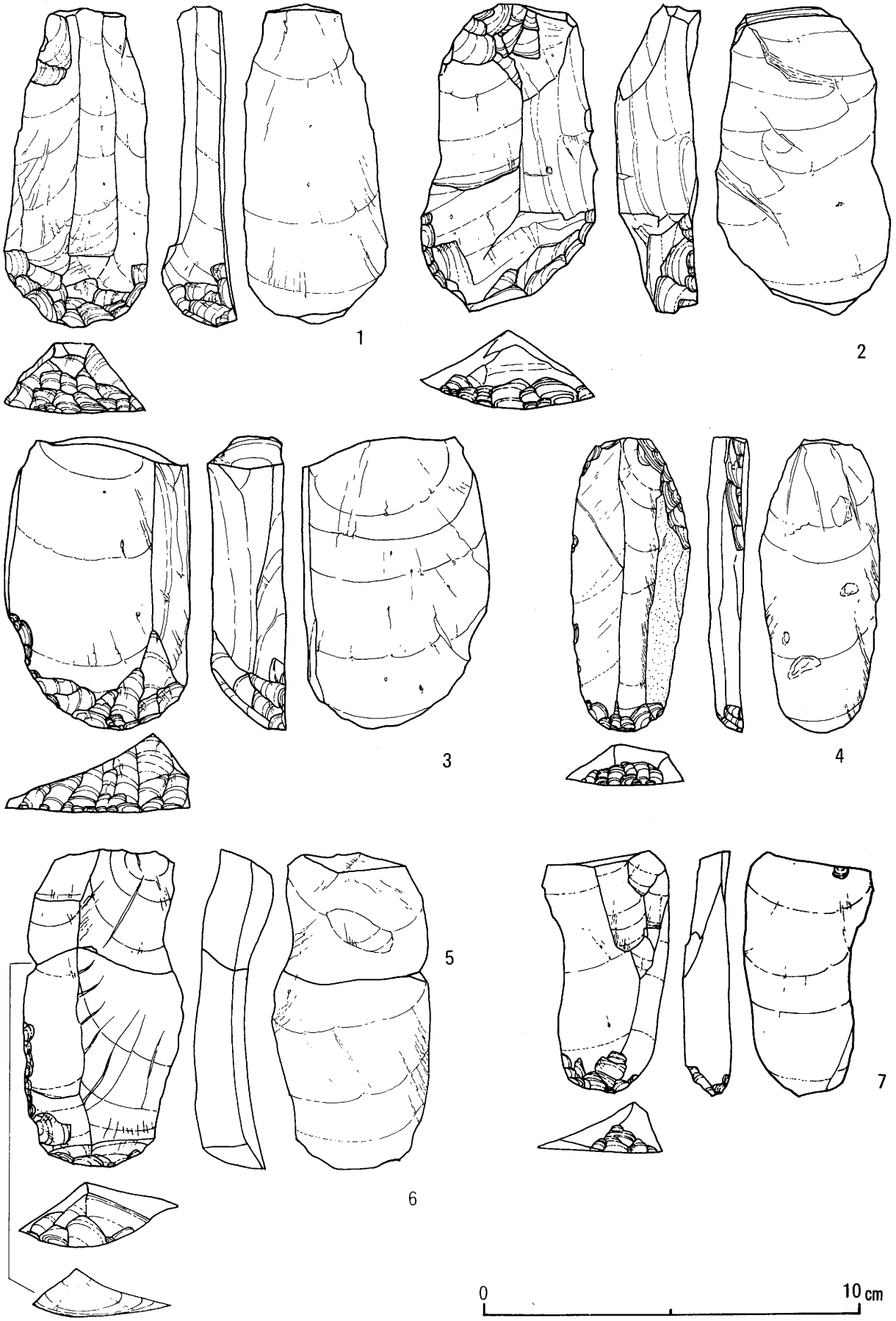


図16　第1ブロック出土石器 1　　2：3

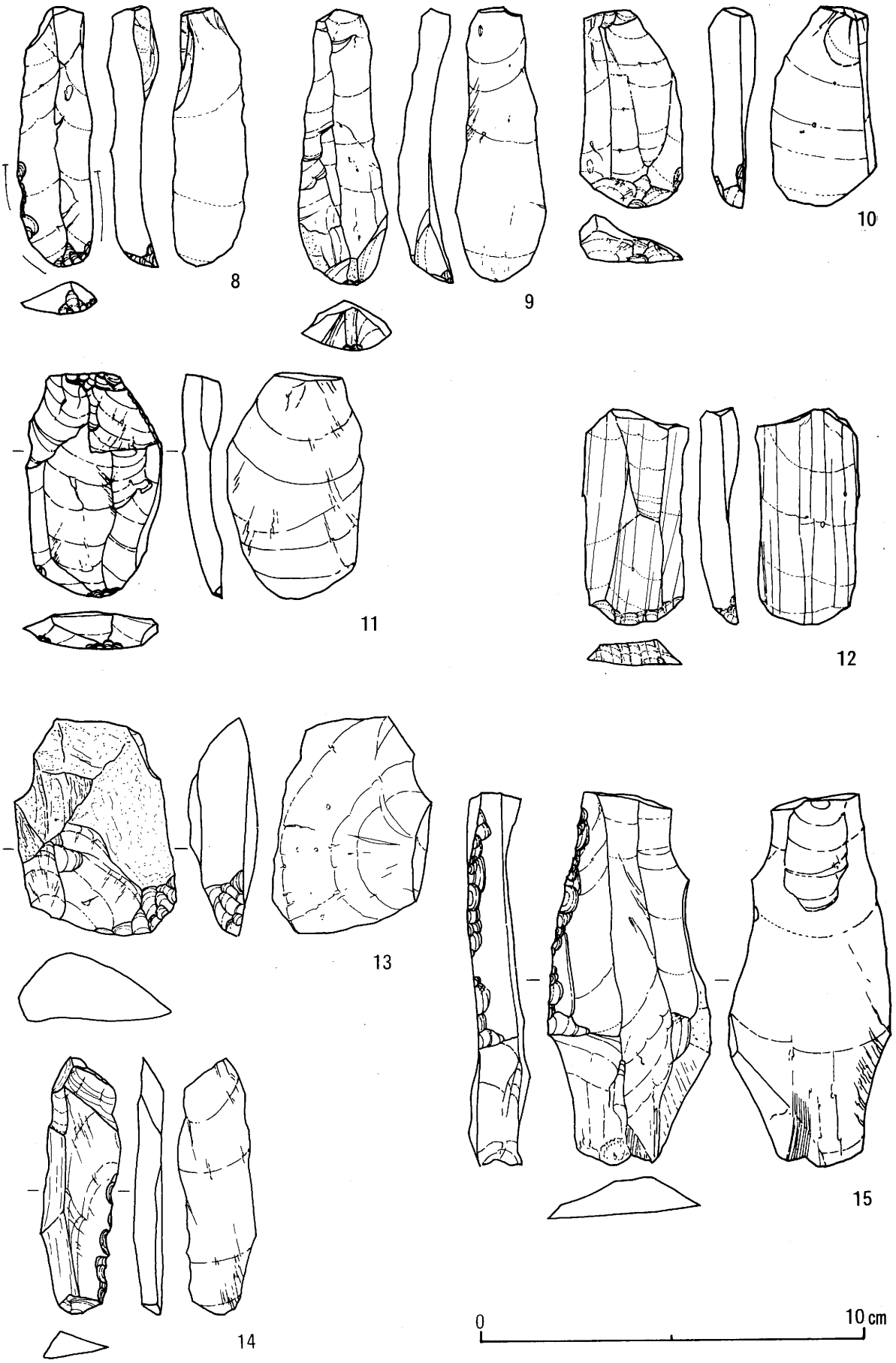


図17　第１ブロック出土石器 2　　2：3

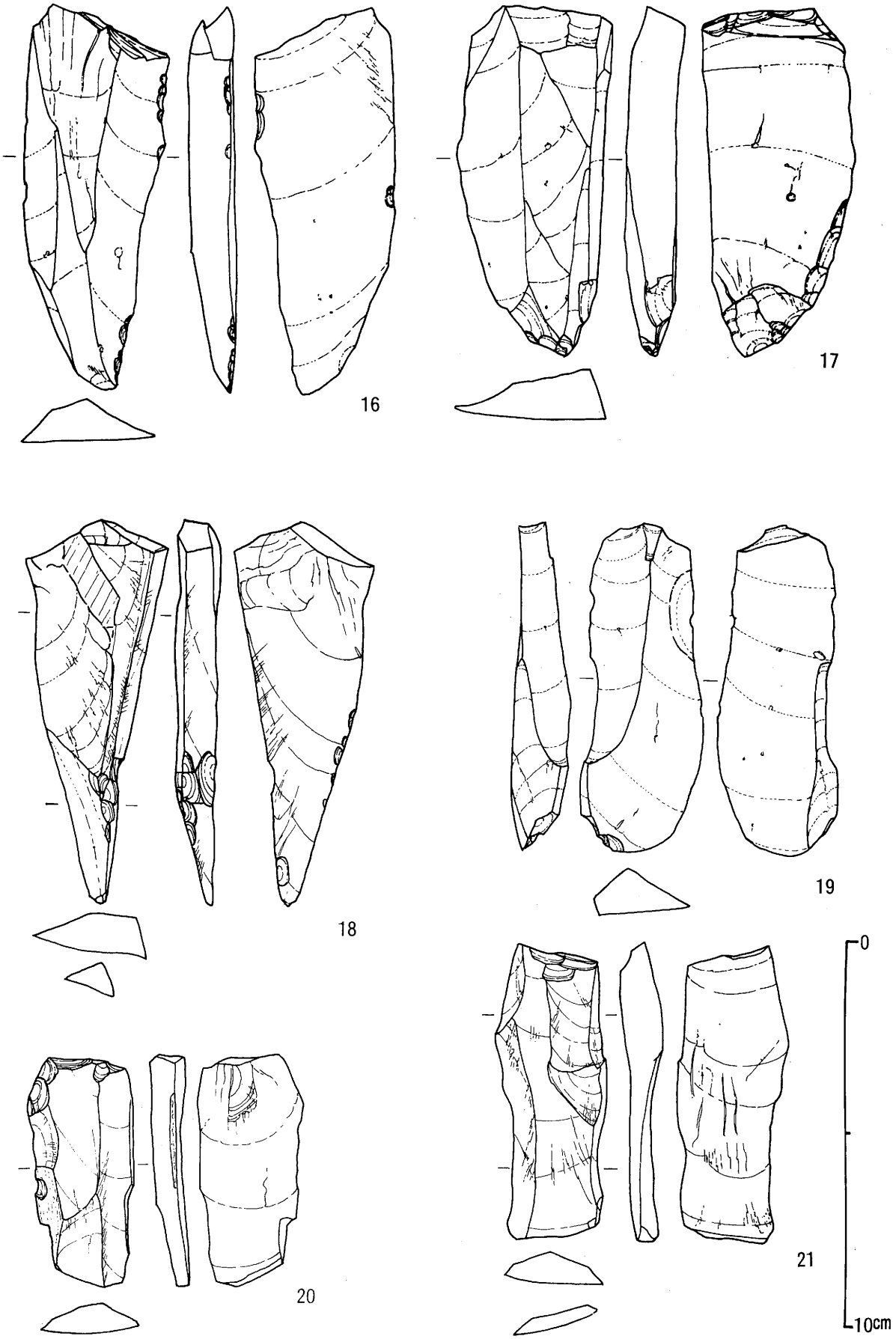


図18　第１ブロック出土石器 3　　2：3

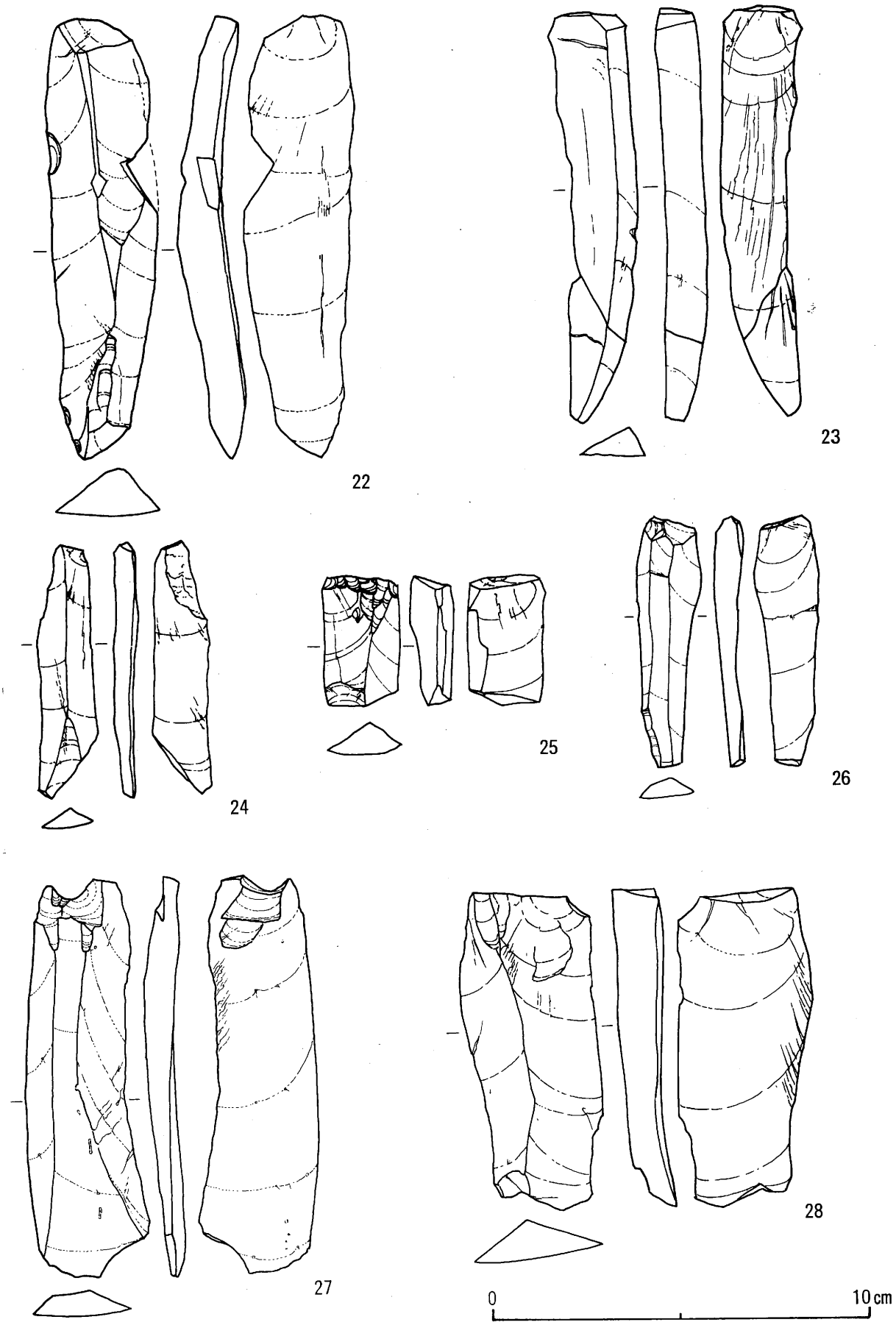


図19　第１ブロック出土石器 4　　2：3

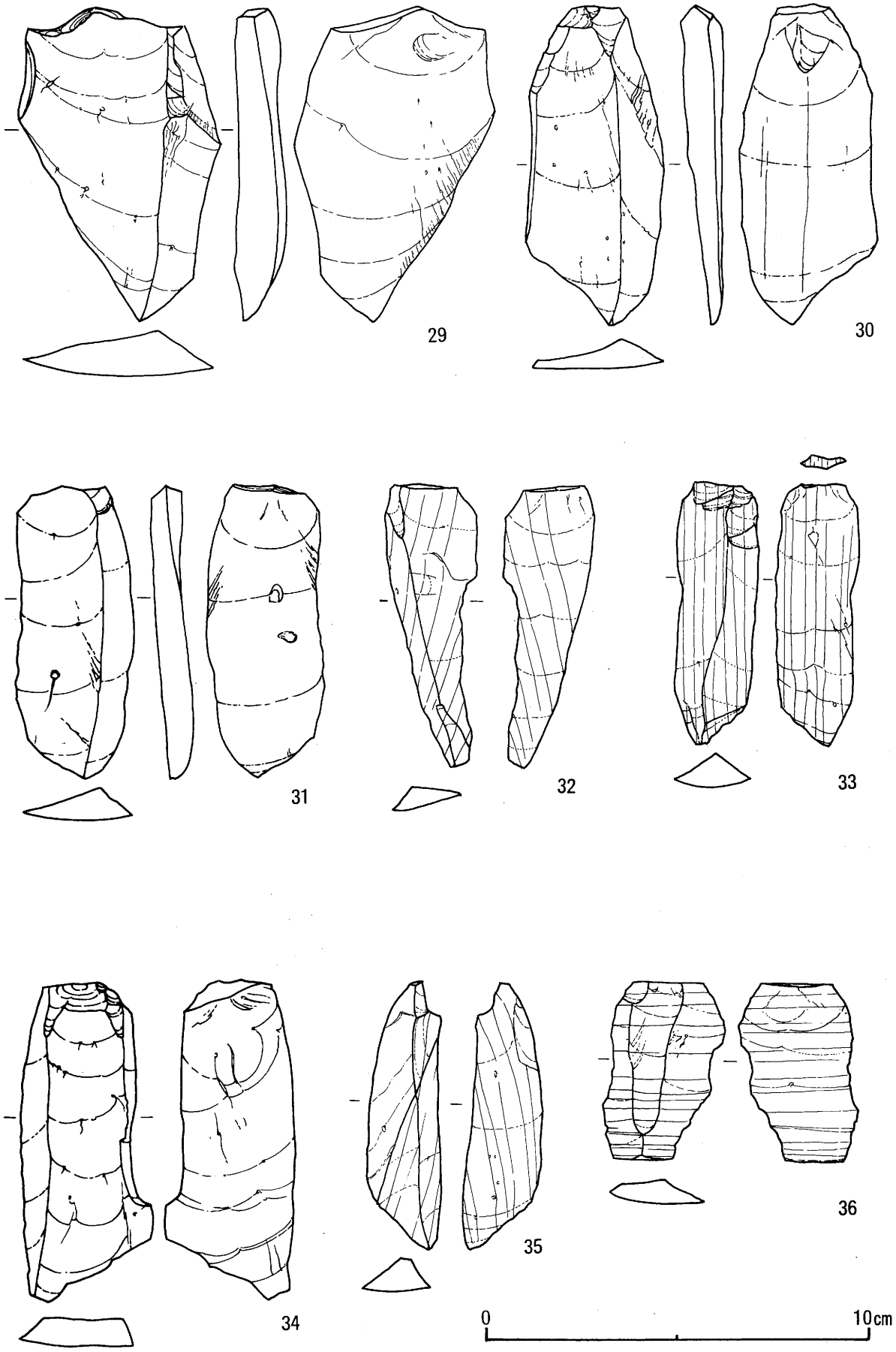


図20　第１ブロック出土石器 5　　2：3

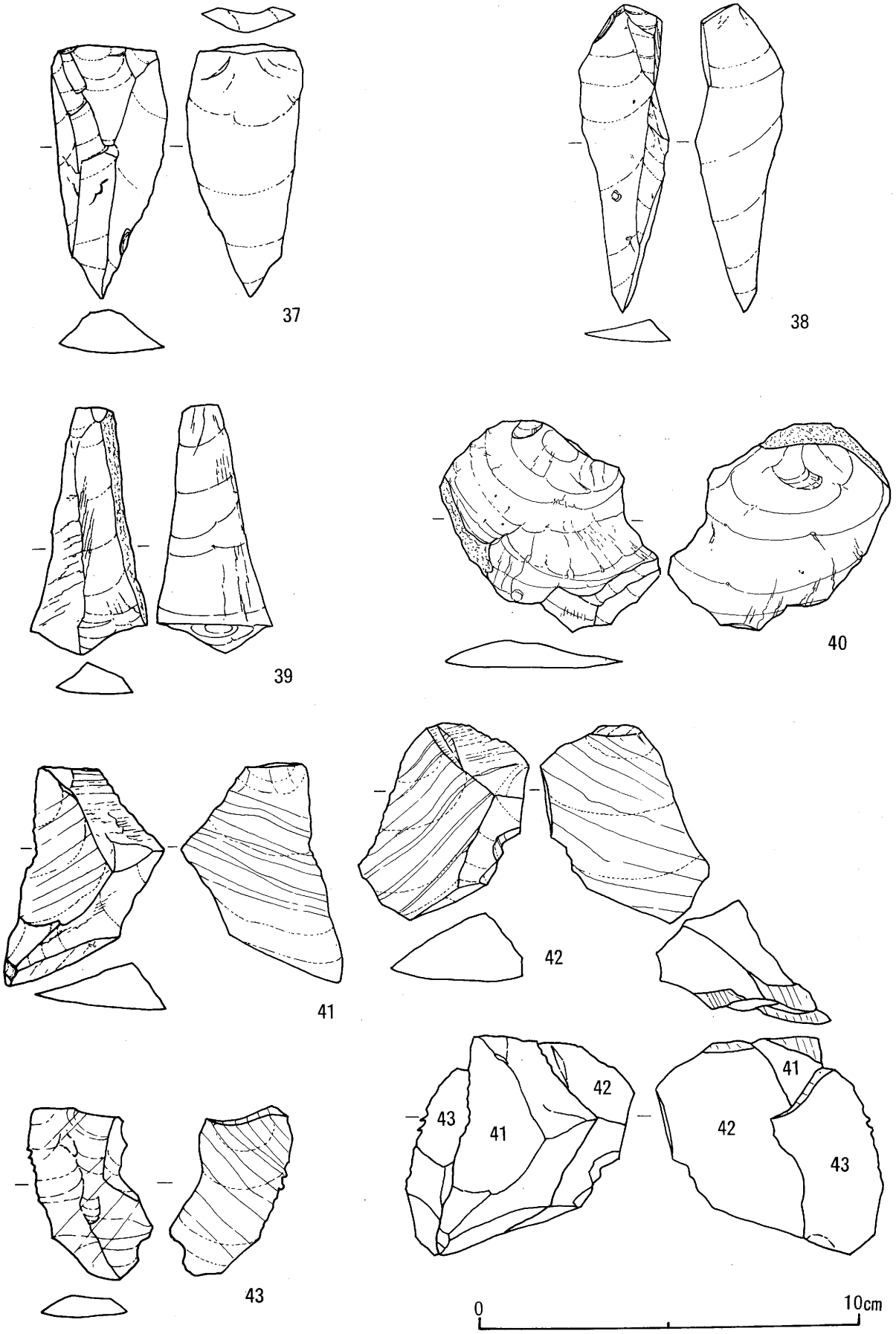


図21　第１ブロック出土石器 6　　2：3

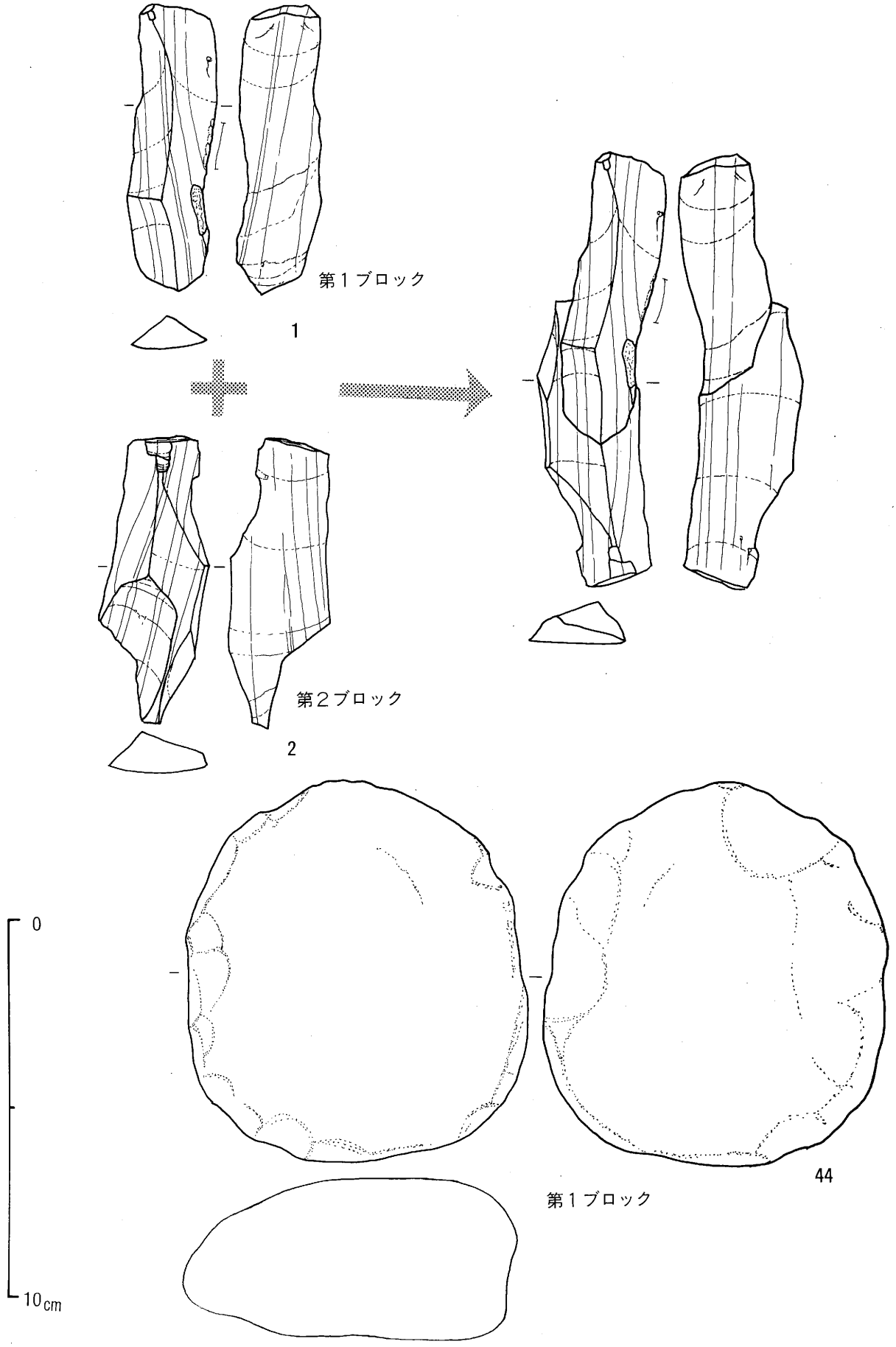


図22　第１・２ブロック間接合資料・台石　２：３

C　第2ブロック（図23～図27）

(1) 掻　器（図23）

5点出土している。

1・2は、折損した剥片が接合したもので、形状の整った刃器状剥片を素材としている。刃部は、やや右傾している。

3・4も同様に折損したものが接合しているが、打面調整のなされていない石核から剥離されている。形状は不定形で、正面側には上下両面からの剥離面が存在している。刃部は、下端部に浅めの剥離で作出されている。右側刃部は欠損している。

5は細身のエンド・スクレイパーで、先端部に刃部が作出される。

6は、流理構造の発達した安山岩製で、先端部の全周に刃部が作出されている。

7は、頁岩製の大形品である。第1次剥離面は、摂理面で段差をもって剥離されている。やや突出した基部側は裏面からの厚形整形によって掻器的な刃部を形成する。正面側は、横長剥片先端部には細かなリタッチが認められ、側縁部に刃部が形成されている。横長の削器とも考えられるが、図下端部の部分的な厚形整形により掻器としておく。

(2) 削　器（図25—20）

頁岩製の大形の製品である。正面に自然面を多く残している。刃部は先端部の第一次剥離面側に正面からの加工によって作出されている。また、基部側には調整加工が加えられている。

(3) 刃　器（図24—8）

1点出土している。正面右側は自然面と思われる。形状は整っている打面は細かに調整されている。また、第一次剥離面が正面側に達しており、石核に急角度で打撃を加えたために抜け切れなかった結果であろう。

(4) 剥　片（図24—9～図26）

本ブロックでも出土した剥片は多いが、一部のみを掲載した。第1ブロックのように大形の剥片は少ないが、中形の形状の整った刃器状剥片が多く出土している。細かく整理・分類していないが、9・12例のように端部が尖頭状になる資料と、11・13・14のように薄く幅広となる資料がある。いずれも打面調整が行われている。18・19は接合資料であるが、バルバースカーが折損面には入り込むようになっており、剥片剥離時に下端に突き抜ける営力と折損面に突き抜ける力の両方へ分散した結果と思われ、製作時に既に折損したものと思われる。21は重量のある大形品で、石核の打面再生に伴う剥片であると思われる。正面には打面調整の剥離面があり、図右側縁には2回の剥片剥離が行われた面が存在している。22～25は接合資料で、やはり打面再生剥片と考えられる。

(5) 石　核（図27）

3点出土しているが、2点を図示した。

27は、裏面の状態から大きな原石を分割した石核と思われる。下部に自然面を残している。剥片剥離はもっぱら正面に限られ、接合した26例のように小形の剥片を作出している。側面は石核調整剥離面をとどめている。

28は、幅広の長方体を呈する。上・下両設打面を有しているが、下端からは企画的な剥片を作出した形跡は伺えない。

もう1点は、第2ブロック固体資料1の資料で、前記してある。

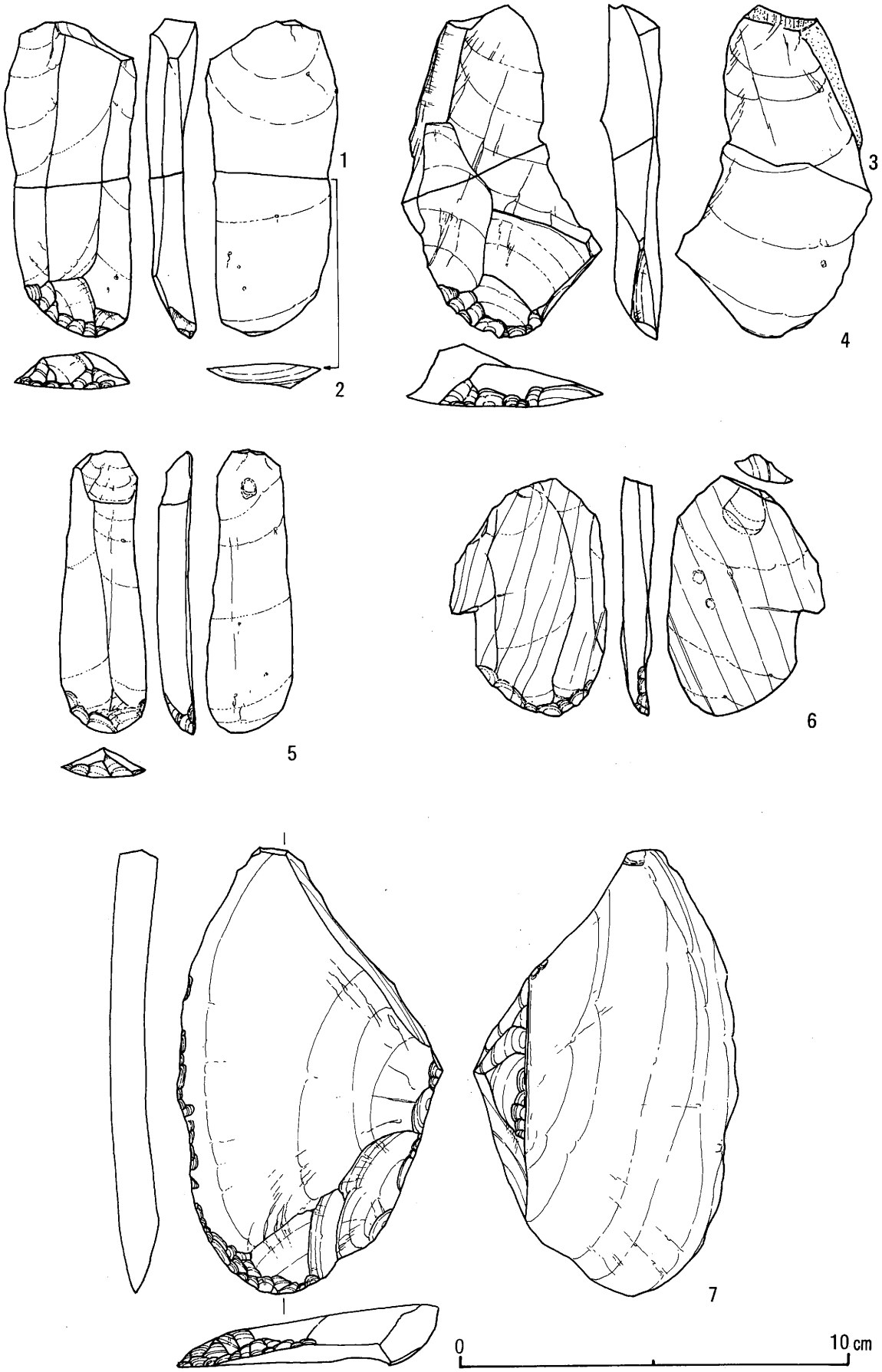


図23　第２ブロック出土石器 1　　2：3

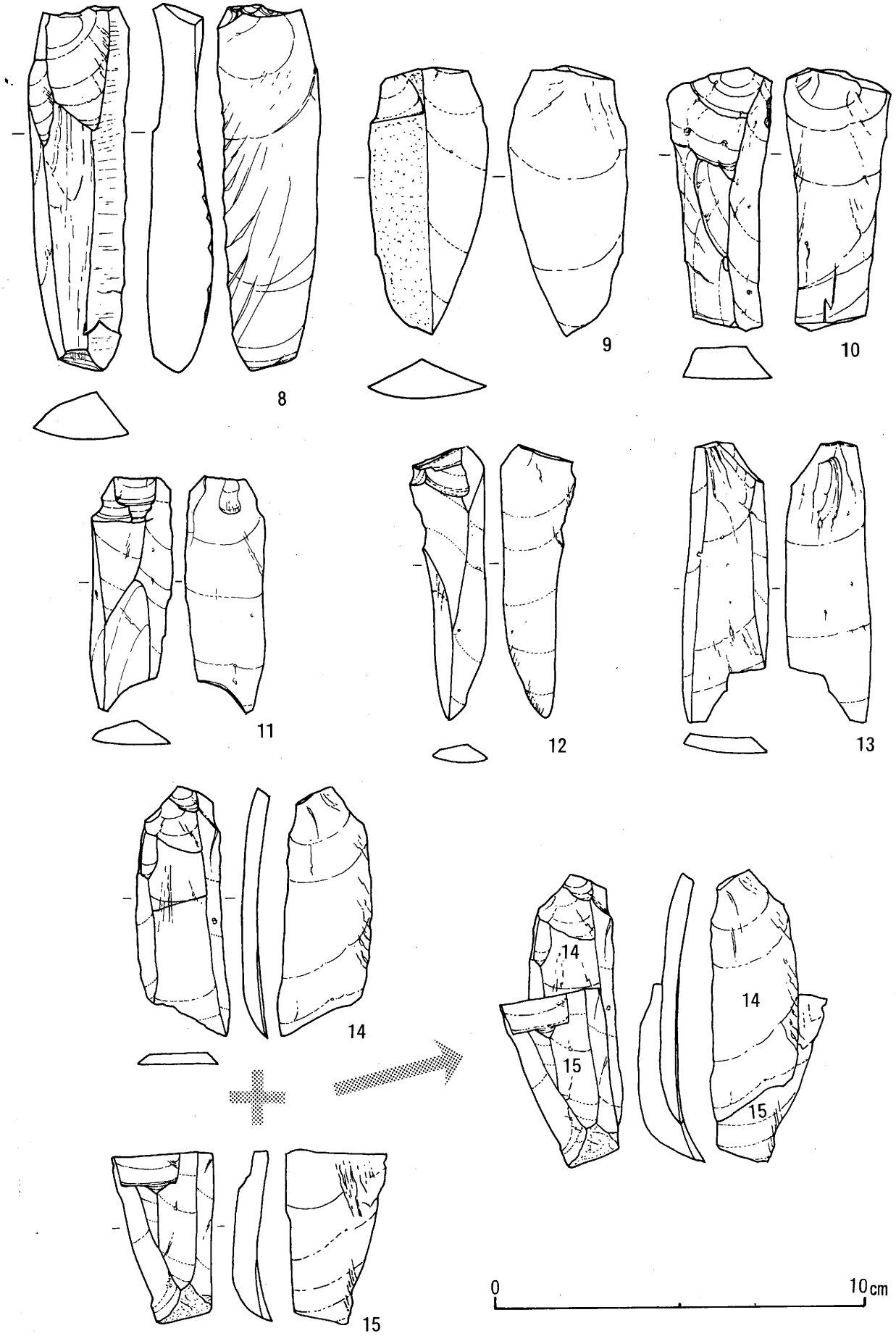


図24　第２ブロック出土石器 2　　2：3

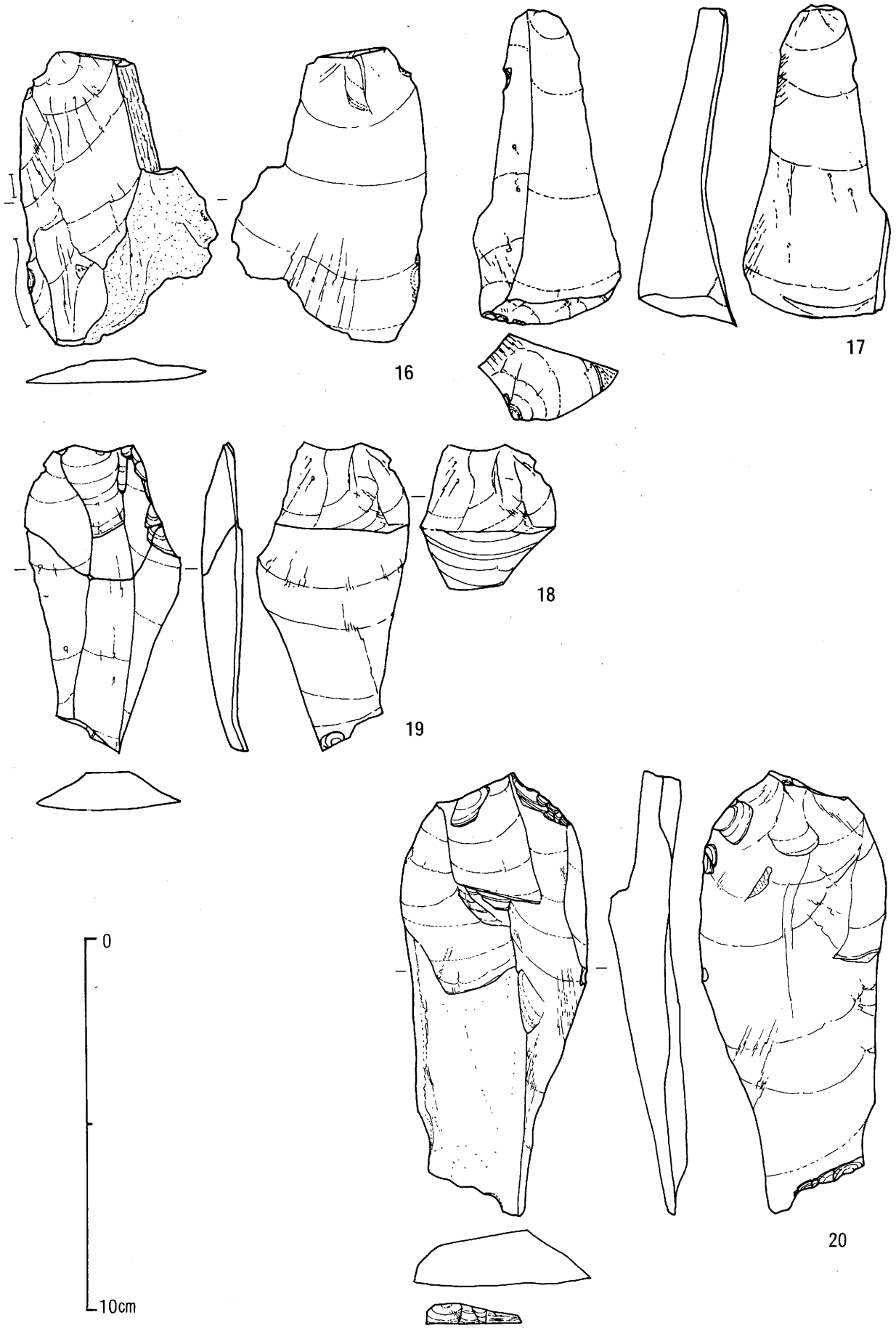


図25　第２ブロック出土石器 3　　2：3

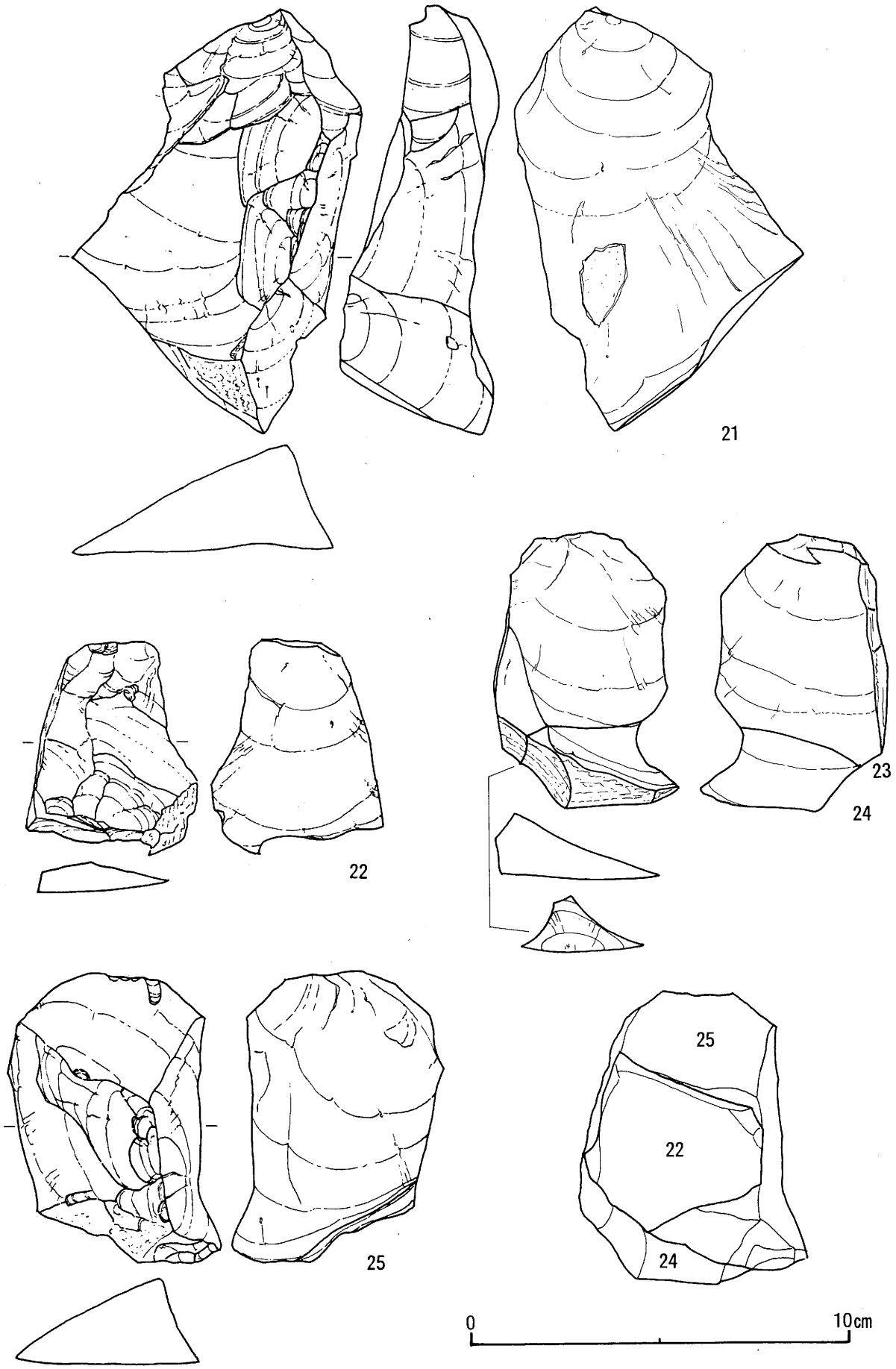


図26　第２ブロック出土石器 4　　2：3

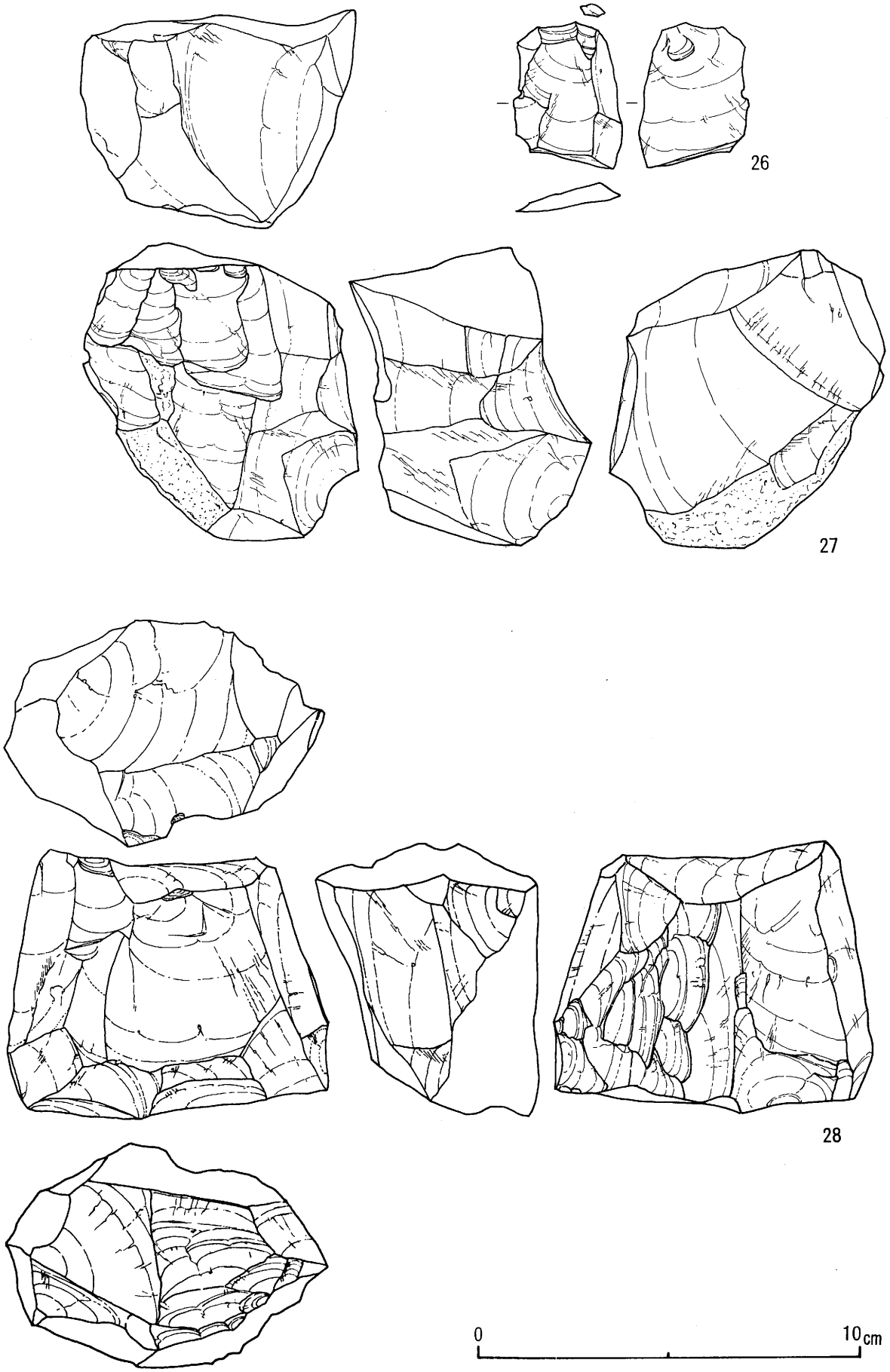


図27　第２ブロック出土石器 5　　2：3

D　第3ブロック（図28～図37）

(1)　ナイフ形石器（図28―1）

珪質頁岩製で、胴中央部より先端部を欠く。第一次剥離面の下端部を基部として、基部周辺から左側縁の部分にブランティングを施している。正面には稜部より調整加工が施されている。また、正面の先端側には摂理面のために剥落状になっている部分もある。

(2)　掻　器（図28―2～5）

4点出土している。

2は、形状の整った剥片を素材とし、端部を中心として刃部が作出されている。緻密な安山岩であるが、一部流理構造が発達している。

3は、横長の剥片を素材とし、その両端部に刃部を作出したいわゆる複刃掻器である。打面側正面に自然面を残している。

4は、やや小形のエンド・スクレイパーである。基部側を少し欠失する。二次加工は先端部のみに行われ、比較的簡単な加工を施している。5は、基部側が欠失するエンド・スクレイパーで、刃部形態は円形を呈す。刃部は急斜度の加工が行われている。

(3)　彫　器（図28―6）

1点出土している。縦長剥片の下端を折取り、左側縁部の上下両端からフルーティングが加えられている。いずれも形状が大きく変化するほどの剥離でない。中央部には加工が届かず自然面を残しているが、浅い剥離であることと考えると、自然面除去を目的とした加工であるのかもしれない。

(4)　刃　器（図28―7）

1点出土している。整った形状を呈し、正面右側縁基部側には、刃こぼれと思われる小剥離痕をとどめている。頁岩製。

(5)　剥　片（図29～図31―21）

剥片の大部分を図化している。7cm以上の中形から大形の剥片が多い。8～10・12・16・17は形状の整った刃器状剥片である。16・17は接合している。19は、石核の下端部まで突き抜けたもので、両設打面の石核であったと思われる。20は石核調整剥片であろう。21は、打面調整に伴う剥片かもしれない。

(6)　礫石器（図31―22）

拳大程度の扁平な礫を使用している。両端面に敲打状の潰れ痕が認められる。敲石の機能を有したものと思われる。

E　第4ブロック（図32～図37）

(1)　掻　器（図31―1・2）

2点出土している。

1は、基部側が薄く先端部が分厚くなっている剥片を素材とし、その先端部にほぼ直線的な刃部を作出している。なお、左側縁部には調整加工が加えられて整形されている。

2は、分厚い縦長剥片を素材とし、その先端部に刃部が作出されている。正面側の稜線から大きな加工を加えておおよその形状を作り、のち裏面側から特に左側に刃部を作出している。

(2)　削　器（図33―7・図36―24・図37―26）

7は、長さ13.8cmを計る大形品である。正面側に自然面を多く残している。二次加工は鋭い先端部に集中して施され、裏面側はやや不規則な二次加工が右側縁に施されている。

24は、重量のある剥片で、正面左側縁に二次加工が加えられている。

26は17cmを計るさらに大形品である。裏面側に自然面を残し、第一次剥離面を正面として加工が施される。素材は横長剥片で、基部側に面的加工を施しており、片面加工の尖頭器にも似た形状を呈する。上・下端部には、それぞれ樋状剥離様の加工によって尖頭状に仕上げている。削器として分類したが、尖頭状石器としておくのが妥当かもしれない。

(3) 彫　器（図33―９）

分厚い剥片の下端部を折取り、その右端部よりフルーティングが加えられている。基部側裏面は、左側縁から、１回の平坦な剥離を施してやや器肉を薄くしている。

(4) 刃　器（図32―４～６・図33―８）

４点出土している。いずれも打面調整がなされている剥片で、形状が整っている。８のみ下端部を欠失する。なお、５～８は黄褐色を呈したやや軟質の頁岩で、同一母岩の可能性がある。

(5) 剥　片（図33―10～図36―25）

大半の資料を図化した。10は彫器と接合した剥片である。流理構造により剥離面が不明瞭となっている。11は、縁辺が平行する刃器状剥片で、正面側には180度反対方向からの剥離面が観察される。12は細身であるが、断面台形状のやや角張った剥片である。13は、下端に自然面を少し残している。石核の末端面と思われる。打面は小さい。14は、多方向からの剥離が観察される。18は、正面先端部の稜部に調整痕が認められる。19～22はやや不定形な剥片である。21・22は接合する。23～25も接合資料である。24は大きな石核から剥離された剥片で、その後23・15が剥離される。いずれも24が剥離された第一次剥離面の下端部から、23、15と順次剥離される。24の正面側は、多方向から加工が加えられ、特に左の側縁部は刃部作出を目的とした二次加工が加えられている。削器としての機能が考えられる。23・24はその調整加工に伴う剥片であると考えられる。

F　第５ブロック（図38～図40）

(1) 削　器（図38―１）

基部側を欠損する。正面左側縁に細かなリタッチが施されている。

(2) 剥　片（図38―２～図39）

２は、大形の刃器状剥片と思われるが先端部の大半を欠失する。３は、自然面を残す不定形な剥片である。４も先端部を欠失する。５・６・７・９・10は、石核８に接合した剥片である。5は打面再生剥片で、正面には多方向からの剥離面が存在している。６・７は５の打面再生剥片が作出される以前に作出されたもので、いずれも表面に近く、石核調整剥片といえる。10・９は、６・７の剥片と反対方向から作出されたもので、まず10が剥離され、90度横から９の横長剥片が剥離されている。

(3) 石　核（図39―８）

広い打面を有する、円錐形の石核である。下端部に自然面を残し、全周に剥片剥離面をとどめている。前記剥片の接合から、ほとんど目的的な剥片剥離が行われていない。剥片はいずれも不定形な剥片であり、企画的な刃器の作出はない。

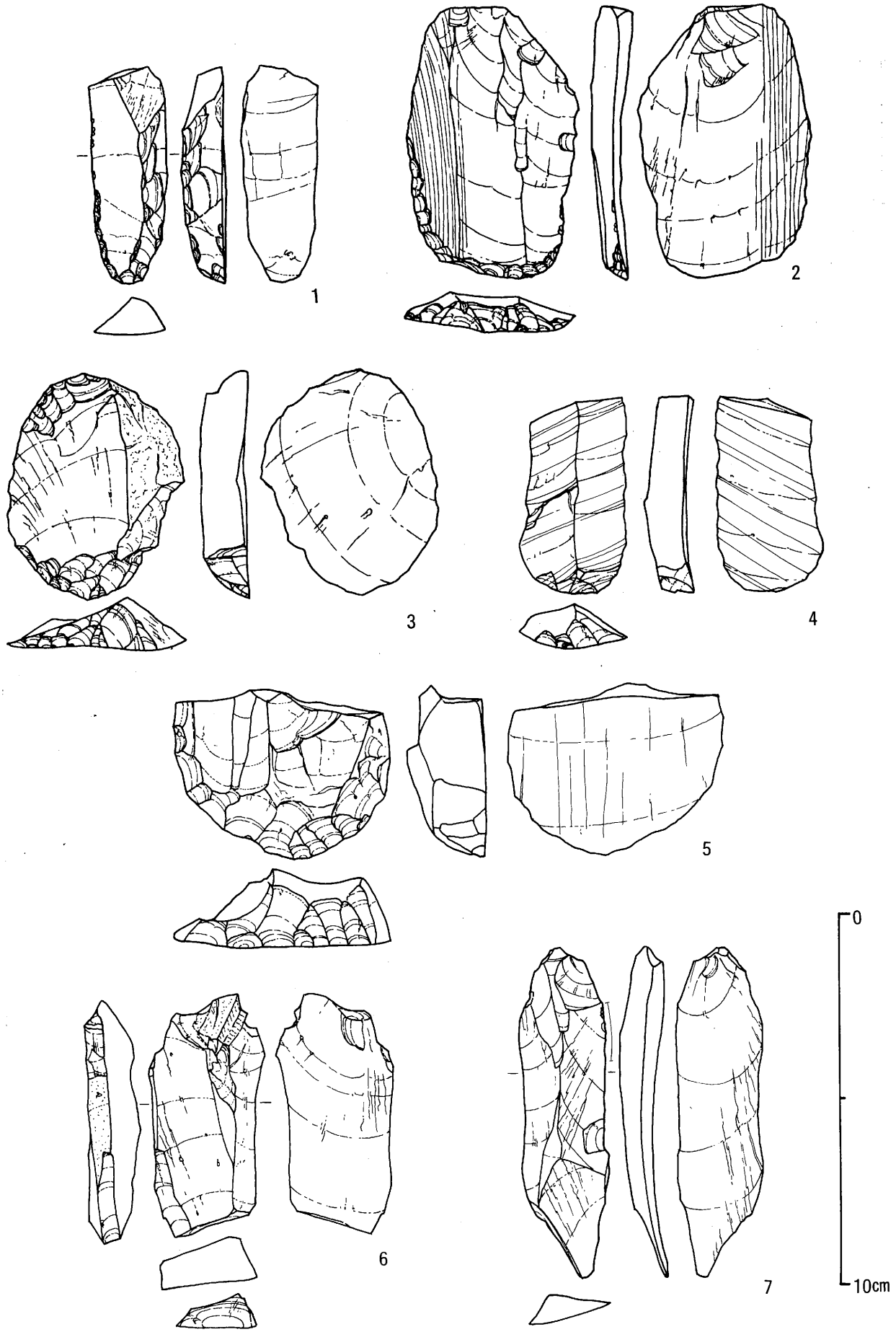


図28　第３ブロック出土石器 1　　2：2

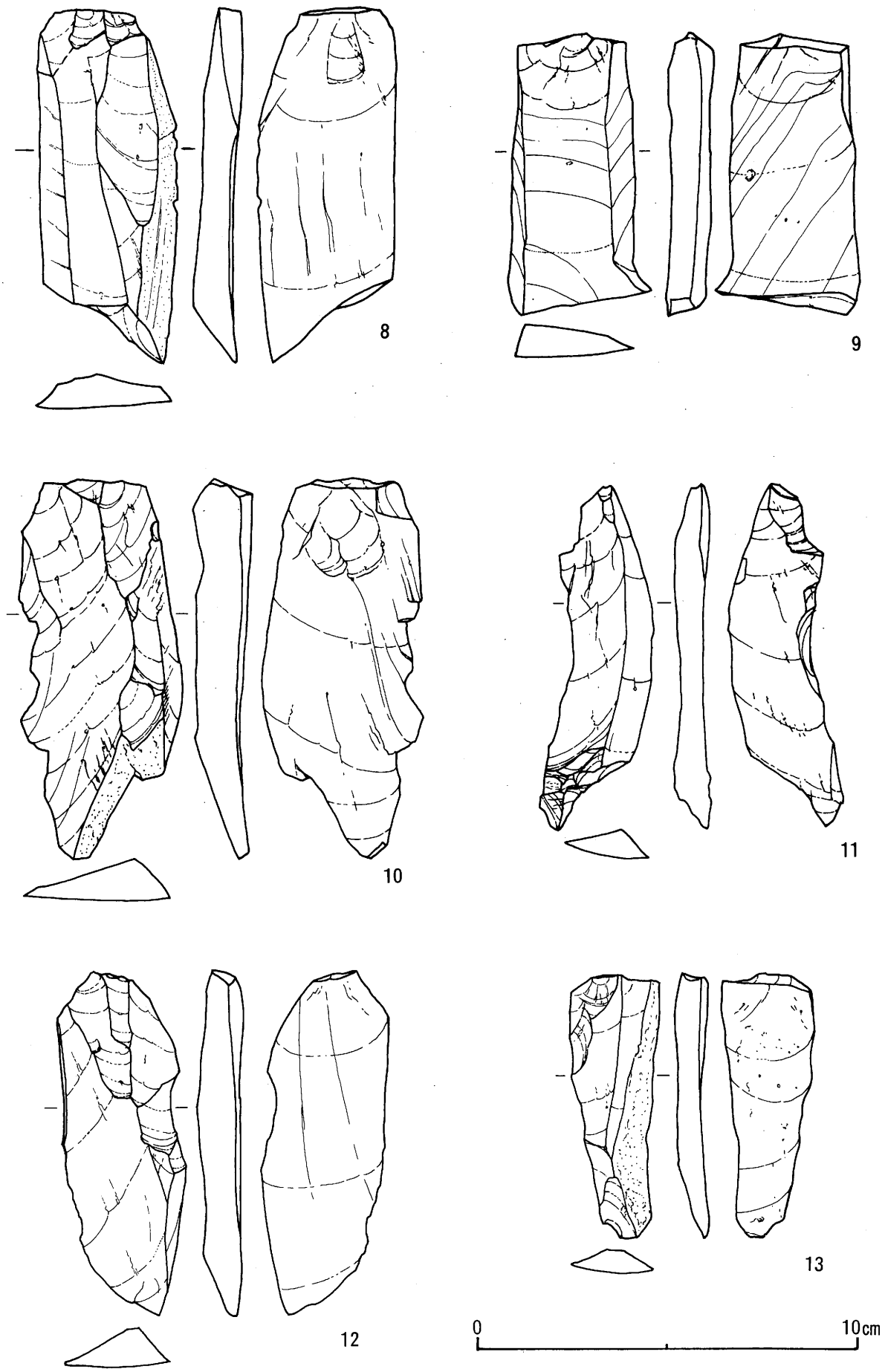


図29　第３ブロック出土石器 2　　2：3

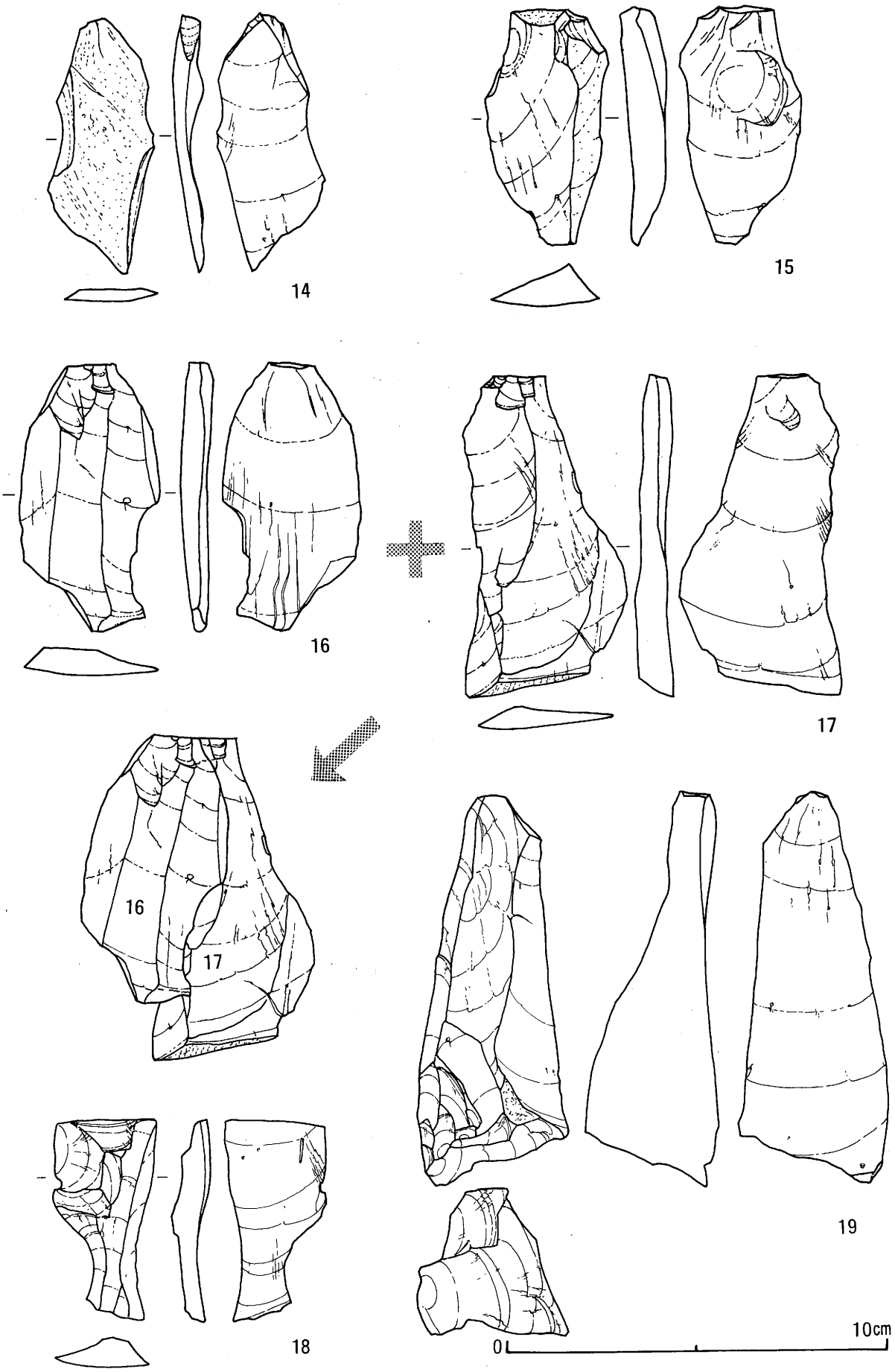


図30　第３ブロック出土石器 3　　2：3

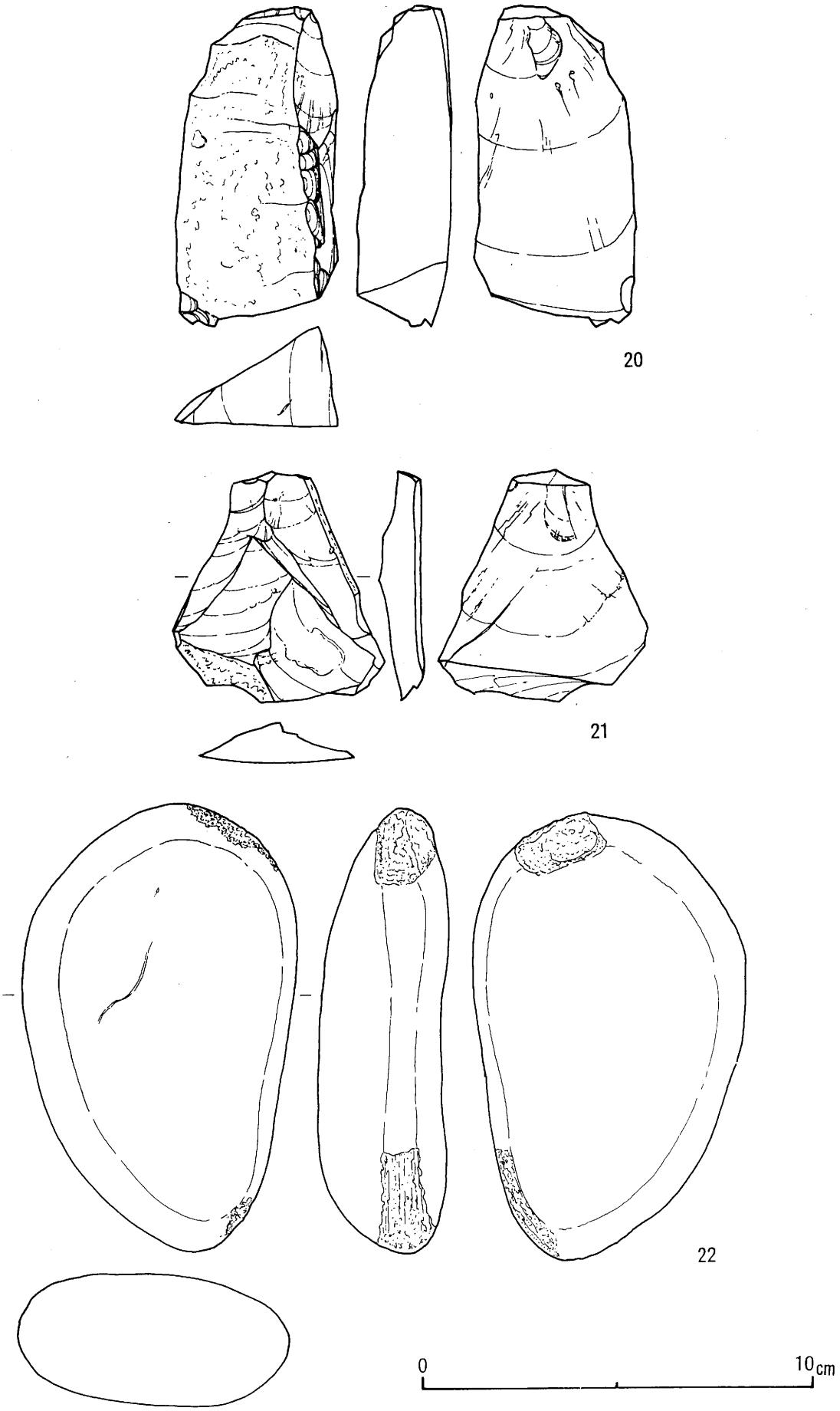


図31　第３ブロック出土石器 4　　2：3

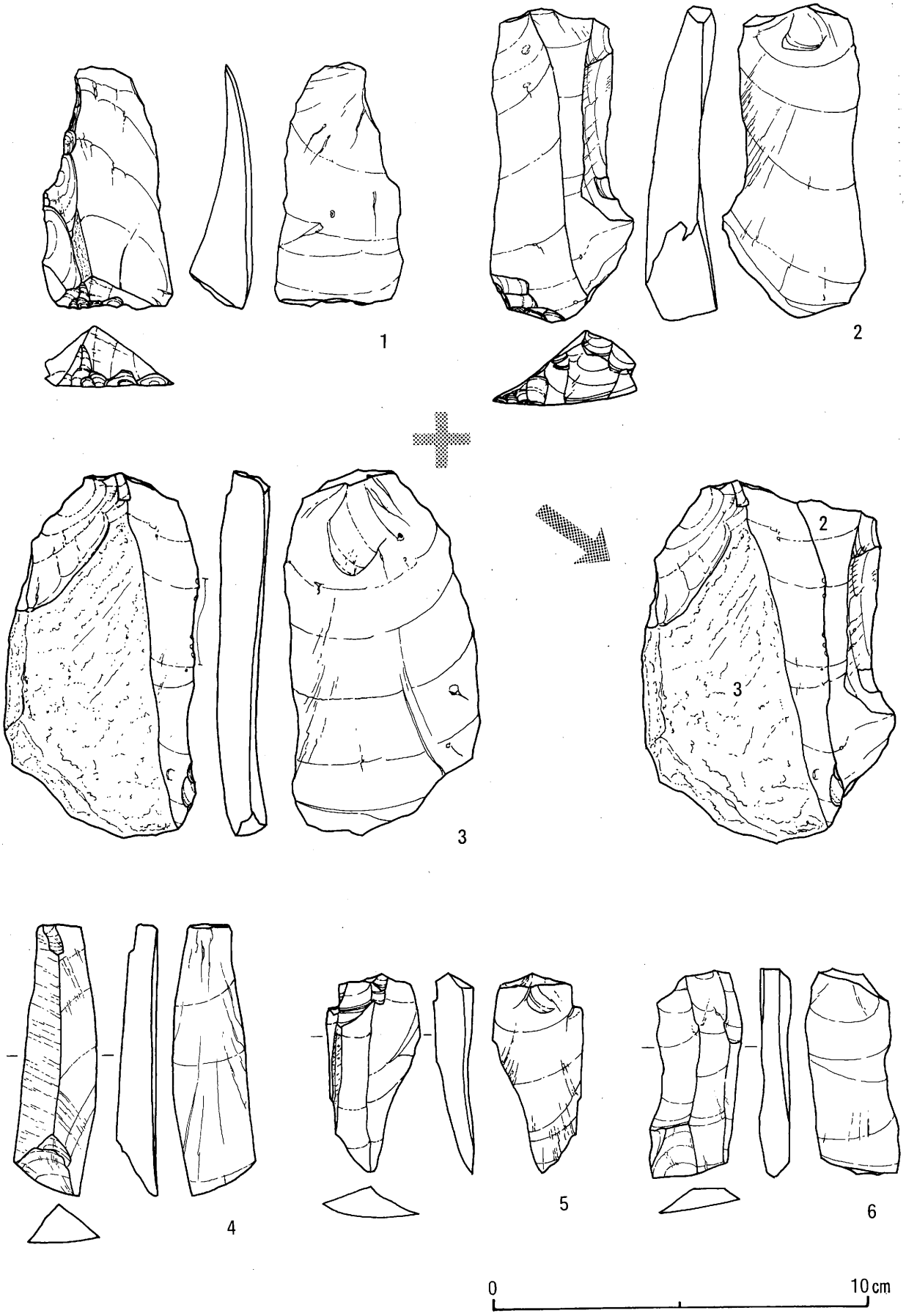


図32　第4ブロック出土石器 1　　2：3

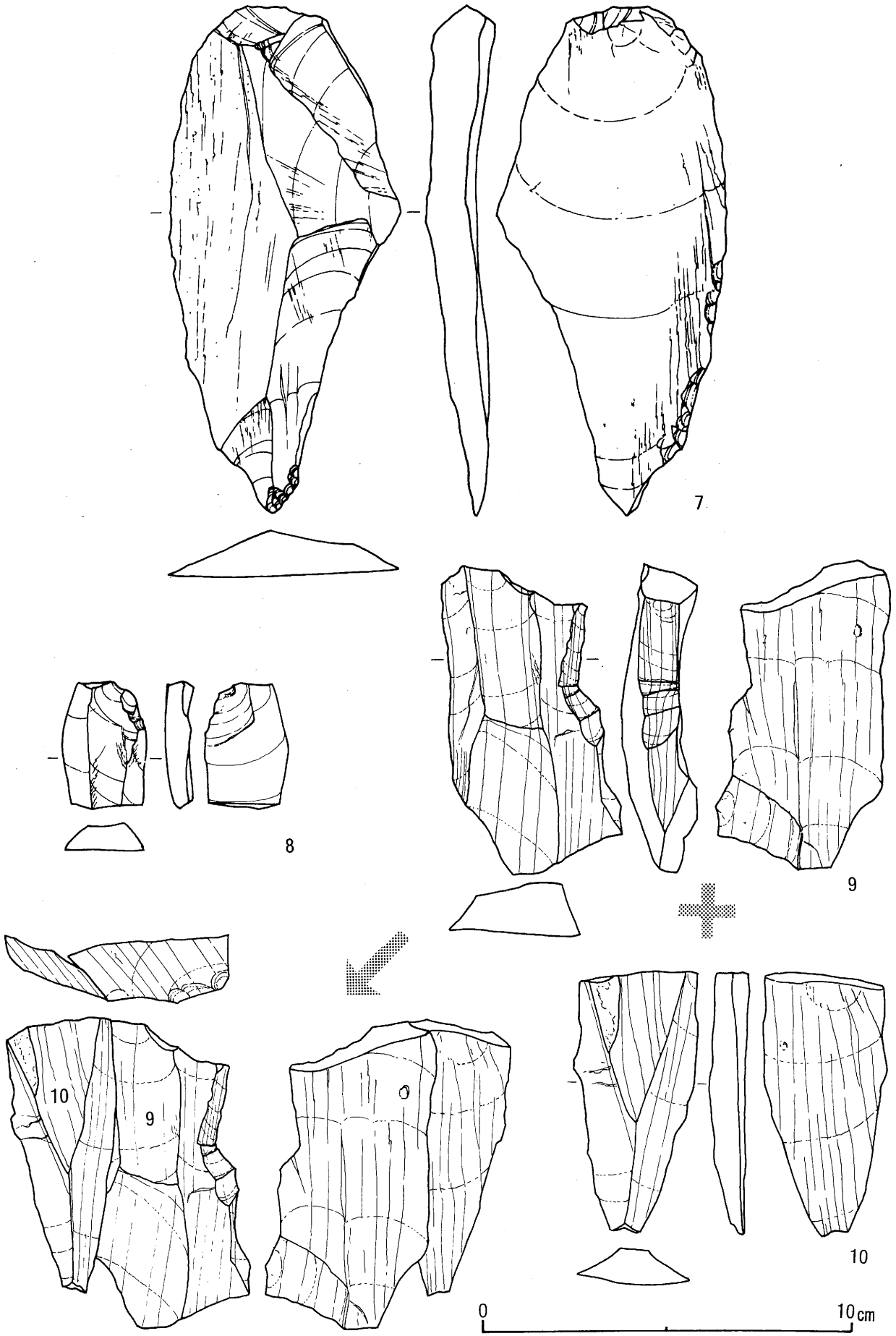


図33　第４ブロック出土石器 2　　2：3

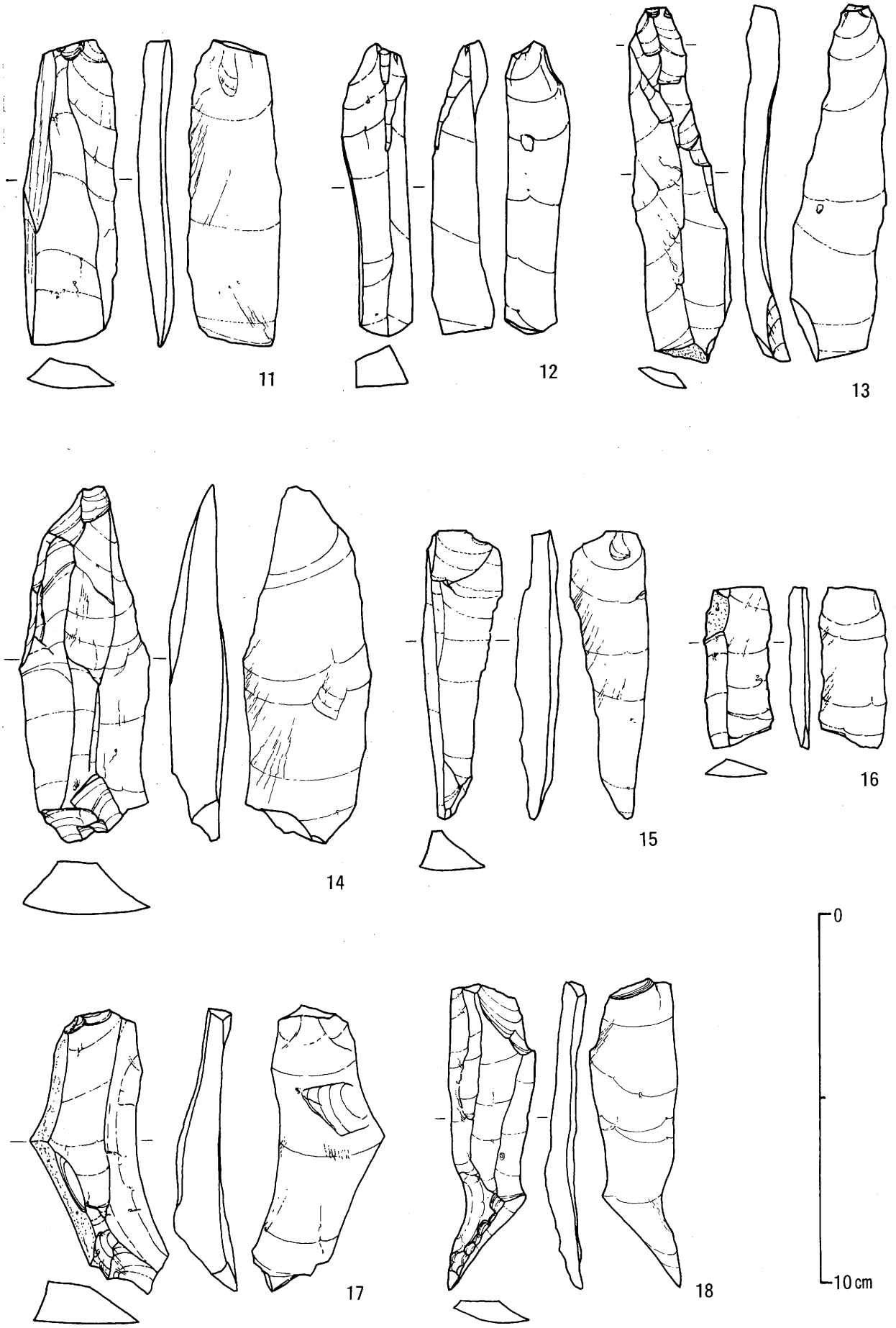
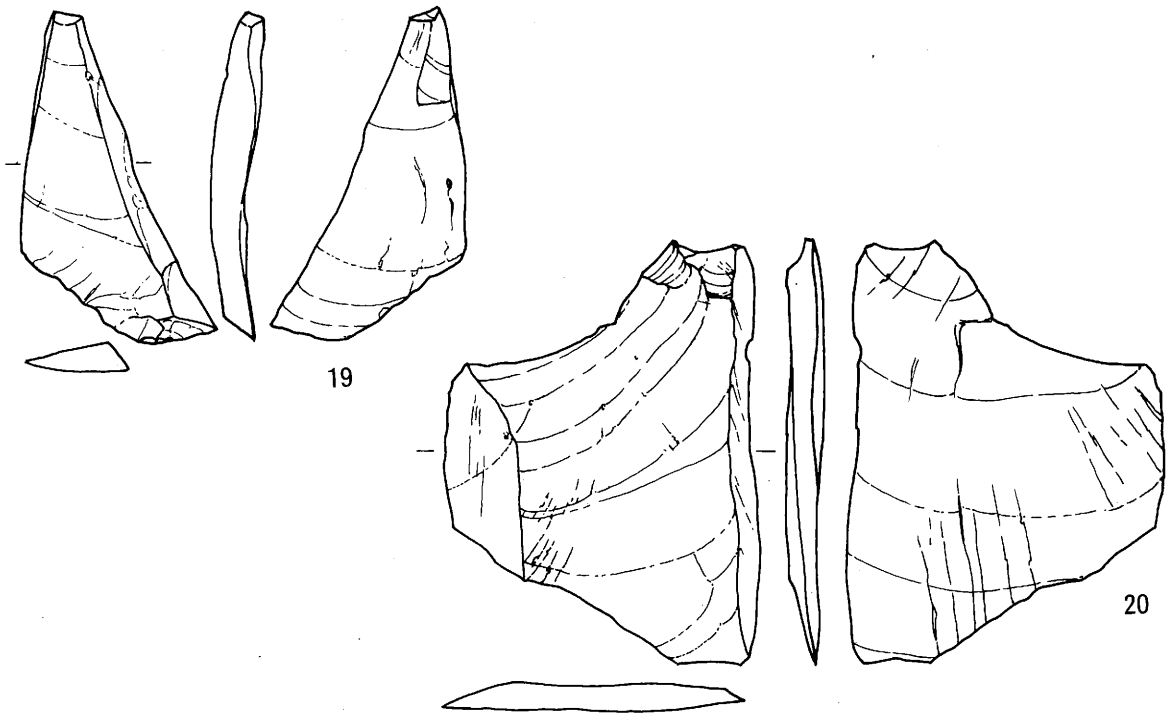


図34　第４ブロック出土石器 3　　2：3



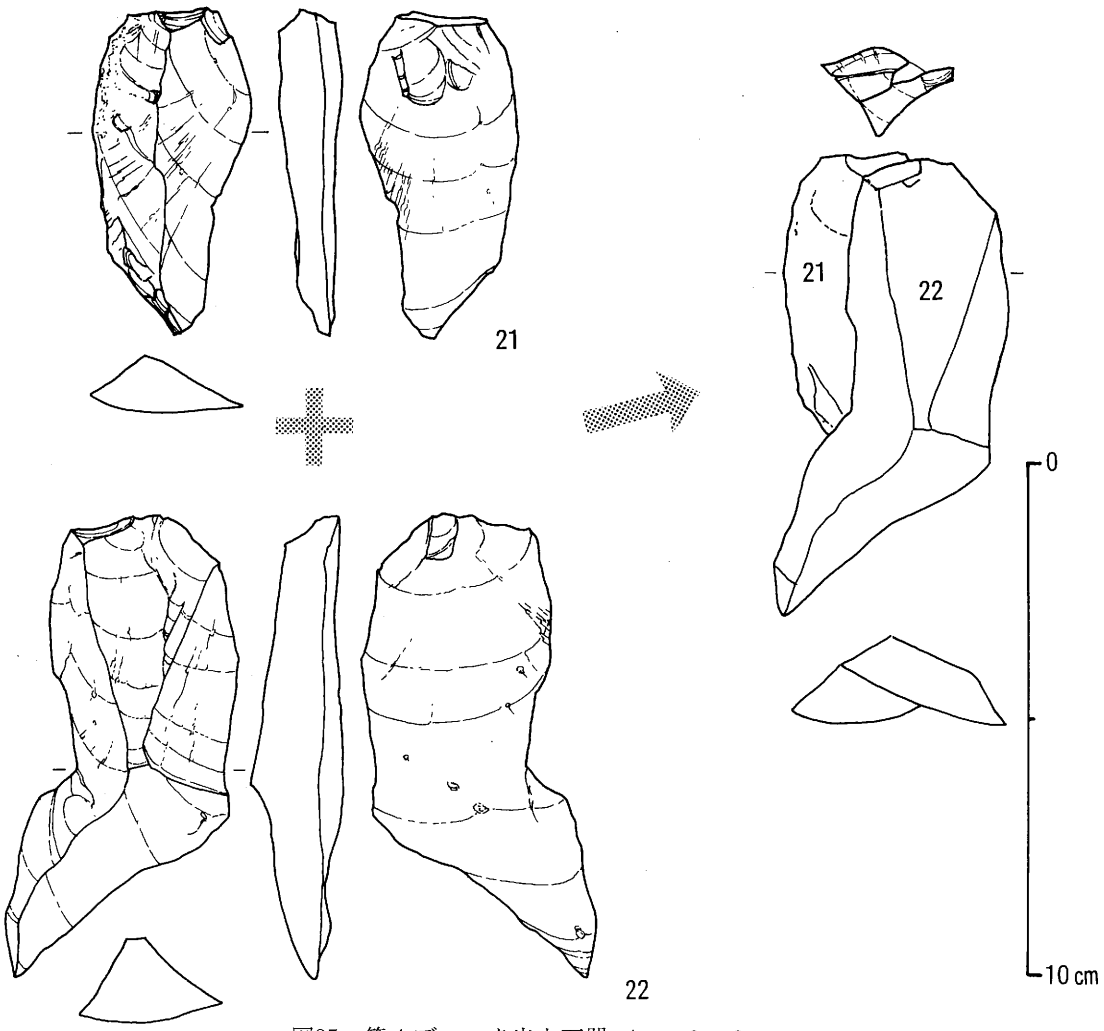


図35　第４ブロック出土石器 4　　2：3

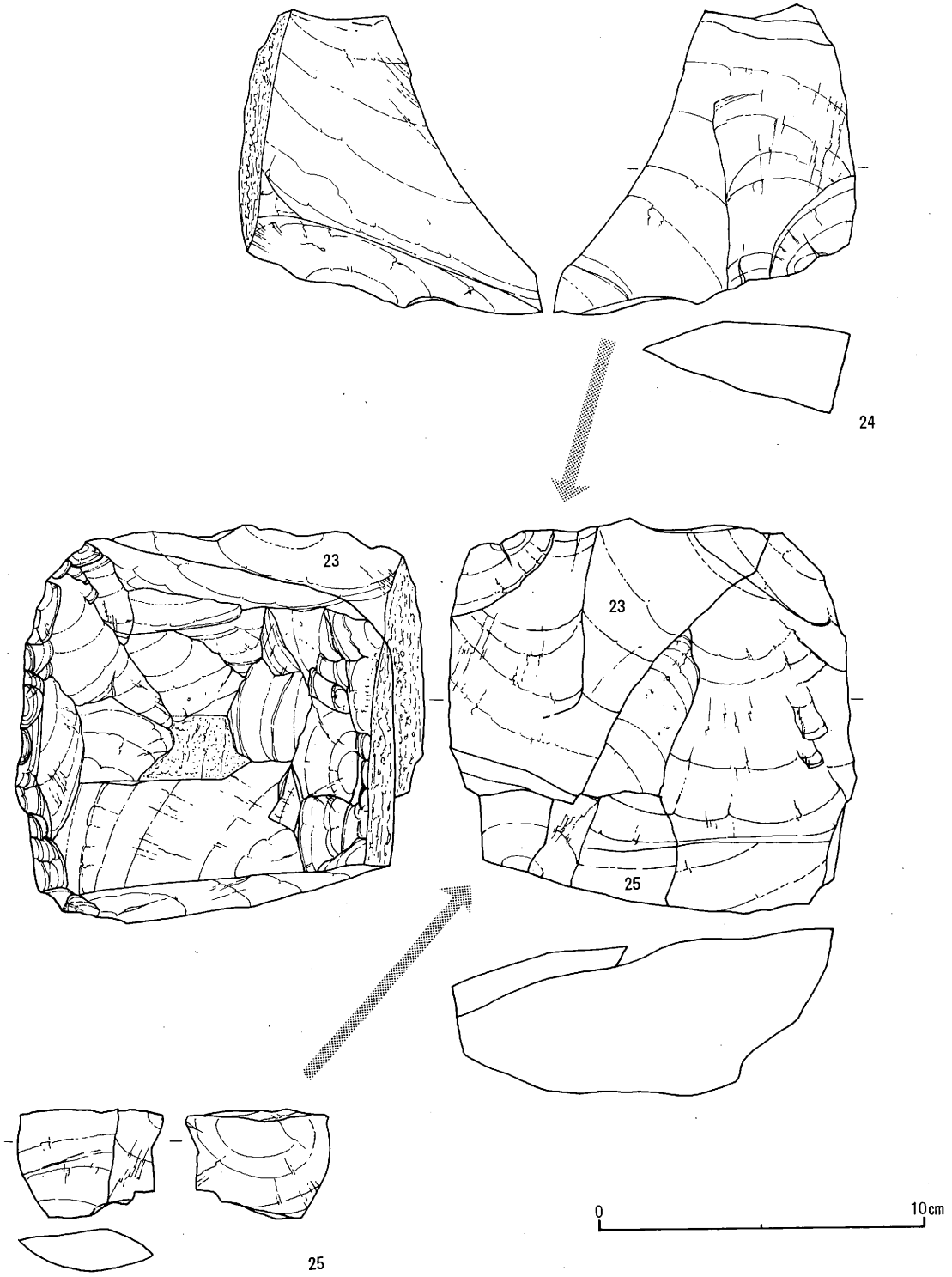


図36　第４ブロック出土石器 5　　1：2

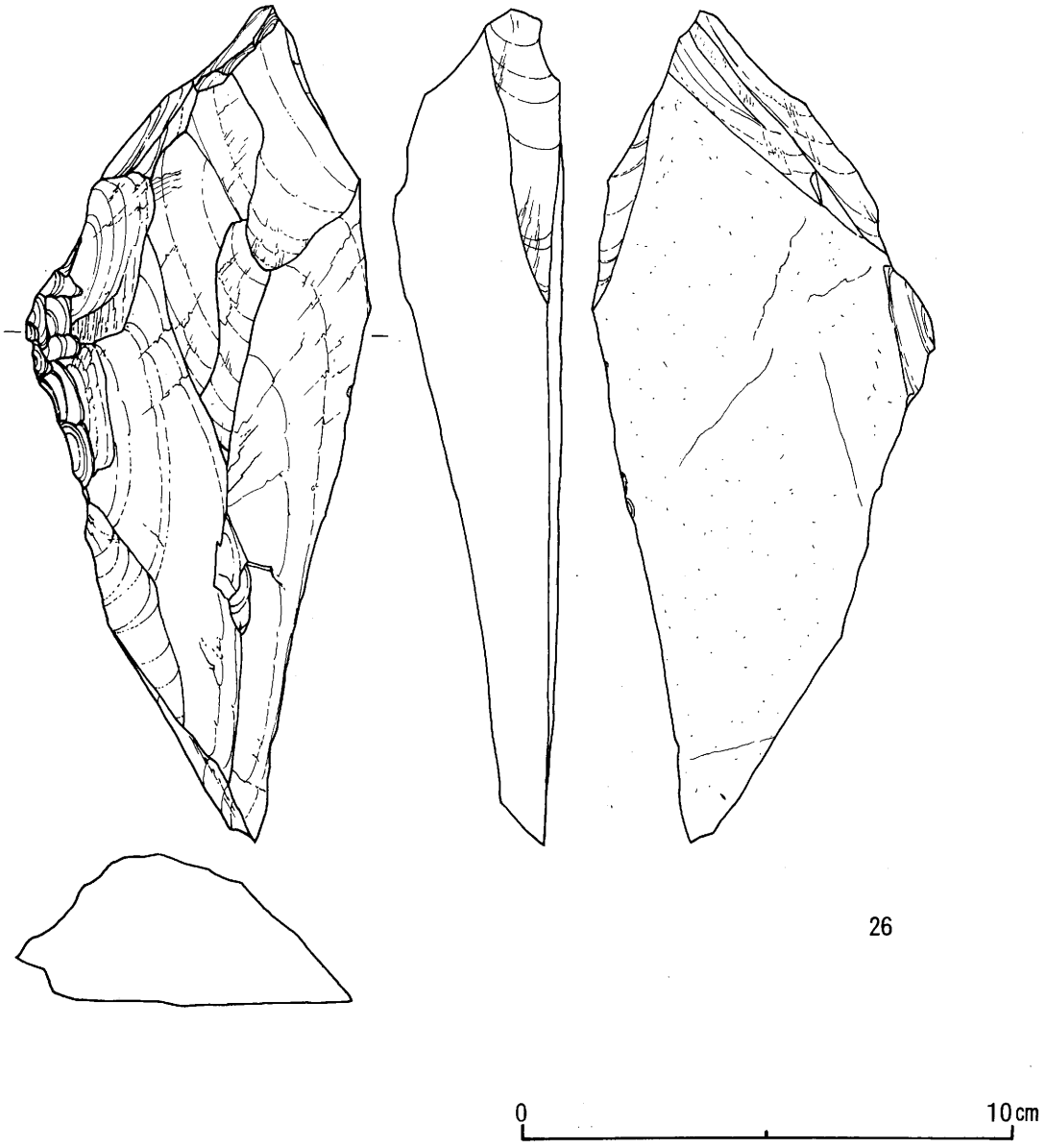


図37　第４ブロック出土石器 6　　２：３

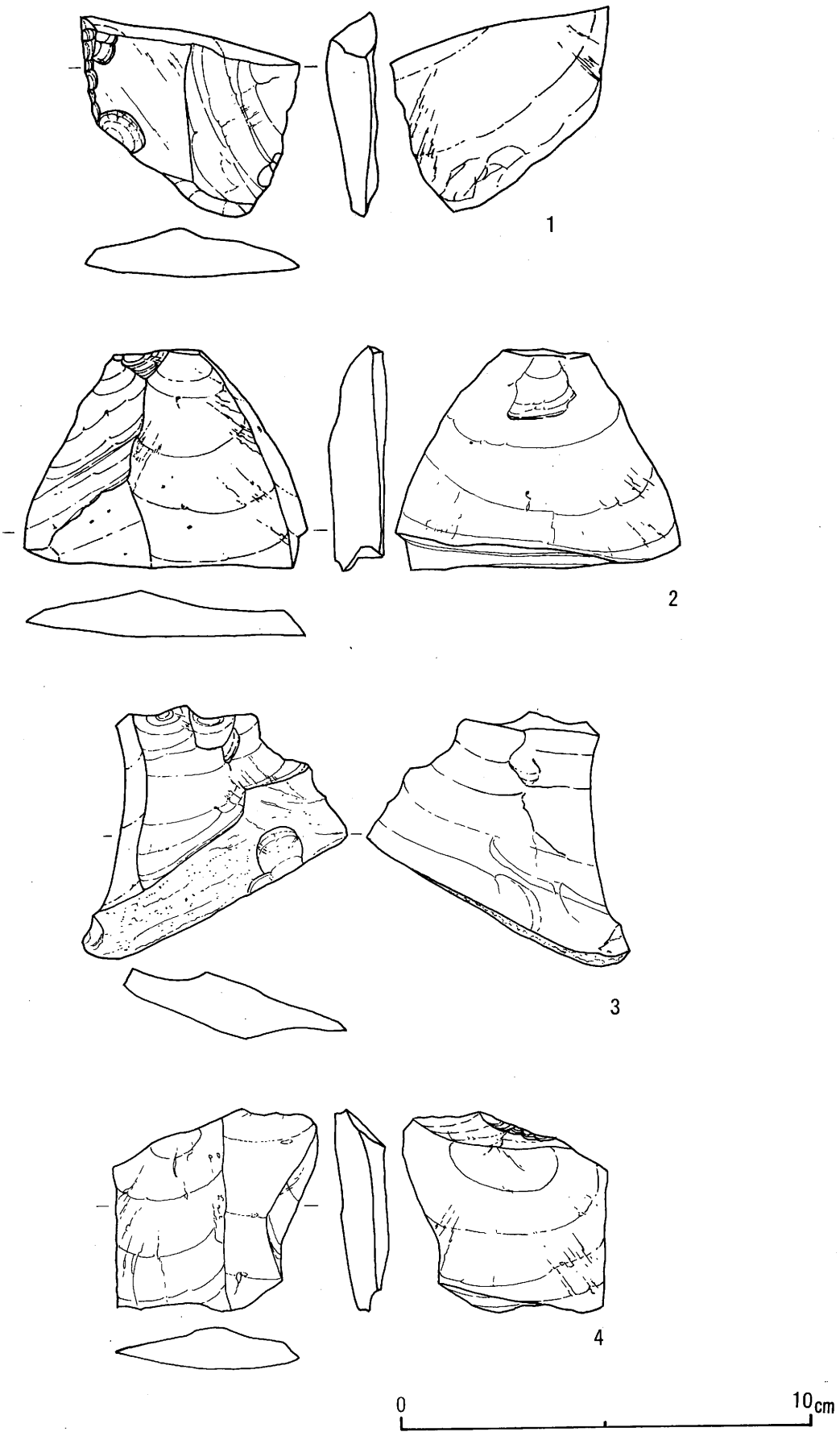


図38　第５ブロック出土石器 1　　2：3

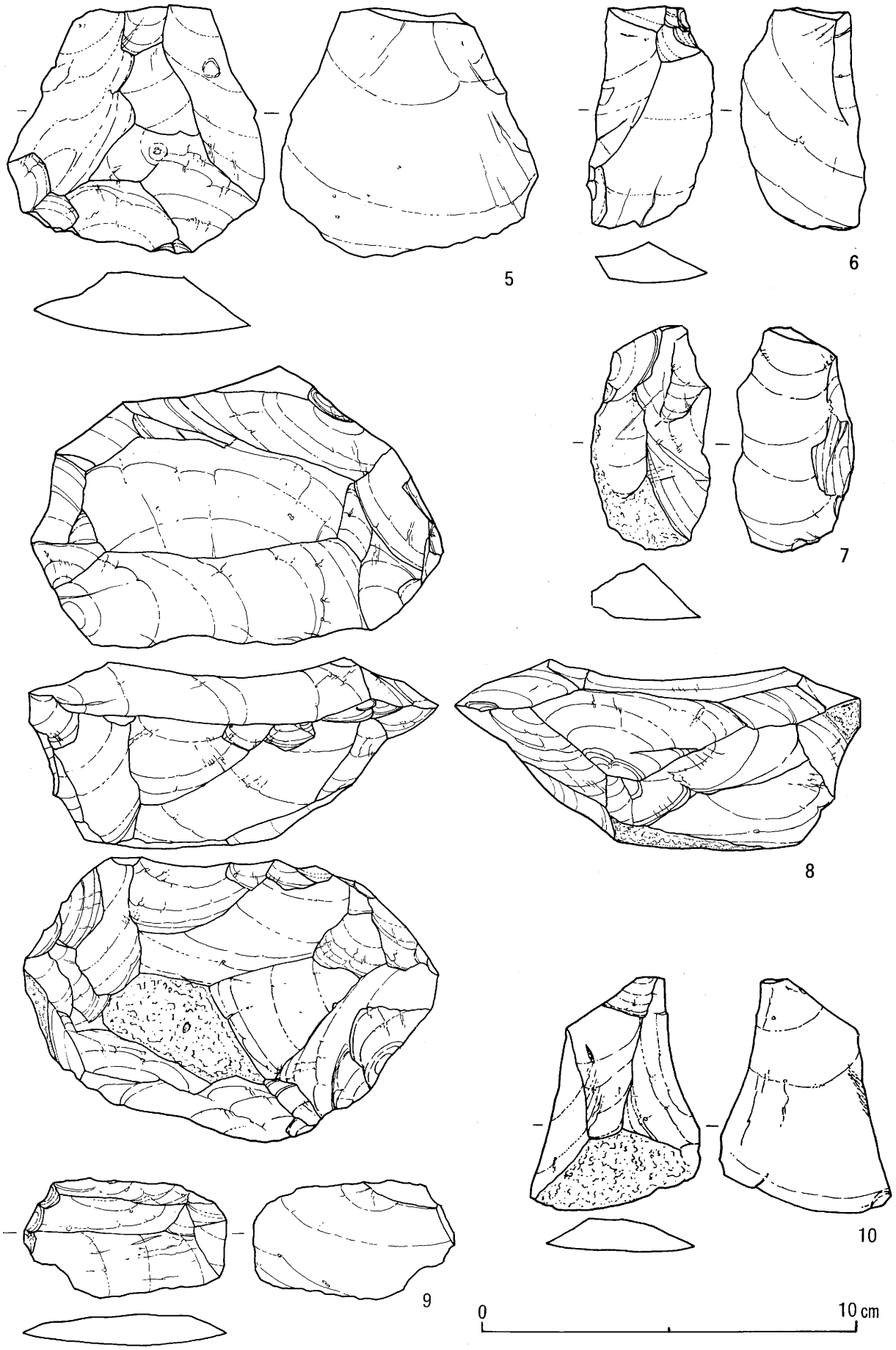


図39　第５ブロック出土石器 3　　2：3

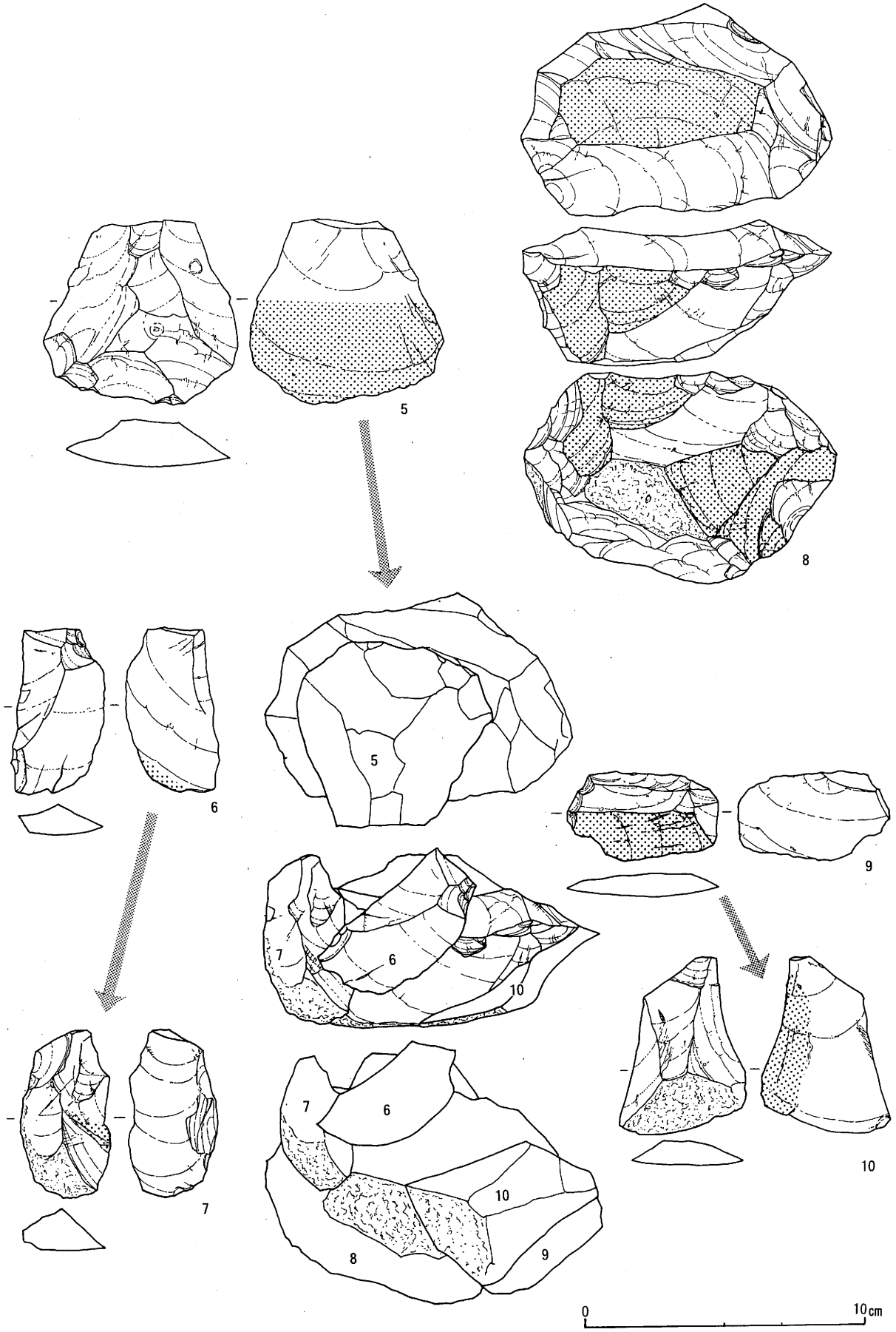


図40　第５ブロック出土石器 2　　1：2

3　トトノ池南遺跡の石器群について

(1)　石器と石器組成について

五ブロックから検出された石器群は、層位的にも接合関係からも同時期における石器群と考えられる。母岩別分類を充分におこなえば、第１・第２ブロック間の接合資料はさらに増えるものと思われる。なお、第３～５ブロック出土石器については出土総量の少ないこともあり、今後の再整理においても接合する可能性は少ない。

本稿では、遺跡の内容については上記理由から今後の課題事項としておき、器種と石器組成について整理することを目的とする。

各ブロックから出土した石器、特に二次加工を施してある石器に注目すれば、掻器が最も多いことが注意される。第５ブロック以外から計23点出土している。ナイフ形石器・掻器・彫器・削器・刃器の総数50点の46％を掻器が占めることになる。逆にこの時期に主体もしくは多くを占めるであろうナイフ形石器は、第３ブロックで出土した１点のみであった。もともと当地方では、ナイフ形石器が他の器種を圧倒するほど出現した遺跡や時期は確認されていないが、１点のみということは稀少過ぎる感じを受ける。また、彫器についても３点と少なかった。定型的ではないが、縦長剥片の縁辺に平行してファシットが入れられることは共通しており、いわゆる小坂型彫器に類似するものである。削器は、大型品が多いことに注意されよう。第１ブロックで出土した安山岩製の削器２点は、幅広の剥片を素材と先端部が尖頭状となる形態で類似しており、トトノ池南遺跡（型）の削器として特徴づけられる石器形態である。刃器は、『石器群の出土状態』の項で記したとおり、頁岩系の石材で、製品として搬入されたと考えられる石器を分類したもので、機械的には石刃と呼べるものである。安山岩製の剥片のなかにも当然「石刃」は存在するが、少

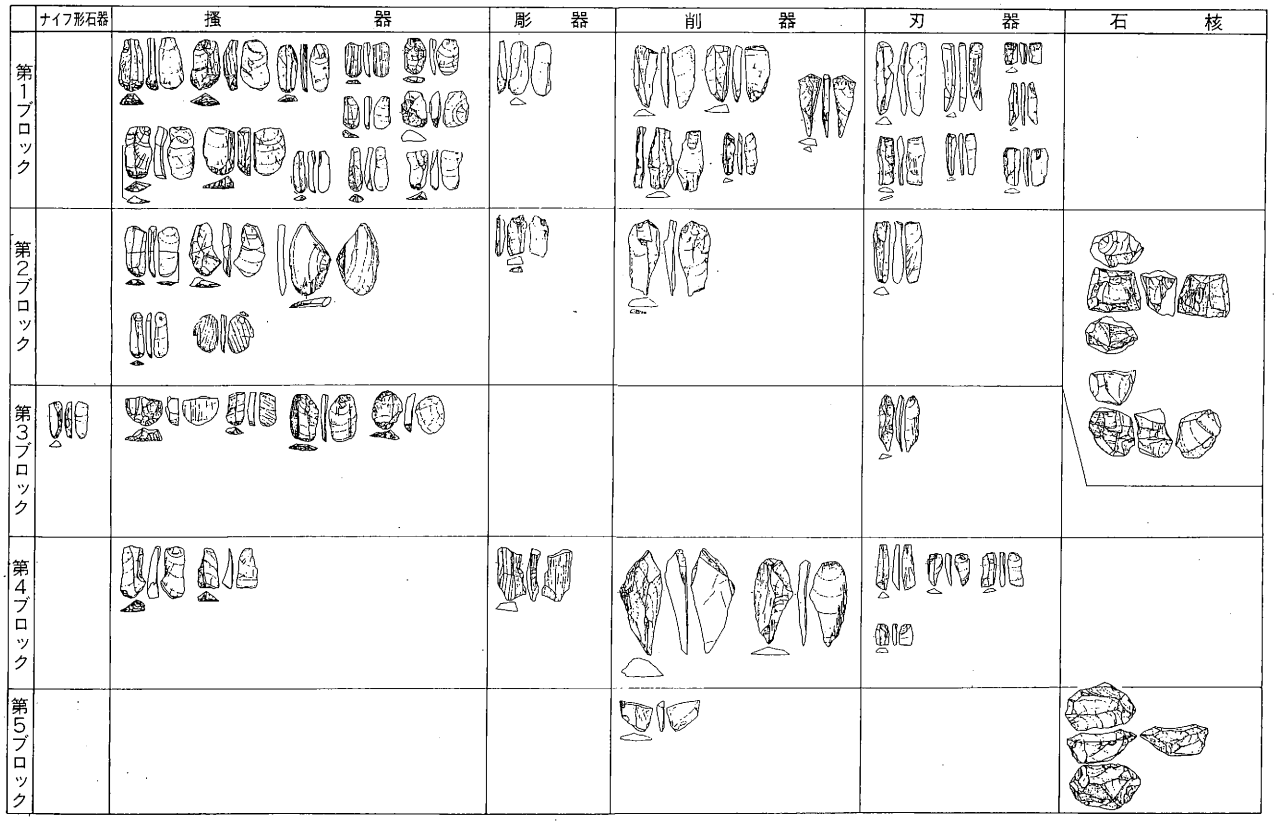


図41　各ブロック出土石器組成一覧

なくても二次加工を施していない剥片にも「製品」として使用された（搬入された）ことが、頁岩系刃器のあり方からいえるのではあるまいか。

以上の石器は、第１～４ブロックにおいて石器組成の面から、特に異質なブロックは見当たらない。（第５ブロックについては、出土量が少なかったことにより単純に比較出来ないことからここでは触れない。）第１～５ブロック出土石器の総体が、トトノ池南遺跡の旧石器時代の一時期における石器群の集合であると考えられる。

(2) 飯山地方におけるトトノ池南石器群の位置付け

本遺跡が所在する飯山地方（長野県飯山市・下高井郡木島平村・同郡野沢温泉村・下水内郡栄村）は、長野県の北部の飯山盆地を中心とした地域である（図42）。隣接する新潟県津南町を含め、旧石器時代の遺跡群が比較的密集している。学史的には、栄村小坂遺跡（高橋　1962）、同横倉遺跡（永峯　1957）の発掘調査によって当地方旧石器文化研究の端緒が示され、飯山市太子林遺跡・関沢遺跡（飯山市教委 1981）、および日焼遺跡（飯山市教委　1989）・上野遺跡（飯山市教委　1990）の調査などにより豊富な石器群が明らかにされてきている。現在までのところ、当地方の旧石器時代の遺跡数は38を数え、そのうち内容がほぼ明らかとなった遺跡は約10か所数えられる（表２）。大まかにはナイフ形石器を組成する石器群と尖頭器を主体とする石器群に分けられる。また、日焼遺跡の調査によって、飯山Ⅰ期からⅣ期までの四時期にわけた試案を提示している（望月　1989）。ＡＴ以下に含まれる石器群を予想してⅠ期とし、以降ナイフ形石器・尖頭器・細石器などの特定石器の組成・消長によって編年したもので、日本旧石器時代区分の大枠に当てはめようとしたものである。結果的には南関東編年と類似している。ＡＴ層による区分も、そこに画期を求めようとしたのではなく、飯山地方では現在までのところＡＴ以下の石器群が発見されていないことにより、便宜的に区分したものである。

トトノ池南石器群は、上記編年ではⅡ期のＡＴ以降のナイフ形石器を伴う時期におかれる。南関東編年では、第Ⅵ層からⅣ層までに含まれるＩｃ期およびⅡ期に相当する。当地方において、この時期に位置付けている石器群は、太子林（図42―20）、小坂（図42―２）、日焼（図42―16）がある。

太子林石器群は、ナイフ形石器・掻器・彫器・錐・局部磨製石斧を組成とする。剥片剥離技術は、幼児頭大もしくは分割礫の石核より、打面調整・石核稜調整が加えられ、長さ10cm前後の剥片が多く作出される。石核は90度や180度の打面転移が行われるが、基本的には単設打面である。石材は安山岩を主体とし全体の95％以上を占めるが、製品は頁岩・黒曜石・安山岩がほぼ均等に存在する。

小坂石器群は、ナイフ形石器・掻器・彫器などを組成とする。とくに小坂型と呼称される彫器やエンド・スクレイパーは、石器群のなかでナイフ形石器とともに安定した量を占めている。剥片は10cm以上の大型品から６cm前後の中型までそれぞれ一定量あり、整った石刃が多い。石材には頁岩・黒曜石・安山岩が用いられるが、製品は黒曜石・頁岩がほとんどを占める。

日焼遺跡は、ラウンド・スクレイパーを製品の中心として組成する石器群で、これに小型のナイフ形石器、エンド・クスレイパーが伴う。拳大以下の比較的小さな原石が用意され、石刃石核とは呼べず目的によって各種の剥片剥離技術が存在する。石材は黒曜石が主体で、安山岩も一定量存在する。

以上の三遺跡について、それぞれ製作技術・石器組成に差が認められることから、これを太子林グループ、小坂グループ、日焼グループとして、各遺跡に代表される石器群として分類しておく。太子林グループと小坂グループは、系譜・系統としてナイフ形石器や彫器・掻器および石刃製作の発展過程のなかでとらえられると思われるが、日焼遺跡石器群は各器種間・石核に前記二グループとは大きな形態・技術変化があり、系統としてとらえるには無理がある。むしろ尖頭器を組成とするが、石刃のエンド・スクレイパーを多量に出土した上野遺跡（図42―21　飯山市教委　1990ａ）の石器群のほうが、より小坂グループの

系譜上にあるように思える。太子林・小坂・上野各石器群は、地元の安山岩を多く使用し、製品には頁岩・玉髄といった東北系の石材を持つことにも共通する。一方、日焼遺跡も安山岩を用いるが、それ以上に黒曜石を多用するところにも大きな相違点がある。そのような観点からトトノ池南遺跡の石器群を概観した場合、エンド・スクレイパーを主体とする（石刃）石器群であり、これに小坂型の範疇に入る彫器などが伴う点など、組成上からは小坂グループに類似する。また、石核調整技術は、90度ないし180度の打面転移が若干認められ、両設打面の石核でない点は太子グループにより類似する。小坂遺跡では石刃石核は検出されていないが、剥片を観察するかぎり両設打面をもつ石核をはじめ各器種によっていくつかの石刃作出技法が存在すると予想される。トトノ池南石器群の石材使用頻度は安山岩が圧倒的に使用され、これに頁岩が加わる状況は太子林グループに似る。以上の諸点からトトノ池南石器群は、太子林・小坂両グループに類似し、両グループが石刃石器群の発展的系譜上に太子林→小坂と位置付けられるならば、その間の石器群で、エンド・スクレイパーという定型化した石器が主体となっている点で、より小坂グループに近い石器群と考えられる。トトノ池南（石刃）石器群については、まだ多くの分析が残されており、現時点ではおおよその目安として提示し、詳細については今後の検討課題としておきたい。

飯山地方旧石器時代関係文献目録

1　信濃史料刊行会　1956　信濃史料
2　神田五六・永峯光一　1957　「長野県下水内郡横倉発見のポイント」（『日本考古学協会第20会発表要旨』）3
3　永峯光一　1957　「長野県下水内郡小坂遺跡」『日本考古学年報10』
4　神田五六・永峯光一　1958　「奥信濃横倉遺跡」『石器時代５』
5　高橋　桂　1962　「北信濃小坂遺跡の調査」『考古学雑誌第45巻１号』
6　木村幾太郎　1967　「長野県小坂遺跡出土の尖頭器」『若木考古84』
7　坂詰秀一　1974　「原始時代」　野沢温泉村史
8　栄村教育委員会　1976　『栄村小坂遺跡緊急発掘調査報告書』　栄村教育委員会
9　高橋　桂 ほか　1977　『遺跡分布調査報告Ｉ』　飯山北高地歴部ＯＢ会
10　望月静雄　1980　「飯山市北竜湖採集の片刃石斧」『高井51号』
11　飯 山 市　1980　「めずらしい石器出土―瑞穂太子林遺跡」『市報いいやま257』
12　高橋　桂　1980　「瑞穂のあけぼの」『新編瑞穂村誌』
13　飯山市教育委員会　1981　『太子林・関沢遺跡』
14　望月静雄　1981　「小坂先土器時代遺跡の新資料」『長野県考古学会誌41号』
15　高橋　桂　1981　「木島平村のあけぼの」『木島平村誌』
16　中島庄一　1982　「小坂遺跡」『長野県史考古資料編全１巻(2) 北・東信』
17　永峯光一　1982　「横倉遺跡」『長野県史考古資料編全１巻(2) 北・東信』
18　望月静雄　1982　「太子林遺跡・関沢遺跡」『長野県史考古資料編全１巻(2) 北・東信』
19　望月静雄　1982　「北信濃関沢遺跡の石器群」（『信濃第34巻４号』）
20　中島　庄一　1982　「北信地域における尖頭器を伴出した石器群について」（『信濃第34巻４号』）
21　早津賢二ほか　1983　「信濃川流域における先土器時代包含層と指標テフラとの層位関係」『信濃第35巻10号』
22　望月静雄　1986　「飯山地方における新発見の先土器時代遺跡および資料」『高井74』
23　飯山市教育委員会　1989　『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ｉ』
24　望月静雄　1989　「飯山市日焼遺跡の石器群」『第２回長野県旧石器文化交流会―発表要旨―』
25　望月静雄・高橋桂　1990　「長野県日焼遺跡」（『日本考古学年報41』）
26　飯山市教育委員会　1990a　『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告II』
27　飯山市教育委員会　1990b　『千苅遺跡の研究』

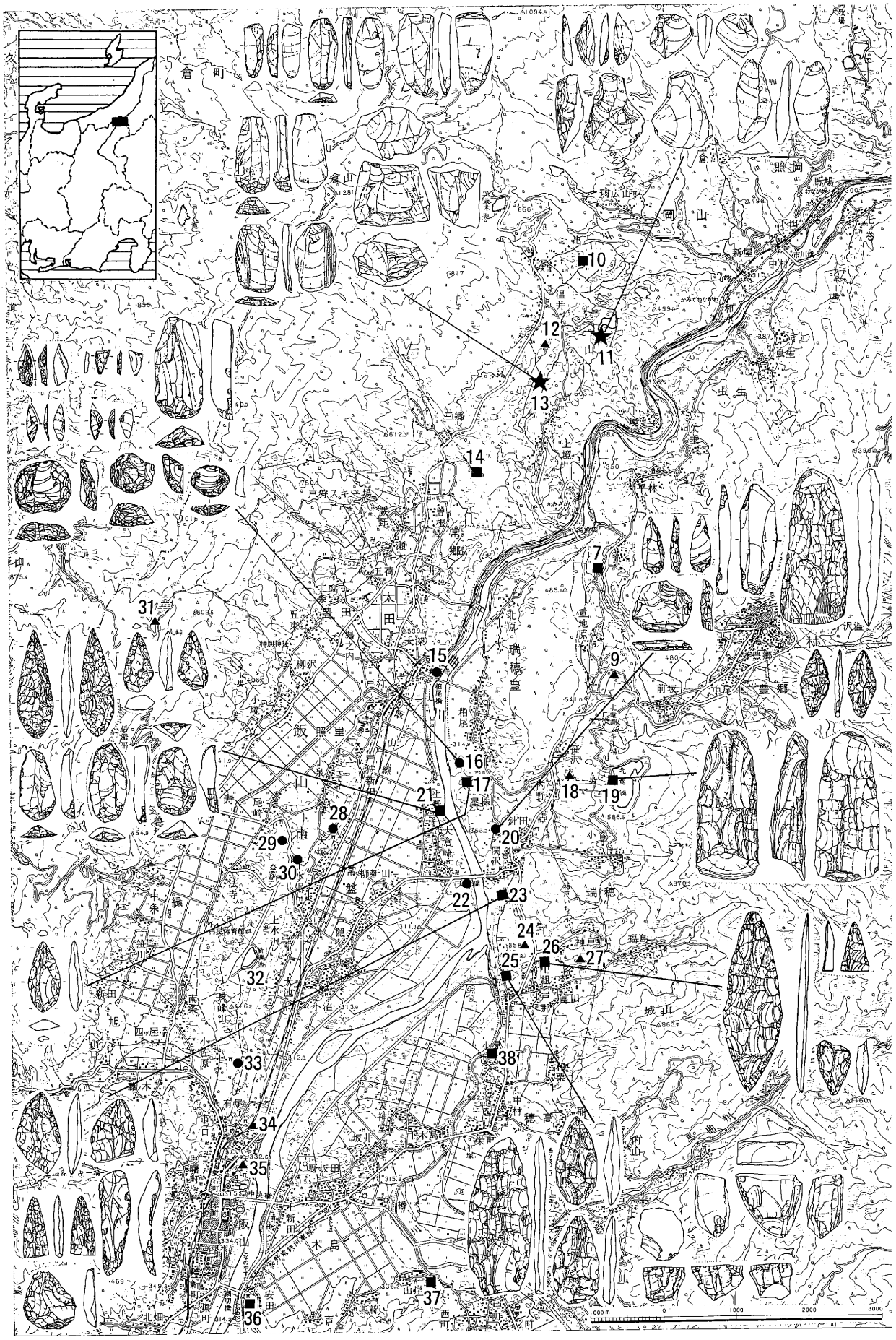
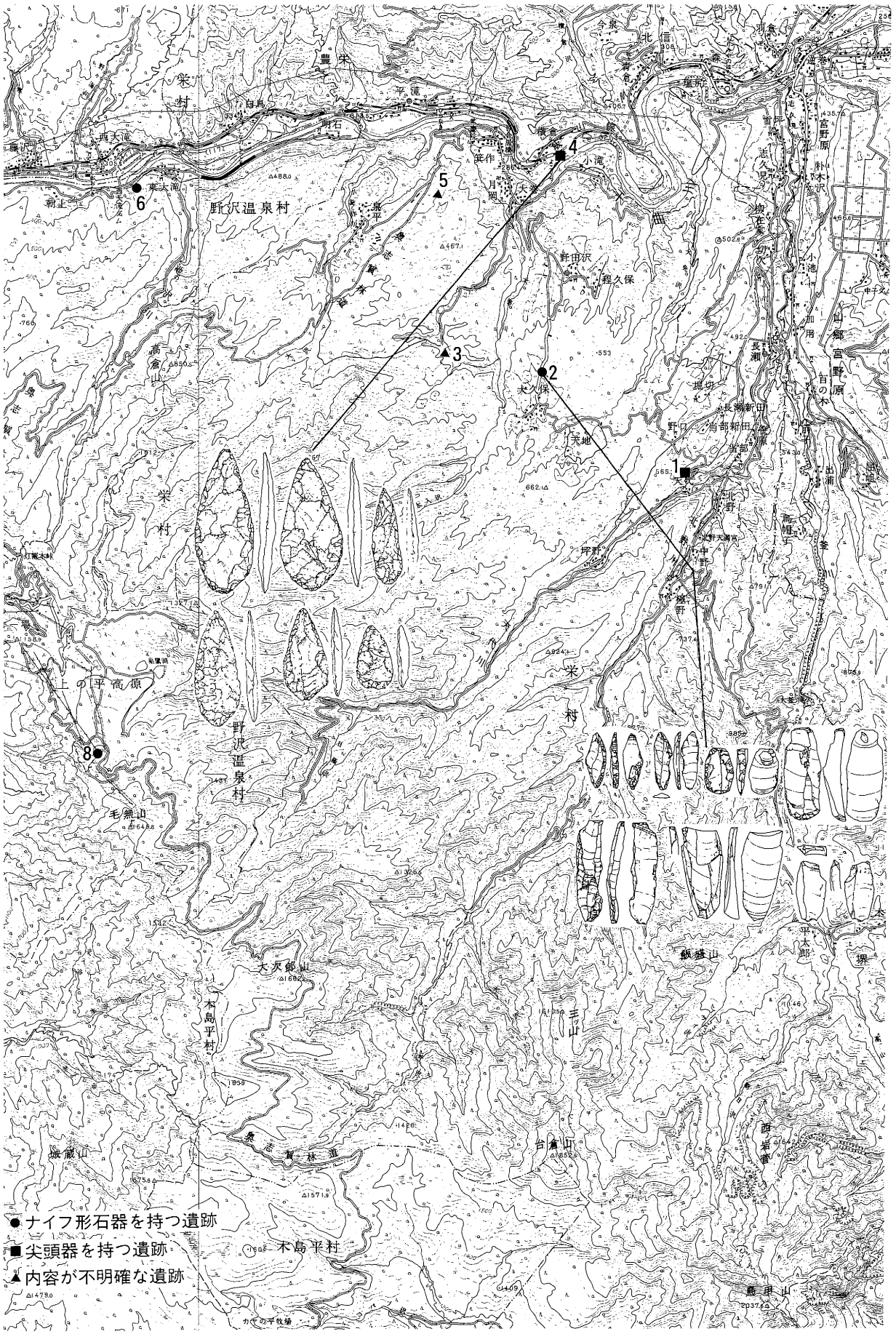


図42　旧石器時代遺跡分布図　　1：75,000


●ナイフ形石器を持つ遺跡
■尖頭器を持つ遺跡
▲内容が不明確な遺跡
野沢温泉村
栄村
上の平高原
木島平村
1
2
3
4
5
6
8

No.	遺跡名	所在地	発掘	主要石器	文献・その他
1	天代トド	下水内郡栄村天代トド	○	尖頭器	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
2	小坂	下水内郡栄村大久保小坂	●	ナイフ形石器・彫器・掻器 刃器・尖頭器	高橋1962　栄村教委1976 中島1982
3	仙当	下水内郡栄村月岡仙当	○	剥片	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
4	村木	下水内郡栄村箕作村木	○	剥片	同上
5	横倉	下水内郡栄村北信地蔵堂	●	尖頭器・剥片	同上
6	東大滝	下高井郡野沢温泉村東大滝	●	ナイフ形石器・尖頭状石器 彫器・掻器・石核	坂詰1974
7	坪山	下高井郡野沢温泉村坪山	○	尖頭器	信濃史料1956　坂詰1974
8	上の平	下高井郡野沢温泉村上の平	○	尖頭器（単独出土）	坂詰1974
9	重地原	下高井郡野沢温泉村重地原	○	剥片	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
10	オリハンザ	飯山市一山温井オリハンザ	○	尖頭器・細石核・細石刃	信濃史料1956
11	新堤	本報告			
12	温井(仮)	飯山市一山	○	剥片	飯山市教委 1986
13	トトノ池南	本報告			
14	雨池グラウンド	飯山市常郷	○	尖頭器・剥片	望月1986
15	真宗寺裏	飯山市常郷大坪	○	ナイフ形石器	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
16	日焼	飯山市瑞穂日焼・南原	●	ナイフ形石器・掻器・削器 尖頭器・敲石・石核・錐	飯山市教委 1989
17	屋株	飯山市瑞穂屋株	●	尖頭器・剥片	飯山市教委 1989
18	内野	飯山市瑞穂内野	○	掻器	飯山市教委 1990b
19	北竜湖	飯山市瑞穂堂道平	○	尖頭器・細石核・片刃石斧	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
20	太子林	飯山市瑞穂(関沢)太子林	●	ナイフ形石器・掻器・彫器 局部磨製石斧・錐・石核	飯山市教委 1981
21	上野	飯山市常盤(上野)外和柳	●	ナイフ形石器・尖頭器 掻器・石核	飯山市教委 1990a
22	瀬付	飯山市常盤(大倉崎)瀬付	○	ナイフ形石器	信濃史料1956
23	関沢	飯山市瑞穂(関沢)畦高	●	尖頭器・尖頭削器・掻器	飯山市教委 1981
24	宮中	飯山市瑞穂宮中	●	剥片	
25	千苅	飯山市瑞穂千苅	○	尖頭器・掻器・彫器・細石核	中島1982 飯山市教委1990b
26	城ノ前	飯山市瑞穂(中組)城ノ前	○	尖頭器	高橋1980
27	木原	飯山市瑞穂(富田)木原	○	尖頭削器	飯山市教委 1990b
28	大塚	飯山市常盤(大塚)屋敷添	●	ナイフ形石器・彫器・石核	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
29	尾崎南(仮)	飯山市寿(尾崎)東長峰	○	剥片	望月1986
30	小泉	飯山市常盤長峰越	●	ナイフ形石器・彫器	飯山市教委 1989b
31	桂池	飯山市寿桂池	○		飯山北高地歴部ＯＢ会1979
32	針尾池	飯山市常盤長峰(針尾池)	○	剥片	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
33	長峰(仮)	飯山市小佐原下長峰	○	剥片	飯山北高地歴部ＯＢ会1979
34	有尾	飯山市飯山(有尾)	●	剥片	
35	城山	飯山市飯山(飯山城)	○	剥片	
36	安田神社境内	飯山市木島安田飯綱神社	○	細石核	信濃史料1956
37	山岸	飯山市木島山岸	○	尖頭器・掻器	
38	鬼久保	下高井郡木島平村穂高鬼久保	○	尖頭器	

表２　飯山地方旧石器時代遺跡地名表

第3章　縄文時代

1　遺　　構

縄文時代の遺構として動物捕獲用の落し穴と推定される土坑・溝状土坑、斜めに掘り込まれたピット・集石土坑がある。しかし厳密に縄文時代とする確たる根拠はない。検出状況、類例などから縄文時代の遺構と考えておく。

A　おとし穴（図43）

坑底に1～数個の小穴がある方形土坑が、谷状地の北縁に一定間隔をおいて並んで4基（SK9～SK12）が、南縁に単独で1基（ＳＫ13）が検出されている。位置的に北縁の並びの東延長上にあるＳＫ８も、底が舟底状で坑底の小穴がないこと等の否定的要素が少なくないが、同様の遺構の可能性がある。いずれも出土遺物はない。

規模はＳＫ13がやや大型で、長1.6ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.8ｍをはかり、ＳＫ９～ＳＫ12は長1.0～1.4ｍ、幅0.4～0.7ｍ、深さ0.5～1.0ｍである。

坑底の小穴は1か所のもの（ＳＫ9･12･12）と2か所のもの（ＳＫ13）と3か所のもの（ＳＫ11）がある。いずれも坑底まで完掘した後に検出されたため坑底より上部に構造物（杭等）があったかどうか土層観察等で確かめられていない。

ＳＫ13は半割して土層観察を行っているが、最上層に焼土が厚く堆積しており、最下層に黄色粘質土を主体とする土がブロック状に自然堆積とは考えにくい状態で存在している。

これらの土坑は他の類例などから動物用のおとし穴と考えておきたい。

B　溝状土坑（図43）

Ｋ―20区（ＳＫ２）をＩ―19区（ＳＫ７）とで2基検出されている。ＳＫ２は長4ｍ、幅0.3ｍ、深さ0.75ｍをはかる。ＳＫ７は上面のプランがやや湾曲しているが底は直線的である。長3.6ｍ、幅0.2ｍ、深さ0.7ｍ。いずれも出土遺物はない。

これらの溝状土坑は長軸方向をそろえて並列している場合が多いが、当遺跡例はやや方向を異にしている。

C　斜めピット（図43）

新堤遺跡で23基検出された斜めに掘り込まれたピットが、当遺跡でも11基検出されている。新堤遺跡例は一定のライン上に集まっているようであったが、当遺跡例は北群（P1～P3）、中群（P4）、南群（P5～P11）と群をなしている。開口方向、掘り込みの角度、深さに一定の規則性のないことは新堤遺跡例に等しいが、極端に浅いものや、極端に掘り込みの角度が斜めなものはない。

なお、南群は縄文早期撚糸文土器が多く出土した所にあたる。

D　集石土坑（図44）

縄文早期の土器が集中して出土した範囲の北端にあたるＬ―12区から集石土坑（ＳＫ14）が検出されている。

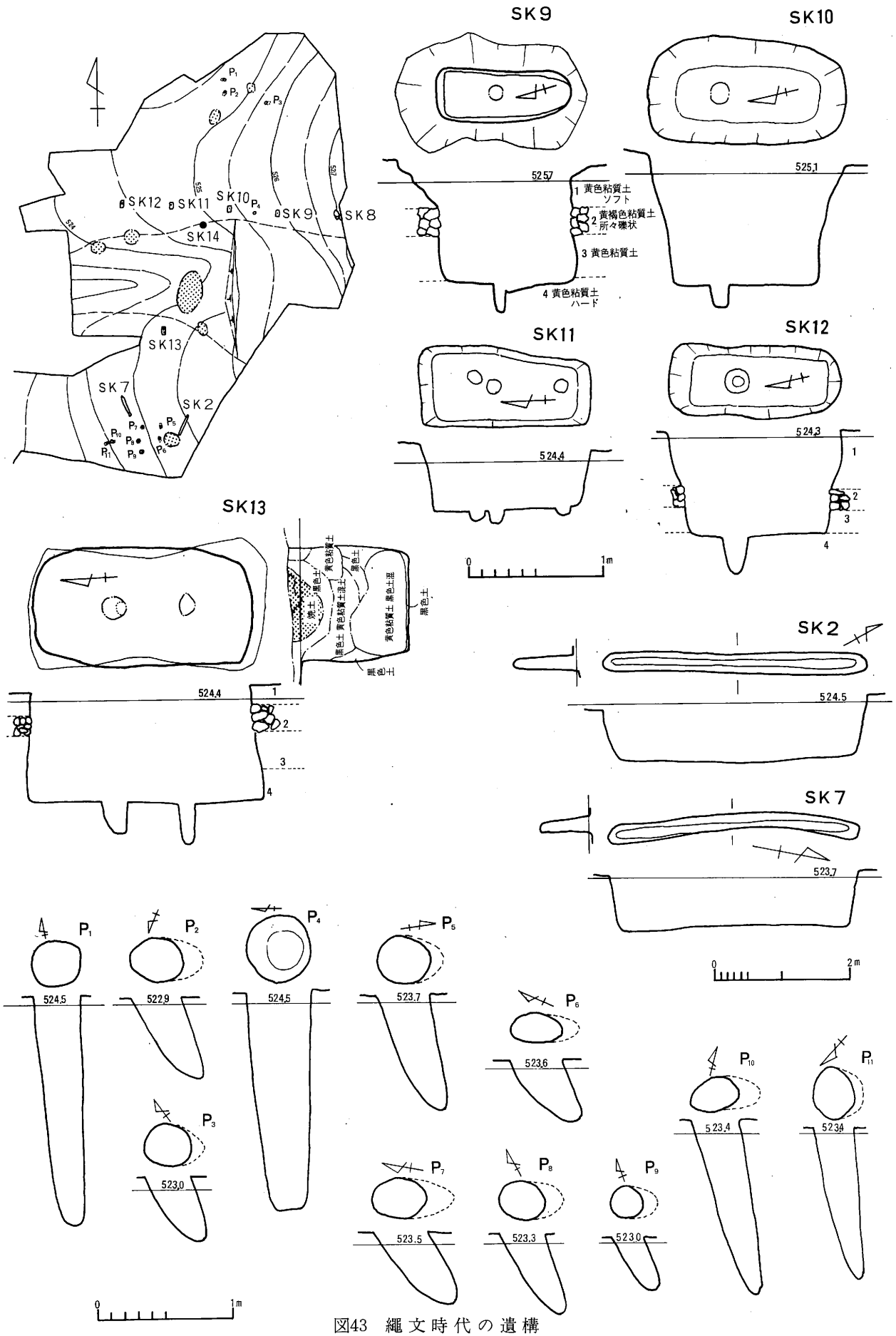

SK9
SK10
SK12
SK11
SK14
SK13
SK7
SK2
SK8
525.7
1 黄色粘質土 ソフト
2 黄褐色粘質土 所々礫状
3 黄色粘質土
4 黄色粘質土 ハード
525.1
524.4
524.3
524.5
523.7
焼土
黒色土
黄色粘質土
黒色土混土
黄色粘質土混土
黒色土
黒色土
0
1m
2m
P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
524.5
522.9
523.0
524.5
523.7
523.6
523.5
523.3
523.0
523.4
523.4

図43 縄文時代の遺構

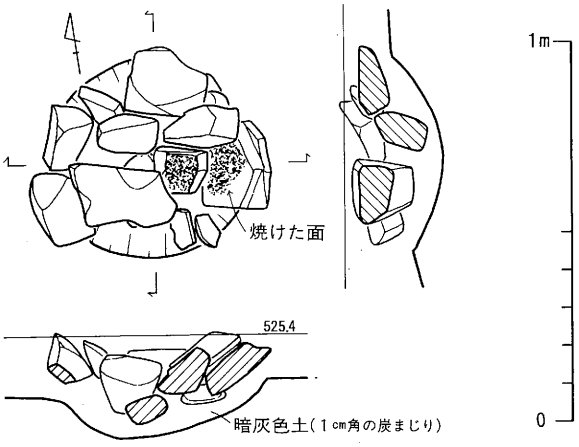


図44　集石土坑ＳＫ14　　1：20

直径約0.6ｍの円形プランで断面凸レンズ状の掘り方に板石が内低外高に置かれている。板石の中には焼け石もあり、埋土中には約1cm角の炭が多く混じっていた。切り込み面は確認されていないが、石の状態から黒色土中より上であるといえる。

2　遺　　物

A　土　　器

(1)　出土状況（図45）

縄文時代の土器の総量はコンテナ半分程と少ない。完形あるいはそれに近く復元できるものはなく小破片がほとんどである。年代的には押型文土器を中心とした早期が主で、一部前期・後期の土器が加わる。

出土層位は確実な所では黒色土と黄色粘質土層との中間漸移層から押型文土器が出土している（図4参照)。また、谷部の調査で黒色土をほとんど取りさった後にＫ・Ｌ—12～14地区で比較的まとまって押型文土器・無文土器などが出土している。

分布状況は、前述した谷状地のＫ・Ｌ—12～14区が最も多く、Ｊ・Ｋ—８・９区、Ｐ・Ｑ—13～15区、Ｊ・Ｋ—20・21区などでも少量ながら出土している。なお谷状地については西半分しか黒色土を除去して調査していないので、Ｋ・Ｌ—12～14区の土器の分布はより東へ広がる可能性が高い。

類別の分布は撚糸文Ⅱ類がＪ・Ｋ—20・21区に集中している以外は特に類別に集中してはいない。

なお、押型文Ｉａ類の24はＫ—12区出土片と約25ｍ隔てたＰ—14区出土片とが接合しており、撚糸文Ⅱ類の42はＪ—13区出土片と約35ｍ隔てたＪ—20区出土片とが接合している。

(2)　分　　類

縄文土器の分類はまず文様別にＩ～Ⅵ類に大きく分け、さらに類の中を文様・形態・胎土・焼成などの要素を加えて細分している。

Ｉ類（図46　1～41）　押型文をＩ類とする。さらに楕円文をＩａ類（1～28）とし、山形文をＩｂ類（29～37）とし、楕円文＋山形文をＩｃ類（38）とし、格子目文をＩｄ類（39）とし、変則的格子目文をＩｅ類として細分する。なおさらに文様の特色や施文方法によっても細分したがそれについては後述する。出土点数はＩａ類が39片、Ｉｂ類が29片、Ｉｃ類が１片、Ｉｄ類が１片、Ｉｅ類が２片である。

Ⅱ類（図47　42～48）　撚糸文をⅡ類とする。いずれも間隔の開いた撚糸文を横走させるものである。14片出土。

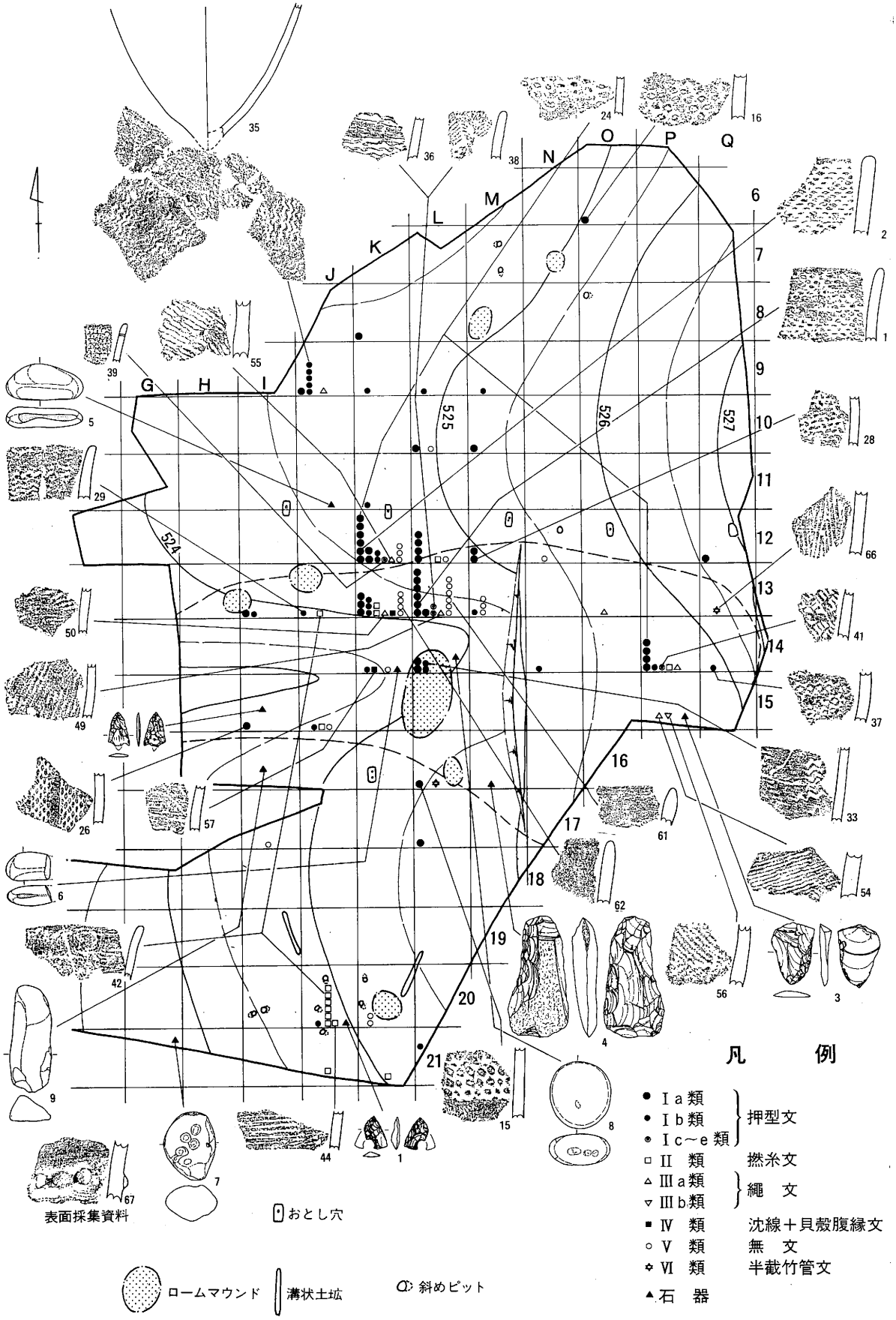


図45　縄文時代遺物分布図　1:500　遺物1：4

Ⅲ類（図47　49～56）　縄文をⅢ類とする。さらに斜縄文をⅢａ類（49～55）、羽状縄文をⅢｂ類（56）とする。Ⅲａ類が７片、Ⅲｂ類が１片出土している。

Ⅳ類（図47　57～59）　沈線文と貝殻腹縁文をもつものをⅣ類とする。３片出土。

Ⅴ類（図47　60～64）　無文のものをⅤ類とする。他類の無文部を含んでいると考えるが、後述するように共通する特色をもつ破片が多く、他類の無文部は少ないと考える。32片出土。

Ⅵ類（図47　65・66）　半截竹管による集合条線をもつものをⅥ類とする。２片出土。

Ⅶ類（図47　67）　頸部に突帯をめぐらすものをⅦ類とする。１片出土。

(3)　早期の土器

Ⅰ類押型文土器と、Ⅱ類撚糸文、縄文Ⅲａ類の49～50、Ⅳ類沈線＋貝殻腹縁文、Ⅴ類無文の一部が早期に比定される。

押型文　押型文は前述したように大きく楕円文と山形文と他３種に分けられるが、さらにその中を細分できる。

楕内文Ⅰａ類は、横位施文で楕円の形が米粒状ないし菱形に近く楕円間のすき間がせまいa_1類（1～14）と、楕円の形が円形に近く楕円間のすき間が広くやや間のびする感があるa_2類（15～25）、縦位施文のa_3類（26・27）、楕円を山形文風に並べたa_4類（28）に分けられる。a_1類が25片、a_2類が11片、a_3類が2片、a_4類が１片ある。

ａ類の施文は主として文様間に無文部がなく密接して施文される横位密接施文だが、中には無文部をわずかにもつものがa_2類とa_3類に若干ある（15・17・18・25・26）。５・10は口縁下にわずかな無文部をもつ。楕円の大きさはa_1類で長径４～７㎜、a_2類で同７～９㎜、a_3類で同４㎜、a_4類で５㎜をはかる。施文原体の長さは良く観察できるものでみれば、１が25㎜、２が41㎜、15が23㎜である。(注1) また同一の楕円が１・２・15・24・26などで１つおきに認められるので原体には一周に２個の楕円が彫られているものと復元される。さらに同一楕円の間隔から原体の直径を復元すれば、１は13㎜÷π（パイ）＝4.1㎜となる。同様にして２は5.1㎜、15は4.8㎜、24は5.1㎜、26は4.1㎜となり原体は直径４～５㎜に復元される。

形態は口頸部がわずかに外に開くものと思われる。胎土に砂粒を少量含む。焼成は概して良好、黄灰色～茶色系を呈する。

山形文Ⅰｂ類は、いわゆる普通の山形文b_1類（29～35）、やや横長に変形したb_2類（36）、連続菱目文風のb^3類に分けられる。b_1類が27片、b_2・b_3類がそれぞれ１片出土している。

施文は口縁部近くでは横位だが、底部に近づくに従って斜位あるいはランダムとなる。また、無文部が楕円文土器に比べて多いようである。原体の長さは33で26㎜、原体の直径は36で5.7㎜と復元される。29・30ともに口縁部はわずかに外へ開いている。35は直角に近い角度で広がる尖底で小さな乳房状突起が付くであろう。

楕円文土器に比べて残りが悪く文様が不明瞭なものが目立つ。胎土に砂粒を含む。焼成は良好、黄灰色～茶色系を呈する。

Ⅰｃ類（38）は楕円文と山形文が組み合わさっているもので、上位に山形文、下位に楕円文が付く。この山形文はⅠｂ類の山形文に比べ線が細い。

Ⅰｄ類（39）は格子目文で、原体の長さは20㎜に復元できる。口縁下に焼成前穿孔の小孔がある。

Ⅰｅ類（40・41）は変則的な格子目文とでも呼ぶものが横位に押捺されている。胎土に砂粒を多量に含む。焼成が悪いためか残りは良くない。暗茶褐色を呈する。

撚糸文　撚糸文Ⅱ類（42～48）はいずれも間隔の開いた撚糸文を横位ないし一部やや斜位に施文するものである。無文部が目立つことも47・48などからうかがえる。特に48は４条１単位（幅12㎜）の撚糸文が

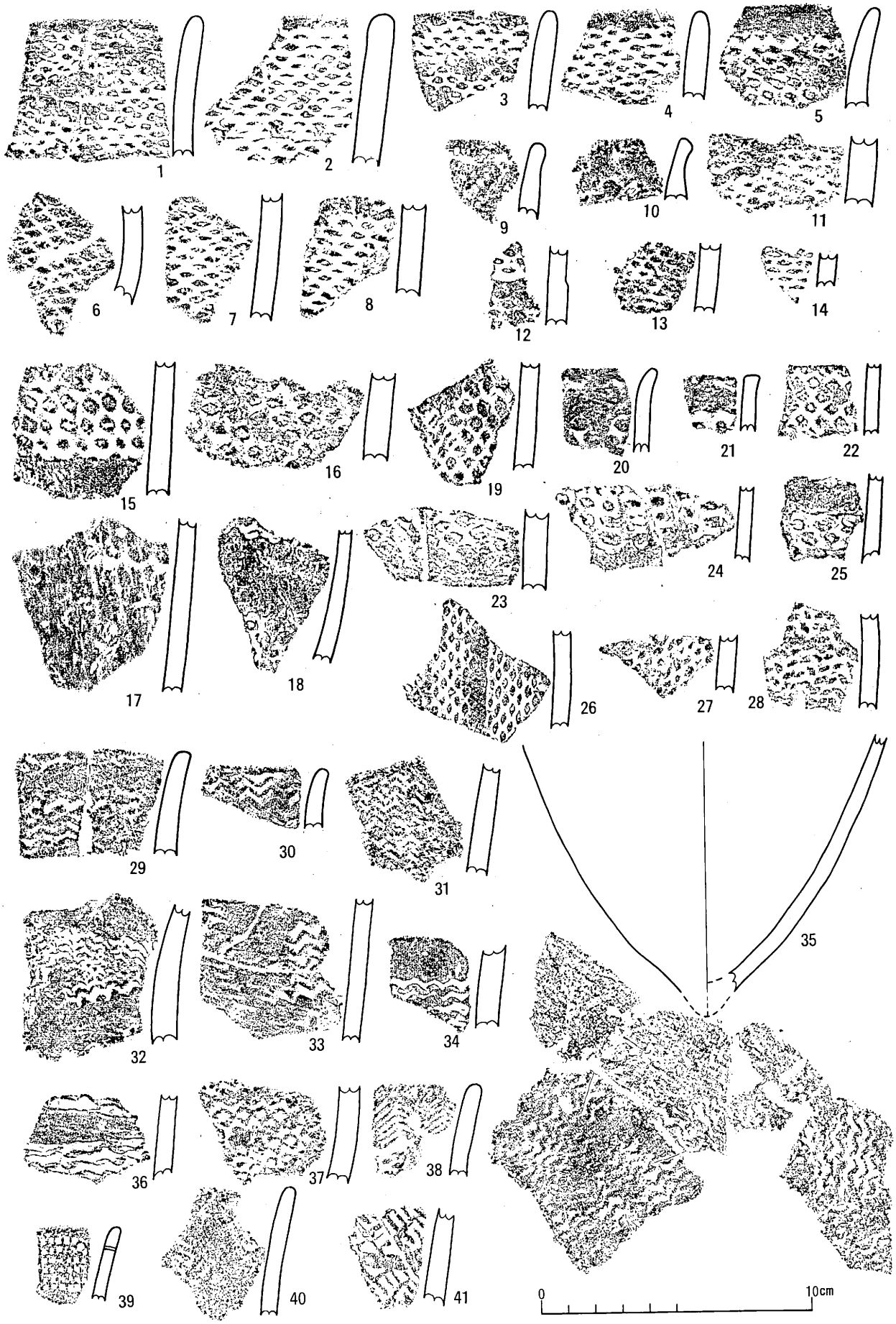

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
19
20
21
22
23
24
25
17
18
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
0
10cm

図46　出土土器　1　　1：2

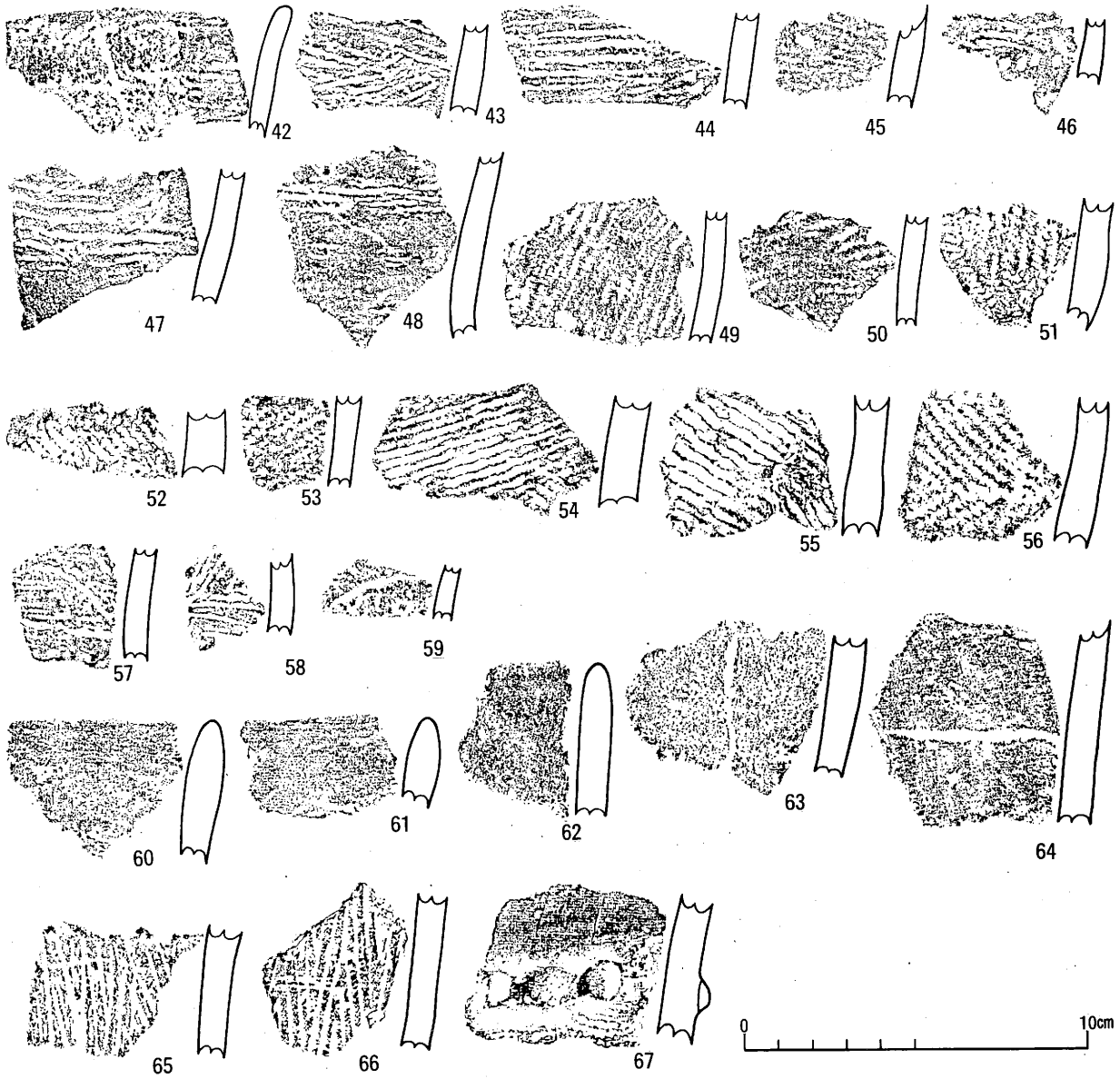


図47　出土土器　2　　1：2

間隔をあけて三帯施されていることがわかる。46は絡条体圧痕らしき押圧痕がめぐる。いずれも胎土に砂粒を少量含む。焼成は良好。茶色系を呈する。

縄文　縄文Ⅲ類のうち49・50が早期に比定される。他の縄文に比べ１単位が小さく、押圧痕は浅い。形態も押型文あるいは撚糸文土器によく似ている。谷状地のＫ・Ｌ―12～14区で出土していることも早期に比定する根拠である。胎土に砂粒を少量含む。焼成は良好。茶褐色を呈する。

沈線＋貝殻腹縁文　Ⅳ類（57～59）はいずれも小片ではっきりしないが、58は文様の残りが良く、沈線の間に貝殻腹縁文を配しているのがよくわかる。胎土に砂を多く含む。焼成は良好。暗茶灰色を呈する。

無文　Ⅴ類無文土器のうちの、外面はナデで内面はミガキと思われるほど平滑に仕上げられ、外面は淡黄灰色、内面は暗灰色を呈し、焼成良好、残りが良いという共通する特色をもった一群（60～63）は早期に比定されよう。

口縁部（60～62）はやや肥厚しながら先端へ移向し端部は尖りぎみとなる。器壁は厚手である。胎土に砂を多く含む。25片出土しているが、そのほとんどが谷状地のＫ・Ｌ―12～14区で押型文土器と一緒に出

土している。(注2)

小結　これらの早期の土器群は、押型文土器において、楕円文が山形文を量的に凌駕すること、密接施文が主体となり確実に帯状施文と認められるものがなく、かえって不規則な方向の施文がみられることなどの点から、細久保式併行期に比定される。

(4)　前・中期の土器

前期に比定されるのは、縄文Ⅲ類52～56、半截竹管による集合条線をもつⅥ類65・66である。Ⅵ類は諸磯C式に特徴的なものであり前期後半に置かれよう。

Ⅶ類67は頸部に突帯をもつもので、突帯は押圧によって波状をなす。突帯以下には縄文が施される。口頸部が外方に開く形態のものと考えられ、中期末葉に比定されよう。

注1　土器は乾燥・焼成の段階で収縮するので実際はこの値より少し大きくなる。このことは後述の原体直径の復元値についても同様である。

注2　厳密な意味では共伴と言い切れないが、黒色土を取りさった後に押型文あるいは無文の土器片が出土していることは、同層位の一定の根拠となると考える。

※　土器の分類、年代比定については㈶長野県埋蔵文化財センター広瀬昭弘・黒岩隆両氏のご指導を得たが、誤りがあれば筆者の責任である。

参考文献

『長野県史』考古資料編全1巻4　1988・3
『樋沢押型文遺跡調査研究報告書』　1987・3　岡谷市教委
『縄文早期の諸問題―講演・発表要旨』　1988・9　群馬県考古学研究所

B　石　　器

(1)　出土状況（図45）

縄文時代の石器は、総量でコンテナ約1箱分ある。剥片がほとんどであり、製品は少ない。石質は大半が安山岩で、黒曜石・頁岩が少量ある

出土層位は基本的には黒色土層下位から、黄色粘質土層との漸移層にかけての層であるが、土器量で最も多い早期の土器と厳密に層位的に共伴する製品はない。ただ、図示した石鏃1点（2）と、石斧（4）・磨石（6）・叩き石（8）が黒色土層の下位から出土しており、石鏃（1）は撚糸文土器が集中するJ―20区から出土している。

なお、今回図示した石器は、定形的な石器の一部だけで、他にも加工された石器は少なからずある。今後何らかの方法で発表したい。

(2)　出土石器（図48）

1は抉入の特徴的な凹基無茎鏃で、鍬形鏃と考えられる。一翼を欠く。黒曜石製。1.1g。

2は凹基有茎鏃で、扁平な作りものである。安山岩製。0.9g。

3はスクレイパーで両側縁に刃を作り出している。白色味の強い頁岩製。

4は打製石斧で、頭部より刃部が幅広の撥形のものである。一面に自然石表面を残している。安山岩製。長さ8.6cm、重さ69.1g。

5・6は磨石で、ちょうど手に持ちやすい石の直線的な側方を磨面として使用しており、使用痕が良く残っている。砂岩製。

7・8は叩き石で、7は表裏両面に使用痕が残る。8は表面に1か所側面に3か所の使用痕がある。7・8とも砂岩製。7は0.9kg、8は1.45kg。

9は敲打器と考えられるもので、ちょうどにぎりやすい断面三角形の棒状石の一端が叩き剥がされている。結晶片岩製と思われる。重さ1.2kg。

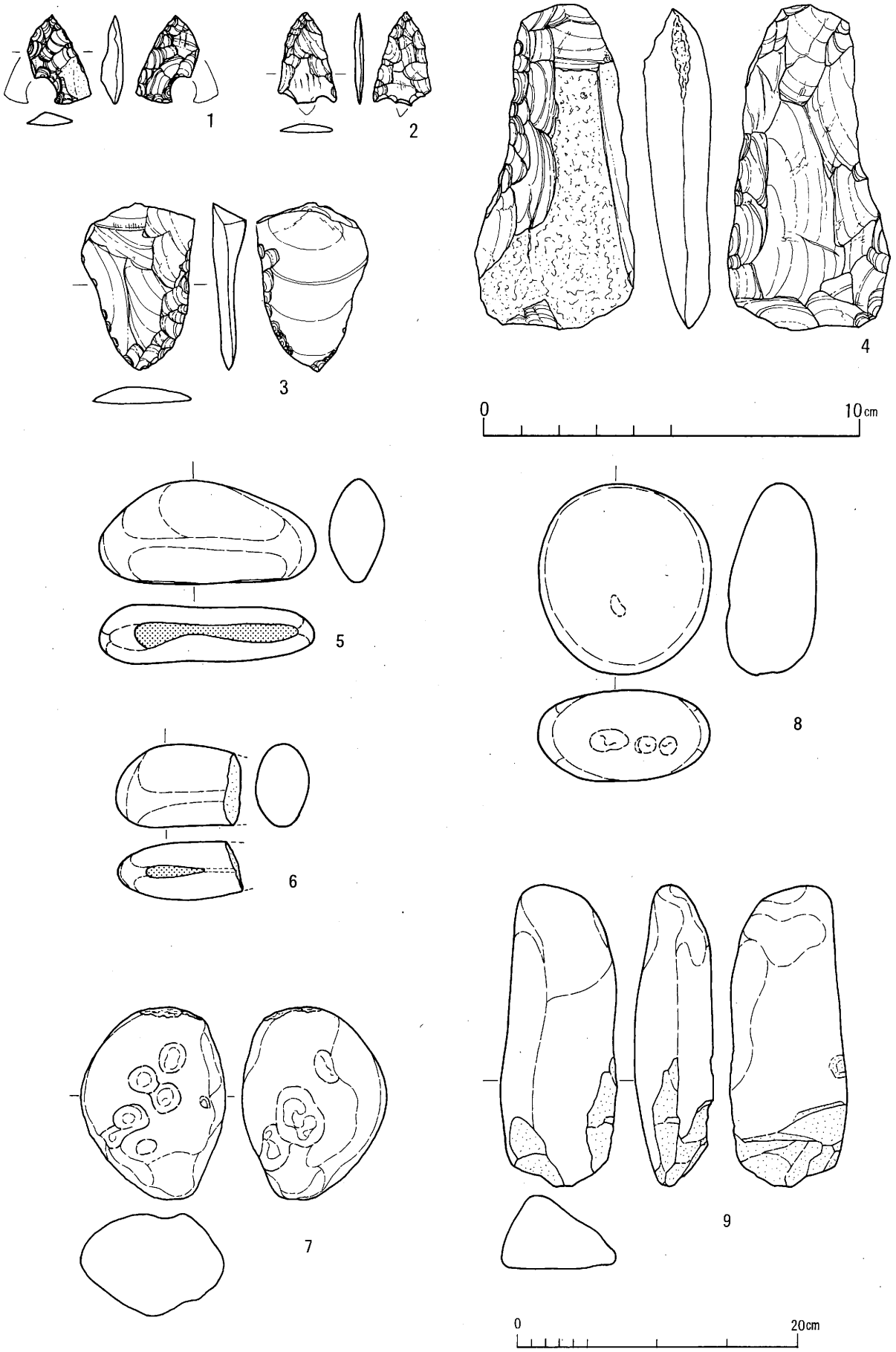


図48　出土石器　1~4 1:1.5　5~9 1:4（アミ目は磨部）

第4章　平安時代

1　遺　　構（図49）

平安時代の遺構は調査地中央部谷状地より北部で検出されている。井戸２基、溝、土坑・掘立柱建物址がある。なお、井戸を中心とした谷状地東部の黒色土上部からは平安時代の遺物が集中して分布している。くわしくは遺物の項でのべる。

A　井　　戸

井戸は木組みのＳＥ１と素掘りのＳＥ２がある。

(1)　ＳＥ１（図50）

ＳＥ１はＱ―14地区にあり、東西に傾斜した沢状地形の高部に位置し、自然湧水を利用する井戸と思われる。プランは上部約２ｍ×２ｍのほぼ円形すり鉢状を程し、覆土には多くの植物繊維を含んでいた。土層調査などから推測するに、先ず湧水のある沢部分に背板を四方形に枠組みをし、土留めを作って水溜井戸を作り、さらにその中に中空の自然丸太を井戸側として置いて、水吸み場として利用したものと思われる。発掘中も湧水があり調査が難渋した。背板で枠組みをした内部からは、木札や、平安時代の土器片や、漆製品、くるみ、鳥の卵などの遺物が出ている。

(2)　ＳＥ２（図51）

ＳＥ２はＰ―13地区にある素掘りの井戸である。出土遺物がないので平安時代とする確たる根拠がないが、平安時代遺物分布地にあることなどから一応平安時代の井戸としておく。底部直径0.8ｍ、深さ約1.7ｍ、上部はロート状に開口する。底に人頭大より大きめの石が単独であった。この井戸も発掘中も水が湧き水深１ｍ程になった。

B　溝・土坑・掘立柱建物（図49）

(1)　溝（ＳＤ１～３）

等高線に直交して東から西へ走る溝が３本検出されている。

ＳＤ１は調査地東端から西北へ走る溝で、幅0.6～0.8ｍ、約30ｍ分を検出している。断面凸レンズ状。西の先端はやや西へ屈曲する。

ＳＤ２はＳＤ１に並行して調査地西北外へ延びる溝で、幅0.5～１ｍ、約26ｍ分を検出している。断面は凸レンズ状。

ＳＤ３はＳＤ１の西先端部近くから西へ延びる溝で調査地外へ続く。幅約0.6ｍ、８ｍ分を検出している。断面は凸レンズ状。

これらの溝は埋土中に平安時代の土器片を含むので平安時代としておいたが、確証はない。

(2)　土　　坑（図49）

炭を多量に含んだ土鉱が３基ある。代表的なものがＬ―10区にあるＳＫ15である。ＳＫ15は直径1.0ｍの円形プランで、断面は凸レンズ状。底一面に炭が約２～５cm堆積していた。焚き火の跡だろうか。この土坑も出土遺物はなく平安時代とする証拠はない。

(3)　掘立柱建物（図49）

建物としてまとめるにはやや無理があるが井戸ＳＥ１・ＳＥ２に北隣するＰ・Ｑ―11区に平安時代と考

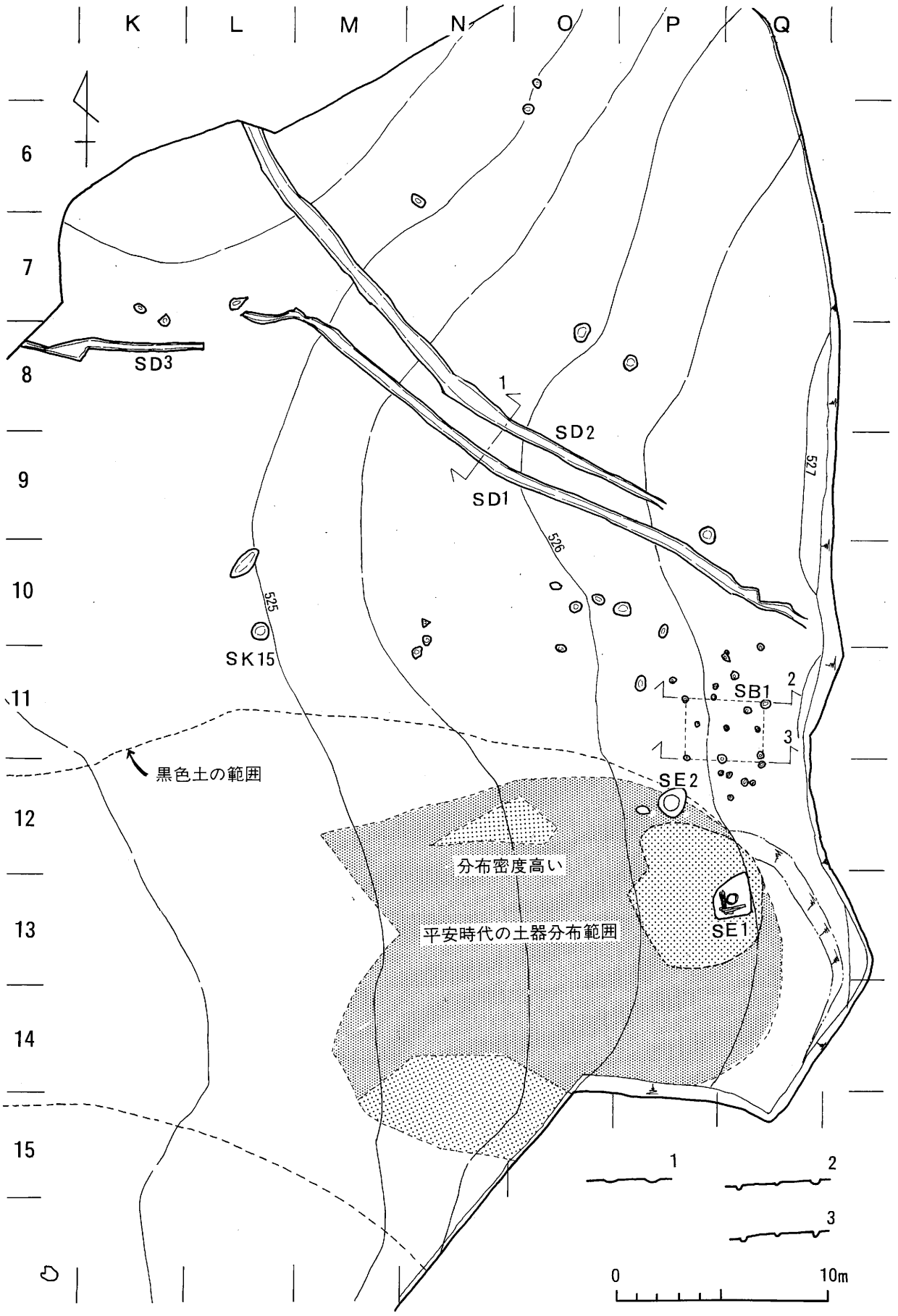


図49　平安時代の遺構　　1：250

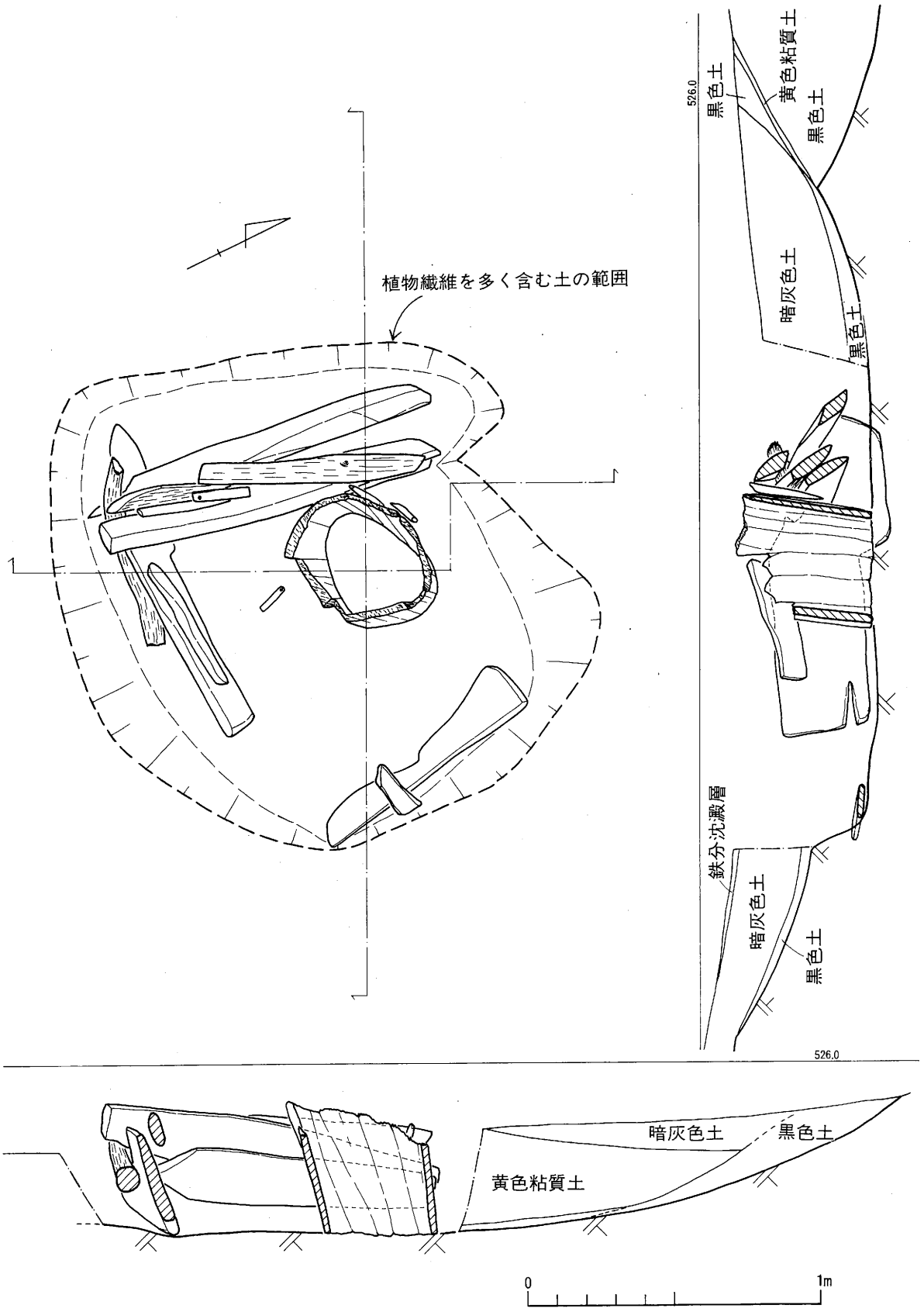


図50　井　戸　ＳＥ１　　1：20

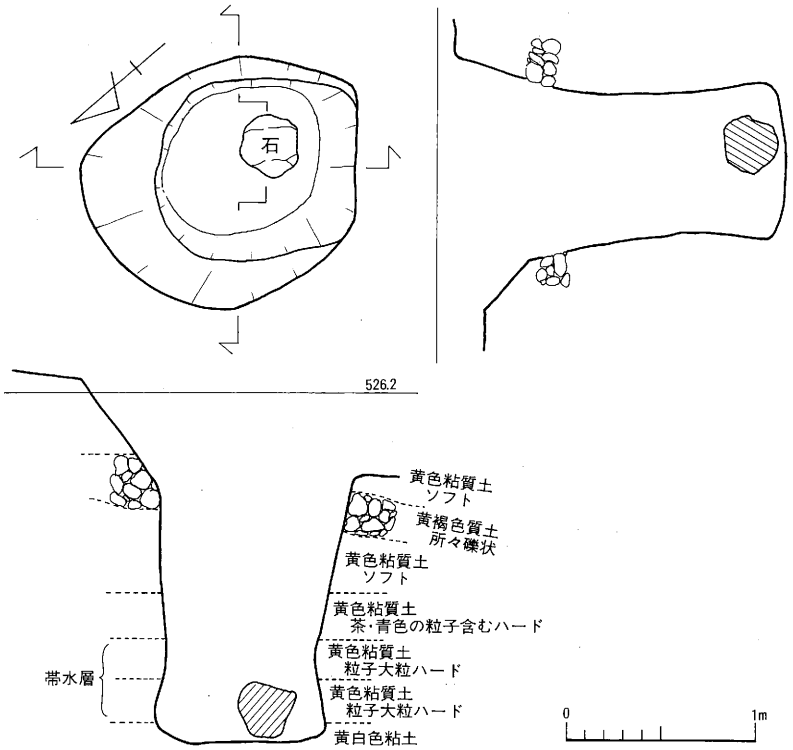


図51　井　戸　ＳＥ２　　1：40

えられる柱穴が集合している。柱穴はいずれも円形プランで直径0.2～0.4ｍ、深さ0.1～0.2ｍ。畑造作時に削平された所とされるので柱穴が浅いのだろう。１棟が何とか建物としてまとめられようか（ＳＢ１)。建物とすれば、１間(2.5ｍ)×２間(3.6ｍ)の東西棟の建物で、柱穴の規模等から定住的な建物でなく、一時的な小屋であろう。

２　遺　　物

Ａ　土器・陶器

(1)　出土状況（図49）

平安時代の土器・陶器は、調査地中央部の谷状地上端にある井戸ＳＥ１を中心とするＭ～Ｑ―12～15区に集中して出土している。出土層位は黒色土層の上位であり、特にＳＥ１の西～南では焼土や炭を多く含んだ層がありそこからまとまって出土している。ただし出土状況は小片が大半で、こわれた後に投棄されたような状態である。ＳＥ１からも小破片が少量出土しているのみである。破片が多くまた個体の識別がしやすい須恵器の甕でみれば、№58はＳＥ１・Ｎ～Ｑ―12～15地区に破片が散在しておりその分布範囲は20ｍ×20ｍにおよぶ。

土器・陶器の出土総量はコンテナ約５箱分であり、内訳は黒色土器椀と土師器椀が１箱分、土師器甕が２箱分、須恵器大甕片が２箱分、灰釉陶器が若干ある。里色土器椀と土師器椀の割合はおよそ黒色土器３：土師器１である。

須恵器坏・皿類はない。

(2)　出土土器・陶器（表３・図52～55）

黒色土器（図52　１～21・31）　黒色土器には椀(注1)（１～21）・鉢（31）がある。椀はいずれもロクロ成形

で、高台をもたない。口縁端部は外方にやや屈曲し、体部は内湾する。大きさに口径16cm以上のもの（1・2・4）、約11cmのもの（7・13・14・17）、約13cmのものがあり口径13cm内外のものが多い。底部調整をみれば、ロクロケズリないしヘラケズリされるものは数点で、ほとんどがロクロ糸切り痕をそのまま残す（表3参照）。胎土は、大半があまり砂を含まないが、中に数点砂粒を多く含むものがある。色調は茶色系統のものが大半である。21は「田」と思われる墨書がある。

鉢（31）は、深い、平底の鉢と考えられるもので、片口が付くかもしれない。内面および口縁部外面はていねいにヘラミガキされる。胎土に砂粒を含む。

土師器（図52　22～30・32　図53　33～45）土師器には椀・壺・甕がある。

椀（22～30）はいずれもロクロ成形で、高台をもつものはない。形態は基本的に黒色土器椀に等しい。大きさに口径16cm前後のもの、口径13cm前後のもの、口径11cm前後のものがあり13cm前後のものが多いことも基本的に黒色土器椀に等しい（表3参照）。大半は胎土に砂を含まないが、数点砂粒を多く含むものがある。色調はくすんだ赤褐色系統である。

壺（32）は1個のみ出土。端部でやや肥厚する短い口縁部をもつ。内外面ともていねいにヘラミガキされる。胎土に砂粒を含む。色調は明るい赤褐色。

甕（33～45）は口径20cm以上のもの（33～36）と、口径16～18cmのもの（37～39）、口径10～15cmのいわゆる小型甕（40～45）とがある。口縁部はいずれも頸部の強いナデによって二段に見える形態のものがほとんどである。図示していないが、胴部はナデの後ケズリを加えるものは少なく、かえって平行ないし格子タタキ目をもつものが多い。底部は平底と丸底がある。

灰釉陶器（図53　46～53）　灰釉陶器には椀（46・47・49～51）、皿（48）、小壺（52・53）があり、図示できるものはすべて図示した。46は椀の口縁部で釉は漬け掛けと思われる。47は見込みと底部の一部のみが無釉と施釉範囲が広いが、施釉方法は漬け掛けと思われる。見込みに重ね焼痕がある。

49は三日月高台をもつ漬け掛けの椀で、見込みが転用硯として使用され、外底に天□作𨻶□の墨書がある。50も三日月高台をもつ底部片で見込みと外底が転用硯として使用されている。

皿（48）は唯一全形のわかるものである。釉は刷毛塗りと思われる。

52・53は小壺と考えられる。53は底にロクロ糸切り痕を残す。

以上の灰釉陶器は猿投黒笹90号窯～折戸53号窯式、東濃光ヶ丘1号窯～大原2号窯式に比定されるものと思われる。

須恵器（図54　54～図55　70）　須恵器には壺・瓶・甕がある。54は壺ないし瓶の頸部である。黒灰色の自然釉がかかっている。55・56は底部片。56は水滴か。

57は突帯付四耳壺である。体部外面は細かい平行タタキ目がナデ消されている。内面には所々に黒色の付着物がある。

58～60は大甕の体部で、58は大きく開く口頸部をもつ。59は肩の張るもので胴最大径は47.5cmをはかる。60は59ほど肩が張らない。胴最大径55.4cmをはかる。59・60ともに外面は平行タタキの後カキ目、内面はロクロナデされる。

61～70は甕胴部のタタキ目の資料で、外面は格子および平行タタキだが、内面は平行タタキ（67）、同心円タタキ（62）、放射状のもの（61）などバラエティに富んでいる。

(3) 小　結

年代　これらの平安時代の土器・陶器は一括性に問題があるが、灰釉陶器の年代観や、食器椀皿類における黒色土器と土師器の割合が黒色土器3：土師器1であること、およびこれらの底部調整がなされず糸切り痕をのこすものが大半であること、須恵器坏皿類がないこと、須恵器突帯付四耳壺の存在などから、

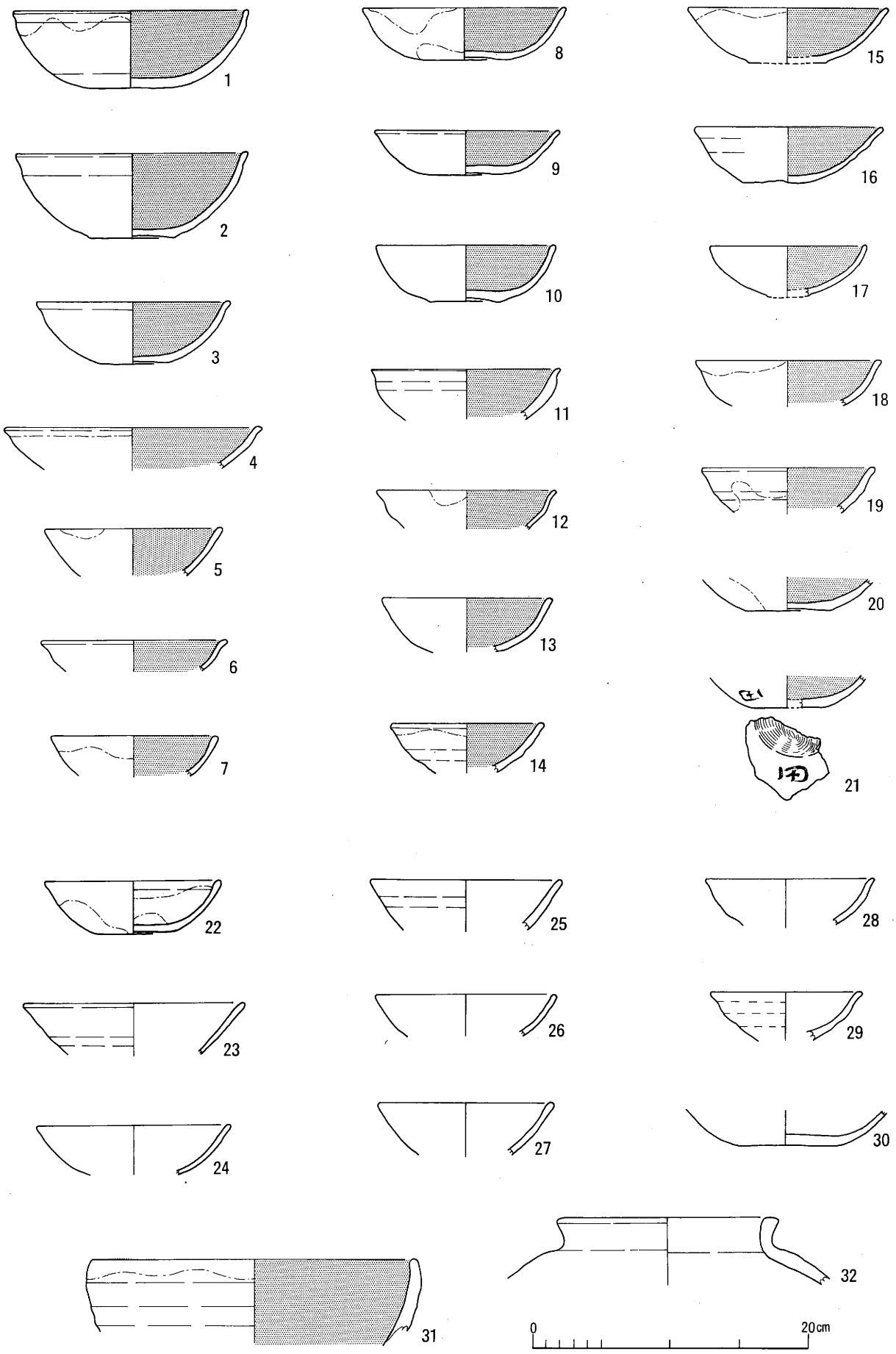

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
0
20cm

図52　出土土器 1　　1：4

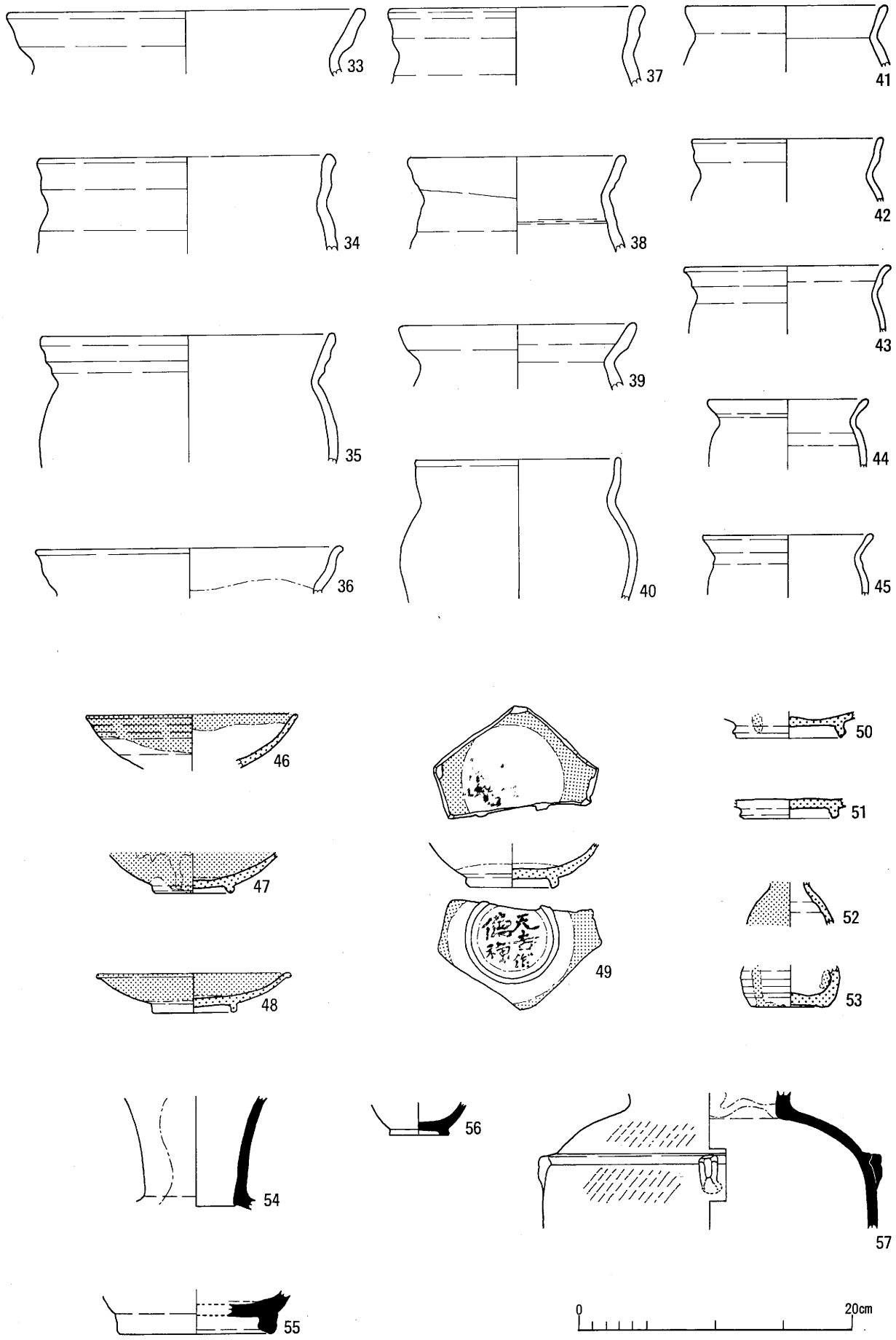


図53　出土土器・陶器 2　　1：4

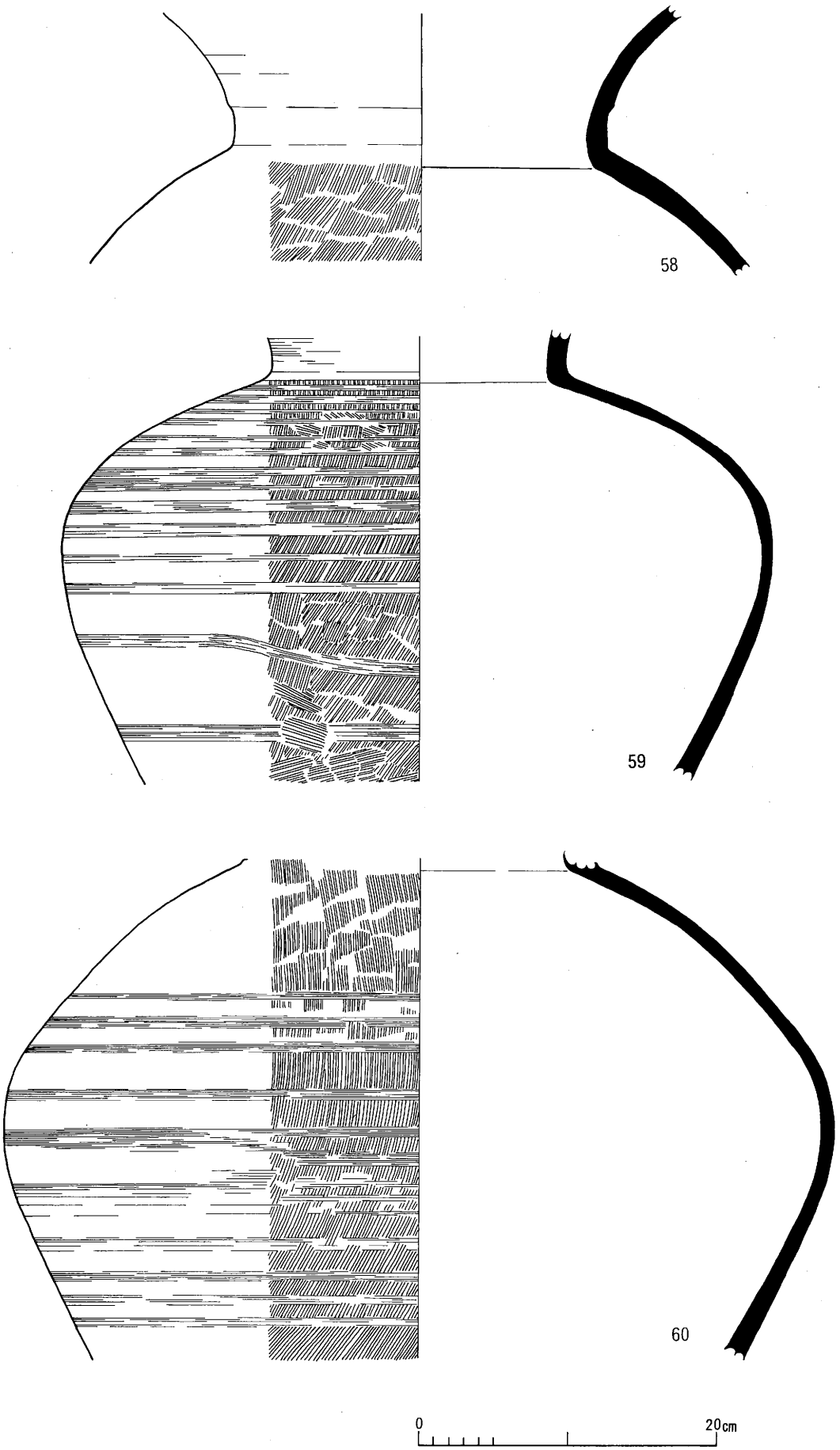


図54　出土陶器　3　　1：4

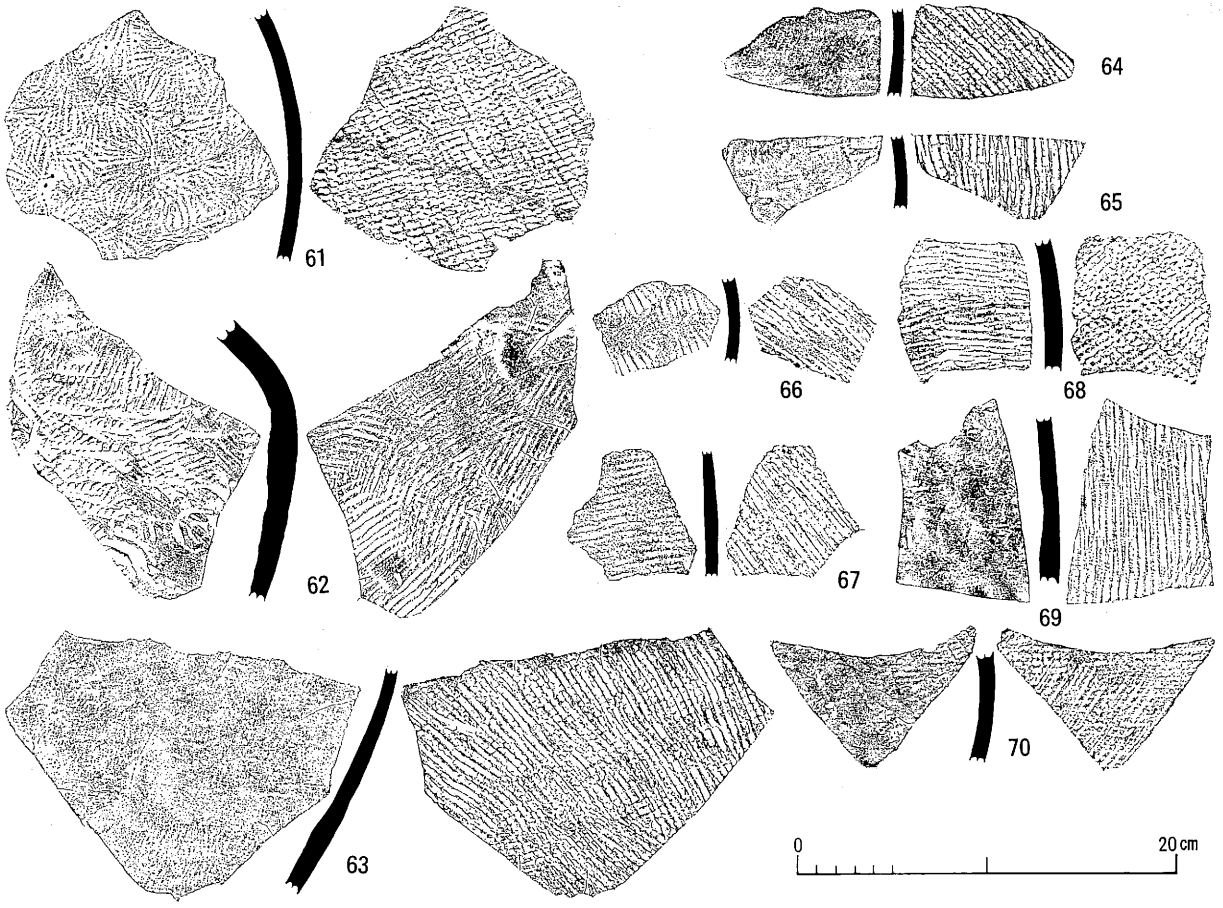


図55　出土陶器　4　　1：4

『長野県史』Ⅳ～Ⅴ期(注2)、10世紀代を中心とした年代に比定されよう。

土師器甕について　土師器の甕の口縁部の形態は、ほとんどが頸部の強い横ナデによって2段に見えるものである。この特色の甕は上野遺跡・長者清水遺跡・北原遺跡・田草川尻遺跡等の市内の平安時代の各遺跡でもみられるものである。口縁部が体部から「く」字形に屈曲し端部が内屈するいわゆる越後型の甕は北原遺跡・上野遺跡で認められるが、年代の古い北原遺跡では4割近く(注3)あるが、年代のより新しい上野遺跡では数点にすぎなく(注4)なる。先の口縁部が2段に見える甕を北信地方に通有な甕とすれば、年代が新しくなるにつれて北信に通有な甕が主体を占めるようになる傾向がうかがえる。この傾向が関田峠を介して越後に近隣する当遺跡でも認められることは興味深い。

墨書土器・転用硯について　当遺跡では墨書土器が2点（転用硯1点を含む）、転用硯が3点ある。

墨書土器の多くが1字あるいはマーク状であるのに対し当遺跡のNo.49の「天□作𨻰□」は遺跡の性格を考える上で注意される。

いっぽう3点の転用硯の存在は字が書ける人が当遺跡にいたことを示すものである。このことについては2つの解釈ができる。1つは当遺跡が特殊な「ムラ」であったという解釈であり、もう1つは当遺跡のような山中の小規模な「ムラ」（集落かどうかは検証されていないが）にも予想外に字が普及していたと考える方向である。

今この2つの解釈に明確な答えをもたないが、後者の方向がより当時の実状に近いのではないかと想像している。このことは平安時代の地方民衆像を考える上で今後の一つの研究課題である。

注１　坏と椀の名称については、高台の付かないものを坏、高台の付くものを椀とする見解もあるが、口縁部片では高台の有無が確認できないこと、高台が付かなくても底部が小さく内湾ぎみに開く体部の形態は「椀」と呼ぶ方がふさわしいと考えて土師器黒色土器については椀としている。
注２　笹沢浩　「(4)平安時代の土器」『長野県史』考古資料編全１巻４　1988
注３　飯山市教育委員会　『北原遺跡Ⅳ』　1985
注４　飯山市教育委員会　「上野遺跡の調査」『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ』　1990

Ｂ　木製品（図56～59）

木製品は井戸ＳＥ１の部材と、ＳＥ１埋土から出土したものがある。また木製品の他に竹製品・漆製品・種子などがある。なお樹種の同定については㈱パリノ・サーベイ社に依頼したものである（後述）。

ＳＥ１部材　１は井戸側で長径約45cm、短径約35cm、最大高約45cmの中空材である。内側に加工痕がはっきりとは認められないのであるいはもともと中空の幹材を使用したのかもしれない。上端は破断面なのでより高かったものだろう。外周部の厚さは３～５cm。外表に表皮は残っていない。腐食が進んでおり約５分の１周程は取り上げ時にくずれてしまい、取り上げた部分も極くやわらかい。樹種はオニグルミ。

２・３は割材で加工痕はなく、斧等で割った木端を利用したのだろう。２は背板である。２・３ともに長約50cm。

４は薄手の板材で長約45cm、幅６cm、厚さ約２cm。板目材。加工痕は肉眼ではよくわからない。樹種はモクレン属の一種である。

５・６は棒状品の一部分で消耗がはげしい。５は左端が、６は右端が杭先のように加工されているが刃痕は不明瞭である。

７は自然木で現地では長約65cmあったが極めて遺存状態が悪く取り上げ時にやわらかい部分が崩壊してしまい現存は約22cmである。表皮はついていない。樹種はハイノキ属の一種。

８・９は井戸側西側につきささっていた杭で、井戸側おさえ棒と考えられる。一端を削って杭にしている。表皮はない。樹種は８がヤマグワ属の一種、９がモクレン属の一種。８は長28cm。９は長37cm。

10は部材中最大の板材で板目材である。鍵形をしているのは、左方の凹部に13～15が重ねられていたので、腐食のためでなくもともと鍵形をしていたのだろう。表面には虫喰いの痕がミミズが這ったように残っているが、一面中央を縦走する大きな凹部は、加工痕こそ認められないが虫喰いではなさそうである。長約112cm、最大幅約43cm。樹種はモクレン属の一種。

11は６とともに東側に在ったもので、磨滅の進んだ板目材である。裏面右方に長５～10cm、深さ２～３cmの楕円形の抉りがある。長約81cm。樹種はモクレン属の一種。

12は背板で表皮が残っている。断面形は三角形で割面は２面ある。割面は後に加工されたかどうか不明瞭。長約72cm。樹種は鑑定していないが肉眼観察では他のモクレン属の一種とよく似ている。

13は板目の板材で、一側は端面でもう一側は尖っている。右方の端面側は一部腐食して欠いている。表面および端面の加工痕は不明瞭。樹種はモクレン属の一種。長約119cm、幅約22cm。一面中央に鋭利な刃物の刃痕が数十ヶ所ある。

14は背板で表皮が背面全面に残っている。割面は割った後に平滑に加工された様子はない。左方の両側にＶ字形の抉り込みがある。長約111cm。幅約20cm。樹種はモクレン属の一種。

15は背板だが、背面の左方は平らに削られている。表皮は右方にのみ残っている。割面も平らに加工されている。一端は三角形に尖らせているが、鋸状の工具ではなく斧のような工具を用いていると加工痕から推定される。長約112cm。幅20～25cm。樹種はモクレン属の一種。

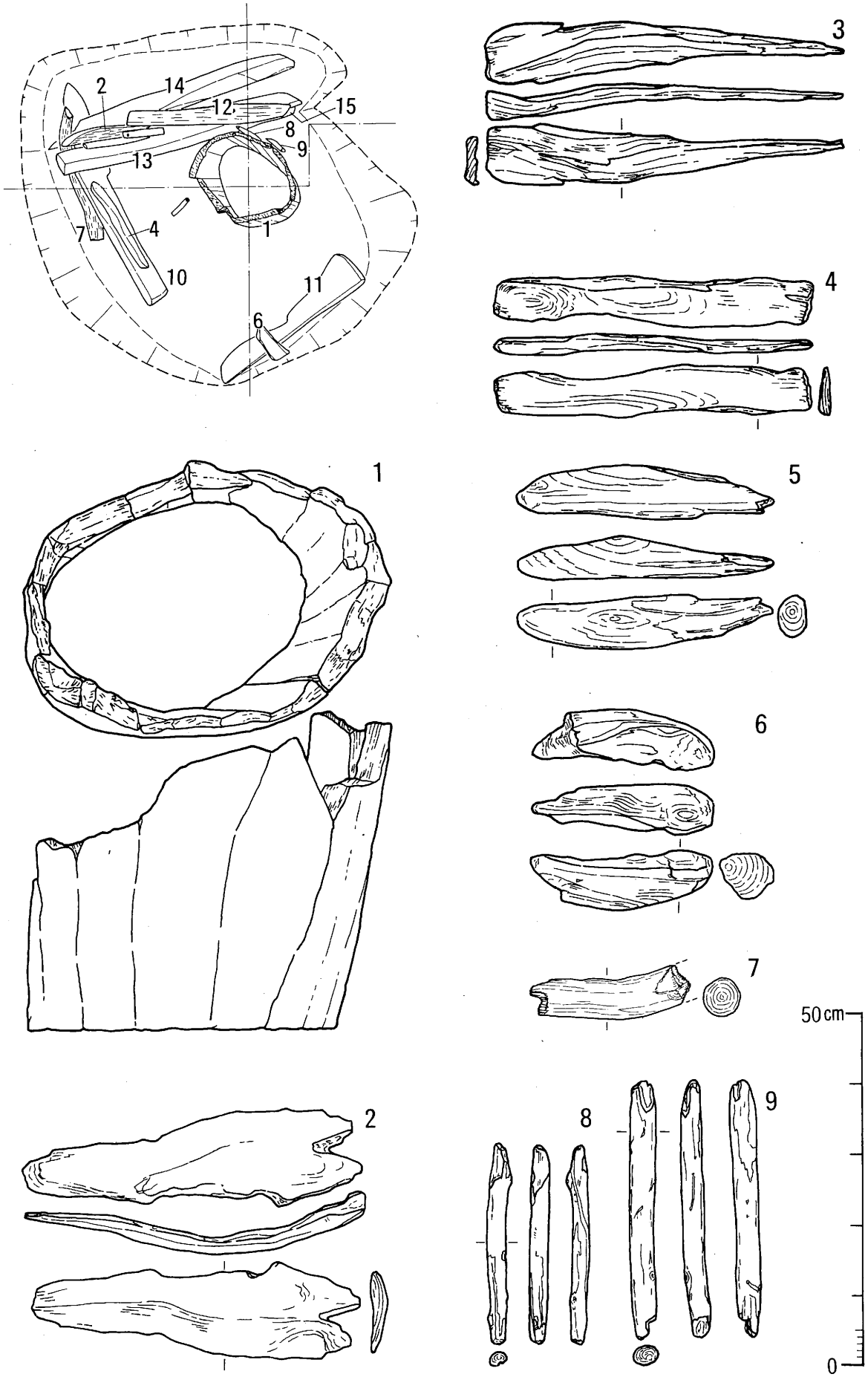


図56　ＳＥ１出土木製品 1　　1：8

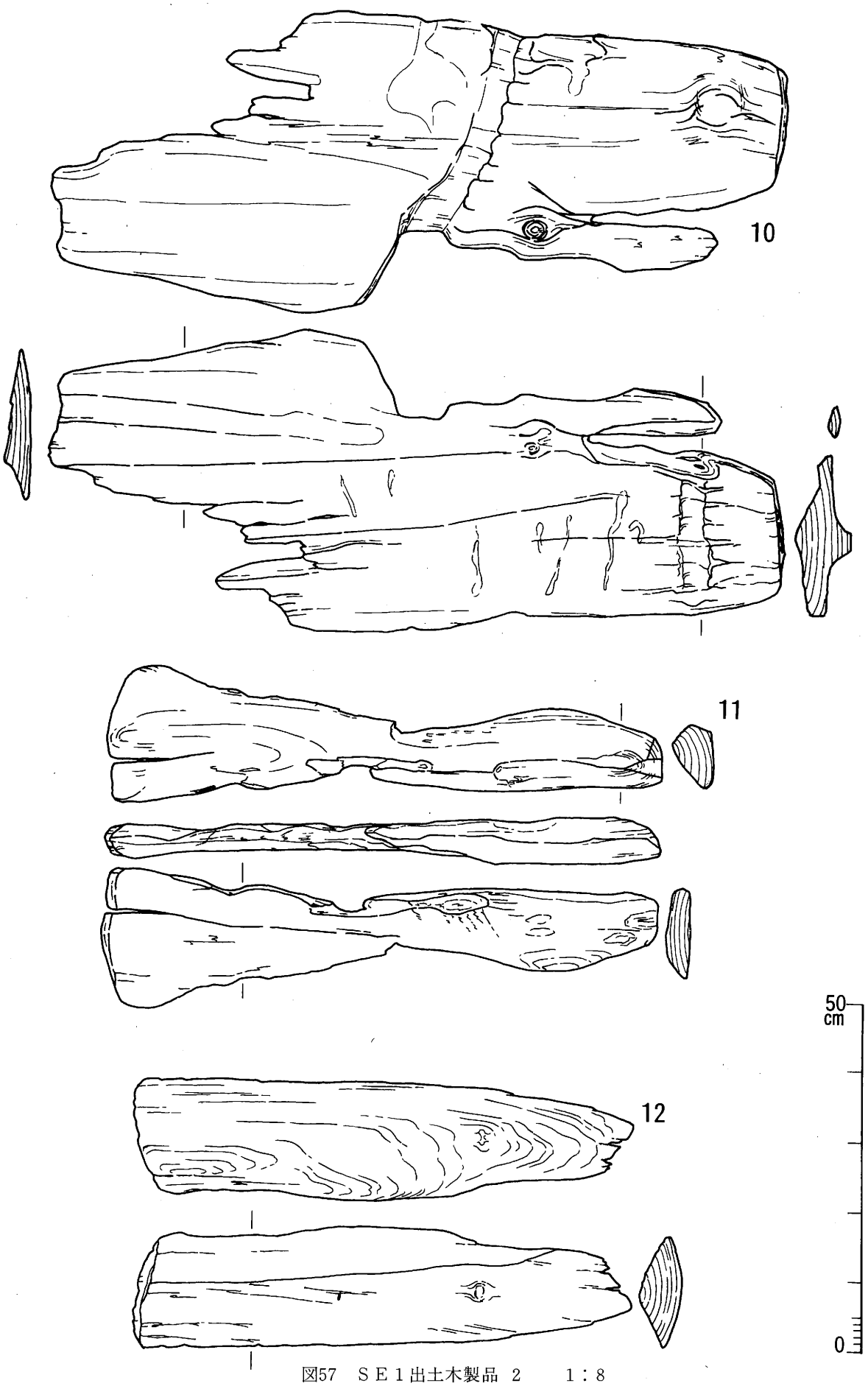


図57　ＳＥ１出土木製品 2　　1：8

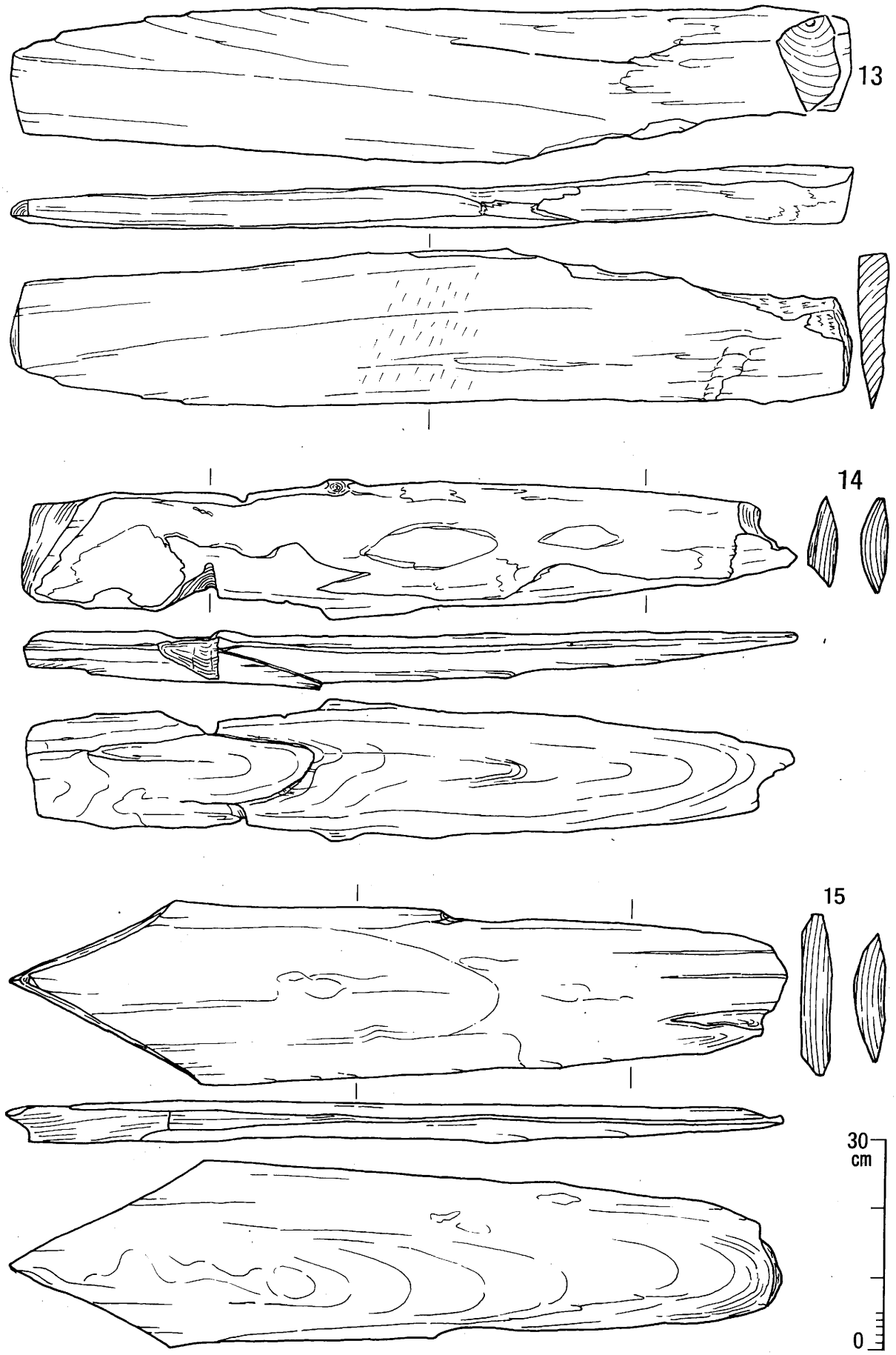


図58　ＳＥ１出土木製品 3　　1：8

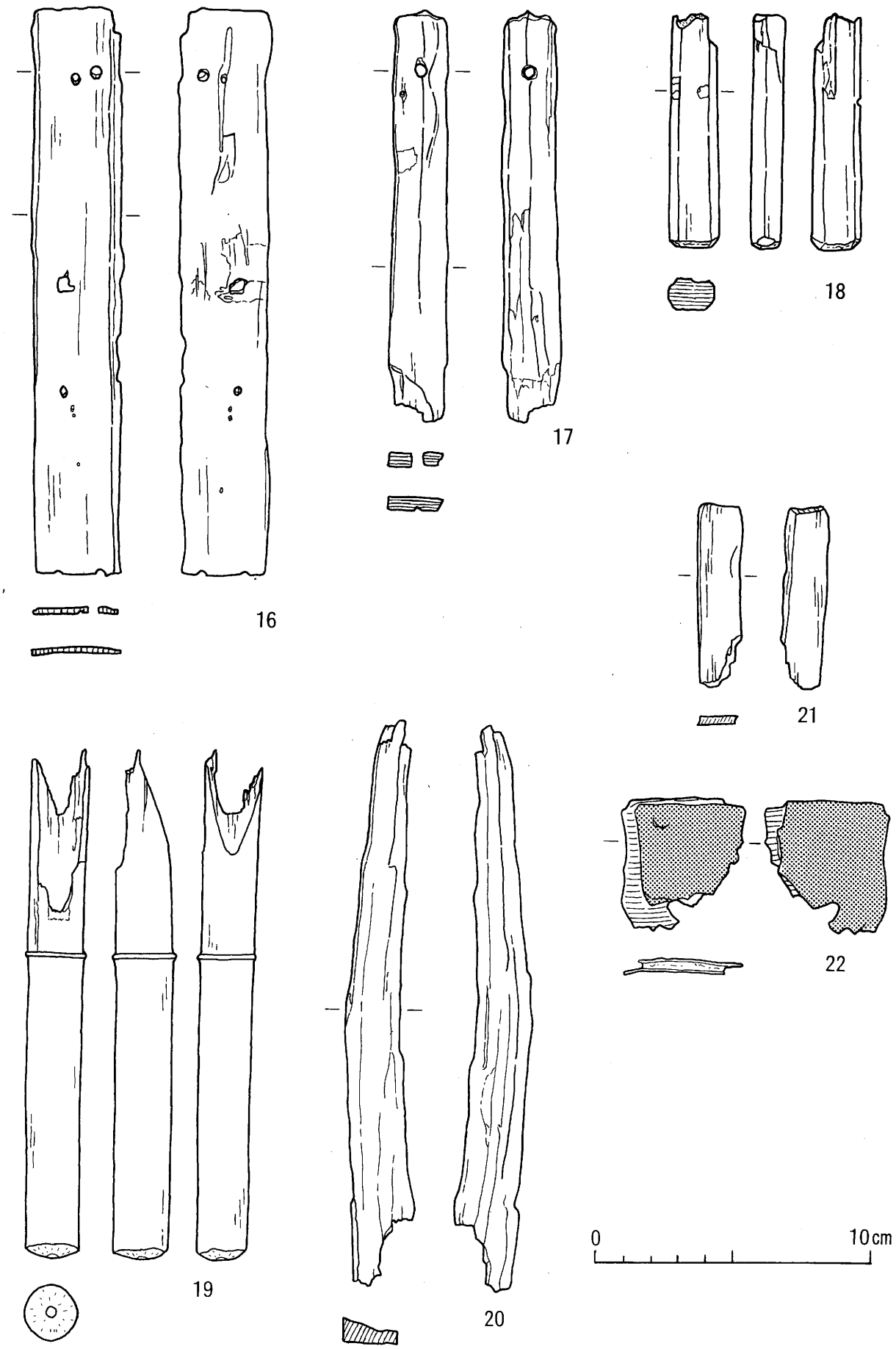


図59　ＳＥ１出土木製品・竹製品・漆製品　１：２

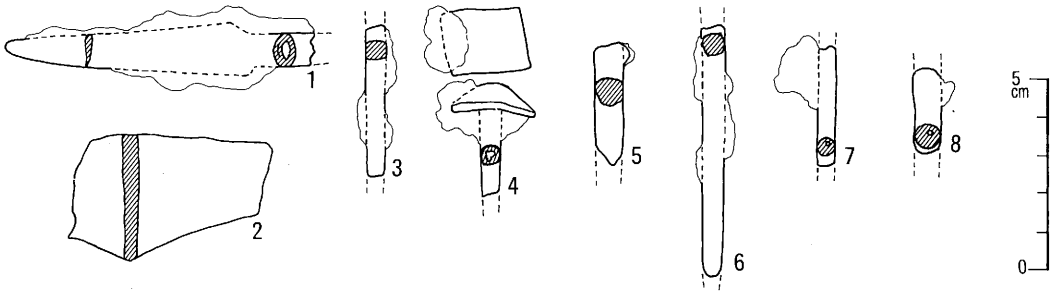


図60　鉄　製　品　　1：2

ＳＥ１出土品　16は薄い木札状品で、現存長20.5cm、幅3.2cm、厚さ１～２mmの正目材である。上端近くに２ヶ所の小穴があり下端に２ヶ所の小穴の痕跡がある。表・裏ともに平らであるが木簡といえるほど平滑ではない。樹種はスギ。

17も上端近くに小穴がある木札状品であるが、16に比べ厚手である。現存長15cm、幅1.9cm、厚さ約5mm。板目材。表裏および側面とも加工痕はない。樹種はスギ。

18はていねいに面取りされた棒状品。一端を欠く。小刀等の柄だろうか。一端がやや広い。現存長8.5cm、幅1.6～1.8cm、厚さ1.1cm。樹種はスギ。板目材。

19は竹製品で一端は斜めに切り込まれ、節は穴があけられている。現存長19.5cm、直径2cm。同様品と思われるものが他に２点ある。

20・21は正目板の破片で、20は一面が炭化している。

22は漆製品。やや赤味がかった黒漆である。口縁と思われる破片もあるので椀かと考える。

他に図示していないがトチの実の皮、クルミ種子、ヒョウタンかと思われる果実の皮が出土している（ＰＬ49）。

Ｃ　鉄製品（図60）

鉄製品も平安時代の土器と同様の黒色土層から出土している。

１は刀子と思われるもので、茎の先端を欠く。２は板状品。３～６は角釘と思われるもので、４は頭部ち四角い傘が付く。５は頭部が少し屈曲する。

７・８は断面円形の棒状品と思われる。

Ｄ　石製品（図61）

ＳＥ１から紡錘車と考えられる石製品が１点出土している。直径5.2cm、厚さ3.0cmの円筒中央に直径約1cmの穴を穿つ。表面は粗く仕上げられ、所々力物の傷痕がある。灰白色の軟質な砂岩製と思われる。重さ88g。

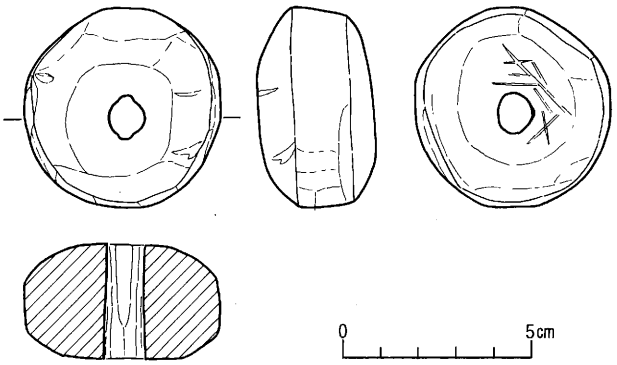


図61　平安時代の石製品　ＳＥ１出土紡錘車　１：２

表３　平安時代の土器一覧表　　（表中の数字の単位はcm）

黒色土器椀

No.	口径	器高	底部径	底部調整	備考
1	16.9	5.5	6.0	ロクロケズリ	外 赤灰褐色 残45%
2	16.5	6.0	6.0	ロクロケズリ	外 やや黒い 残50%
3	13.8	4.4	5.5	糸切り痕のこる	外 黒っぽい 残30%
4	18.5	—	—	—	口縁片
5	12.7	—	—	—	内 灰褐色の部分あり
6	12.3	—	—	—	口縁片 外 黒っぽい
7	11.9	—	—	—	外 黒っぽい
8	14.5	3.6	5.2	糸切り痕のこる	外 やや黒い 残50%
9	13.2	3.2	5.5	糸切り痕のこる	いびつ 残98%
10	12.8	4.0	5.1	〃	外 黒っぽい 残50%
11	13.5	—	—	—	外 黒褐色
12	12.9	—	—	—	口縁片
13	12.1	—	—	—	外 黒い部分あり 口縁片
14	11.0	—	—	—	
15	14.2	3.9	5.5	糸切り痕のこる	内 やや褐色 残30%
16	13.1	4.1	4.8	〃	いびつ 外 黒褐色 残65%
17	11.1	3.7	3.0	—	口縁片 外 ふち黒い
18	13.2	—	—	—	口縁片 外 黒っぽい
19	12.4	—	—	—	口縁片 外 黒っぽい
20	—	—	6.0	糸切り痕のこる	外 黒っぽい
21	—	—	5.2	〃	墨書「田」
—	—	—	5.6	〃	底のみ 内外 共に黒褐色
—	—	—	4.7	〃	
—	—	—	6.5	〃	
—	—	—	5.0	〃	
—	—	—	7.2	ヘラケズリ（静止？）	
—	—	—	5.8	糸切り痕のこる	
—	—	—	6.0	〃	内 黄褐色の部分あり
—	—	—	5.0	〃	
—	—	—	5.2	〃	
—	—	—	5.4	〃	
—	—	—	6.0	〃	砂つぶ目立つ
—	—	—	6.1	〃	
—	—	—	5.9	〃	
—	—	—	5.4	〃	
—	—	—	5.2	ロクロケズリ（周辺も）	
—	14.6	—	—	—	口縁片
—	12.4	—	—	—	口縁片 外 灰黒色
—	10.4	—	—	—	口縁片
—	11.6	—	—	—	口縁片 外 灰黒色
—	14.2	—	—	—	口縁片
—	—	—	5.1	糸切り痕のこる	内 やや褐色 外 黒くくすむ
—	—	—	4.9	〃	内 やや褐色 外 黒くくすむ
—	—	—	5.3	〃	
—	—	—	6.0	〃	
—	—	—	4.8	〃	
—	—	—	6.0	〃	
—	—	—	4.7	〃	
—	—	—	8.0	〃	内 灰黒褐色
—	—	—	4.8	〃	
—	—	—	6.2	〃	
—	—	—	5.0	〃	内 やや褐色
—	—	—	5.5	〃	内 茶の部分あり
—	—	—	6.5	〃	
—	—	—	5.6	〃	
—	11.0	—	—	〃	口縁片 外ふち黒い
—	11.8	—	—	〃	口縁片
—	12.4	—	—	〃	口縁片
—	12.6	—	—	〃	口縁片 外ふち黒い

土師器椀

No.	口径	器高	底部径	底部調整	備考
22	12.6	3.8	5.1	糸切り痕のこる	底 炭化物付着
23	15.9	—		—	口縁片 外 やや黒い
24	13.9	—		—	口縁片 砂多含
25	13.8	—		—	口縁片 全体白褐色
26	13.0	—		—	口縁片
27	12.6	—		—	口縁片
28	11.9	—		—	口縁片
29	10.8	—		—	口縁片 外 やや黒い
30		—	6.7	糸切り痕のこる	底部 黒くくすむ
—		—	5.5	〃	
—		—	4.8	〃	
—		—	4.6	〃	
—		—	5.5	〃	

No.	口径	器高	底部径	底部調整	備考
—	—	—	5.7	糸切り痕のこる	
—	—	—	5.1	〃	
—	—	—	4.7	わからない（糸切り？）	
—	—	—	5.8	糸切り痕のこる	
—	—	—	5.0	〃	
—	—	—	5.9	〃	
—	—	—	5.4	〃	
—	—	—	6.2	〃	
—	—	—	8.0	静止けずり（まん中糸切のこる）	
—	16.2	—		—	粗い砂多含
—	13.8	—		—	
—	12.5	—		—	

土師器甕

No.	口径	備考
33	26.0	全体 赤灰色
34	21.5	外 黒い付着物
35	21.3	外 暗灰褐色
36	22.3	
37	18.5	外 黒い付着物
38	15.8	
39	17.2	全体 黒灰色部多い
40	14.8	外 黒くくすむ部分あり
41	14.5	全体 黒灰色部多い
42	13.8	全体 灰赤褐色
43	14.8	全体 黒っぽい
44	10.0	ところどころ黒味
45	12.3	砂多含
—	16.0	内 やや暗い部分あり
—	24.6	
—	23.2	外 黒い付着物
—	19.0	
—	22.9	
—	24.6	
—	19.6	
—	18.3	砂多含
—	21.4	
—	22.9	
—	21.8	
—	23.0	砂多含
—	21.1	
—	10.1	
—	—	底部径5.5　糸切り痕

灰釉陶器

No.	器形	口径	器高	底径	備考　釉調
46	椀	15.3	—	—	内 白灰色釉うすくかかる ふちはやや濃くかかる
47	椀	—	—	5.4	内 淡緑色釉 外 白緑色釉に淡緑色釉がたれている
48	皿	14.1	2.9	5.8	内外 白灰色釉うすくかかる
49	椀	—	—	6.0	内外 淡黄白色釉うすくかかる 底部に墨書
50	椀か皿	—	—	7.5	外 淡緑色釉たれかかる
51	椀か皿	—	—	6.5	内 白灰色釉うすくかかる
52	小型壺	—	—	—	外 淡緑色釉うすくかかる
53	小型壺	—	—	5.0	内 淡緑色釉たれかかる 外 白緑色釉たれかかる

須恵器

No.	器形	備考
54	壺	頸部　頸径 7.5cm
55	壺	底部　底部径 10.8cm
56	小壺	底部　底部径 4.0cm
57	突帯四耳壺	頸部 11.7cm　胴部 外 平行タタキ 内 ナデ
58	甕	頸径 25.0cm　胴部 外 平行タタキ 内 ナデ
59	甕	頸径 19.6cm 胴最大径47.5cm　胴部 外 平行タタキからカキ目 内 ナデ
60	甕	頸径 23.8cm 胴最大径55.4cm　胴部 外 平行タタキからカキ目 内 ナデ
61	甕	外 格子　内 菊花状に見えるタタキ目
62	甕	外 平行タタキ　内 胴下半は同心円タタキ肩付近は平行タタキで、いくらか凹凸がある
63	甕	外 格子　内 ナデ
64	甕	外 格子　内 ナデ
65	甕	外 格子　内 浅い一本線
66	甕	外 格子　内 扇状
67	甕	外 格子　内 平行タタキ
68	甕	外 格子　内 平行タタキ
69	甕	外 平行タタキ　内 ナデ
70	甕	外 平行タタキが交差する　内 ナデ

第5章　結　　語

新堤遺跡に続いて本遺跡の調査に入った当初、平安時代の遺構が検出される位であろうと考えていた。しかし、調査が進行するにつれてとてつもない重要な遺跡であることが判明した。本遺跡の性格は、出土遺物から大きく三つに特徴づけられる。

第1は、旧石器時代の素晴らしい遺跡であること。石器は5つのブロックに分れて出土し、総数530点にのぼる。石器の種類、特徴、編年的位置付け等については、第2章で望月静雄が詳しく触れているので省略する。しかし、本遺跡出土石器が、飯山地方の旧石器文化研究に重要な役割を果すことは、間違いない事実であり、投げかけている問題も大きい。思えば、昭和20年代後半に飯山地方の旧石器文化研究が緒について以来すでに40年近い歳月が流れ去った。そして、すでに40個所近い遺跡数に達し、その文化内容も豊富・複雑である。飯山盆地中心のごく狭い範囲にこのように旧石器時代の遺跡が濃密に分布するのは、いかにこの地方が後期旧石器時代人にとって居住するに魅力ある場所であったかを端的に物語っている。今後、更に温井台地の調査が計画されている。調査の進行につれて旧石器時代の遺跡数はまだまだ増加するであろう。深雪地帯の飯山地方は、旧石器文化の宝庫であるといっても過言でないであろう。

第2は、比較的まとまって縄文時代早期の土器が出土したことである。押型文、撚糸文、沈線文と貝殻腹縁文の組合せと多様である。押型文土器は、新堤遺跡に比して量的にも多く早期究明の貴重な資料となろう。撚糸文土器が果してどこに位置づけられるかは、今後の検討課題といえよう。

この他に縄文時代前期後半、同中期末の土器が出土している。

第3は、平安時代中期の秀れた遺跡であること。平安時代の明確な遺構としては、井戸1基があげられる。井戸は、背板で枠組みし、その中に中空の自然丸太を置いたものであり、井戸内部から土器片、漆製品、木札、クルミ等の遺物が出土している。そして、この井戸を中心にして平安時代の土師器、灰釉陶器、須恵器等が出土している。出土した土器等は小破片が大部分であり、投棄された可能性をもっているようである。とすれば、この井戸は、井戸（水）を中心とする信仰の一面をもっていたと考えられなくもない。今後の研究課題といえよう。

平安時代中期の遺物の中で特に注目されるのは、墨書土師器、墨書灰釉陶器硯及び灰釉陶器硯であろう。灰釉陶器硯はいずれも灰釉陶器を転用したものであり、3点出土している。この硯のもつ意味は大きい。案外に常岩の牧形成や温井台地開発、あるいは交通路に関係しての役所的建物がこと付近に存在した可能性が高いのではなかろうか。更に第3編第4章小結の項で常盤井智行が触れているように特殊な「ムラ」であったという解釈や予想外に文字が普及していたとする説も充分考えられるところである。いずれにしても今後の重要課題といえよう。

そのほか、刀子あるいは釘と思われる鉄製品や紡錘車と考えられる石製品も出土している。以上のように平安時代の遺物は多種多様であり、平安時代中期の研究上重要な資料といえよう。

出土した各種の木製品は、それぞれこの地域に自生する樹木を利用したことが知られる。トチの実、クルミ等の竪果類も出土しており、温井の自然への働きかけと自然の恵みを享受しつつトトノ池南遺跡に関与した人々の生活が展開されたことを裏付けている。

いずれにしても、本遺跡は旧石器時代、縄文時代、平安時代の生活の場としてすぐれた環境を備えていたといえよう。

末尾ながら調査にあたってご指導をたまわった県文化課、ご協力頂いた地元関係機関、作業員の皆さまに厚くお礼申し上げる。

第４編　自然科学分析

1　飯山市新堤遺跡のテフラ分析

早津賢二・小島正巳

1．はじめに

飯山市新堤遺跡は、千曲川左岸の標高約500ｍ、千曲川との比高約200ｍの、小起伏に富んだ丘陵上に位置する（図1）。そこには、主に妙高火山起源の降下テフラ層やテフラ性土壌層が、厚く発達する。

筆者たちは、発掘グリッドにおいて、旧石器群の出土層準と、特定テフラ層、特に姶良Tn火山灰層（AT、町田・新井、1976）との層位関係を決定する目的で、調査・分析をおこなった。その結果を、以下に報告する。

図１　発掘地点の地形

2．地質の概要

発掘地点の地質は、上位より、黒色腐植土層（層厚30cm～130cm）、漸移層(10～15cm)、褐色風化テフラ層(50cm以上)から成る（図２）。

黒色腐植土層は、地形の凹部で厚く、真中よりやや下方に、混交の進んだ火山灰層とみられる赤褐色味をおびた層(10cm)をはさむ。漸移層は、黄褐色味をおびた黒色腐植土層である。

褐色風化テフラ層は、この地域において肉眼で明瞭に認め得る最上位の示標テフラ層である前坂スコリア層（MS）（妙高火山起源の貫ノ木スコ

図２　分析試料採取断面

リア層、、KN、約2.5万年前に対比)(早津・新井、1981、1985）の層準までは掘り下げられておらず、発掘グリッドで認められるものは、すべてMSより上位にあるテフラ性土壌の部分である。新堤遺跡の旧石器は、このテフラ性土壌の上限から15～25cm下方に、集中して産出する。

3．テフラ分析

本地域を含む千曲川～信濃川流域一帯の褐色風化テフラ層の上部には、バヴルウォール型の火山ガラスを主とする姶良Tn火山灰（AT）の降下層準のあることが知られている（早津、1988；早津・新井、1981、1985)。そこで、AT の正確な降下層準を決定するために、グリッド断面において、褐色風化テフラ（テフラ性土壌）を上下方向に５cm幅で連続採取し、それらの中に含まれているATガラスの含有量を調べた。その結果、旧石器群出土層準の下限より10～15cm下位に、ATガラス最濃集層準の下限があり、それより下位では、ATガラスの量は極めて少ないことが判明した（図３）。このことから、ATの降下層準は、ATガラス最濃集層準の下限にあると考えられる。

一般に、土壌中に混交している特定テフラの降下層準は、今回のように、問題にしているテフラの構成粒子が急に多量に出現する層準と、最も多量に濃集している部分の下限が一致している時に、最も高精度に決定できると考えられる（早津、1988）ので、今回決定されたATの降下層準は、純層の場合に準ずる精度の高いものであると考えてよいであろう。

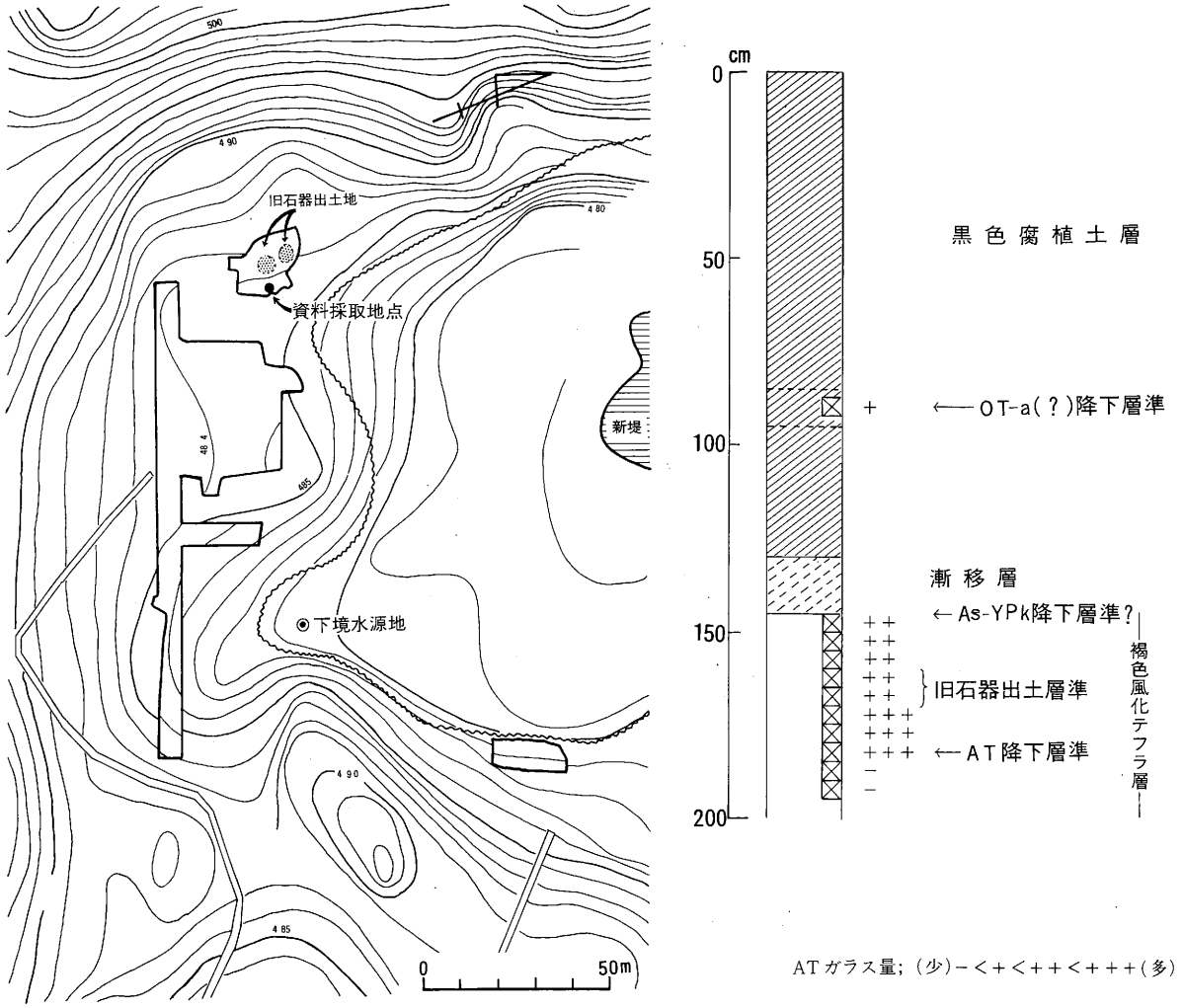


図３　発掘グリッド断面の地質柱状図

褐色風化テフラ層の上限にも、ATガラスはかなり多く含まれているが、そこでまATガラスのほかに、軽石型の火山ガラスも少量ではあるが認められる。新堤遺跡の東方約11kmの栄村小坂遺跡では、この層準に、軽石型火山ガラスを含むことで特徴づけられる浅間草津軽石層（As-YPk、1.0—1.1万年前）（新井、1971; 町田、1987）が産出しており（早津ほか、1983)、上記の軽石型火山ガラスもAs-YPkのものである可能性がある。

また、最上位の黒色腐植土層中にはさまれる赤褐色味をおびた部分の土壌層は、斜方輝石・角閃石・カンラン石などの鉱物とデイサイト質の岩片を含むことから、妙高火山中央火口丘期の火山灰（大田切川火山灰？、OT-a、約4000—4500年前、早津・小島、1985）が混入している可能性がある。これらは合わせて、今後の検討を待ちたい。

4．旧石器群の年代推定

新堤遺跡の旧石器群は、上下10cmの幅にわたって集中して産出する。一般に、遺物は、もともとの位置から下位よりも上位に移動しやすいと考えられることを考慮すると、遺物の年代は集中層準の下限にほぼ一致するとみてよいであろう。

今、ATの年代を2.1—2.2万年前（町田・新井、1976)、褐色風化テフラ層上限の年代を、この地域で一般的に認められている1万年前と仮定し、さらにこの間の土壌の堆積速度を一定と仮定して、新堤遺跡の旧石器群出土層準の下限の年代を推算すると、約1.7—1.8万年前となる。

ま と め

新堤遺跡の発掘グリッドにおいて、ATの降下層準を高精度で決定することができた。これに基づき、いくつかの仮定をおいて推定された旧石器群の年代は、約1.7—1.8万年前である。

引用文献

新井房夫（1971）：北関東ロームと石器包含層 — とくに前期旧石器文化層の諸問題 — 。第四紀研究、**10**、317—329。

早津賢二（1988）：テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー — ATにまつわる議論に関係して — 。考古学研究、34巻4号、18—32。

早津賢二・新井房夫（1981）：信濃川中流域におけるテフラ層と段丘形成年代。地質学雑誌、**87**、791—805。

早津賢二・新井房夫（1985）：妙高火山群テフラ地域のテフラ層。早津賢二著「妙高火山群 — その地質と活動史」、第一法規出版：P. 253—305。

早津賢二・新井房夫・小島正巳・望月静雄（1983）：信濃川流域における先土器時代遺物包含層と示標テフラ層との層位関係。信濃、**35**、813—822。

早津賢二・小島正巳（1985）：火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係。早津賢二著「妙高火山群 — その地質と活動史」、第一法規出版：P.307—319。

町田　洋（1987）：火山・テフラ・巨大崩壊。日本第四紀学会編「日本第四紀地図解説」：P.11—16。

町田　洋・新井房夫（1976）：広域に分布する火山灰 — 姶良Tn火山灰の発見とその意義 — 。科学、**36**、339—347。

2　トトノ池南遺跡・新堤遺跡自然科学分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1　トトノ池南遺跡出土材同定

1－1．試　　料

試料は飯山市・トトノ池南遺跡から検出された材14試料である（表１）。

トトノ池南遺跡（飯山市大字一山字西外峯所在）は、関田山脈東麓台地上（標高約500ｍ）の西側斜面の林内に立地する。この遺跡発掘調査対象となった地区の中央部には西に下る小谷があり、その頂部には湧水がある。この湧水を利用した平安時代とみられる井戸が検出され、木札なども検出された。同定を行った試料はこの井戸材と、木札、棒状用材である。

1－2．同定方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柾目・板目の３面の徒手切片を作製、ガム・クロラール(Gum Chloral）で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した（図版１～３）。

1－3．結　　果

14試料が以下の６種類に同定された。材の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、各Taxaの科名・学名・和名は基本的に「日本の野生植物木本Ⅰ・Ⅱ」（1989）にしたがった。また、一般的性質などについては「木の事典　第１巻～第17巻」（1979～1982）も参考にした。

スギ（Cryptomeria japonica）　スギ科

早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、放射柔細胞の壁は滑らか、分野壁孔はスギ型（Taxodioid）で２～４個。放射組織は単列、１～15細胞高。

スギは、本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では植林面積第一位の重要樹種であり、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。樹皮は屋根葺用とされ、葉は線香・抹香の原料にもなる。

オニグルミ（Juglans ailanthifolia）　クルミ科

散孔材で年輪界付近でやや急に管径を減少させる。管孔は単独および２～４個が複合、横断面では楕円形、管壁は薄い。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性Ⅲ型、１～４細胞幅、１～40細胞高。柔組織は短接線状、周囲状および散在状。年輪界は明瞭。

オニグルミは、北海道から九州までの川沿いなどに生育する落葉高木である。材の硬さは中程度、加工は容易で狂いが少なく、保存性は低い。銃床として、洋の東西を通じて広く用いられ、現在では材積が少なくなっていると思われる。ほかに各種器具・家具材などの用途も知られている。種子は食用となり、栄

養価に富む。

ブナ属の一種（Fagus sp.）　ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に２～３個が複合、横断面では多角形、管壁厚は中庸～薄く、分布密度は高い。道管は単および階段穿孔を有し、階段穿孔の段（bar）数は10前後、壁孔は大型で対列状～階段状に配列、放射組織との間では網目状となる。放射組織は同性～異性Ⅲ型、単列、数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状および散在状。年輪界は明瞭～やや不明瞭。

ブナ属には、ブナ（Fagus crenata）とイヌブナ（F. japonica）の２種がある。ブナは北海道南西部（黒松内低地帯以南）・本州・四国・九州に、イヌブナは本州（岩手県以南）・四国門九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほうがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは、日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していたが、近年、植林などによって生育地が激減している。材はやや重硬で、強度は大きいが加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。また種子は食用となり、搾油される。

ヤマグワ（Morus bombycis）　クワ科

環孔材で孔圏部は１～５列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は管壁は厚く、横断面では楕円形、単独または２～３個が複合、小道管は管壁厚は中庸、横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は密に交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ～Ⅲ型、１～６細胞幅、１～50細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、中国原産のカラグワ（マグワ）（Morus alba）・ロソウ（M. alba var. multicaulis）とともに多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。材の解剖学的特徴のみで、これらを区別することはできない。ヤマグワの材はやや重硬で強靱、加工はやや困難で、保存性は高い。装飾材や器具・家具材として用いられ、樹皮は和紙の原料や染料となり、果実は食用となる。

モクレン属の一種（Magnolia. sp.）　モクレン科

散孔材で管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および２～４個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列、放射組織との間では網目状～階段状となる。放射組織は異性Ⅱ型、１～２細胞幅、１～40細胞高。柔組織はターミナル状。年輪界は明瞭。

モクレン属は、ホオノキ（Magnolia obovata）、オオヤマレンゲ（M. sieboldii）、タムシバ（M. salicifolia）、コブシ（M. kobus）、シデコブシ（M. stellata）の５種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の適潤～湿性地に生育するが、コブシは西日本にはやや少ない。タムシバなどは産地が限られたり、稀であったりする。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工は極めて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途が知られている。また木炭は金・銀・銅・漆器の研磨に用いられた。コブシの材は、ホオノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るものとされ、ホオノキに準じた使われ方をする。

ハイノキ属の一種（Symplocos sp.）　　ハイノキ科

散孔材で管壁は薄く、横断面では多角形～角張った楕円形、単独および２～５個が複合する。道管は階段穿孔を有し、段は多数。放射組織は異性II～I型、１～３(4)細胞幅、１～20細胞高であるが時に上下に連結する。柔組織は散在状。年輪界はやや不明瞭。

ハイノキ属には、常緑性のハイノキ節〔ハイノキ（Symplocos myrtacea）・クロバイ（S. prunifolia）など〕と、落葉性のサワフタギ節〔サワフタギ（S. chinensis forma pilosa）・タンナワフタギ（S. coreana）など〕がある。サワフタギを除いて関東地方以西に分布する。サワフタギは北海道から九州までの山野に普通な小高木で、材は重硬・強靱で割れにくく、各種工具の柄など器具・旋作・薪炭などに用いられる。木灰は媒染剤ともなる。

1―4．考　察

1．井戸外枠材は、軽軟～やや硬いモクレン属がほとんどである。モクレン属のうちホオノキは日本の山間の肥沃地に散在し、コブシは温帯～暖温帯の日当りの良い適潤地に生育する。また、同定を行った井戸枠材７試料の内の１試料だけは、強度は余り高くないがやや堅硬で、切削加工は困難でないハイノキ属の一種が使用されている。ハイノキ属のうち、サワフタギは暖帯に生育するものが多く、現在は関東地方から西に分布している。それ以外は日本の山野にきわめて普通に生育しており、両材の材質は、使用目的が同一にしては異なっていると言うほどの違いはないと思われる。ハイノキ属は、材の解剖学的特徴から、種の区別がつかないが、現在の分布からみるとサワフタギと推定するのが妥当と思われる。すると、井戸枠材に使用した材は山間にごく普通に生育した種であり、付近の材を利用して井戸枠を作製したと思われる。ただし、１部分を別の材料にした理由が用途を意識したものか、材料調達上の理由か、また別の理由によるのかは解らない。

2．井戸くり抜き材は、河岸や湿潤な平地の肥沃なところに生育し、加工の容易なオニグルミが使用されている。

3．押え棒の小は温帯～暖帯の山野にごく普通に自生し、やや重硬で強靱なヤマグワが使用されているのに対して、大は軽軟～やや硬いモクレン属の一種が使用されている。

以上、同定された樹種は、いずれも、現生種で自然分布からみて当時の遺跡周辺に自生していたと推定できる樹種である。

表１　トトノ池南遺跡出土材の樹種

番号	挿図番号	遺構など	用　途　な　ど	樹　種　名
1	図59－16	ＳＥ１－２	木札（大）	スギ
2	図59－17	ＳＥ１－１	木札（小）	スギ
3	図59－18	ＳＥ１－	小型棒状品	スギ
4	図58－13	ＳＥ１－７	井戸外枠材	モクレン属の一種
5	図56－４	ＳＥ１－８	井戸外枠材	モクレン属の一種
6	図57－10	ＳＥ１－９	井戸外枠材	モクレン属の一種
7	図56－７	ＳＥ１－10	井戸外枠材	ハイノキ属の一種
8	図58－14	ＳＥ１－11	井戸外枠材	モクレン属の一種
9	図58－15	ＳＥ１－12	井戸外枠材	モクレン属の一種
10	図57－11	ＳＥ１－14	井戸外枠材	モクレン属の一種
11	図56－１	ＳＥ１	井戸側（くり抜き材）	オニグルミ
12	図56－９	ＳＥ１	井戸側（おさえ棒　大）	モクレン属の一種
13	図56－８	ＳＥ１	井戸側（おさえ棒　小）	ヤマグワ属の一種
14	図　　版	Ｑ　　－14	黒色土層下面出土自然木	ブナ属の一種

材写真図版説明

写真番号	樹　種　名	試料番号	断　面	倍率
図版1	スギ			
1a	スギ	2	木　口	× 40
1b	スギ	2	柾　目	×100
1c	オニグルミ	2	板　目	×100
2a	オニグルミ	11	木　口	× 40
2b	オニグルミ	11	柾　目	×100
2c	ブナ属の一種	11	板　目	×100
3a	ブナ属の一種	14	木　口	× 40
3b	ブナ属の一種	14	柾　目	×100
3c	ブナ属の一種	14	板　目	×100
図版2				
4a	ハイノキ属の一種	7	木　口	× 40
4b	ハイノキ属の一種	7	柾　目	×100
4c	ハイノキ属の一種	7	板　目	×100
5a	ヤマグワ	13	木　口	× 40
5b	ヤマグワ	13	柾　目	×100
5c	ヤマグワ	13	板　目	×100
6a	モクレン属の一種	8	木　口	× 40
6b	モクレン属の一種	8	柾　目	×100
6c	モクレン属の一種	8	板　目	×100

2　トトノ池南遺跡出土石器の岩石鑑定

トトノ池南遺跡では、先土器時代に属する石器群が検出されている。ここでは、石器群の産地推定などに関する情報や岩石学的特性と用途との関係などを把握するために、石器作製過程で生じる剝片を試料とし、石質を鑑定することとした。

2－1．試料及び鑑定方法

トトノ池南遺跡より出土した先土器時代の剝片類8点（表2）について、岩石薄片を作製し偏光顕微鏡下での観察を行った。鏡下ではその鉱物組成・組織などを観察・記載し、目的に対し検討した。

試料番号	遺物番号 ブロック　個体番号	挿図番号
1	4 － 10	33 － 10
2	4 － 31	34 － 13
3	3 － 35	—
4	2 － 63	—
5	4 － 29	35 － 20
6	2 － 107	—
7	4 － 8	34 － 11
8	4 － 20	34 － 12

2－2．石器顕微鏡観察結果

(1)　試料番号1

岩石名：単斜輝石安山岩

肉眼的に岩石表面は黄褐色と灰色の縞状で明瞭な流理組織が認められる。切断面は暗灰色で緻密な岩石である。

組織：ガラス基流晶質組織（hyalopilitic texture）

鏡下では、斑晶として微量の斜長石・単斜輝石が認められ、石基は短冊状の斜長石が定向配列し、微晶の単斜輝石・斜長石・火山ガラスが塡間状に好在している。流理構造が認められる。

斑晶

斜長石：微量存在し、大きさ0.04mm～0.6mmの半自形～自形の薄い板状を呈する。双晶の発達は弱く、累帯組織が認められない。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.05～0.14mmの半自形粒状を呈する。単純双晶が認められる。淡緑色を帯び多色性はきわめて弱い。

石基

斜長石：少量存在し、長さ最大0.1mmに伸長した長柱状～短冊状を呈し、石基中に定向配列し、流理組織を作っている。石基を構成する火山ガラス中にも針状に晶子として析出している。

単斜輝石：少量存在し、大きさ0.02mm以下の粒状を呈し、石基中の斜長石結晶粒間を火山ガラスととも

に充塡している。

クリストバライト：石基中に微量存在している。

火山ガラス：中量存在し、石基の結晶粒間を充塡している。茶褐色を呈する。

不透明鉱物：微量存在し、大きさ0.01㎜以下の自形～半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

特徴

本岩は石基中に多くの火山ガラスが存在し、安山岩溶岩の急冷相とみられる。

(2) 試料番号2

岩石名：安山岩

肉眼的に試料番号1ときわめて相似した外観を有する岩石である。

組織：ガラス基流晶質組織（hyalopilitic texture）

鏡下では、斑晶として微量の斜長石が認められ、単斜輝石斑晶は認められない。石基は短冊状の斜長石が散在し、微量・微晶の単斜輝石と中量の火山ガラスが塡間状に存在している。鏡下での流理構造は弱い。

斑晶

斜長石：微量存在し、大きさ0.2～0.3㎜の半自形～自形の薄い板状を呈する。集片双晶および単純双晶が観察され、一部に弱い累帯組織が認められる。

石基

斜長石：少量存在し、長さ最大0.1㎜に伸長した短柱状～短冊状を呈し、一部は0.05㎜大の針状で石基中に散在する。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.02㎜以下の粒状を呈し、石基中の斜長石結晶粒間にみられる。

クリストバライト：石基中に微量存在している。

火山ガラス：多量存在し、石基の結晶粒間を充塡している。茶褐色を呈する。脱ガラス化作用をうけ、針状微晶の晶子（斜長石？）を生成している。

不透明鉱物：きわめて微量存在し、大きさ0.01㎜以下の自形～半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

特徴

本岩は安山岩溶岩の急冷相とみられる。

(3) 試料番号3

岩石名：単斜輝石安山岩

肉眼的に、試料番号1と同様に黄褐色と暗灰色の縞状の流理組織が認められる。試料番号1と比較すると多孔質である。

組織：ガラス基流晶質組織（hyalopilitic texture）

鏡下では、斑晶として微量の斜長石・単斜輝石が認められ、石基は短冊状の斜長石が弱い定向配列し、微晶の単斜輝石・斜長石・火山ガラスが塡間状に存在している。

斑晶

斜長石：微量存在し、大きさ0.04～0.5㎜の半自形～自形の薄い板状を呈する。集片双晶および単純双晶が観察され、一部に累帯組織が認められる。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.05～0.15㎜の半自形～他形粒状を呈する。単純双晶が認められる。淡

緑色を帯び多色性はきわめて弱い。

石基

斜長石：少量存在し、長さ最大0.1㎜に伸長した長柱状～短冊状を呈し、石基中に定向配列して散在する。弱い配列を示し、流理組織を作っている。石基を構成する火山ガラス中にも針状に晶子として析出している。

単斜輝石：少量存在し、大きさ0.02㎜以下の粒状を呈し、石基中の斜長石結晶粒間を火山ガラスとともに充塡している。

クリストバライト：石基中に少量存在している。

火山ガラス：中量存在し、石基の結晶粒間を充塡している。

不透明鉱物：微量存在し、大きさ0.02㎜以下の自形～半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

特徴

本岩は安山岩溶岩の急冷相とみられる。鏡下での流理組織は弱い。

(4) 試料番号4

岩石名：単斜輝石安山岩

肉眼的に、黄褐色を呈するが、切断面では暗灰色緻密な岩石である。縞状構造が認められない緻密質岩石で、切断面は暗灰色を呈する。

組織：ガラス基流晶質組織（hyalopilitic texture）

鏡下では、斑晶としてきわめて微量の斜長石・単斜輝石が認められるが、ほとんど無斑晶に近い。石基は短冊状の斜長石が定向配列し、流理組織が認められ、結晶粒間は火山ガラスが多い。

斑晶

斜長石：きわめて微量存在し、大きさ0.2㎜の半自形～自形の薄い板状を呈する。集片双晶および単純双晶が認められ、一部は累帯組織が認められる。

単斜輝石：きわめて微量存在し、大きさ0.05㎜の半自形～他形粒状を呈する。淡緑色を帯び多色性はきわめて弱い。

石基

斜長石：中量存在し、長さ最大0.12㎜に伸長した短冊状を呈し、石基中に散在する。定向配列を示し、流理組織を作っている。また、短冊状斜長石とともに石基を構成する火山ガラス中にも針状の晶子として析出している。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.01㎜以下の粒状～晶子状を呈し、石基中に散在している。

火山ガラス：中量存在し、石基の短冊状斜長石粒間を充塡している。茶褐色を呈し、0.01㎜以下の針状晶子（斜長石？）を析出している。

不透明鉱物：少量存在し、大きさ0.01㎜以下の自形～半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

特徴

本岩は石基中に多くの火山ガラスが存在し、流理組織が明瞭で、安山岩溶岩の急冷相とみられる。

(5) 試料番号5

岩石名：単斜輝石安山岩

肉眼的に黄褐色と灰褐色が縞状となる流理組織がみられる。岩石表面に微細な黒色鉱物（輝石）が散在する。切断面は暗灰色を呈し、緻密質な岩石である。

組織：ガラス基流晶質組織（hyalo-pilitic texture）

鏡下では、斑晶として微量の斜長石・単斜輝石が認められ、石基は短冊状の斜長石が定向配列し、流理組織が認められる。微晶の単斜輝石・斜長石・火山ガラスが塡間状に存在している。

斑晶

斜長石：微量存在し、大きさ0.1～0.2mmの半自形～自形の薄い板状を呈する。集片双晶が認められ、累帯組織は認められない。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.05～0.1mmの半自形粒状で、淡緑色～淡褐緑色を呈する。多色性はきわめて弱い。

石基

斜長石：少量存在し、0.1mm以下に伸長した長柱状～短冊状を呈し、石基中に散在する。定向配列が認められ、流理組織を作っている。石基を構成する火山ガラス中にも針状に晶子として析出している。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.01mm以下の粒状を呈し、石基中の斜長石結晶粒間を火山ガラスとともに充塡している。

火山ガラス：少量存在し、石基の結晶粒間を充塡している。

珪酸鉱物：火山ガラスから脱ガラス化作用をうけて生成した微細な珪酸鉱物が多く認められる。晶子として存在するため不明確であるが、複屈折・結節率が低くクリストバライトと思われる。

不透明鉱物：微量存在し、大きさ0.03mm以下の自形～半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

特徴

本岩は安山岩溶岩の急冷相とみられる。

(6) 試料番号6

岩石名：安山岩

肉眼的に灰褐色相中に黒色相を縞状に含む流理組織が発達している。黒色相には空隙が多く認められる。切断面は灰黒色で岩石表面ほど組織は明瞭ではない。

鏡下で褐色を呈する岩相をホストとし、黒色を呈し空隙を多くともなう出相をレンズ状および縞状に伴う。

褐色ホスト岩相

組織：ガラス基流晶質組織（hyalo-pilitic texture）

ホストとなる岩石には斑晶として微量の斜長石が認められ、石基は短冊状の斜長石が定向配列し、微晶の斜長石・火山ガラスが塡間状に存在している。流理構造が認められる。

斑晶

斜長石：微量存在し、大きさ0.08～0.25mmの半自形～自形の薄い板状を呈する。弱い累帯組織が認められる。

石基

斜長石：中量存在し、長さ最大0.2mmに伸長した長柱状～短冊状を呈し、石基中に散在する。弱い定向配列を示し、流理組織を作っている。石基を構成する火山ガラス中にも針状に晶子として析出している。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.01mm以下の粒状を呈し、石基中に散在している。

クリストバライト：火山ガラスの脱ガラス化により少量の微晶質クリストバライトが生成されている。

火山ガラス：中量存在し、石基の結晶粒間を充塡している。脱ガラス化作用をうけ少量の0.01mm以下の針状晶子（斜長石）と珪酸鉱物（クリストバライト？）を生成している。

不透明鉱物：微量存在し、大きさ0.01mm以下の自形～半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

黒色相

組織：ハイアロオフィティック組織（hyalo-ophitic texture）

全体に黒色を呈するガラス質岩で、斑晶がきわめて少なく、杏仁状組織（amyg-daloidal texture）を示す空隙が多く存在する。

斑晶

斜長石：きわめて微量存在し、大きさ最大0.2mmの半自形～他形板状を呈する。双晶は認められるが、累帯組織は認められない。

石基

斜長石：少量存在し、長さ最大0.1mmに伸長した長柱状を呈し、石基中に散在するが、ホスト岩と比較すると量的に少ない。弱い定向配列を示す。

単斜輝石：きわめて微量存在し、大きさ0.01mm以下の粒状を呈し、石基中に散在している。

火山ガラス：鏡下で暗灰色～黒色で多量に存在する。0.002mm以下の微細な珪酸鉱物を析出しているが、詳細は不明である。

空隙

中量存在し、大きさ0.02～0.15mmの杏仁状（あんず状）を呈し、他の二次鉱物の充塡はみられない。溶岩表面にみられる気泡のあととみなされる。

特徴

本岩は安山岩溶岩の急冷相であるが、溶岩が流出する際に表面の岩石を取り込んで生成されたものと思われる。

(7) 試料番号7

岩石名：単斜輝石安山岩

肉眼的に、岩石表面は黄褐色で、色調の濃淡で縞状構造を示す流理組織が認められる。切断面は暗灰色で緻密質である。

組織：ガラス基流晶質組織（hyalo-pilitic texture）

鏡下では、斑晶として微量の斜長石およびきわめて微量の単斜輝石が認められ、石基は短冊状の斜長石が弱い定向配列して散在して、弱い流理組織が認められる。微晶の単斜輝石・斜長石・火山ガラスが塡間状に存在している。

斑晶

斜長石：微量存在し、大きさ0.06～0.6mmの半自形～自形の薄い板状を呈する。集片双晶の発達がみられるが、累帯組織は認められない。

単斜輝石：きわめて微量存在し、大きさ0.05mmの他形粒状を呈する。淡緑色を帯び多色性はきわめて弱い。

石基

斜長石：少量存在し、長さ最大0.2mmに伸長した長柱状を呈し、石基中に散在する。弱い定向配列を示

し、流理組織を作っている。

単斜輝石：きわめて微量存在し、大きさ0.02mm以下の粒状を呈し、石基中の斜長石結晶粒間を火山ガラスとともに充填している。

火山ガラス：多量存在し、石基の結晶粒間を充填している。脱ガラス化作用により微細な珪酸鉱物を生じているが詳細は不明である。

不透明鉱物：微量存在し、大きさ0.01mm以下の自形～半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

特徴

本岩は安山岩溶岩の急冷相とみられる。

(8) 試料番号8

肉眼的に、岩石表面は暗褐色を呈し、弱い流理組織が認められる。切断面は暗灰色で緻密質である。

岩石名：単斜輝石安山岩

組織：ガラス基流晶質組織（hyalopilitic texture）

鏡下では、斑晶として微量の斜長石、きわめて微量の単斜輝石が認められる。石基は短冊状の斜長石が弱い定向配列を示して散在し、弱い流理組織が認められる。多量の火山ガラスが塡間状に存在している。

斑晶

斜長石：微量存在し、大きさ0.1～0.5mmの半自形～自形の薄い板状を呈する。双晶の発達は弱く、累帯組織は認められない。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.1mmの半自形長柱状を呈する。淡緑色を帯び多色性はきわめて弱い。

石基

斜長石：中量存在し、長さ0.2mm以下に伸長した長柱状を呈し、石基中に弱い定向配列を示して散在し、流理組織を作っている。石基を構成する火山ガラス中にもきわめて微細な大きさ0.002mmの針状に晶子として析出している。

単斜輝石：微量存在し、大きさ0.02mm以下の粒状を呈し、石基中に散在している。

火山ガラス：中量存在し、石基の結晶粒間を充塡している。茶褐色を呈し、針状晶子（斜長石）を析出している。

不透明鉱物：微量存在し、大きさ0.005mm以下の半自形粒状を呈する。外形から磁鉄鉱と推察される。

特徴

本岩は安山岩溶岩の急冷相とみられる。

2－3．まとめ

試料番号1～8はいずれも本質的には単斜輝石安山岩に属するが、鏡下で斜長石・単斜輝石の斑晶がみられる岩石を単斜輝石安山岩、斜長石のみで単斜輝石の斑晶が認められない試料番号2および試料番号6を安山岩とした。ただし、薄片は試料のきわめて小範囲の部分で作製しているため、他の部分に単斜輝石の斑晶が含有される可能性があると思われる。岩石の組織はガラス基流晶質組織を示すが、全般に斑晶～微斑晶に乏しく、火山ガラスが多いことでハイアロオフィティック組織に近い組織を示している。

試料番号1～8は、次のような共通する特徴を有している。

①斑晶が乏しい。

②石基中の斜長石は短冊状を呈し、弱い定向配列をするものが多い。

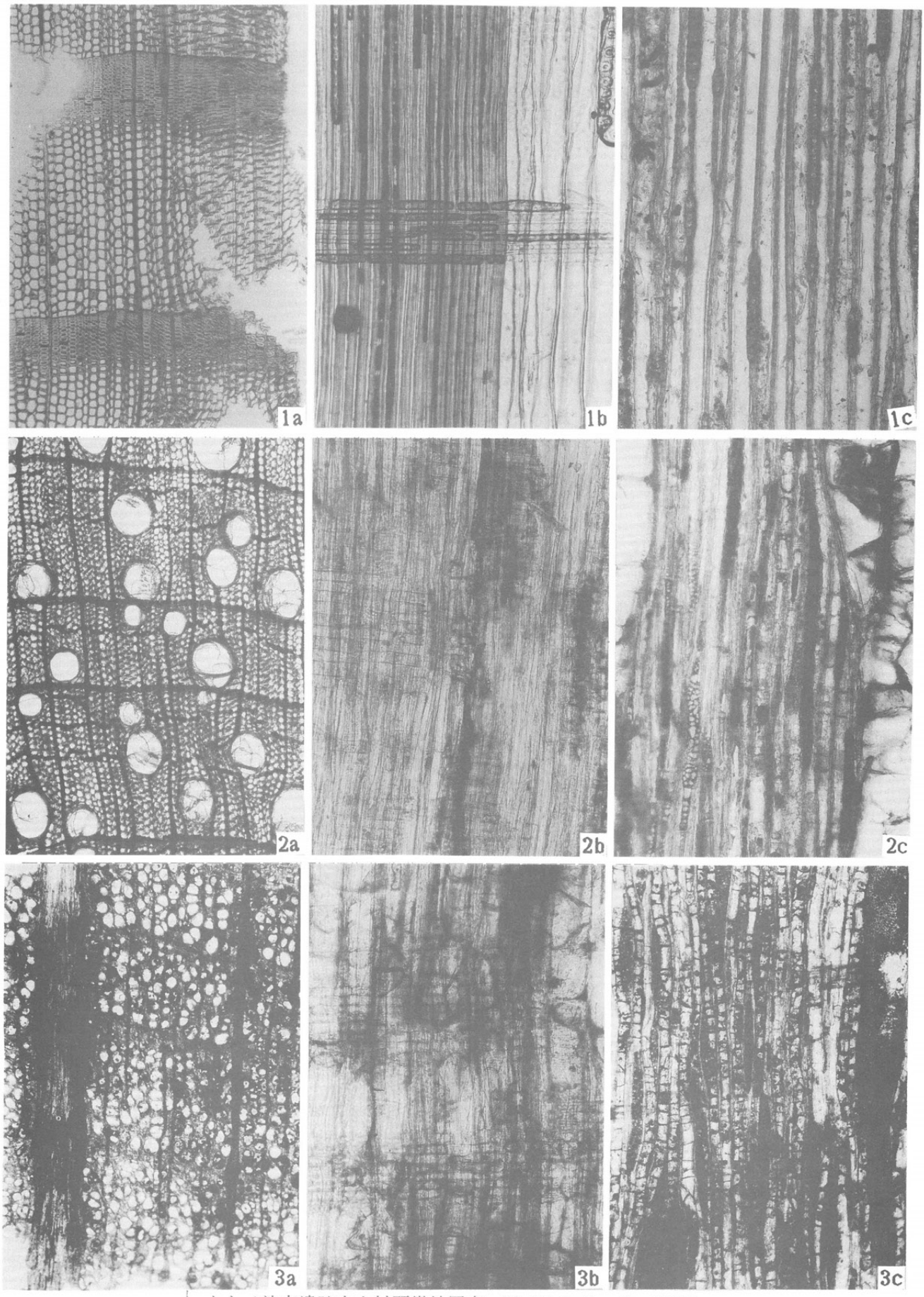
③火山ガラスが多く存在する。

④構成鉱物は斜長石・単斜輝石・火山ガラスを主体としている。

構成鉱物および岩石の組織から、試料番号１～８は同一の安山岩溶岩に属し、しかも、溶岩の流出時の表面に近い急冷相の岩石と推察される。これらの岩石は、近辺の河床などで入手可能であったと判断される。また、岩石を構成する鉱物の粒度が小さく、火山ガラスが多く存在することで緻密質であり、流理組織が認められることから、薄い偏平な材料が得られやすい特性を有している。このような特性は、石器製作の際鋭利な刃縁部を作出するのに有効であったと思われる。

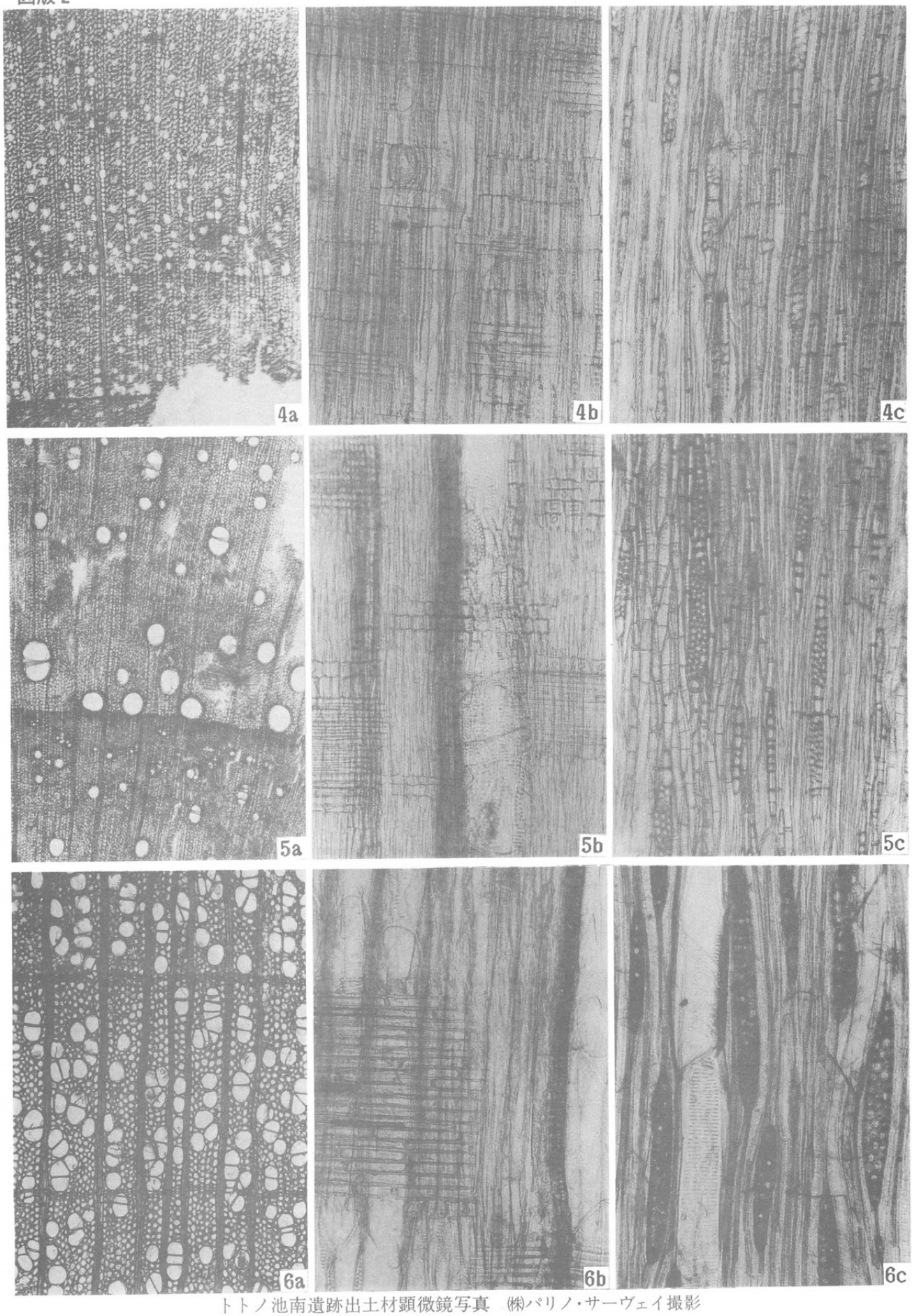
一方、一部に黒色急冷相が含まれ（試料番号６）、この部分には溶岩流出時の気泡に起因する空隙が多くみられる。この種の岩石は緻密質の岩石と比較して材質的に脆いと思われ、石器の素材としての利用に際しては選択、排除されていたとも考えられる。今回の剥片類と、それを素材とした製品との関係が注意される。

図版 1



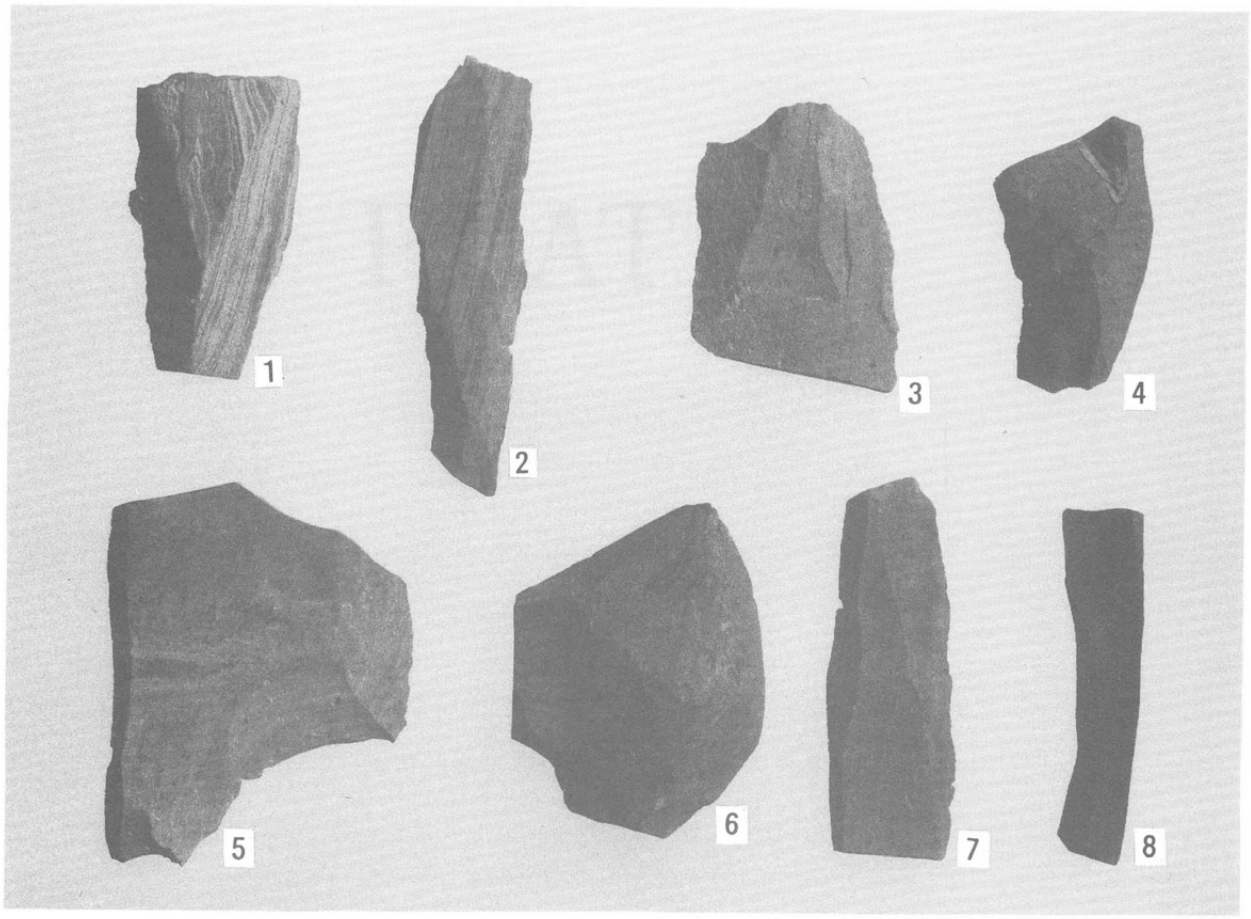
トトノ池南遺跡出土材顕微鏡写真　㈱パリノ・サーヴェイ撮影

図版 2



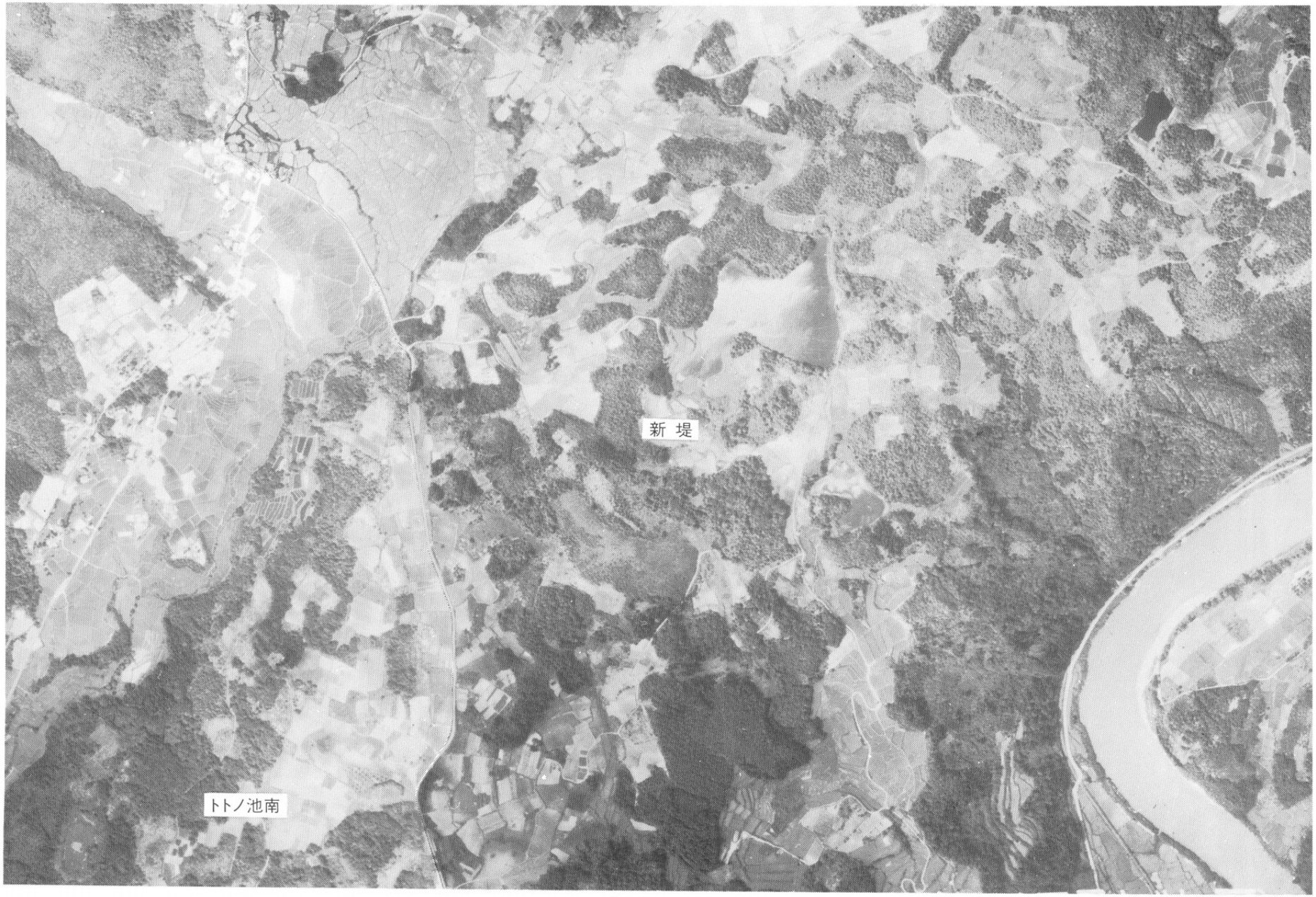
トトノ池南遺跡出土材顕微鏡写真　㈱パリノ・サーヴェイ撮影

図版 3



トトノ池南遺跡出土旧石器岩石鑑定試料

PLATE

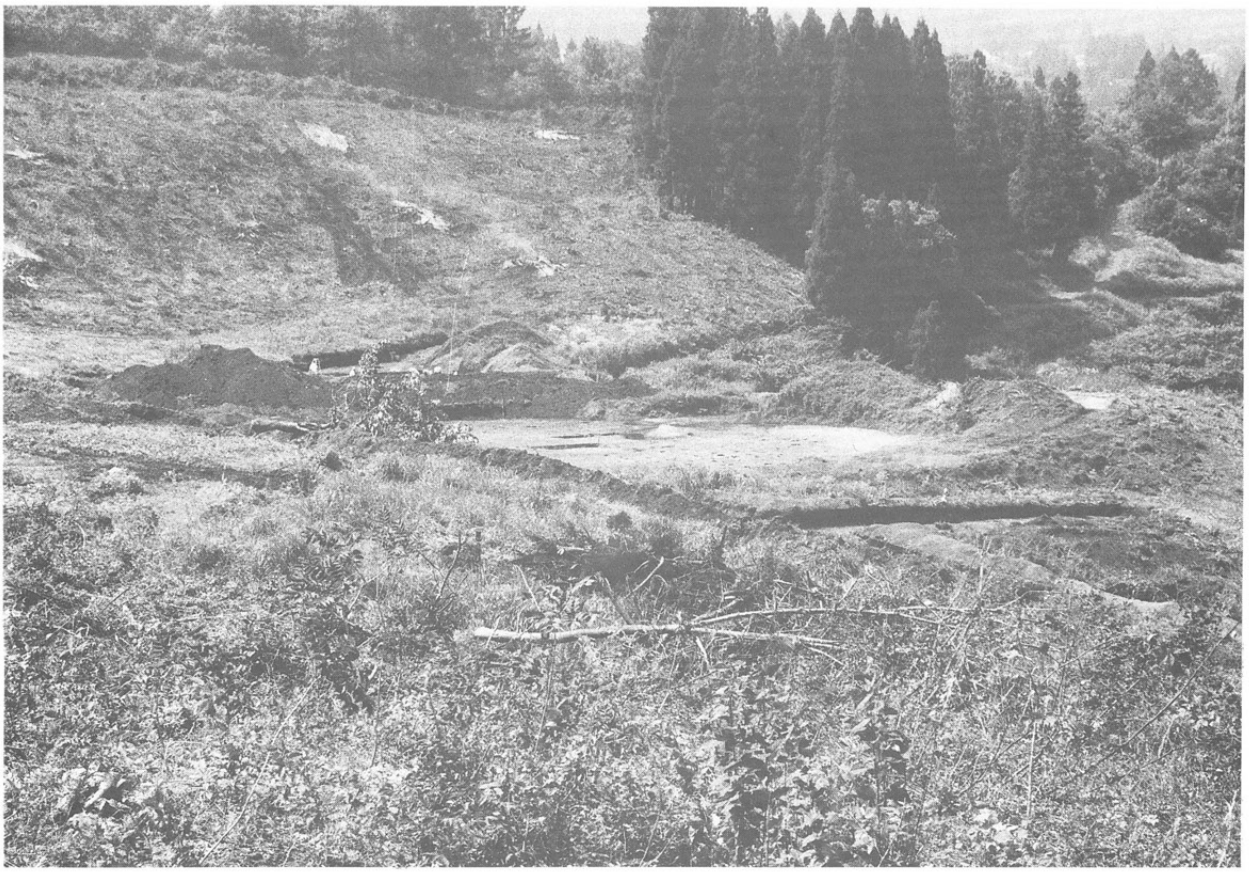


▲ 遺跡航空写真

◀ 開始式のあと調査団長より
調査諸注意を聞く

◀ 重機による表土除去
（B地点）

◀ Ⅳ区の調査（B地点）

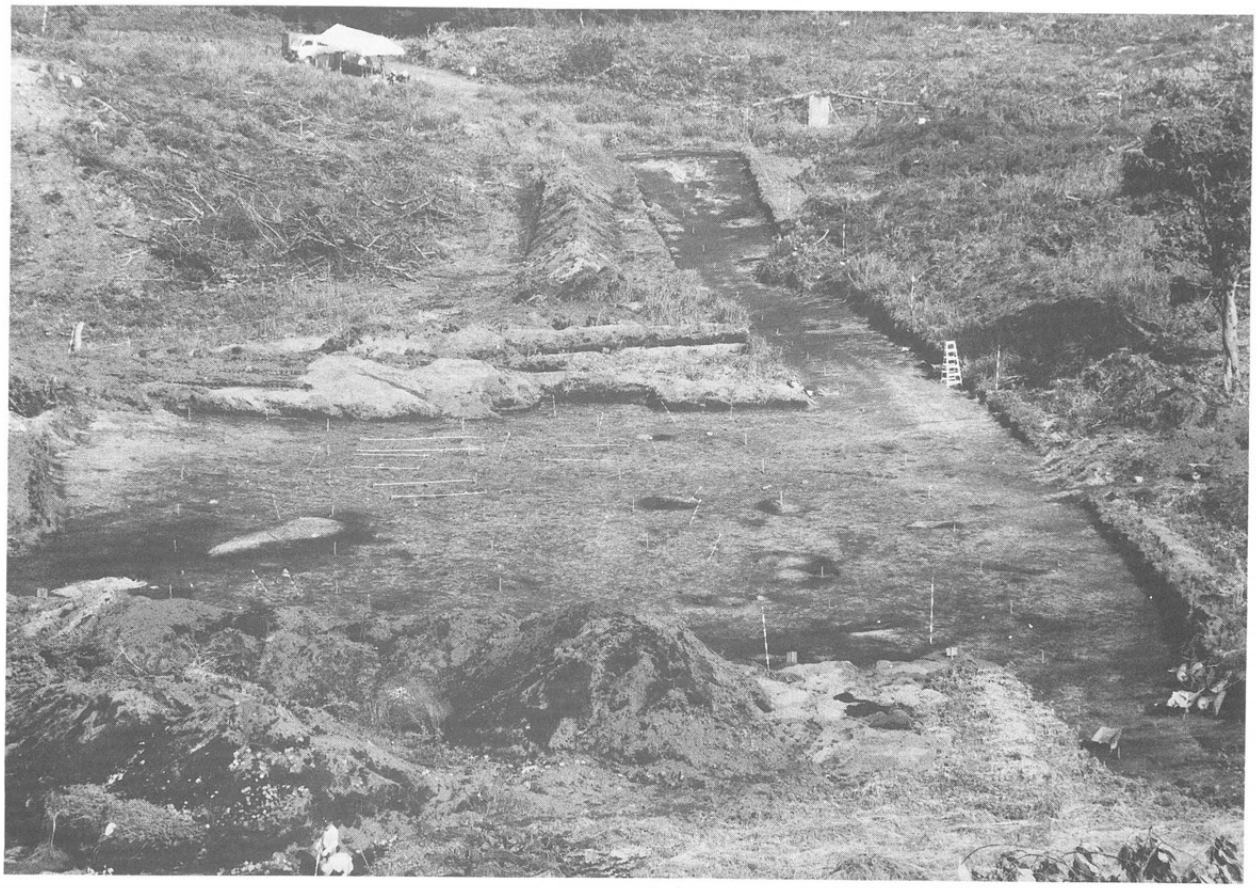


▲　B地点全景（南東から）

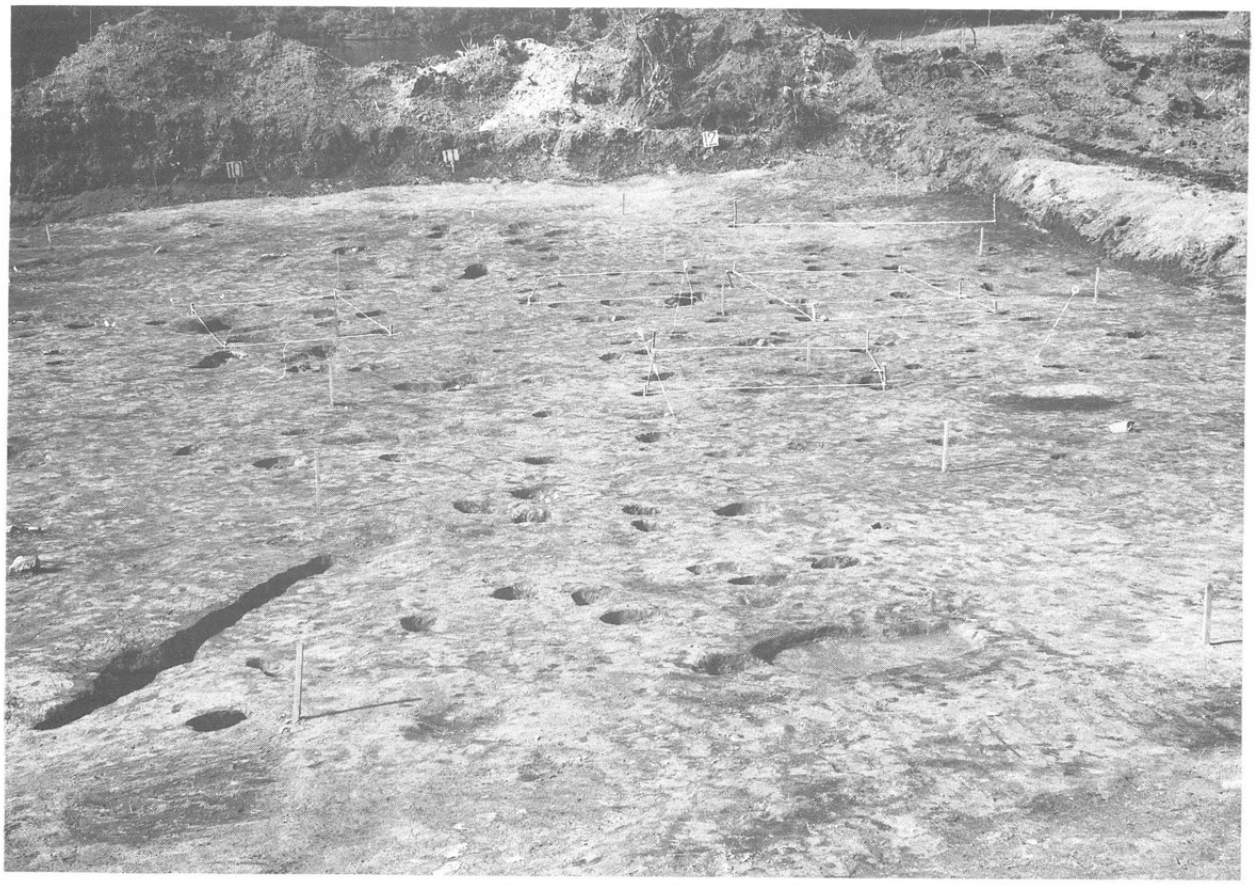
▲　B地点Ⅰ区の調査（西から）

▲　A地点試掘トレンチ完掘状態

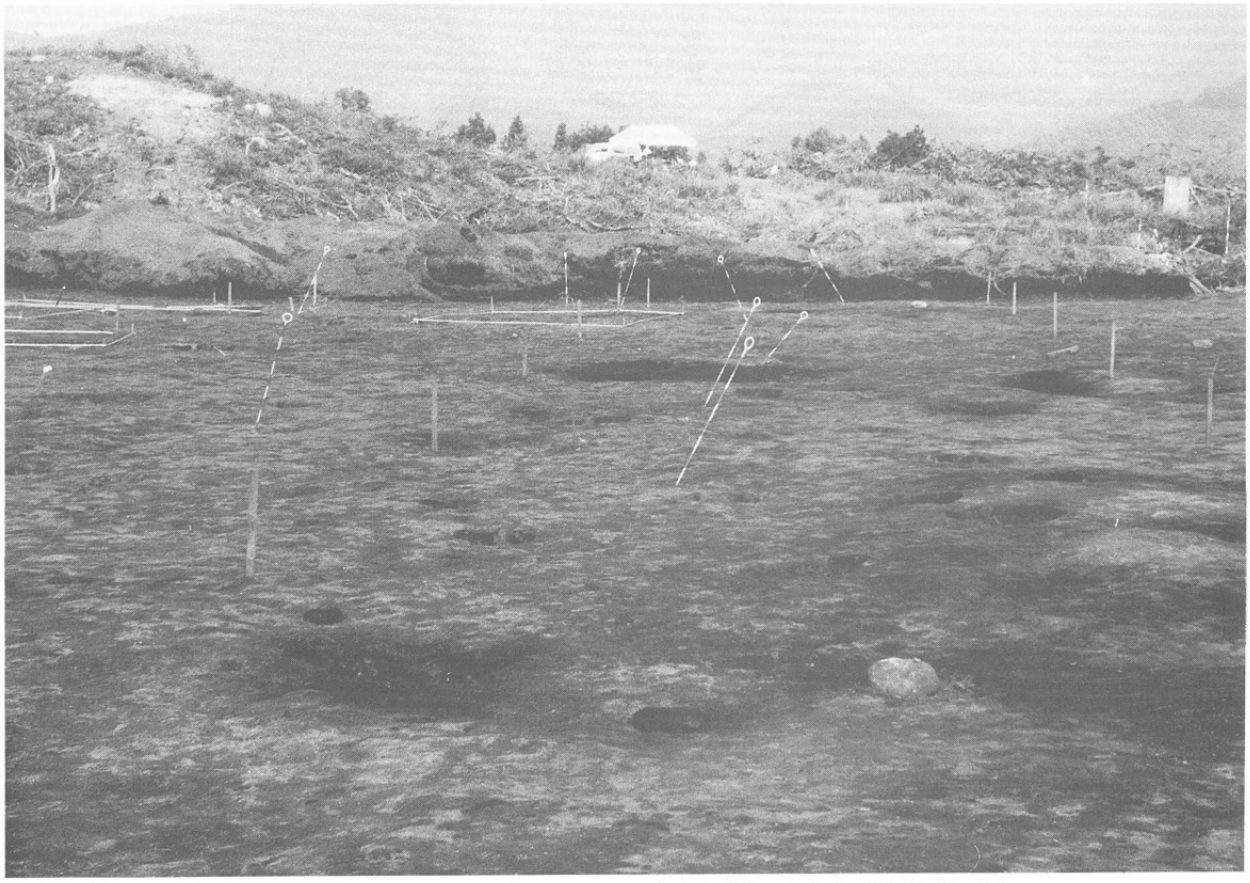
▲　B地点I区（南から）



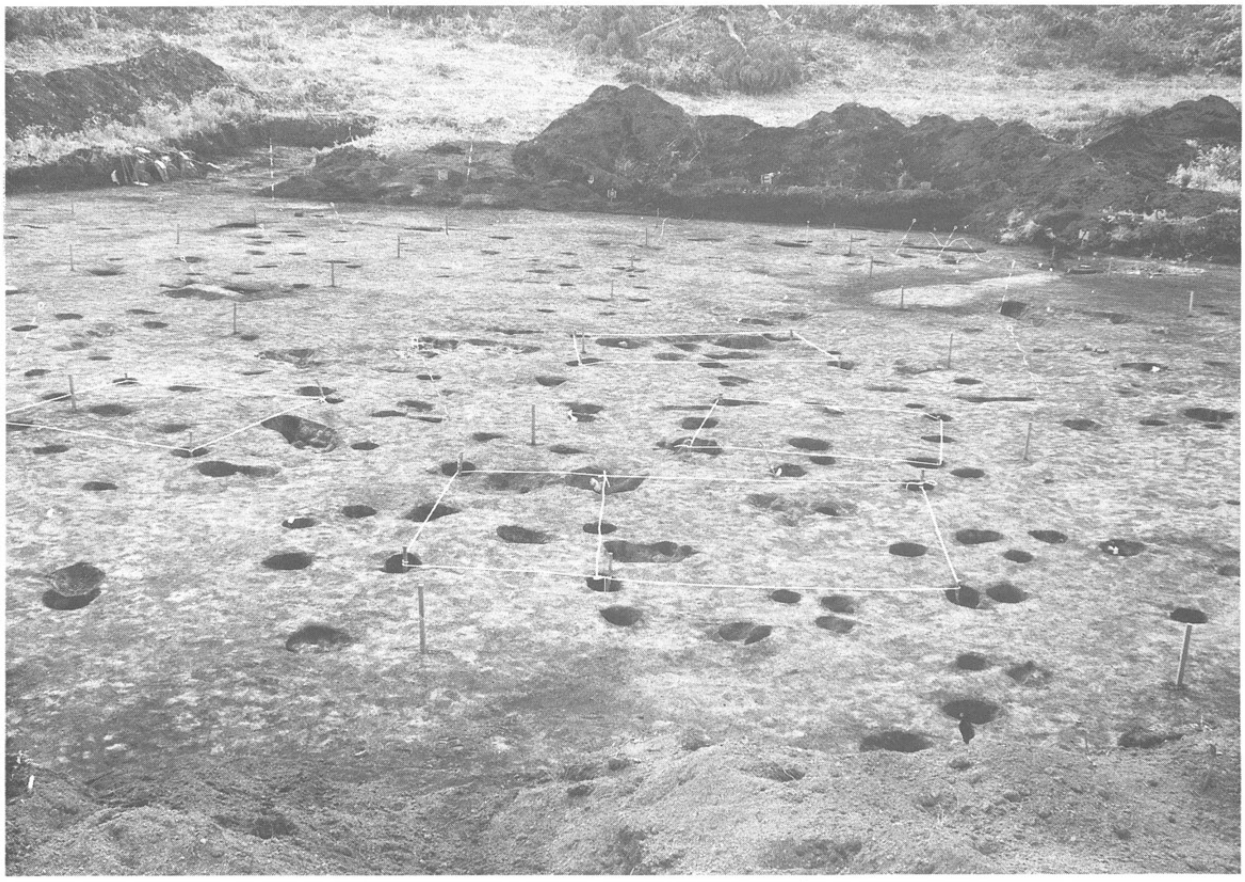
▲　B地点全景（西から）



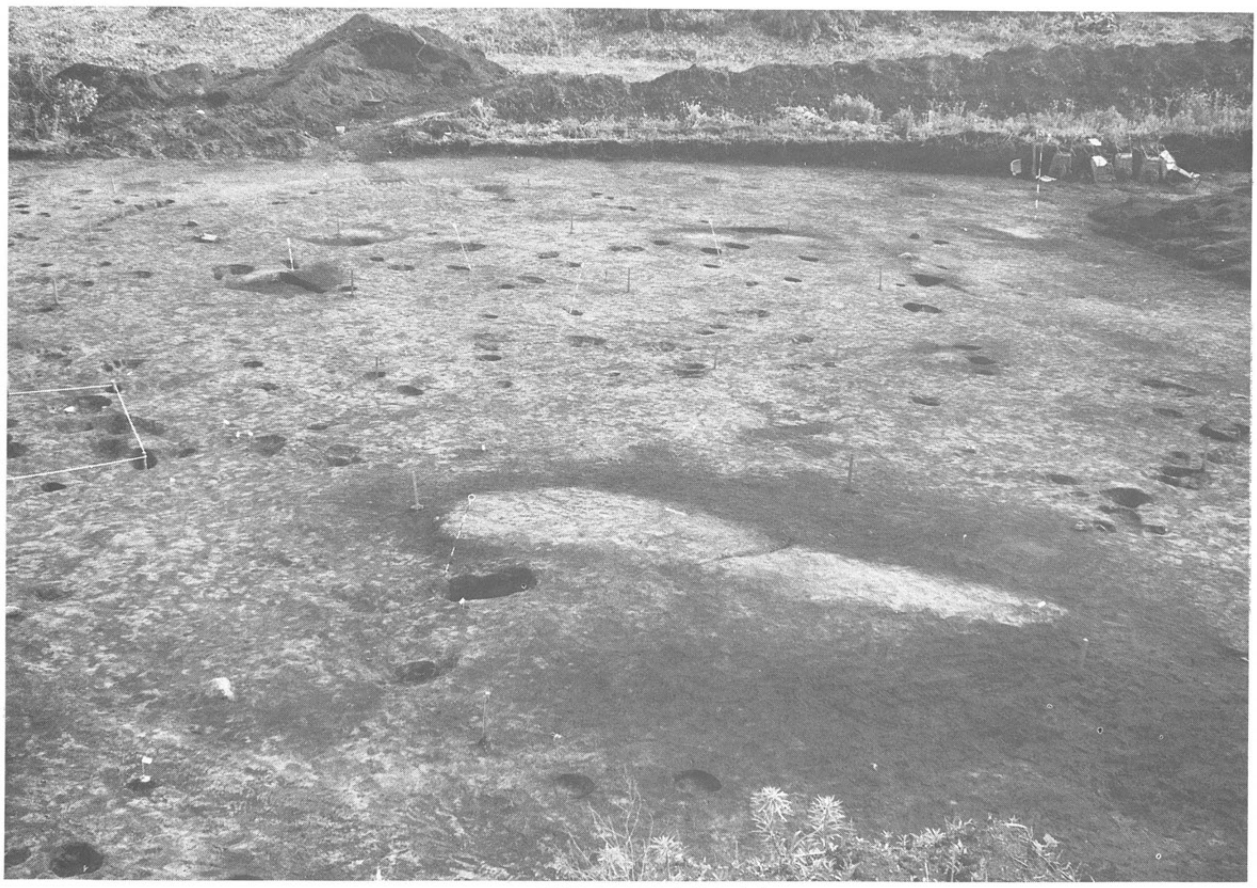
▲　B地点Ⅰ区（南から）



▲　B地点Ⅰ区斜めピット（ピンポールが位置と開口方向を示す）（西から）

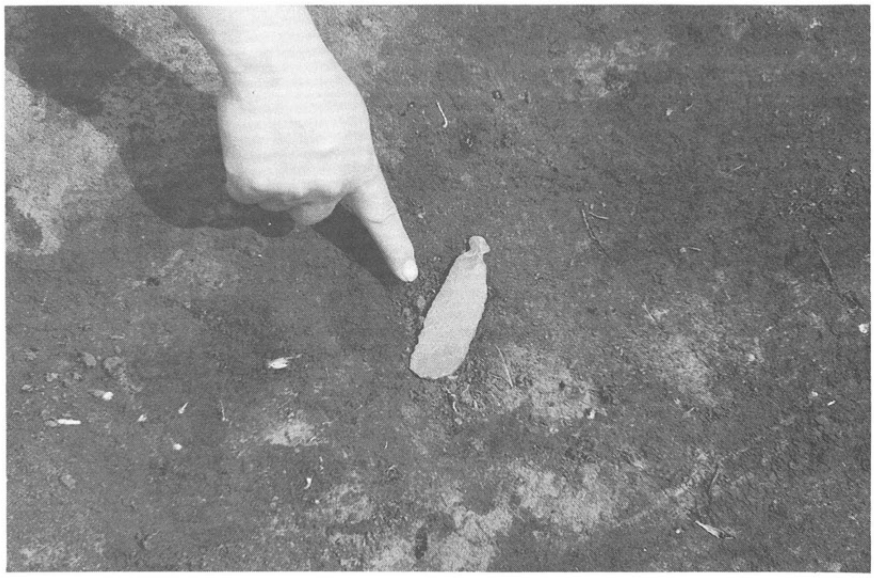


▲　B地点Ⅰ区掘立柱建物群（東から）

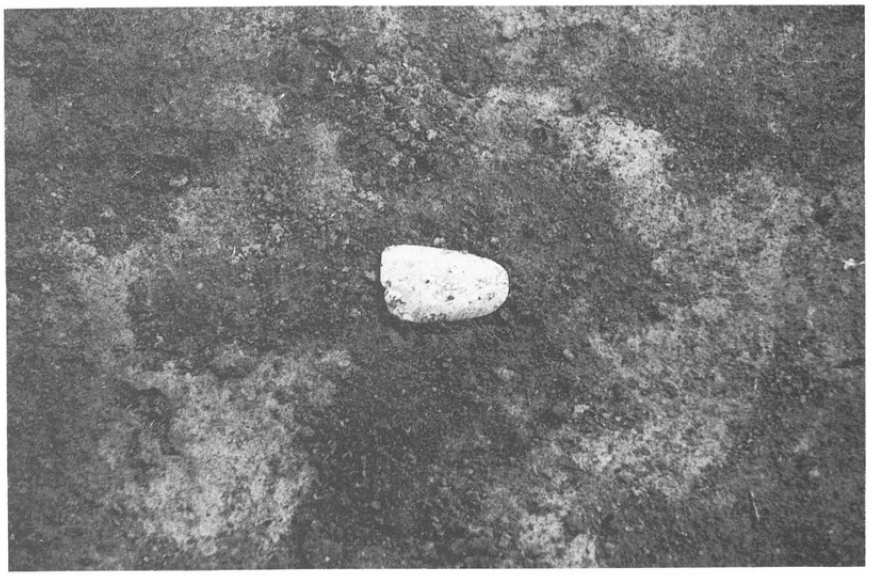


▲　B地点Ⅰ区（北から）

▲　B地点Ⅱ区（北から）

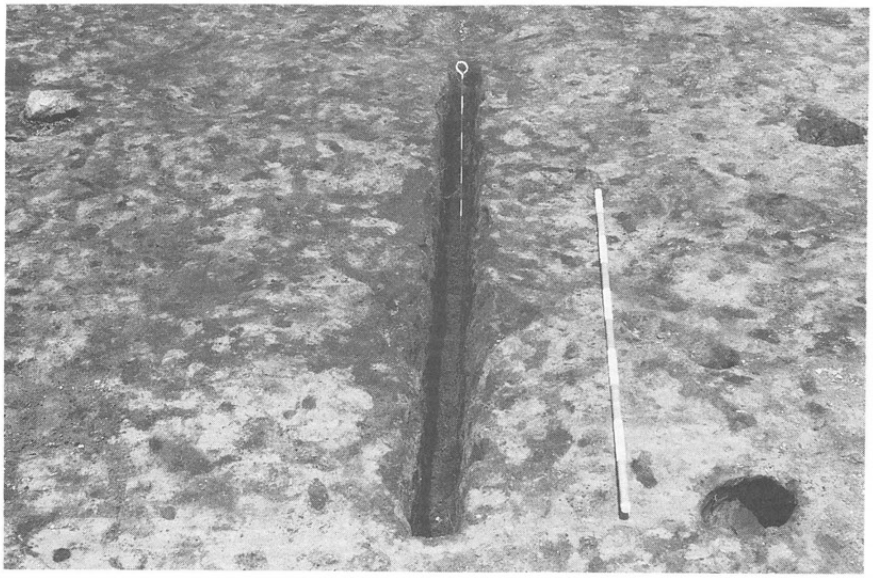


◀ B地点D－8区石匙出土状態



◀ B地点D－13区小型磨製石斧出土状態

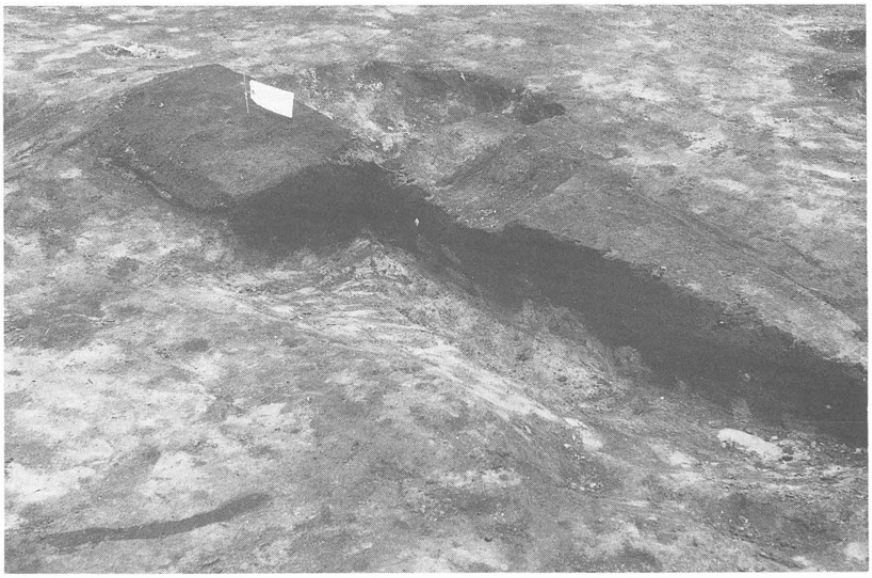
◀ B地点E－11区抉入石器出土状態



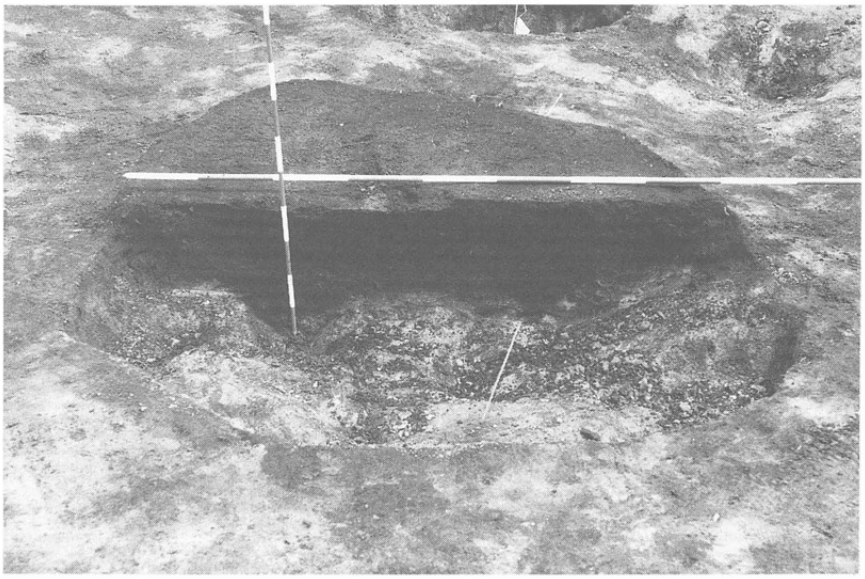
◀ Ｂ地点Ｂ－10区溝状土坑ＭＳＫ

◀ Ｂ地点Ⅳ区斜めピット23

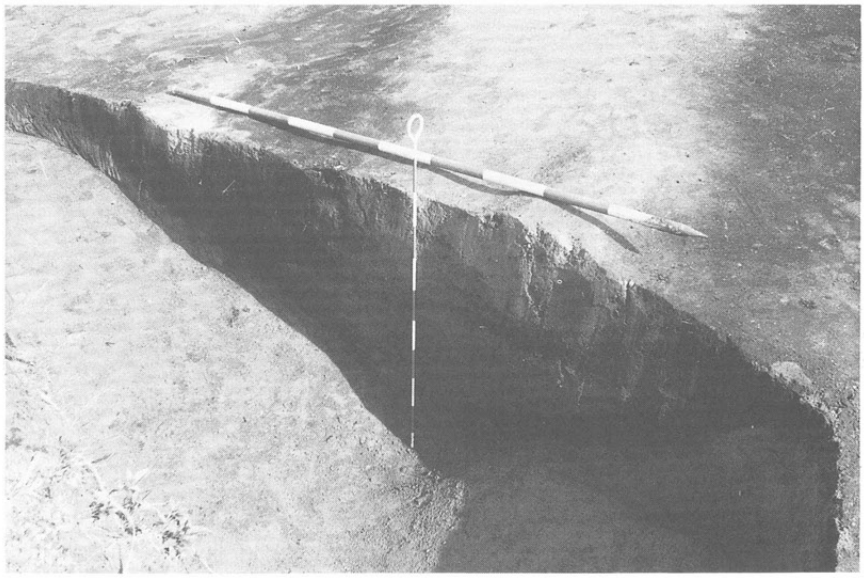
◀ Ｂ地点Ⅲ区斜めピット１



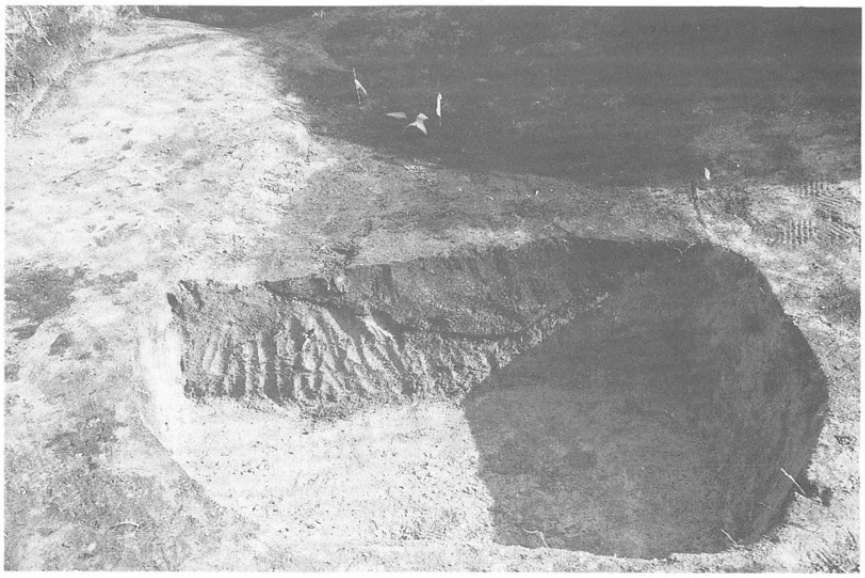
◀ B地点Ⅰ区焼土1



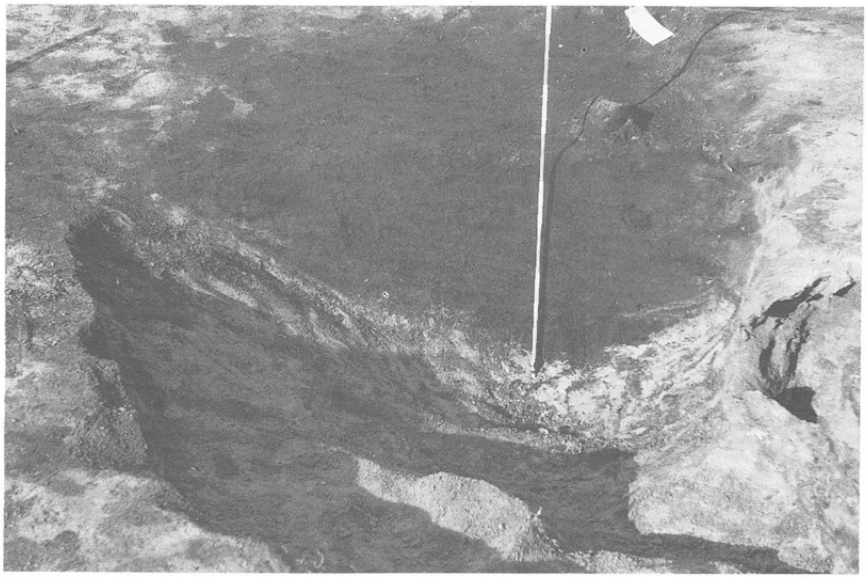
◀ B地点Ⅰ区焼土2



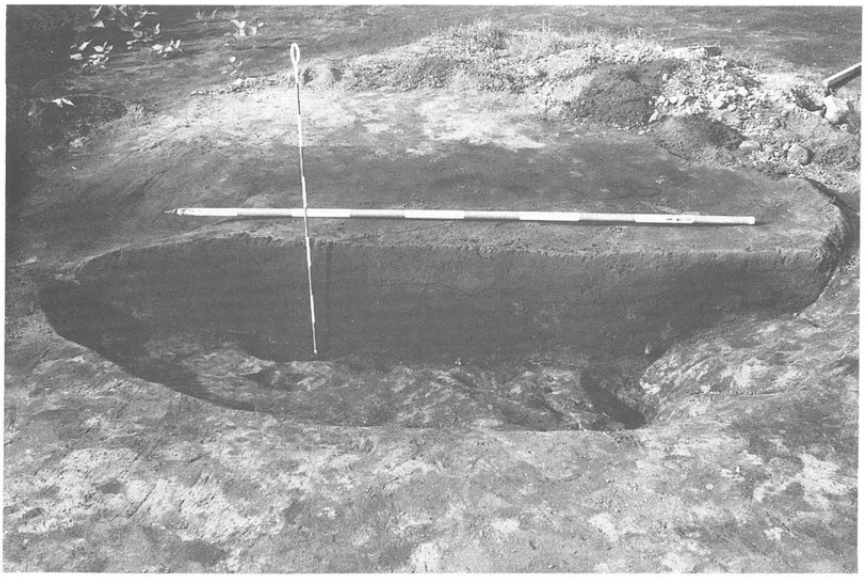
◀ B地点Ⅲ区ロームマウンドと焼土11



◀ B地点Ⅲ区平安土坑SK5半割状況（北から）



◀ B地点B−10区ロームマウンド



◀ B地点I区焼土6

▲　B地点Ⅰ区旧石器確認調査

▲　B地点Ⅰ区旧石器確認調査

▲　B地点Ⅳ区旧石器出土により調査区域拡張

▲　B地点Ⅳ区旧石器第1ブロック（東から）

▲　B地点Ⅳ区旧石器第2ブロック（南から）

▲　第1ブロックNo.22 石核

▲　第1ブロックNo.1 ナイフ　No.12フレイク